

富山県射水郡下村  
下村加茂遺跡発掘調査報告

1999年3月

下村教育委員会



遠景（南上空から）



A地区全景（北上空から）奥は加茂神社



A地区 SD15（弥生前期貯木場跡）と近世道路跡・探土穴群（西上空から）



C地区全景（北上空から）奥はA地区（右）B地区（左）

## はじめに

下村は、その昔、私たちの幼い頃から見れば遙かに広い面積を持った放生津潟（新潟市・富山高岡新産業都市建設計画により現在は富山新港及び関連用地となって当時の面影はない。）に臨み、加賀藩主が分藩とはいいながら富山藩領を通るのを遠慮してつくったと言われる参勤交代の宿場として発展した比較的古い成り立ちの村です。

富山市・新潟市・小杉町に隣接しますが、いわゆる富山県の複眼都市—富山、高岡の中間、さらに人口集積の太閤山団地（小杉町）や新潟市から車でいずれも25分以内という、まさにこれら都市のベッドタウンに相応しい恵まれた位置にあります。しかし、村の外観は、昭和52年に完成した乾田化事業により一枚が30%と150%の45アールに整然と区画された田んぼの中の静かな佇いで、人口は2,100人余りを擁し、市街化調整区域、農業振興地域の指定が村の在り態に深く関わっていることが読み取れます。

平成7年、農林省の農村総合整備事業による「水郷の里」、農免農道整備事業による「農免農道」を建設する際、対象地の加茂神社裏に遺跡の存在が明らかとなりました。発掘調査の結果、旧鍛冶川沿いの貯木場跡地と見られる箇所から約2,300年前の農耕用、祭祀用と見られる木製品が多数出土、わずか1粒ながら炭化米の発見もあって弥生時代前期初頭に既にここで稻作が行われていたことが判明、また、そこから50mも離れていない地点で、こちらは年代がぐっと下がりますが、中世の館の遺跡が発掘され、「やんさんま」（流鏑馬）や天下の奇祭「牛つぶし」で有名な加茂神社が倉垣庄の總社と言われるのもさること、人々の注目が集まっていたのでした。

発掘は平成7年度に始まり、平成10年度に一応終了しました。

村として、大方の、建設の障りの出来（しゅうたい）で厄介なことになったとの思いを、むしろこれを寄贈として「むら起し」の一助にと発想転換出来たのは幸いでした。今は、水郷の里の中程に1億3千万円余りを投じた管理棟が完成し、その中に当初計画から組み込まれた白堜の遺跡展示室が多くの人々の訪れるところとなっています。遺跡の間近で、しかも村の中で一番人々が訪れるであろうパークゴルフのクラブハウスを兼ねた管理棟内を選んだのが功を奏したと言えましょう。訪れる村内外の多くの人々に下村の歴史と文化を認識して頂けるようがとなれば幸いと思っています。

終わりに、精力的に発掘調査の実施に当たり、事後の出土品の展示にも情しみ無くお力添えを頂いた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、富山県農林水産部、同高岡農地林務事務所、さらに熱心に発掘作業に従事して頂いた関係の方々に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

下村教育委員会

教育長 芝田 壮臣

## 例　　言

1. 本書は、富山県射水郡下村加茂中部に所在する下村加茂遺跡で、平成9年度・平成10年度に実施した発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 平成9年度調査は、県営農免道路事業に係るふるさと農道整備事業（以下、農免道路）および集落環境整備事業下村地区に係る水郷の里（以下、水郷広場）建設に伴い、下村教育委員会が富山県農林水産部高岡農地林務事務所および村建設課から受託して実施した。  
平成10年度調査は、水郷広場建設に伴い、下村教育委員会が村建設課から受託して実施した。
3. 調査主体は下村教育委員会であるが、調査の実施にあたり富山県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けた。
4. 調査事務局は下村教育委員会に置き、主事 田中良仁が事務を担当し、教育長 芝田莊臣が総括した。
5. 出土遺物と調査に係る資料はすべて富山県埋蔵文化財センターが保管している。なお、下村では収蔵・展示施設の建設を予定しており、完成後はそこに移管される。遺物の注記は、下村加茂遺跡を示す「下カモー」出土地区名・出土地点等を併記した。また、本書に掲載した遺物には、図版毎にコンテナに入れ収蔵してある。
6. 分布調査・試掘調査・発掘調査担当者は次のとおりである。

分布調査	平成7年度	調査担当者	富山県埋蔵文化財センター	文化財保護主事	島田修一・池田恵子
試掘調査	平成7年度	調査担当者	富山県埋蔵文化財センター	文化財保護主事	島田修一・越前慶祐
発掘調査	平成9年度	調査担当者	富山県埋蔵文化財センター	主任	久々忠義
			同	文化財保護主事	越前慶祐
研修生		同		主事	水島康彦・源田 孝
平成10年度	調査担当者	富山県埋蔵文化財センター	主任	安念幹倫	
		同	文化財保護主事	境 洋子	
研修生		同	主事	杉沢慎子	
7. 本書の作成は、富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て、調査担当者がこれにあたった。  
ただし、本書の「第VI章 自然科学的分析」の分析結果については、専門の機関等へ依頼あるいは委託し、その成果を得た。なお、調査担当者執筆箇所の文責については文末に記した。
8. 本書は本文・表と巻末図版（挿図・写真図版）からなる。本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。  
1) 遺構番号は地区毎にかつ遺構の種別ごとに付した。遺構番号は調査現場で付したものそのまま使用し、掘立柱建物-SB、土坑-SK、柱穴・小穴-P、溝・堀-SD、その他-SXと表記している。なお、遺構番号は遺構検出時点で付したため、井戸もSKと表記している。

- 2) 本書で示す方位はすべて真北、水平基準は海拔高である。
- 3) 引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕で文中に示し、章あるいは節末毎に掲載した。
- 4) 土層の色名や土器・陶磁器の胎土色調については、農林水産技術会議監修「新版標準土色帖」（1994年版）に基づいている。
- 5) 遺構図版はA地区から順におさめた。なお、掘立柱建物および施設を伴う井戸以外は個別の実測図は載せていない。それぞれの遺構の平面形および土層図のセクションポイントについては、全体図(付図)を参照願いたい。
- 6) 遺物実測図版・遺物写真図版はA地区から順におさめ、基本的に堀・溝・井戸・土坑、その他出土の遺物の順に配置した。同じ遺構出土の遺物はなるべくまとめて配置したが、スペースの関係上必ずしも徹底していない。番号は、写真図版におさめた遺物を基本に、時代・遺構・種類を問わず通し番号にした。
- 7) 土器実測図の断面は、珠洲を除いて白抜きである。油煙・炭化物の付着にはスクリーントーンをかけた。
- 8) 遺構図版の縮尺は原則として1/40とし、掘立柱建物の平面図のみ1/60とした。
- 遺物実測図版は、上器・石器類は原則として1/3とし、一部陶器類はスペースの関係上1/4または1/5とした。木器については弥生時代の木器は1/4、中世以降の木器については原則として1/3としたが、一部1/2・1/6のものもある。
- 遺物写真図版については、陶器類の大型破片・復元品は1/3・1/5とし、その他の土器・石器類は1/2とした。なお、錢貨・土製品は対応である。木器は原則として弥生時代のものは1/3～1/8、中世のものは2/3としたが、一部1/2・1/4としたものもある。
9. 発掘調査中および報告書作成中、下記の方々・機関から多大な御教示・御協力を得た。記して深甚なる謝意を表したい。(敬称略、五十音順)
- 赤羽仁論・赤沼多佳・宇野隆夫・木本秀樹・工業普通・桑原隆博・島田修一・神保孝造・杉山左近・高梨清志・新田 洋・林 建亮・穂積裕昌・宮田進一・光谷拓実・三輪茂雄・邑本順亮・山田昌久・山崎雅恵・渡辺昌宏・吉井亮一・吉田清三・茶道資料館・富山県林業技術センター・富山県【立山博物館】

# 目 次

第Ⅰ章 位置と環境 .....	1
1 位置と地形 .....	1
2 周辺の遺跡 .....	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯 .....	3
第Ⅲ章 調査の概要 .....	5
1 調査方法 .....	5
2 平成9年度調査の経過 .....	6
3 平成10年度調査の経過 .....	7
4 普及啓発活動 .....	7
5 整理作業 .....	8
第Ⅳ章 遺構・遺物 .....	9
1 遺構各説 .....	9
2 遺物各説 .....	9
3 A地区 .....	10
A 概要 .....	10
B 弥生時代 .....	10
C 弥生末～古墳時代・平安時代 .....	14
D 中世 .....	15
E 近世 .....	18
2 B地区 .....	20
A 概要 .....	20
B 中世 .....	20
C 近世 .....	20
3 C地区 .....	21
A 概要 .....	21
B 中世 .....	21
4 D地区 .....	25
A 概要 .....	25
B 中世 .....	25
5 E地区 .....	26
A 概要 .....	26
B 弥生時代 .....	26
C 古墳時代 .....	26
D 中世 .....	26
E 近世 .....	26

6 F地区 .....	27
A 概要 .....	27
B 中・近世の遺構 .....	27
C その他の遺構 .....	28
D 遺物 .....	28
引用・参考文献 .....	28
第V章 まとめ .....	29
1 要約 .....	29
2 北陸への弥生文化の波及について .....	32
3 D地区 SD04(館跡 1 の堀)出土の茶磨について .....	40
第IV章 自然科学的分析	
下村加茂遺跡出土木樹種識別 .....	43
富山県林業技術センター・木材試験場 資源利用課 塚本英子	
下村加茂遺跡出土木製品の樹種調査結果(1) .....	51
鶴吉田生物研究所 沙見 真 京都造形芸術大学 岡田文男	
下村加茂遺跡出土木製品の樹種調査結果(2) .....	54
鶴吉田生物研究所 沙見 真 京都造形芸術大学 岡田文男	
下村加茂遺跡の古環境復元 .....	55
パリノ・サーヴェイ株式会社	
下村加茂遺跡泥土の花粉分析 .....	63
富山大学大学院人文学科研究科 山崎雅恵	
下村加茂遺跡 SD15出土の種実遺体 .....	68
立山博物館 古井亮一	
下村加茂遺跡の珪藻分析 .....	70
邑本順亮	
平成 8 年度調査区の自然科学分析について .....	78
平成 8 年度調査区 SD62出土漆椀の分析 .....	83

# 図版目次

## 卷首図版

- 卷首図版1 遠景
- 卷首図版2 A地区全景
- 卷首図版3 A地区 SD15と近世道路跡・探土穴群
- 卷首図版4 C地区全景

## 図版

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図	調査区位置図	5
第3図	基本土層模式図	10
第4図	A地区遺構図（1）川 SD15の土層	85
第5図	A地区遺構図（2）川 SD15の土層	86
第6図	A地区遺構図（3）堀 SD18・24・05・30・31・34の土層	87
第7図	A地区遺構図（4）建物 SB01と周辺の平面	88
第8図	A地区遺構図（5）建物 SB01と周辺の土層	89
第9図	A地区遺構図（6）建物 SB02と周辺の遺構平面・土層	90
第10図	A地区遺構図（7）井戸の平面・側面、穴・溝の土層・溝	91
第11図	A地区遺構図（8）川・溝などの土層	92
第12図	A地区遺構図（9）探土穴の土層	93
第13図	A地区遺構図（10）探土穴の土層	94
第14図	A地区遺構図（11）探土穴の土層	95
第15図	A地区遺構図（12）探土穴の土層	96
第16図	B地区遺構図 溝・穴の土層	97
第17図	C地区遺構図（1）溝・穴の土層	98
第18図	C地区遺構図（2）溝・穴の土層	99
第19図	C地区遺構図（3）溝・穴の土層	100
第20図	C地区遺構図（4）・D地区遺構図（1）溝・穴の土層	101
第21図	D地区遺構図（2）建物 SB01の平面・柱穴断面	102
第22図	E地区遺構図（1）道路 SX01・探土穴ほかの土層	103
第23図	E地区遺構図（2）堀・川・溝の土層	104
第24図	A地区遺物図（1）縄文土器・弥生土器・石器	105
第25図	A地区遺物図（2）弥生前期の木器（農具）	106
第26図	A地区遺物図（3）弥生前期の木器（漁労具・紡織具）	107
第27図	A地区遺物図（4）弥生前期の木器（桶）	108
第28図	A地区遺物図（5）弥生前期の木器（箱・子・棺など）	109
第29図	A地区遺物図（6）弥生前期の木器（劍形・鳥形ほか）	110
第30図	A地区遺物図（7）弥生前期の木器（柄ほか）	111
第31図	A地区遺物図（8）弥生前期の木器（柱）	112

第32図	A地区遺物図（9）弥生前期の木器（板）	113
第33図	A地区遺物図（10）弥生前期の木器（穴のある板）	114
第34図	A地区遺物図（11）弥生前期の木器（えぐりのある板）	115
第35図	A地区遺物図（12）弥生前期の木器（板）	116
第36図	A地区遺物図（13）弥生前期の木器（板・柱・棒）	117
第37図	A地区遺物図（14）弥生前期の木器（柄）	118
第38図	A地区遺物図（15）弥生前期の木器（柱）	119
第39図	A地区遺物図（16）弥生前期の木器（柱）	120
第40図	A地区遺物図（17）中世の土器ほか	121
第41図	A地区遺物図（18）中世の土器ほか	122
第42図	A地区遺物図（19）中世の土器	123
第43図	A地区遺物図（20）中世・近世の土器	124
第44図	A地区遺物図（21）中世・近世の木器（櫛・箸・曲物ほか）	125
第45図	A地区遺物図（22）中世・近世の木器（折敷・曲物・下駄ほか）	126
第46図	B地区・D地区遺物図 中世・近世の土器・金属製品・茶磨	127
第47図	C地区遺物図（1）中世・近世・古代の土器	128
第48図	C地区遺物図（2）中世・近世の土器	129
第49図	C地区遺物図（3）中世の土器	130
第50図	C地区遺物図（4）中世・近世の土器	131
第51図	C地区遺物図（5）中世の木器（折敷・板ほか）	132
第52図	C地区遺物図（6）（D・E地区含む）中世の木器（折敷・箸・桶ほか）	133
第53図	E地区遺物図（1）中世・近世の土器	134
第54図	F地区遺構図	135
第55図	F地区遺構図	136

## 表

表1	調査の経過	4	表16	遺物観察表（11）	151
表2	採土穴計測表（1）	137	表17	遺物観察表（12）	152
表3	採土穴計測表（2）	138	表18	SD15木器観察表（1）	153
表4	採土穴計測表（3）	139	表19	SD15木器観察表（2）	154
表5	採土穴計測表（4）	140	表20	SD15木器観察表（3）	155
表6	遺物観察表（1）	141	表21	SD15木器観察表（4）	156
表7	遺物観察表（2）	142	表22	SD15木器観察表（5）	157
表8	遺物観察表（3）	143	表23	SD15木器観察表（6）	158
表9	遺物観察表（4）	144	表24	SD15木器観察表（7）	159
表10	遺物観察表（5）	145	表25	SD15木器観察表（8）	160
表11	遺物観察表（6）	146	表26	SD15木器観察表（9）	161
表12	遺物観察表（7）	147	表27	中・近世木器観察表（1）	162
表13	遺物観察表（8）	148	表28	中・近世木器観察表（2）	163
表14	遺物観察表（9）	149	表29	中・近世木器観察表（3）	164
表15	遺物観察表（10）	150			

## 写真図版

- 図版1 明治40年の旧鐵治川  
図版2 昭和31年の旧鐵治川  
　昭和35年の下村加茂集落  
図版3 昭和28年のやんさんま走馬風景  
　昭和37年加茂神社神幸式・一本杉  
図版4 作業風景  
図版5 A地区 SD15全景  
図版6 A地区 SD15木器出土状況  
図版7 A地区 SD15木器出土状況  
図版8 A地区 SD15木器出土状況  
図版9 A地区 SD15掘り下げ  
図版10 A地区 中世館全景  
図版11 A地区 堀  
図版12 A地区 堀  
図版13 A地区 かまと・井戸  
図版14 A地区 建物・井戸  
図版15 A地区 井戸・溝  
図版16 A地区 近世採土穴  
図版17 A地区 近世採土穴・道路跡全景  
図版18 A地区 近世採土穴  
図版19 A地区 川跡  
図版20 B地区 全景  
図版21 B地区 堀  
図版22 B地区 溝・採土穴  
図版23 C地区 全景  
図版24 C地区 屋敷地  
図版25 C地区 井戸・穴  
図版26 C地区 柱穴・穴・堀  
図版27 C地区 堀  
図版28 C地区 堀・屋敷地  
図版29 D地区 全景  
図版30 D地区 建物  
図版31 D地区 堀  
図版32 E地区 全景  
図版33 E地区 井戸・堀  
図版34 E地区 採土穴・道路跡  
図版35 A地区 繩文土器・弥生土器(表)  
図版36 A地区 繩文土器・弥生土器(裏)  
図版37 A地区 繩文土器・弥生土器・石器  
図版38 A地区 土師器・須恵器・珠洲ほか  
図版39 A地区 八尾・珠洲ほか  
図版40 A地区 珠洲ほか  
図版41 A地区 土師器皿・珠洲ほか  
図版42 A地区 珠洲・青磁・砥石ほか  
図版43 A地区 土師器皿・珠洲ほか  
図版44 A地区 土師器皿・青磁・珠洲  
図版45 A地区 土師器皿・珠洲・瀬戸・越中瀬戸  
　鉄鍋・寛永通寶  
図版46 B地区 珠洲・瀬戸・灰釉陶器・茶白ほか  
図版47 C地区 珠洲ほか  
図版48 C地区 珠洲  
図版49 C地区 珠洲ほか  
図版50 C地区 土師器皿・珠洲ほか  
図版51 C地区 珠洲・青磁ほか  
図版52 C地区 越中瀬戸・唐津ほか  
図版53 C地区 珠洲・越中瀬戸ほか  
図版54 E地区 宋錢・砥石・炉壁  
図版55~102 A地区 弥生前期の木器  
図版103~106 A地区 中世・近世の木器  
図版107 C地区 中世・近世の木器  
図版108 C・D地区 中世・近世の木器  
図版109 C・E地区 中世・近世の木器  
図版110 F地区 全景  
図版111 F地区 穴・溝・作業風景  
図版112 F地区 溝・遺物

## 付図

- 付図1 遺構全体図  
付図2 A地区・D地区遺構図  
付図3 B地区遺構図  
付図4 C地区遺構図  
付図5 E地区遺構図

# 第Ⅰ章 位置と環境

## 1 位置と地形

下村加茂遺跡は、富山県射水郡下村加茂中部に所在する。

下村は、富山県のほぼ中央に位置し、遺跡の西北約1.5kmには現在富山新港となっている放生津潟がある。放生津潟の南には射水平野と呼ばれる海拔0～6mの平地が広がり、その南側は射水丘陵や呉羽丘陵と呼ばれる海拔100～145mの丘陵地帯となっている。射水平野は、その大半がおよそ6,000年前の繩文海進期に、海底に没したことがある。その後、気候の寒冷化に伴い丘陵地帯から流れ出る神奈川、下条川、鍛治川などの河川によって土砂が運ばれ陸地化していった。

遺跡は、鍛治川の右岸に位置し、海拔20～50cmである。現況は水田となっている。射水郷綱領守と称される加茂神社の北側に隣接するところである。鍛治川は、現在は河川改修によって遺跡の西方約500mに新鍛治川ができたが、改修前は、加茂神社の南縁を流れる幅約50～90mの大きな川であった。鍛治川は、おもに遺跡の南東3.5～5kmにある呉羽丘陵の各所から流れ出す谷水を集めているが、加茂神社のところは、そのような小河川が合流するところにある。

## 2 周辺の遺跡（第1図）

射水平野とその南の丘陵地は、県内屈指の遺跡密集地帯である。

旧石器時代の遺跡（約1.2～2.2万年前）は、丘陵地の約40カ所で発見されている。おもな遺跡をあげると、小杉町の新造池遺跡・新造池A遺跡・草山B遺跡があり、富山市の境野新遺跡・北代遺跡がある。各遺跡からは、石を薄く削いでできた鋭い側刃を刃先としたナイフ型石器など各種の石器が出土している。

繩文時代の遺跡は、平野・丘陵地合わせて50カ所以上で発見されている。射水平野が海進で水没していた繩文時代前期（約6,000年前）は、丘陵部と丘陵裾部に認められる。おもな遺跡は、小杉町の南太閤山I遺跡・富山市の中岡遺跡・小竹貝塚・鶴ヶ森貝塚がある。南太閤山I遺跡では、たくさんのクルミやクリの殻が出土し、小竹貝塚・鶴ヶ森貝塚からは、ヤマトシジミ・シカ・イノシシ・カモ、タイやサケなどの貝殻や骨・歯が出土している。当時の自然環境や食生活などを知る手がかりとなっている。

繩文時代中期から後期にかけては、射水平野が陸地化し平野部への人々の進出が始まり、小杉町の伊勢領遺跡・白石遺跡・富山市利波遺跡などがみられる。また丘陵部にも多くの遺跡が残されている。小杉町では、水上谷遺跡（県史跡）、富山市では古沢遺跡・北代遺跡（国史跡）などがある。これらの遺跡では、堅穴住居跡が残されており、当時の住居や集落の様子を知ることができる。

縄文時代晩期から弥生・古墳時代にかけては、気候が寒冷化し、平野部は水田耕作を中心とした生活をするのに適した環境となつたらしい。平野部では、新湊市の沖幡江遺跡・本江遺跡、小杉町の愛宕遺跡・白石遺跡・富山市利波遺跡などがあり、丘陵地では、小杉町上野遺跡・岡山遺跡（県史跡）・中山南遺跡（県史跡）のように、谷や平野に面した所に集落や墓地が残されている。

飛鳥白鳳・奈良・平安時代は、丘陵地に須恵器や鉄の生産関係遺跡が約300カ所発見されており、この地域の大きな特色となっている。おもなものをあげると、小杉町・大門町の小杉丸山遺跡（国史跡）・黒河尺目遺跡・富山市北押川遺跡・金草窯跡（県史跡）・長岡杉林遺跡がある。当時伏木には越中国衙が置かれており、この地が国衙工房として生産を行っていたものと考えられる。中世においては、政治の中心は新湊市の放生津にあった。そのため射水平野には中世の遺跡も多く残されている。

（久々忠義）

伏木富山港

市 湿地



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 下村加茂
2. 新造池・新造池A
3. 小竹貝塚
4. 蝦ヶ森貝塚
5. 伊勢領
6. 白石
7. 利波
8. 津幡江
9. 本江
10. 愛宕
11. 畠山
12. 中山南
13. 黒河尺目
14. 金草窯跡

## 第II章 調査に至る経緯

**遺跡の発見** 今回の調査対象となった下村加茂遺跡は、集落環境整備事業下村地区に係る水郷の里(とねりこ広場)建設(以下「水郷広場」とする)および県営農免道路事業に係るふるさと農道整備事業(以下「農免農道」とする)に併せて実施された分布調査によって新たに発見されたものである。

両事業が具体化したのは、平成6年度に県各開発部局及び各市町村へ対し行った平成7年度以降の事業照会に際して、下村教育委員会および富山県高岡農地林務事務所(以下「高岡農地」とする)より回答がなされて以降である。水郷広場は、平成12年に実施予定の富山国体でパークゴルフ(公開競技)の会場予定地であり、農免農道は、そのアクセス道路であることから早急に対応する必要があった。

当初、水郷広場建設予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地(以下「遺跡」とする)は知られていないかった。しかし、事業地の南側に隣接して、治暦2年(1066年)に創建され中世莊園倉垣庄の總社とされている加茂神社や弘仁年間創建の寺伝をもつ真言宗福王寺が所在していたことから分布調査を実施することとなった。一方、農免農道についても、建設予定地内には摺出寺遺跡が存在し、白石遺跡に隣接していることなどから、分布調査から実施することとなった。

なお、下村には専門職員がないため、村教育委員会(以下「村教委」とする)の依頼により県埋蔵文化財センター(以下「埋文センター」とする)が分布調査から本調査までを実施した。

**分布調査** 両事業の分布調査は、平成7年4月18日に実施した。その結果、水郷広場事業地内のほぼ全面で古代から近世にかけての遺物の散布が認められ(下村加茂遺跡)、約49,000m<sup>2</sup>の試掘調査が必要となった。また、農免農道建設予定地内でも広範囲に古代から近世にかけての遺物の散布が認められ(摺出寺遺跡・下村白石遺跡・下村加茂遺跡)、約19,500m<sup>2</sup>で試掘調査が必要となった。

**試掘調査** 水郷広場事業地の試掘調査は、平成7年5月18日から5月31日にかけて実施した。計42本の試掘溝(基本的に幅約1m)を設定し、遺構および遺物の遺存状況を確認した。その結果、包含層は昭和46年のほ場整備により削平され存在していないものの、中世～近世にかけての遺物・遺構を確認した。また、調査対象地西端においては場整備時に埋められた旧銀治川河道が確認された。その結果、旧銀治川部分を除く約40,000m<sup>2</sup>において遺跡の保護措置が必要となった。そのうち、本調査は、管理棟など建物・園内流路・駐車場などを対象とした。当初、本調査が必要となる面積は、約13,000m<sup>2</sup>であった。しかし、遺跡を現状の少しでも多く保存するために村教育委員会・下村産業建設課と協議を重ね、その結果、約11,500m<sup>2</sup>を対象に実施することとなった。

農免農道建設予定地の試掘調査は、3遺跡を平成7年5月18日から5月31日、同年11月22日、翌平成8年5月13日から5月15日の3回に分けて実施した。計27本の試掘溝(基本的に幅約1m)を設定し、遺構および遺物の遺存状況を確認した。その結果、下村加茂遺跡でのみ中世～近世にかけての遺物・遺構を確認した。試掘結果と地形を勘案し、道路法線幅約14.1m、長さ約150m、面積約2,200m<sup>2</sup>の範囲において全面調査が必要となった。

**本調査** 調査は、村教委が調査主体となり、村教委の依頼を受け埋文センターより調査員を派遣し、工事請負方式で実施された。また、工事の工程上西側から順次実施することとなった。

### 平成7年度2期調査

平成7年7月31日から9月8日にかけて園内流路の一部について実施した。調査対象面積は、約800m<sup>2</sup>である。主な遺構には、採土穴群・道・溝などが見られた。遺物は近世陶磁器がほとんどで、中世土器・陶磁器が若干見られた。

### 平成7年度3期調査

平成7年11月1日から11月30日にかけて園内流路の一部について実施した。調査対象面積は約1,000m<sup>2</sup>である。しか

し、冬季に向かっての調査のため、西端約300m<sup>2</sup>を完掘するにとどまり、残りは次年度に持ち越した。

#### 平成8年度調査

平成8年4月12日から6月21日にかけて第2次調査の持ち越した箇所について調査を実施した。調査の結果、中世の溝・土坑、近世の採土穴群・道などが確認され、それに伴い中世土器・陶磁器・漆器・木製品、近世陶磁器等が出土している。

なお、同年9月より遺物整理・報告書作成作業を開始し、平成9年3月報告書を刊行した。

#### 平成9年度調査

平成9年5月1日から11月14日にかけて実施した。平成9年度春の時点で、残り約11,000m<sup>2</sup>の本調査が必要であった。富山固体間に合わせるためにには、平成10年度中の調査終了が不可欠であった。そのため、当初の調査予定は、農免農道（約2,200m<sup>2</sup>）・水郷広場管理棟予定地（約500m<sup>2</sup>）を含め、6,000m<sup>2</sup>であった。しかし、調査の進捗状況が良かったため、結果的に約10,650m<sup>2</sup>を調査した。

また、弥生時代前期の遺物が多数出土したSD15の一部や中世館跡は、事業の計画変更によって盛土保存されることとなった。

#### 平成10年度調査

平成10年4月28日から6月9日にかけて実施した。平成10年度春の時点で残っていた水郷広場水路部分・倉庫予定地の約1,400m<sup>2</sup>を調査し、当事業に係るすべての調査を終了した。

（越前慶祐）

表1 調査の経過

調査年度	調査区名	調査面積	調査年度	調査区名	調査面積
平成7年度	分布調査（水郷広場） (農免道路)	49,000m <sup>2</sup> 30,000m <sup>2</sup>	平成9年度	A地区 水郷広場管理棟 農免農道 駐車場	3,170m <sup>2</sup>
	試掘調査1次（水郷広場 農免農道一部含む）	49,000m <sup>2</sup>		B地区 農免農道 駐車場	1,455m <sup>2</sup>
	試掘調査2次（農免農道）	2,000m <sup>2</sup>		C地区 水郷広場築山	3,700m <sup>2</sup>
	平成7年度調査区	800m <sup>2</sup>		D地区 水郷広場管理棟 (計画変更先)	540m <sup>2</sup>
	平成8年度調査区	1,000m <sup>2</sup>		E地区 農道	1,785m <sup>2</sup>
平成8年度	試掘調査3次（農免農道）	12,000m <sup>2</sup>	平成10年度	水郷広場水路	1,400m <sup>2</sup>



は、本調査

### 第III章 調査の概要

#### 1 調査方法

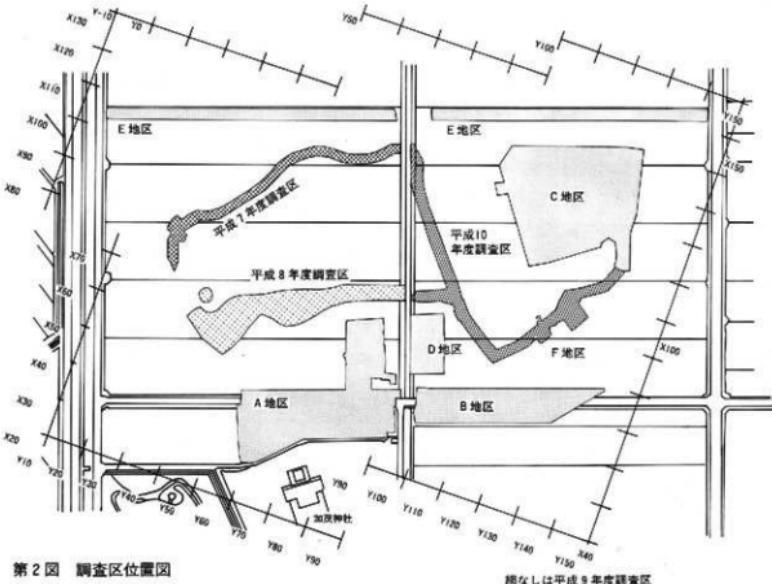
**調査地の現況** 下村加茂遺跡は先述の通り、鍛冶川によって形成された沖積平野の南北にのびる自然堤防上に立地する。また、下村中心集落からはややはずれ、真言宗の古刹福王寺・中世莊園倉垣庄の總社とされる加茂神社の北側に位置する。この辺りは、標高40cm以下の低地で、昭和45~46年に実施されたほ場整備までは水郷地帯であった。現在は、整然と区画された水田が広がっている。調査地内は小さな起伏があり、旧地形は南北方向に尾根状の高いところがあり、遺跡の東西で急に低くなる。しかし、現在その起伏は、先述のほ場整備時の削平・盛土のためほとんどみられない。ほ場整備時の削平は、地山を著しく削平している。

調査区は、農免道路・駐車場・管理棟・築山・農道部分に分かれており、便宜上A地区～E地区とした(第2図)。

**グリッドの設定(第2図)** グリッドは2m方眼で、事業地内の全域をカバーできるように設定した。グリッドの基準には国家座標を用い、平成7年度の事業開始時点にX 81950 Y 2100をX 0 Y 0として設定した。しかし、測量業者との打ち合わせのミスで、南北方向をY軸、東西方向をX軸としてしまった。そのため、平成8年度刊行の調査報告書は、そのままで調査が実施された。しかし、調査上の不便さから、今年度は南北方向をX軸、東西方向をY軸に設定を直した。

**発掘調査方法** 調査は、a. 表土除去、b. 遺構検出・発掘、c. 遺構の記録写真撮影・実測図化、d. 空中写真測量、e. 分析用サンプリング、f. 土壌洗浄である。

**a. 表土除去** 試掘調査の調査結果に基づいて、調査員立会いのもと重機による表土除去を実施した。当初、調査区西側の旧鍛冶川(SD15)上層は、排土置場と考えていたため厚く除去した。



**b. 遺構検出・発掘** 人力でジョレンやねじり鎌で遺構検出を行った。確認した遺構は、スプレーペンキでマークングを行い、遺構概略図の作成を行った。遺構番号は、各地区毎に遺構の種類毎で番号をついた。遺構は、堆土の堆積状況を観察・記録するためのセクションベルトを残し、明らかに搅乱と思われるものや一部の遺構以外は移植ゴテで発掘した。掘立柱建物の柱穴のセクションは、平面的に少しずつ下げる柱痕跡を確認したのち断ち切ったが、柱穴の遺存状況が悪いものが多く、図化が可能なものののみ図化している。井戸は本来断削りを実施するところであるが、井戸が確認された一帯を盛土保存することになったため実施していない。

**c. 遺構の記録写真撮影・実測図化** 各遺構のセクション図は、基本的に1/20で作成した。遺構によっては、平面図や見通し図も作成している。写真は、セクションについては基本的に35mmカメラで、個別の完掘写真や重要な箇所についてはプロニー判カメラも併せて撮影した。全景・ブロック写真は35mmカメラ・プロニー判カメラ・4×5インチ判カメラで撮影した。フィルムは、35mm・プロニー判はカラーと白黒、4×5インチ判はカラースライドと白黒を使用した。

**d. 空中写真測量** 遺構の平面図作成には空中写真測量を利用した。撮影にはヘリコプターを使用し、4×5インチ判の写真で測量を行った。

**e. 分析用サンプリング** 分析は、珪藻分析、樹種同定、種子同定、花粉分析、C14年代測定を実施した。珪藻分析は邑本順亮氏、樹種同定は県木材試験場塙本英子氏、種子同定は保立山博物館吉井亮一氏、花粉分析は富山大学大学院生山崎雅恵氏・鶴谷リノ・サーヴェイ、C14年代測定は鶴谷リノ・サーヴェイに依頼した。邑本氏・塙本氏・山崎氏については、現地で直接サンプリングをしていただいた。

**f. 土壌洗浄** SD15(弥生前期の旧河道)・井戸の埋土について、一旦土嚢袋に詰めた後、日が1mmのざるを2つ重ねて洗浄して内容物を採集した。

## 2 平成9年度調査の経過

A地区の重機による表土除去は、5月1日より開始した。土砂を調査区外へ搬出する必要があったことや現道の除去等があったため予想より時間を要した。5月12日から調査員2名・作業員20名前後・補助員2~3名の体制で発掘作業を開始した。現道除去と並行して作業に入ったため、管理棟予定地より順に遺構検出を行った。調査の間、湧水と降雨には最後まで悩まされた。5月下旬からは、加茂神社裏の近世遺構から順に遺構発掘を開始した。平成7年度・平成8年度調査区で確認されたものの続きの道路跡・探土穴群が確認された。5月23日、当初調査予定地外であった旧鐵治川(SD15)の落ち際から条痕文土器が出土した。さらに、5月28日には条痕文土器・弥生土器・木器が出土したことから、調査区の拡張が必要となったため村教委と協議をもち拡張することになった。調査は遺構が比較的多く見られたにも関わらず順調に進んだ。6月中旬には高所作業車を使用してブロック写真撮影を行い終了した。そして、SD15の調査を残した状態で7月2日に空中写真測量を実施した。

SD15の調査は、おびただしい量の木材や木器の出土や遺構検出面が既に海拔0m以下になるため湧水が激しく手こずった。さらに、堅杵・鍔・劍形・鳥形などが出土したことから、6月20日には「北陸最古級・弥生時代中期初頭の木製農具」として各報道機関に発表した。これによって、村内だけでなく広く県内外に知られるようになった。調査は、断続的に継続し、7月24日・10月23日に空中写真測量を行い11月14日に終了した。

また、9月上旬の村教委・村開発部局を交えた話し合いで、SD15の一部と管理棟予定部分で確認された館跡を計画変更によって盛土保存することになった。保存することになった箇所は、11月10日から人力により川砂で埋め戻した。なお、保存箇所以外出土の弥生時代前期の木材は、サンプルを採集後、保存箇所に移し川砂で覆った。

B地区は、6月13日より重機による表土除去を開始し、6月24日から作業員による発掘作業を開始した。6月23日からは、県埋蔵文化財センターで実施している埋蔵文化財専門養成研修の研修生1名が調査に加わった。

調査は、搅乱・削平が多くみられ、遺物・遺構量が少なかったこともあって天候不順にも関わらず、予定より早く進んだ。そして、7月中旬には高所作業車を使った写真撮影も終了した。7月24日に空中写真測量を行った。

C地区は、当初の計画では来年度の調査予定であったが、他の地区の調査が予想以上に早く進んだことから今年度中に調査を実施することになった。7月28日より重機2台で表土除去を開始し、それと同時に7月29日から人力による遺構検出を行った。8月7日で遺構精査が終了し、8月9日～8月17日まで盆休みを取った。盆明けから遺構発掘を開始した。調査が進むにつれて、13世紀後半～14世紀前半と16世紀後半～17世紀の2時期の屋敷地があることが分かった。しかし、ほ場整備時に削平・搅乱を受けたうえに耕作による搅乱が見られ、柱穴が見られたものの建物の復元はできなかった。遺構発掘は9月上旬で終了し、9月11・12日に高所作業車を使用して写真撮影を行った。空中写真測量を9月25日に行った。しかし、撮影失敗との連絡を受け9月27日に再測量を行い調査を終了した。

D地区は、9月9日の村教委との協議により、管理棟予定地が変更になったために新たに調査対象地となった箇所である。調査は、調査面積が少ないとからE地区と並行しておこなった。9月29・30日に表土除去を行い、9月30日から遺構精査を開始した。その結果、A地区的館に伴う削平の堀が確認された。この堀からは、県内では出土例が多くない山茶碗や茶臼が出土した。遺構掘削は、10月3日より開始し、10月9日に終了した。ブロックおよび全体写真撮影は、10月16・17日に足場を使用して行った。空中写真測量は、E地区と併せて10月29日に実施した。

E地区は、東側調査区から9月30日から開始し、10月13日に終了した。10月2日からは、表土除去が終了した東側から遺構精査を開始した。西側調査区の排水は調査区外へ搬出の必要があったため、キャリアダンプを使用したため時間を要した。遺構は、調査区の東西両端に集中して確認された。西側調査区で道路跡・採土穴群が確認され、A地区からE地区まで少なくとも200m以上にわたって続くことが確認された。10月17日に一部を除き遺構掘削が終了し、10月21・22日に足場を使用してブロック・全景写真撮影を行い、10月29日の空中写真測量をもって終了した。

### 3 平成10年度調査の経過

今年度の発掘調査地区は、人工川、便所及び資材棟の建設予定地である。便宜上、この調査区をF地区と称した。4月28日から5月1日の3時間、表土除去を実施した。5月7日から作業員を導入し、発掘調査を開始した。まず、北西隅から包含層除去及び遺構精査を行った。以降同様の作業を行う。5月20日から遺構掘りを開始し、併せて遺構断面実測等も行った。6月4月には全景写真撮影を、翌5月には空中写真測量を実施した。またこの日をもって、作業員導入による発掘調査は終了した。6月8・9日は、遺構の個別写真撮影を実施した。この写真撮影の終了をもって、現地での調査はすべて完了した。例年に比べて天候不順であり、大雨により調査区がプール状態となつたこともあったが、遺構・遺物が比較的少なかったため、予定より早く完了した。

なお調査期間中、富山県埋蔵文化財センターが実施している埋蔵文化財専門養成研修の研修生1名が、常時調査に加わった。

### 4 普及啓発活動（いすれも平成9年度）

**新聞・広報等の記事** 新聞等報道機関への記者発表を6月20日と8月21日に実施した。それぞれ新聞・テレビ会社数社によって大々的に報道された他、2回にわたって新聞で報道された。これらによって、村民・県民に広く知られるようになった。また下村で2ヶ月に1回発行され、村内全戸に配布されている広報誌「しもむら」でも遺跡の紹介が掲載された（10月No121号）。ここでは、調査成果のほかに先に実施された現地説明会の様子が紹介された。

**現地説明会** 2回目の記者発表の直後の8月23日に実施した。この段階で調査が終了したA地区（SD15は木器の出土状況が分かる状態）・B地区および遺構精査が終了した段階のC地区を見学会場とした。説明会は、午前10時から12時までの日程で、全体説明と個別の遺構説明および出土遺物の説明をおこなった。全体説明は、配付資料「下村・下村加茂遺跡現地説明会資料」とパネルを作成した。個別の遺構説明については、主要遺構に遺構名を記したプラカ-

ドを立て、口頭で説明をした。出土遺物の説明は、遺物に関連した説明板を壁に貼った。当日は約200名と予想以上の参加者があり、村内の人だけでなく県内外からの参加者が多かった。個別の遺構説明は2班に分けておこなった。

**その他の見学会** 6月10日、授業の一環で地元下村小学校6年生の見学があり、簡単な遺跡の全体説明と時代背景の説明のあと実際に遺跡・遺物を見学した。発掘現場を初めて見る子供がほとんどで、熱心に説明を聞いていた。県埋蔵文化財センター主催の「ふるさと考古学教室」(小学生対象)と「普及講座」(一般の人対象)の見学会が、それぞれ7月29日と8月28日に実施された。新聞等の報道により参加者の関心は高く熱心な質問がいくつかあった。

**展示会・講演会** 村の芸文祭(11月2・3日)には、会場の一角に展示室を設け遺物と写真パネル・説明パネル等を展示し、このことは新聞でも報道された。現地説明会以降、広く一般を対象とした展示・説明の機会がなかったためかなり関心が高かった。また、平成10年2月18日には、都内社会教育大会(参加者100名)において出土した木器について教授を受けた東京都立大学助教授山田昌弘氏の講演会が開かれた。また、平成10年4月26日には調査担当者の久々が下村芸術文化協議会および村の社会教育の一環で実施された講演会にて「2,300年前の下村」の演題で講演をした。

## 5 整理作業

### 1) 遺物

土器・石器・金属器については、調査に並行して現場プレハブにて水洗・注記・接合・復元・実測作業を行った。土師器についてはバインダー処理を施した。注記はポスターカラーを使用した。注記作業まで終了した遺物は、それぞれ遺構・グリッドごとにまとめ接合作業をおこなった。範囲を中心にして接合関係が見られるものがいくつか見られたため、できるだけ遺構・地区間の接合を試みた。実測は、遺物の時期や出土状況を勘案しながら、遺構出土のものを中心に可能な限りおこなった。

木器は、製品・未製品・加工木などかなりの量が出土地した。現場では、良好な資料はコンテナ内でホウ酸水に水漬けして保存した。その他のものは塩化ビニール製のシートにくるんで保管した。現場から持ち帰った後は、良好な資料については実測後に鶴吉田生物研究所で保存処理をおこない、他の資料については鶴三菱ガス化学のR Pシステムを使ってパックした。

遺物の写真撮影は、デジタルカメラによる撮影委託をした。木製品の実測は、この写真を使って実測している。

### 2) 図面

現場で製作した記録図面はB3版で約70枚にのぼった。実測図は、地区毎に断面図(基本的に1/20)・平面図(基本的に1/20)に分け、それぞれの図面の内容をタックシールを付け明記した。

遺構平面図は側上管に測量委託をし、各地区的1/20と1/100の遺構図と平面図を作成し、原図と共にMO・CD-ROMで保存している。

各図面は保存のためデジタル撮影し、原図と共にMO・CD-ROMで保存している。

遺物の写真・図面のデジタル撮影は、アガス・フォト・スタジオへ委託した。

(越前慶祐)

## 第IV章 遺構・遺物

### 1 遺構各説

ここで取り上げる遺構は、主に掘立柱建物・井戸・堀・溝・土坑・採土穴・道路跡である。各地区において館跡の遺構もしくは屋敷地の遺構とした場合は、堀の内側に位置するこれと同時期の遺構を指すものとする。以下、個別の遺構の記述にあたって、前もって一応の基準と使用する語句や数値の意味などについて述べておく。

径や幅・深さなど規模を表す数値は、原則として土層断面図作成箇所の測定値であるが、その数値がその遺構の規模を示すものではないと判断した場合はこの限りではない。

#### 掘立柱建物

- ① 建物の長軸（柱間の多い部分）を「桁行」、建物の短軸（柱間の少ない部分）を「梁行」とする。建物の規模は「梁行」×「桁行」で表記する。
- ② 「身舎」は、庇もしくは張り出し部を持つ建物の主体となる部分をいう。
- ③ 建物の内側に位置する建物に伴う柱を「束柱」とし、このような建物を「総柱建物」とする。
- ④ 柱穴について、「柱根」は木質が残っているものを指し、「柱痕」は柱の痕跡を指すものとする。

#### 井戸

- ① 種類を、木組井戸（井戸枠を板で組むもの）、曲物積み上げ井戸（曲物を數段積み上げて井戸枠としたもの）、素掘井戸（全く井戸枠をもたないもの）に分けた。
- ② 平面形・規模は井戸枠の平面形・規模を示している。

#### 採土穴

- ① 平面形より、円形・方形・隅丸方形・不整形に分類した。
- ② 近世の採土穴群はその上層に流路が見られ、周辺より低くなっている。そのため深さの数値は流路の肩の地山面の高さより計測したものである。

### 2 遺物各説

本文中には出土遺物について詳細な説明をおこなわず、各遺構からの出土遺物の種類・器種・特記事項のみを簡単に説明するに留める。詳細については遺物計測表・SD15出土木器観察表・中・近世木器観察表を参照されたい。本文・計測表・観察表・図版・写真図版中において番号は共通である。なお、F地区については、別途番号を附し本文のみの説明とする。

以下、各遺物の記述にあたって、前もって一応の基準と使用する語句や数値の意味などについて述べておく。

#### 土師器皿

- ① 「かわらけ」・「土師質土器」・「土師皿」などの呼称があるが、ここでは「土師器皿」を使用する。
- ② 時期決定は宮田氏の編年〔宮田1997〕による。

#### 珠洲

- ① 器種分類において、「鉢」と「すり鉢」の区別は鉢目の確認の可否でおこなった。そのため、「鉢」の中にも実際には「すり鉢」が存在している。また、「片口鉢」としたものも片口が確認できたもののみに使用した。
- ② 時期区分は吉岡康暢氏の研究〔吉岡1994〕による。本来なら「吉岡編年第III期」とするべきであるが「III期」とのみ記述する。  
(越前慶祐)

### 3 A地区

#### A 概要

弥生時代～近世にいたる遺構・遺物が確認された。このうち主体を占めるのは弥生時代前期・鎌倉時代後期（13世紀～14世紀前半）・近世前期である。

弥生時代の遺構・遺物は、主に調査区の西端で確認された。遺構は前期のSD15のみで、自然流路（旧銀治川）の淀みを利用した貯木場兼木器加工場である。土器は弥生時代前期の縄文土器（条痕文土器）と弥生土器が出土し、それに伴い大量的木材・木器が出土した。古墳時代・古代の遺物は散見できるが、この時期の遺構は確認できない。

中世の遺構・遺物は、主に調査区の東半分で確認された。遺物は、13世紀前半～15・16世紀のものまで見られるが、中心となる時期は13世紀後半～14世紀前半である。遺構は鎌倉時代後期（13世紀～14世紀前半）の範囲に伴うものとそれに後続する時期と思われる採土穴がある。ここで確認された跡跡を便宜上跡跡1と呼称する。

近世の遺構・遺物は、主に調査区の西側で確認された。この時期の遺構には、旧銀治川に沿って南北方向に延びる道路跡とその両側に見られる採土穴群・溝がある。いずれも近世前期（17世紀）のものである。

#### B 弥生時代

弥生時代の遺構は、川 SD15・16の屈曲部を利用した貯木場跡がある。川の中からは、縄文土器・石器、弥生土器、木器・自然木・種実が出土した。土器の様相、C14放射性炭素年代測定などから、貯木場は、弥生時代前期古段階のものと推定される。

##### 川と貯木場（SD15・16）

SD15は、昭和47年まで流れていた銀治川の旧流路である。その川幅は、昭和47年段階では10～20mであるが、流路が時代によって変化しており、最大で50～90mあることが、試掘調査で確認されている。

貯木場跡は、川の右岸にあり、岸辺を弧状にえぐっているところである。その川岸から川（西）側へ約15mといったところが昭和47年段階の川岸である。川岸地山面の高さは海拔0cmで、川底の高さは海拔マイナス135cmである。

川の中とその上に堆積している土は、大きくI～IX層の9層に分けることができる（第3図）。VI層からX層は、それぞれの中が縦状になっていて、薄い層の集合である。遺構確認面の土は黄灰色粘土質シルト（X層、厚さ約10cm）で、さらにその下は白色または青灰色の砂（XI層、厚さ110cm）が堆積している。また、SD15の川底面にやや堅い白色の粘土層（XII層）が認められる。XII層からはおびただしい湧水がある。

SD17は、SD15がいったん土砂（VII～IX層）で埋まった後で、川岸との間にできたSD15の分流である。そこでの川底面の高さは、海拔マイナス120cmである。

##### SD15土層説明（）内は第3・4図の地層名

I層（②層）暗褐色シルト（水田耕土） 厚さ約15cm

II層（③層）黒褐色シルト（旧耕土） 厚さ約10cm

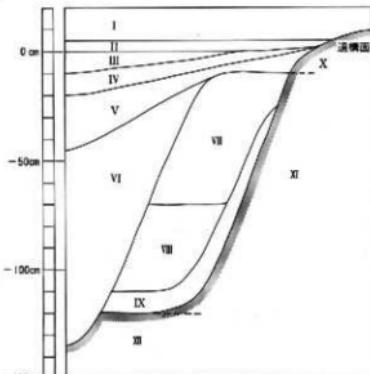
III層（④層）黒色砂質シルト（近世遺物包含層） 厚さ約10cm

IV層（⑩・⑪層）黒褐色シルト（中世遺物包含層） 厚さ約10cm

V層（⑫・21・22層）オリーブ黒色シルト（弥生前期遺物包含層） 厚さ約25cm 木器・植物遺体を多く含む。

VI層（⑬層）黒褐色シルト砂質（弥生前期遺物包含層） 厚さ約90cm 木器・植物遺存体を多く含む。

VII層（37～43層） 黃褐色砂 厚さ約60cm 大きく5層に分かれる。 第3図 基本土層模式図



VII層（26・35・36・44～46層）灰色砂 厚さ約50cm 砂と黒褐色砂が縞状に堆積。

IX層（54層）黒色砂質シルト 厚さ約10cm 川岸付近に残る。

SD15に弥生時代前期の貯木場が設けられたのは、その川が1m近く埋積したことである。基本土層のV層下部からVI層上部の海抜マイナス20～50cm前後のところから、切り倒された木材や木器、土器や石器が出土した。VI層は植物質とシルト質の砂が混じったもので、白い砂が縞状に堆積していることから、強い水の流れによって堆積したことがわかる。しかし、V層は植物質や木器をあまり含まず土にも粘りがあり、水が淀んだ状態で堆積したことが考えられる。貯木場は、そのような水の流れがほとんどない浅瀬に設けられたものと考えられる。

木材は、岸辺から約10mのところに帶状に連なっていた。切り倒された木材は、周辺に生えていたものを、当時の人が伐採して、後で利用するために川縁の浅瀬に水漬けにしたものと考えられる。木器は木材の間から出土しており、加工途中のものもあるが製品も多く、その上流右岸（加茂神社のあたり）に集落があったものと考えられる。

貯木場跡は、弥生時代前期以降に鍛冶川の流れが西へ移行したこと、その包含層が0cm以下にあって地下水に没かっていたために保存されたものである。

#### 土器・石器（第23図、図版35～37、表6・7）

土器・石器の大半は、旧鍛冶川（SD15・17）の木器の出土層と同じところから出土した。特にX44～46Y59・60区からやまとめて発見された。その他に数点、中世以降の土に混じって発見されている。全体の量は少なく、整理箱3箱である。

土器は、50点ほどの破片があるが、個体数はその半分ほどであろう。土器には、外面に条痕を施したりヘラケズリを行った繩文土器（1～18・20・21・23～50）と、ハケメやヘラミガキを施した弥生土器（19・22・51）があり、前者が多い。個々の説明は観察表にゆずるが、ここでは特徴的なものを説明しておきたい。

1～5・21は条痕を施した深鉢である。全体の器形がわかるものはないが、21の底径の小さい底部をみると、深鉢は口が広く底がすぼまる鉢形となるらしい。

条痕は貝殻によるもので、条幅は1～2mmの細いものと2～3mmとやや広いものがある。条痕は横方向あるいは斜めに施される。内面はナデあるいはヘラミガキするものが多い。

1・4・5は口縁部が内湾ぎみに立つ深鉢で、1は口唇部に連續した押圧が施され口縁部がさざ波状となるもの、5は口縁部に双頭の突起（B字状突起）が付いている。

2・3は同一個体とみられるが、口縁部端部がわずかに外反する深鉢である。色調は灰色や黒褐色を呈する。1は外面に、2・3・5は内面に炭化物がこびりついている。

16・17は同一個体で、胴部下半部をヘラケズリした繩文土器深鉢である。

弥生土器19・22・52は、褐灰色をしており、繩文土器に比べて明るい色調である。いわゆる遠賀川式土器の特徴に近い。19は竈の胴部とみられ、摩滅しているが外面はヘラミガキ内面はナデである。

22は壺の底部とみられる。外面は縱方向のハケメの上からヘラミガキを行い、内面は横方向のハケメを丁寧に施す。底部は大きいかわりに薄く、胴部との接合部分に接着をよくするために指先を押しつけた爪痕が残る。このような特徴の持つ例を知らないが、東北地方でみられる壺型の影響があるのかもしれない。

石器は5点ある（52～56）。52は石鐵で、長さ2.6cmの有茎式で、石材は安山岩である。

56はこぶし大の軽石である。中央に幅約5mm深さ1mmの溝が巡る。溝はそこに紐を縛りつけたと考えられており、浮き子とみられる。軽石は上市町江上A遺跡では刃物を研ぐ砥石として用いられており、砥石の可能性もある。

53・54は打製石斧（土掘り具）である。53は頭部と刃部を欠く。54は長さ168cmの刃先がやや開くもの。55は泥岩製の砥石である。SD17から出土した。

このほかに、SD16の古い川底から、船刀石斧とともにみられる緑灰色の石材が出土した。

木器（第24～38、図版55～102、表18～26）

貯木場跡から、農具、漁撈具、紡織具、容器・食器、祭祀貝、工具、建築部材、用途不明の棒、杭など生活全般に関わるもののが約400点出土した。その他に、切り倒した木材や植物の種実がある。おもなものを紹介しておく。

農具には、鍬（1・3・5）、鋤（2・6・35）、堅杵（7）、編板（10）、田下駄（69）がある。

1は、鍬の身部とみられる。身の平面形は肩が丸く先が尖る木の葉形である。身の断面は中央が厚く縁が薄い紡錘形である。上部は欠けている。その先が長く伸びるか、短い柄軸が付くのかわからない。そのため、鍬になるのか鋤になるのかは判断がつきにくいが、樹根が広葉樹であることから、膝柄の柄が付く鍬と想定する。

2は、平面形が短冊形の鍬の頭部と考えられる。この種の鍬は長方形の柄孔を持つものとみられる。

4はその柄の頭部とみられるものである。断面方形の突起があり、突起を方形柄孔に差し込み、突起の側面の穴に栓をして身を固定するものと考えられる。そうすると、装着される鍬の厚みは1.8cmであり、2の厚みと同じである。着柄角度は約60度となる。

3は先が二又に別れた鍬とみられるが、はっきりしない。

5は柄穴の丸い鍬の柄とみられる。長さ106cmの心去り棒で、断面を径2.8cmに丸く削り出している。35は、先が尖る細棒である。又鍬の歯にならないだろうか。

6は、T字形をした鍬の把手とみられる。ケヤキ材で、柄部との境に段を設け、全体にていねいに磨かれている。柾または枝の可能性も考えられる。

7は堅杵である。長さ55cm、握り部の直径が3cmつき部の直径が4.5cmの細いもの。握り部には筋を持たない。片側のつき部は欠けているようでもあるが、無かった可能性が大きい。

10は編板である。幅約6cm厚さ1cmの板の片側側辺に三角と四角の刻みがある。三角刻みの間隔は14.3cm四角刻みの間隔は15.4cmである。刻み間隔から、竹や蘆などを編む道具と考えられる。

漁撈具には、たも網棒（9・37）、罈（8）、舟の部材とみられるもの（23・25・170）、浮子（34）、柄（38～53）がある。

9は、枝分かれした木を利用し、幹を柄、枝を枠にしたたも網棒である。柄は断面がかまぼこ形で先に三角形の頭部を作り出す。別木の長い柄をあて、紐で縛って取付けたものとみられる。

37は、断面かまぼこ形の棒で、平らな面の両端には斜めに、中央にはまっすぐな溝が彫り込まれている。斜め溝の反対面はそこにはめ込まれた棒を縛ったような緊縛痕が残る。たも網棒あるいは熊手の組合せ部材と考えられる。

8は、柄の上部を欠くが、身は肩が丸く先が尖る木の葉形で、断面は平坦である。スギ材であること、柄がやや偏平で一本であることから、柾とみられる。23は、舟の舳先ではないかとみられる。

25は、直徑50cmの丸木を厚さ約3cmにくりぬいたものである。丸木舟とみるが、外側が表皮のままであるので、柾状の槽かもしない。

34は、蝶ネクタイ型の板である。形態的には、チキリと呼ばれる結合部材に似ているが、薄くて中央くびれ部が細い。浮子あるいは糸巻きのようなものではないかと想像される。発掘時に分割して出土したためバチ型木器と呼ぶ。

38～53は、太さ1.5～3cmの断面かまぼこ形の柄である。38は一端がコブ状、39・41は一端が三角形に尖っている。これらは、たも網や祭祀具などを取り付ける柄になるとみられる。

40は、幅1.5cm厚み8mmの木釘が18cmの間隔をおいて2箇所に打ち込まれている。紐で縛るほかに木釘で固定する方法があったことがわかる。

紡織具には、経巻具（11）・綿打具（12）・紡錘車の軸（13・14）とみられるものがある。

11は、機織り具の縦糸をかける棒とみられる。両端に立木や腰当てに結ぶためのえぐりがある。えぐりの間隔から

布幅は24cmほどであったと想定される。12は、横糸を押し込む板で、身の大部分が欠けているが、一方が薄く尖り、反対側は平版で厚さ4.5cmの厚みがある。残っているところは端の手に握る部分とみられ、手すれにより摩滅している。13・14は断面が丸い直径1cmの棒で、繊維に燃りをかけ糸を作る紡錘車の軸木とみられる。13は片方が尖がっている。

容器・食器には、桶(15・16)、箱(17・18・19)、蓋(20・22・24)、くりもの(21)、鎧状品(26・27)、脚部(30)がある。

15・16は断面が丸く、内面下部に底板をはめ込むための肥厚帯がある。16は遺存状態が悪く大きさは不明、15は、高さ30.6cm内径約16cmを測る。上部は外側を削り内傾させているが、蓋をかぶせるためかもしれない。

17は、幅11cm厚さ9mmの板の一端に方形の小さい穴をあけたもの。別の板の側辺に突起を作り出し、その穴に差し込んで箱形に組み合わたるものと考えられる。

18・19も箱の側板とみられる。18は板の一端が四又に別れている。側辺には装飾的なえぐり込みがある。19は側辺に段状のえぐりを設けている。

20は、縁がやや厚みのある隅丸方形のもので、合子のようなものの蓋ではないかと考えられる。

24は、厚さ8mmの薄板である。側辺の弧状のえぐりがある。桶か箱の蓋または底板であろう。

22は、断面がやや山形の板で蓋と見られる。周辺が薄く筈箱の蓋のように使われたのではないかと想像される。

21は、直経40cm長さ2.2mのハンノキを半截してくり抜いたもの。縁の厚さは3.5cm。表面に加工痕が顕著にみえ、舟筒や桶の未製品のようである。

26・27はいずれも針葉樹の板目材を用いた大型の杓子あるいは卓配のようなものである。鎧状品と呼んでおく。26は、人半がはつりとられているが、平坦な身に直径2cmの断面が丸い握り部がつく。27は、先端を欠くが身は肩がやや張る方形で、長さ12.5cmの断面が四角い柄が付く。肩部の形状が左右で異なるので、未製品の可能性もある。

30は、容器の脚部ではないかとみられる。

祭祀具には、剣形(28)、鎧状品(29・31)、矛形か(32)、鳥形(33)がある。

28は、ヒノキ材を用いた長さ45.2cm幅3.2cm厚み8mmの先が鋭いものである。断面は菱形にして鎧を表現している。下部は、両側辺を削り柄部を作る。剣あるいは槍を象ったものとみられる。

29は木の葉形の身の中央に半円形の穴が二個一対であけられているもの。

31も、身はやや笹の葉形で長いが、同様に半円形の穴が二個一対であけられている。31には、長さ7.5cm太さ1.5cmの軸が付いている。29は欠けているが、同様の軸が付くのであろう。その軸と穴の間の軸とに別木の柄を縛りつけて用いるものと考えられる。

これとよく似た木器は、これまで弥生時代から古墳時代にかけて出土例があり、組合せ鎧と呼ばれている。その用途については、針葉樹が使われていることなどから、実用の鎧ではなく櫛の可能性が考えられている。今回刃先を上にして図化したのは、これが、槍や矛などの武器を形作った祭祀具の可能性があるのではないかと想定したからである。32は、先を尖らせた板であるが、矛などの武器形ではないかと考えられる。

33は鳥形とみる。幅4.7cm厚み1.5cmの板の一方をくちばし状に尖らせ、他方は段状の削りを加えて尾を表現している。側面と腹部に粗いえぐりがある。側辺のえぐりには羽根が取り付けられたものであろうか。下のえぐりは棒などへの装着のための工作とも考えられる。

工具には、刀子あるいはヤリガンナの柄とみられるもの(36)がある。36は、両端に頭部をこしらえた断面かまぼこ形の棒で、三箇所に幅1.5cm深さ2mmの溝が彫り込まれている。同様のものを2枚重ねて、間に刀子やヤリガンナの茎を挟む工具の柄ではないかと考えられる。溝は、桜皮などで巻いて縛るためのものであろう。

建築部材には、柱(54~58)・厚板(59~63)、板(64~68・70・71~73~105)、角材(106~169)、くさび(72)と

みられるものがある。

54は、一部を残すだけであるが、直径約40cmの丸柱に縦16cm横10.5cmの四角い貫穴があけられている。

55・56は、断面方形の柱であるが、四角い穴やえぐりがある。57は、幅12cm厚さ10cmの角柱である。端部を斜めに削り落してある。高床建物の床材とみられ、主柱や横材と交差するとみられるところに相欠き状のえぐり込みが認められる。58は、一部に表皮を止める一辺約10cmの角柱である。

59は、幅29.5cm厚さ5.5cmの板の端部両角を削り落とし、端部から約20cmのところに約3cmの段を設けているもの。建物の床板と考えられる。60は、厚さ5.5cmの厚板である、片方によって一辺8cmの方形の穴があいている。建物妻部分壁板とみると、穴は棟木がはまるのかもしれない。

61は、幅25cm厚さ2cmの板である。両端を切りそろえて方形にしている。焼け焦げており、壁板を礎板に加工したものかもしれない。63は、厚さ1.8cmの板であるが、側辺を丸く整えている。ねずみ返しの可能性がある。

板は、幅3~14cm厚み0.8~2cmのものがある。64~71・73は穴があいており、74・75は側辺にえぐり込みがある。板は、建物の襤板などの建築材とみられる。穴やえぐりは他の板との接合のための紐通し穴あるいは紐掛けと考えられる。板は建築材とすれば本来はもっと長いものであったと考えられるが、50cmほどに切りそろえられているものが多い。建物が解体された後の部材の可能性がある。

角材は、幅3.5~9cm厚み2~12cmのものがある。152~158は端部や側辺にえぐりがあるもので、垂木のようなものと考えられる。162~164は、一部に表皮が残るもので、製材途中の割材かもしれない。

用途不明の棒(110~151)は、棒を組み合わせて作られた道具等の部材の可能性が高い。110~112は、太さ3cm前後の断面が多面体のもので、111は上端に幅1.2cmの四角い穴がある。機織り具のようなものの部材かもしれない。

121は隅丸方形の穴がある。上端にも直交する穴があいているらしい。建築材かもしれない。

122は、上部は断面円形下部は断面方形である。糸巻きの部材か。

123は、大足の横桟材か。125はくびれがある角材である。垂木の先端のようである。

129は太さ1.4cmの丸棒である。火つき棒の可能性がある。

杭(171~173)は先端を尖らせたもの。堰や水路の護岸などに用いられたものであろう。

剝片(174)は、幅5~6cm長さ18~23cm厚さ3~8mmのものがある。これらは、これを削り落とした道具が鉄のようない金属刃物であり、この場所で木器の加工が行われていたことを示す。

切断木(175~180)は、割材および加工痕跡を残す木材である。178~180の加工痕から斧の刃部幅が3~4cmであったことがわかる。切り倒され、水辺に貯木されていたおもな木材は、長さ12.6m太さ46cmのトネリコ、長さ9.6m太さ47cmのハンノキ、長さ5.2m太さ25cmのコナラがある。

木器はスギが多く用いられているがスギの丸木は残っていない。しかし枝材が出土しているので、伐採された木材のなかにはスギも含まれていたと考えられる。スギは利用価値が高いので早くに使われてしまったものであろう。

木材のほかには、種実類も多く見つかっている。これまでに炭化米・ヒヨウタン・ヒシなど約25分類群の種実遺体が確認されている。木材・種実の同定結果については、第VI章に詳しい。

### C 弥生末～古墳時代・平安時代

弥生末～古墳時代と平安時代と見られる土器が9点出土している。排土中や包含層、中世以降の遺構からの出土で、それぞれの時期の遺構は認められない。

57は、内面ハケメの土師器甕の胴部である。器壁が薄く、弥生末～古墳時代前期のものである。

58~65は、いずれも平安時代のものとみられる。58・59は、底部糸切りの土師器甕の底部である。60は須恵器壺、61は須恵器甕、62は須恵器甕の胴部である。63~65は、土錐である。

(久々忠義)

## D 中世

### a. 館跡 1

先述のとおり13世紀～14世紀前半の館跡である。館跡の遺構出土の遺物のほとんどは13世紀後半以降のものであるが、一部13世紀前半のものがみられ初現はこの時期にまで遡るものと思われる。館跡は主郭と2つの副郭からなる。全体を確認したものではないが、平成8年度調査で北端の堀を確認している。館跡の主郭は、周囲を堀で囲まれた東西約37m南北約41mの方形であると推測する。副郭は主郭の南側と北東側で確認され、いずれも堀で囲まれている。なお、北西側の副郭はD地区で確認されたもので、詳細についてはD地区の章に譲る。南側の副郭を含めると南北方向約55mの規模になる。副郭が当初から存在していたものなのか、ある時点で拡張されたものなのかという問題がある。幾つかの堀は一度掘り直しがなされているものの、出土遺物からその新旧の時期差を追うことはできなかった。しかし、鎌倉時代終末期に館の防御を強化するために行われたものと推測できる。この館の遺構の覆土には炭や焼土粒が混入しているものが幾つか見られることから、廃絶時に火災にあってるものと推測する。館跡に伴い掘立柱建物2棟・井戸6基・カマド1基などが確認された。以下、それらについて述べる。

#### 堀（第6図・図版11・12）

**SD18-2** 遺構掘削の前にはSD18-1の続きを捉えていたが、遺構掘削の結果、別の遺構とした。館の主郭前面の堀である。基本的に幅1.2m深さ0.4m前後であるが、主郭への入り口部分では池状に幅が広くなり幅6.5m深さ0.8mを測る。また、断面形は箱形で、池状の部分はすり鉢形になる。この堀は15m東で北に折れ、SD34につながる。SD18-1・2セクションや範囲確認トレントレンチセクションをみると掘り直しがなされていることが分かる。掘り直した際に正面は池状に深くしているが、範囲確認トレントレンチ部分では浅くなっている。掘り直した部分の覆土は比較的砂質分が多い。出土遺物には土師器皿・土師器鍋（180）・珠洲・八尾（189）・青磁（181）がある。土師器皿は小片が多く、口径が復元できるものはほとんどない。土師器鍋は口縁端部の小片で、外側に炭化物が多く付着している。珠洲は甕・壺・すり鉢がある。時期が分かることは少ないが編年II～III期の範疇に押さえられそうである。八尾はいずれも甕の胴部で時期決定の決め手に欠ける。青磁は高台のみの出土であるが、13世紀後半～14世紀前半の確である。須恵器甕は混入品の可能性があるが砾石に転用されている。

なお、八尾は館内の複数の遺構で出土しているが、その調整の差から數個体に分けられる。調整はナデ調整痕があり残さないものと粗いナデ調整痕を明瞭に残すものとがある。後者のものは焼成があまり良くないものが多い。この差が単なる個体差なのか時期差なのか窯の差なのかは不明である。ここで出土したものは粗い調整痕を残すものである。破片は比較的大きく意図的に割られたかのような割れ方をしている。

**SD24** 館の主郭前面の堀である。SD18-2とはわずかに段違いになるように位置し、その間が主郭の入口部分になる。その幅は約4.6mを測る。平面形および土層観察からSD18-2同様、ある時点で深く掘り直していることがわかる。その時点で意識的にクランクさせている。新旧両方の覆土に植物遺体が多く混じた層がみられるほか、全体に砂質分の多い層が目立つが、掘り直した部分はより目立つ。本来の幅は不明だが掘り直した後は幅1.8～3.2m深さ0.6～0.7mを測る。出土遺物には、土師器皿（190～192）・珠洲（194～198）・木製品（柄17・折敷底板19・浮子18）等がある。土師器皿は13世紀後半～14世紀前半のものがみられ、口径7～8cm程度のものと13cmのものとがある。珠洲は甕・壺・すり鉢がありII～III期のものである。また、このすぐそばから遺構検出時に鉄鍋片が出土している。口縁部の小破片であるが、口径40cmに復元できる。口縁端部はほぼ水平で、縁に蓋受けの屈曲が付くタイプと思われる。

**SD34** 調査区の北西端で確認した。一部のみの確認であり深さは0.45mを測るが、幅は不明である。なお、この堀の南側の確認トレントレンチでSD18の続きを確認している。中層に薄くはあるが砂層が見られる。出土遺物には、珠洲（212・213）・八尾（89・214・215）・板材がある。珠洲はすり鉢が八尾は甕があり、八尾はSK07出土のものと接合する。珠

洲はII～IV期のものである。

**SD30** 幅0.9m～2.5m深さ0.2m～0.4mを測り、北ほど幅が広くかつ深くなる。この堀は、館を東西に区画している。堀の東側にカマドをもつSB01があることから、出火した際の防火の意味があった可能性がある。出土遺物には、土師器皿（199～204）・珠洲（205・206）・八尾等がある。土師器皿は口径8～9cm前後のものが多く、底部糸切りのものも1点みられる。主体となる時期は13世紀後半～14世紀前半である。珠洲はII期～IV期の甕・壺・鉢・すり鉢がある。遺物には時期幅がみられるが、掘り直しの痕跡はみられない。

**SD18-1** 幅1.0m深さ0.3mを測る副郭の堀である。現道下であったため上層は荒れていた。土層観察より掘り直しがあったことが分かる。出土遺物には土師器皿・珠洲がある。珠洲は直径58cmを測るII期～III期の甕の口縁がある。この珠洲は掘り直し前の層より出土している。

**SD05** 幅2.0m前後深さ0.6m東西方向に長さ約24.0mを測る。SD18-2・SD24の南側約12.5mにこれに平行して配置され、館の正面を防護している。また、西側により、幅0.7m堀底からの高さ0.2mの土橋がある。SD18-1との間は堀が数m途切れる。覆土には砂層およびシルト質砂層が目立つ。なお、掘り直しの痕跡はみられない。出土遺物には、土師器皿（140～143）・土師器鉢？（144）・珠洲（145～148）がある。土師器皿は13世紀代のものが多い。土師器鉢と思われるものは胎土に海面骨針が目立つ。小片であるため口径等は不明である。珠洲は甕・すり鉢があり、すり鉢はIV期と思われる。

#### 掘立柱建物（第7～9図・図版13・14）

**SB01** 調査区の北東部に位置し、身舎は1間×2間で北側と東側に1間の庇と西側の一部に張り出しをもつ。身舎は梁行2.3m桁行5.0m（柱間2.5m）を測る。総床面積は2.5m<sup>2</sup>程度の小規模な建物である。削平のせいか柱穴は浅くはっきりしないものもある。カマド（SK08）をもち、木組井戸（SK07）が伴うと考えられることから館の炊屋と考えている。庇部分の柱穴は不揃いで小規模である。庇部分にはカマドが位置し、SK07が建物に接するように位置することから、絵図などにあるように薪はなかったのではないかと思われる。柱穴内には柱根が残るもののがいくつか見られたものの、遺物の出土はなかった。

**SB02** SB01の南西に位置し、さらに調査区西側へ延びるが身舎は2間×3間の總柱建物と思われる。また、東側には張り出し部がつく。身舎は推定梁行4.0m（柱間2.0m）桁行6.1m（柱間2.1m）を測る。SB01同様、削平のせいか柱穴は浅くはっきりしないものもある。また、建て替えと思われる重複する柱穴が幾つか見られる。この建物には北側にある素掘りの井戸（SK65）が伴うと思われる。柱穴はSK70（曲物積み上げ井戸）の掘り方とSD01を切る。館の廃絶時に存在した建物と考えられる。

#### 井戸（第10図・図版13～15）

井戸はいずれも鉛跡1内で確認された。鉛跡部分は調査後盛土保存されることが決まったため、井戸の断割り作業をおこなっていない。そのため掘り方および井戸枠の裏込めについては確認できなかった。

**SK07** SB01に伴う。一辺0.6m深さ1.3mの方形の木組井戸である。掘り方は径1.7mを測る。井戸枠の木組みは、上部を幅約20cm長さ70cm以上の板を上下2カ所の横棟で同定している。また、下部は直径0.7mの曲物桶を井戸枠に使用している。また、井戸内に直径21.0cmを測る曲物桶が出土した。これに合う底板がないことから本来「まなこ」として底に据えられていたものが漏水のため横転したと考える。出土遺物には、土師器皿（79～81）・珠洲（77～78）・八尾（88～90）・カマドの炉壁（82・83）・完形の黒漆塗り櫛（9）・箸（4～7）・曲物底板のほか、桃の種子・炭化米なども出土した。珠洲・八尾の甕は大きな破片で投棄されたと思われる出土状況であった。土師器皿は13世紀後半で、口径7.0cmのものと12.0cmのものがある。八尾は甕で、上から下方向への粗いナデ調整痕を残すものと調整痕を残さないものが出土している。

**SK57** SB01内にあるが建物には伴わないと考える。直径0.8m深さ0.6mの円形の素掘り井戸である。覆土には直径1~2cmの灰白色粘土質シルトの小ブロックが堆積状に混じる。後述するSK58・SK65同様、断面フラスコ状になっている。湧水層である青灰色砂は大変崩れやすいため、調査中も排水の度に崩落する状態であった。そのことから、一つの井戸の耐用年数は極めて短かったのではないかと思われる。出土遺物は土師器皿(99~103)がある。時期は13世紀後半のものである。

**SK58** SB01内にあるが建物には伴わないと考える。直径0.8m深さ0.45mの円形の素掘り井戸である。SK57同様、覆土には直径1~2cmの灰白色粘土質シルトの小ブロックが堆積状に混じる。この井戸は比較的浅いため現在では湧水は少ない。出土遺物は土師器皿(115・116)・珠洲(117・118)がある。土師器皿は13世紀後半のもので、珠洲はすり鉢・鉢がありII~III期のものである。

**SK64** 用水路跡や暗渠排水に切られているため平面形は不明瞭である。井戸枠に使われている曲物の径から直径0.5m前後深さ1.25m蔚の円形の井戸である。上部がすり鉢形になっているのは井戸枠の抜き取りによるものと思われ、本来は曲物が数段積み上げられていたものと思われる。出土遺物は土師器皿(119・120)・珠洲(121~123)がある。土師器皿は13世紀後半のものである。珠洲は甕・すり鉢があり時期が分かることは少ない。

**SK65** SB02に伴う。直径0.8m深さ0.6mの円形の素掘り井戸である。井戸の底から柄のとれた大型の柄杓が出土した。その他の出土遺物には珠洲(124・125)・木器(折敷底板(12))がある。

**SK70** SB02内に位置するが建物には伴わない。直径1.2m深さ1.3mを測る円形の曲物積み上げ井戸である。井戸枠の曲物は2段確認された。上段の曲物はかなりの腐食が見られたが、直径62cm高さ38cm(痕跡から本来は48cm)厚さ0.25cmを測る。下段の曲物は直径47cm高さ40cm厚さ1cmを測る大型のもので、さらにその外側に直径53cm(高さ不明)の曲物を据えている。上段の曲物の下には沈下を防ぐための珠洲甕の胴部片を敷いている。なお、この井戸の覆土上層には焼土・炭化物層と灰層が見られる。出土遺物は土師器皿(126)・珠洲(127・128)・八尾(129・130)がある。土師器皿は13世紀後半で口径12.0cmを測る。八尾甕は調整が丁寧なタイプである。

#### カマドおよび間違造構(第8図・図版13)

**SK88** 焼土・炭化物・灰が厚く埋積しており、建物との位置関係からカマドと考えるものである。一部暗渠排水に切られるが、直径1.5mを測る円形の土坑で一旦深く掘り下げたあと炭などと共に埋め戻している。深さは完全に掘りきっていないため不明である。上部構造は残っていないが、周辺の造構内から激しく焼けたスサ入りの粘土の塊が多く出土していることからカマドとした。出土遺物には、土師器皿(85~87)・珠洲(84)・カマドの炉壁がある。土師器皿は口径7.0~8.0cmを測り、13世紀後半のものと思われる。珠洲は口径22.0cmを測るII期の片口鉢である。

**SK61** 直径1.3m深さ0.55mを測る円形の土坑である。素掘りの井戸の可能性もあるが、SB01に隣接し覆土中に灰が多く見られることから、カマドの灰を捨てた土坑とも考えられる。1層は灰白色粘土質シルトのブロックが主体となり、灰ブロックの入り方からさらに細かく分層が可能である。出土遺物はない。

#### 塙か(第10図・図版17上)

**SD16** 館跡1の西方約15mにある南北方向の溝である。幅0.6~0.9m深さ0.4m長さ5m~7mの短い溝が互い違いで連続するものである。なお、南側ははっきり確認できるが、北側では削平のためはっきりしない。この溝からは時期決定が可能な遺物の出土がないため時期ははっきりせず、順序の観察でも塙が立っていた痕跡は確認できない。しかし、館から旧鐵治川への出入口と推測する箇所が途切れおり(幅2.7m)、館の西側を区画する塙跡と推定する。遺物は高下駄の齒(16)が出土している。

#### 道路跡か(第10図・図版10)

館跡1の南側で確認された。SD16とSD21・22が蛇行しながら並行してみられ、道路の側溝と考えられる。西側は

近世の遺構に切られるため確認できない。SD21・22は本来1本の溝と思われるが、削平のため一部が残存している程度である。残りの良いところで幅0.4~0.9m深さ0.2~0.35mを測る。SD06の続きはB地区でも確認でき、幅0.3~0.7mを測る。出土遺物はSD06から土師器皿(151)・珠洲(152)があるが、時期決定はできず館跡1と同時期に存在したかどうかは不明である。

#### b. 中世探土穴群(第12図・図版16)

調査時には近世の探土穴群と考えていたものの中に中世後半の探土穴と思われるものがある。館跡1内の探土穴の多く(SK01~06・47~48など)がこれにあたると思われる。具体的な時期は不明であるが、館跡1に伴う遺構を切ることからこれに後続する時期のものである。当該期の探土穴は中世の遺物しか出土しないことや、覆土には明黄褐色砂・褐灰色砂などの砂層がみられるものが多いことと地山ブロックが比較的小さく霜降り状に混じるなどの特徴が挙げられる。さらに、規模・形状は後述する近世探土穴と大差なく、長軸1.5~3.0m短軸1.5~2.0m深さ0.5~0.6mを測り、方形または円形を尾するものが多い。また、掘削も青灰色砂を振り込んでいる。基本的に南北に連続して掘られ、穴同士で切り合い関係をもつものはほとんどない。

出土遺物は、SK02・SK03・SK05・SK06・SK43・SK46~48・SK53・SK63から土師器皿・珠洲・八尾が出土している。これらの遺物の時期は13世紀後半~14世紀前半である。なお、SK05から出土している17世紀の瀬戸皿は混入品と考えている。

#### E. 近世

調査区西側で江戸時代前期の道路跡・探土穴群・溝を確認した。

##### a. 道路跡

###### SX01(付図1・4・図版17)

平成7年度・平成8年度調査区および後述するE地区でも確認されており、幅約2mで旧銀治川に沿って南北方向に200m以上にわたって延びる。また、探土穴と前後関係がはっきりしない箇所もあるが、幅0.8m前後の側溝と思われる溝がある。路面の所々に灰白色粘土質シルトが見られ、若干の盛上がされていたようである。

築造時期は中世の段階にまでさかのばる可能性が高いと思われる。また、古地図などから本来は旧北陸街道を越え中沖村(現富山市中沖)まで続いていたことや現在の加茂神社の参道がかつてこの道路の一部であったことが分かる。しかし、少なくとも文政年間には加茂神社の参道となっている。

###### SX02(第11・12図・図版10)

調査区の中央で確認され、幅2.0~2.4mを測り南北方向に延びる。削平のためはっきりしない部分もあるがS D08・09は側溝になるものと思われる。出土遺物はないが、SX01に後続する道路跡と思われる。SX01は加茂神社の西側を通るのに対してSX02は東側を通る。これは、SX01が加茂神社の参道に取り込まれたためであろうか。

##### b. 探土穴群(第12~15図・図版17)

梢円形もしくは丸方形で一部に重複がみられるものの、道路跡の両側に6m前後の幅で比較的整然と並んで確認された。この穴群は道路跡同様に平成7年度調査区・平成8年度調査区および今年度E地区でも確認されており、道路跡に沿って南北200m以上にわたって延びる。これらの穴の性格については、これまでの調査では遺物が極少なく時期決定が困難なことや調査区が狭かったことから決めかねていたものであった。今回の調査においても出土遺物は少なく、特に道路・探土穴群からの出土は少ない。探土穴が5~8割程度埋まった後、しばらく滞水していた時期(SD13・14)がある。一応溝として捉えたが、覆土の状況からはさほど流れがあったとは思われない。遺物の多くはこの溝より出土しており、遺物の時期は17世紀代である。

それぞれの探土穴は直徑もしくは1辺が1.5m~3.0m深さ0.5m~0.8mのものが多く、重複が少ないと出土遺物

が少なく時期幅も小さいことなどから、掘削は組織的にかつ短期間になされたものと推定できる。なお、覆土には大小の地山ブロック（灰白色粘土質シルト・にぶい黄橙色粘土質シルト・にぶい黄橙色砂など）が多く見られる。これは土砂の採掘に際し、一つの穴（A）を掘り終え次の穴（B）を掘削するときにBの不要な土砂をAに投げ入れる、といった作業を連続しておこなったためと推測する。

次に、採掘の目的について考えると、覆土中に粘土質シルトブロックが多くみられること、掘削は青灰色砂層にまでおよぶことから粘土質シルトの採掘を目的としたものではないと思われる。また、先述のとおり組織的にかつ短期間に掘削されたことを考えると、採掘された大量の土砂は大規模な公共事業（土木工事）に使用されたと考えられる。そこで、江戸時代前期の大規模な土木工事について調べてみると、1662年（寛文2年）に北陸街道と加茂集落（加茂宿）の建設が行われている。これは、加賀藩が富山藩内を避けて参勤交代をするために北陸街道の新往還がつくられ、それまで三々五々点在していた民家を集めて街道村が作られたものである。採掘した土砂は、その盛土・造成のため道路を使って運ばれたと推測することができる。

c. 溝（第11図・図版19）

**SD11・12 加茂神社のすぐ南側の東西方向の溝**で、現在の加茂神社社殿の下に延びていく。さほど人の手が加わっている様子は見られない。その位置関係からSX01・採土穴群よりは新しいと思われるがSD13・14と時期差があるかどうか不明である。出土遺物は土師器皿（149）・珠洲（153・154・156）・瀬戸（150）・越中瀬戸（155）・唐津（157）がみられ、これらから見ると17世紀末にはほぼ埋没していると思われる。

**SD25-A・25-B** 調査区の南西端で確認された弧を描く溝である。SD25-Aが古く、幅・深さともに一回り大きく掘り直されている。SD25-Aの覆土は黒褐色シルトと砂層の互層であり、流水があったようである。周囲の状況などから近世の溝としたが、出土遺物は13世紀後半の土師器皿1点のみで、中世段階の溝である可能性もある。

**SD26** SX01を切る東西方向の溝で、幅0.2mあまり深さ0.4m前後を測る。SX01部分のみで確認され、その前後に確認されていない。また、出土遺物もないため性格・時期などはいっさい不明である。  
(越前慶祐)

## 2 B地区

### A 概要（第15・45図、図版20~22・45・46、付図2）

B地区は、A地区的東側に隣接するところである。海拔約55cmである。中世・近世・現代の遺構・遺物が検出された。現代の道路側溝 SD05・06、SD11・15などがあるが、以下では、近世以前の遺構について解説する。

#### B 中世

##### 溝・堀（SD01~04・06・07）

SD01は、幅40cm深さ20cmの溝で、A地区的SD06の続きとみられる。珠洲甕洞部片（273）が出土しており、鎌倉時代の道の側溝と考えられる。

SD02・03は、幅約2m深さ50cmの堀である。SD02とSD03は直交してつながるもので、その内部に一辺約30mの方形区画をつくるらしい。正方形の区画とすれば、内部の面積は900m<sup>2</sup>となる。

堀の覆土からは、土師器皿（274）、瀬戸壺（275）、珠洲の甕洞部片（275・276）、すり鉢（280）、八尾（278）、瓦器火鉢（279）が出土した。すり鉢（280）の特徴から、堀は珠洲IV期（14世紀中頃）のものである。

南北方向の堀は、北に対して約42度西に傾いた方向であり、A地区的鎌倉時代の館の堀とは方向が異なる。内部には何らかの建物があったものと見られるが、その痕跡は見つかなかった。

以上のほかに、SK06・07のような浅くて不整形な穴が認められる。

SK06は、一辺約1.8m深さ約10cmの浅いもの。鎌倉時代の珠洲すり鉢（283）が出土している。

SK07は、長さ2.2m幅1.5m深さ10cmの長方形の穴である。覆土から鎌倉時代とみられる八尾甕（284）が出土した。土坑墓のようでもあるが、断定できない。

包含層から出土した遺物には、瀬戸美濃天日茶碗（526）、瀬戸壺（285）がある。

#### C 近世

##### 溝（SD04）

SD04は、幅1.2m深さ約20cmの溝で、調査区中央にSD03に直交するように東西に延びている。覆土から、越中瀬戸皿（281）が出土しており、16世紀末から17世紀前期の溝である。

探土穴（SK01・02・10~13・表12）

調査区中央にSD04の方向と同じ方向で、6個の穴が並んでいる。穴は長辺1.2~2m短辺0.9~1.8mの方形または梢円形で深さ50cm前後のものである。覆土は、シルト質砂と粘土ブロックが混じったものである。出土遺物はないが、SD04との方向性や覆土の状況から、江戸時代前期の探土穴と見られる。

包含層から出土した遺物には、内面に菊花文がある越中瀬戸皿（286）、小柄（287）やキセル（288）の剣製品、砥石（289）がある。

（久々忠義）

### 3 C地区

#### A 概要（付図3）

中世～近世にかけての遺構・遺物が確認された。そのうち主体となるのは中世前期（13世紀後半～14世紀前半）・中世後期（14世紀後半以降）である。調査区のほぼ全域で遺構・遺物が確認できたが、調査区全体には場整備時の削平・攪乱がみられ遺存状況は良くない。そのせいか建物跡は確認できない。また、調査区北側には幅3.0mあまり深さ0.6m前後の場整備前の川跡が東西に走っているほか、調査区中央部を南北方向に幅1.2m前後の排水路跡が横切る。

中世前期の遺構・遺物はほぼ調査区全体にわたって確認された。主な遺構は堀・井戸・小穴群・土坑・溝で、堀によって四方を区画された屋敷地が確認された。確認された屋敷地はA地区の館跡1と同時期である。しかし、堀が四方を完全に囲まずそれぞれの屋敷地の範囲を示す程度のものであること、井戸がいずれも索掘りであるなど差が見られることが注目される。遺物は主に堀・井戸中からの出土であるが、調査区南側の小穴群の幾つかからまとった量の出土が見られた。また、中世後期と考える遺構・遺物が調査区の西側で主に確認された。この時期のものと考える遺構からは13世紀代～15世紀後半のものが出土しており、先の屋敷地の後続するものと考える。主な遺構は堀・土坑・溝などで、堀によって区画された複数の屋敷地が確認されたが、実際いくつあるのか復元できない。SD02・04の堀で区画された屋敷割りの方向は中世前期の屋敷地のそれと同じくする。

また、近世前期（16世紀末～17世紀前半）の遺物が比較的多く出土した。しかし、遺構に伴うものは少ない。

#### B 中世

##### a. 屋敷地（第17～19図・図版23・24）

先述のとおり、中世前期（13世紀後半～14世紀前半）の堀によって四方を区画された3つの屋敷地とそれに後続する中世後期（14世紀後半～15世紀）の複数の屋敷地が確認された。中世前期の屋敷地のうち全体が確認できたものは1つで、北側の2つの屋敷地は調査区外へ延びる。理由については後述するが、北側の2つの屋敷地は一つの屋敷地の可能性がある。この3つの屋敷地は便宜的に、全体が確認されたものを屋敷地1、北側の屋敷地のうち西側のものを屋敷地2、東側のものを屋敷地3とする。中世後期の屋敷地はSD02南側およびSD04南側にあたる。便宜的にSD04によって区画される屋敷地を屋敷地4、SD02で区画される屋敷地を屋敷地5とする。

**屋敷地1** 調査区中央に位置し、SD03・SD04・SD17・SK03で囲まれ南北約24.0m東西38.0mを測る。堀は完全に囲まずそれぞれの屋敷地の範囲を示す程度のもので、東西の堀は短く南北の堀は比較的長い。また、東西方向の堀は互いに並行するものの南北方向の堀はきちんと直交していないほか、南北の堀は屋敷地のやや東側に寄っている。このように同時に存在したと思われるA地区的館跡1に比べるとかなり見劣りがする。この屋敷地に伴う遺構には井戸1基・土坑（採土穴か）4基が確認されたのみで、確実に建物として復元できるものは確認されていない。ただし、北東隅の小穴群の中に1間×2間の掘立柱建物（梁行2.1m桁行6.4m（柱間3.2m））を復元できるものがある（P25・27・28・29、SK37）。梁行は本来2間であったと思われる。軸がSD17に並行していることや柱のアタリが確認できるものがあることから可能性が高いと思われる。

**屋敷地2・3** 共に屋敷地1の北側に位置し北側は調査区外に延び、E地区で続きと思われる堀が確認されている。屋敷地2はSD07・SD18・SD19に囲まれ推定南北約34.0m東西約16.0mを測る。屋敷地3はSD07・SD18・SD20に囲まれ、その規模は屋敷地2と同規模である。ともに、屋敷地1同様、堀は四方を完全に囲まずそれぞれの屋敷地の範囲を示す程度のものである。SD18は、場整備前の川跡に切られる上にその北側は削平・攪乱のため遺存状況が悪い。屋敷地3では索掘り井戸が1基確認されたが、屋敷地2からは建物跡・井戸などは確認されていない。SD07・19は屋敷地3と共有しており、SD19がSD07と屋敷地3の東端を区画するSD20の中間に位置すること、E地区的状況などから屋敷地2と屋敷地3は一つの屋敷地と捉えるべきかもしれない。そう仮定すると、その規模は南北約34.0m東

西約33.0mのほぼ方形になる。

なお、屋敷地1と屋敷地2・3の間は約4.5mである。

**屋敷地4** SD04に西側および北側を区画され南側をSD02に区画される屋敷地である。屋敷地1の北端・東端を同じくすると思われ、東西44.0m南北15.0mを測る東西に細長い屋敷地である。この屋敷地に伴うと思われる建物・井戸などの遺構は確認されなかった。

**屋敷地5** SD02に西側および北側を区画される。なお、東側はSD05がその境界になり、南側はSD13が境界となる可能性がある。その場合、屋敷地の規模は東西22.0m南北24.0m程度になる。この屋敷地に伴うと思われる建物・井戸などの遺構は確認されなかったが、SK01がこれに伴うと思われる。

その他、越中瀬戸を中心とした近世前期の遺物が調査区の広い範囲で出土している。この時期の遺物は他の地区では採土穴群付近から若干出土しているのみである。また、若干ではあるが溝などの遺構中から出土しているものもある。確認はないものの調査区内に近世前期段階に屋敷地があったものと思われる。その廃絶時期は現在の加茂集落が作られた1662年であろうか。

#### b. 堀（第20図・図版26～28）

屋敷地の区画のための堀を10条確認した。堀の覆土の観察では掘り直しがあったと思われるものはほとんどみられない。また、屋敷地1～3に伴う堀の多くで、上層に数種の土がブロック状もしくは斑状に混ざった層がみられる。これは、これに後続する屋敷地4・5が建設された時に埋めた可能性があるものと考える。そのほかにもその可能性があるものがあるが、これについては「e. 溝」の章に記載する。

**SD03** 屋敷地1の南端を区画し、長さ11.6m幅1.6m深さ0.45mを測る。断面形は箱形である。中央を排水路に切られる。埋土は中層に粘土質シルトがみられその上層・下層にシルト・シルト質砂・砂質シルトの混土層がみられる。出土遺物には土師器皿（348）、珠洲（349～354）、瀬戸・美濃天目碗（347）があるが、瀬戸・美濃天目碗は混入の可能性がある。珠洲にはすり鉢・甌がありⅡ期～Ⅲ期のものと思われる。

**SD04-2** 屋敷地1に北端を区画し、中世後期の堀（SD04-1）に切られる。長さ15.5m幅1.8m深さ0.3mを測り、断面「U」字形を呈する。SD03と対になる堀であるが正対しない。調査当初は溝が切り合っているという認識がなかつたため遺物を分けて取り上げることはできなかったが、13世紀代の土師器皿（383・387・388・390・391）・珠洲が多く出土しており、この堀に伴うと思われる。

**SD17** 屋敷地1の東端を区画し、長さ4.5m幅1.6mを測る。なお、南北方向の断面形を見てみると、南側には幅約0.6mのテラス状の平坦面が2段みられ（深さはそれぞれ0.2m・0.5m）、北側を深く掘り下げている（深さ0.8～0.9m）。このような断面形は他の堀には見られない。北側部分は湧水層を掘り下げているため湧水が激しい。そのため崩落が激しく、測量時までに多少平面形が変わってしまった。本来は長方形を呈し、断面形は箱形である。出土遺物には土師器皿（365・369）・珠洲（366・367）のほか木器が多く出土し、木器には折敷（27）・角形木器（25）・籠状木器（篠木）（28）等がある。籠状木器（篠木）が出土していることや最下層にボソボソした黒色シルトが見られることから便所として使用されていた可能性もある。その上層には20cm程の粘性が強い層がみられる。土師器は13世紀後半～14世紀のものである。

**SK03** 屋敷地1の西端を区画し、長さ6.5m幅1.8m深さ0.65mを測る。断面形は箱形を呈し、SD17とほぼ並行し対をなす。しかし、SD03・04とは直交せずやや東に振る。SK番号が付いているのは、調査途中までは周辺に複数の大型土坑（採土穴）があったことからそれらの一つと考えていたためである。覆土の埋まり方を見てみると、他の堀がほぼ水平堆積であるのに対し、西側から土砂が流れ込むように堆積している。また、上層から越中瀬戸が出土していることも考えると、堀の埋没までにかなり時間がかかったと考えられる。出土遺物には越中瀬戸（312）のほかに珠

洲窯（313）がある。

**SD07** 屋敷地2・3の南端を区画し、SD04-2の北側に約4.5mを隔てて位置する。長さ14.2m幅1.4~1.5m深さ0.2~0.4mを測り、断面形はやや崩れた箱形を呈する。上層には粘土質シルトを主体としたシルト質砂・シルトの混土層がみられ、一気の埋められた感がある。出土遺物は珠洲窯（356）がある。

**SD18** 屋敷地2の西端を区画し、幅1.5m深さ0.15mを測る。調査区北側へ延びるため長さは不明である。ほ場整備前の川・SD25に切られるほか、削平のため遺存状況は良くない。出土遺物には珠洲（362）と混入品の伊万里（364）がある。

**SD19** 屋敷地2の東端および屋敷地3の西端を区画し、長さ7.2m幅2.1m深さ0.45mを測る。ただし、この溝の延長上に深さ数cm程度を測る溝の痕跡が調査区北側へ延びていること、さらにはその中に幅2.1mのSK19があることから、本米SK19も含め1本の溝が存在したと思われる。このことは、他の堀についても深い部分のみが残存した可能性があることを伺わせるものである。溝の東側1/3程度はシルト・シルト質砂・粘土質シルトなどが斑状に混ざった層で埋まっている。それに対し、西側は混じりの少ない黒褐色シルト層であることから、掘り直しがあった可能性がある。出土遺物はSD19・SK19共に無い。

**SD20** 屋敷地3の東端を区画する。南端はほ場整備前の川に切られ、北側は調査区外へ延びる。幅1.5m深さ0.45mを測り、断面形は箱形を呈する。覆土は複数の土が斑状に混ざった層が埋積している。出土遺物は土師器皿（370~372）・珠洲（374~378）・越中瀬戸（373）があるが、越中瀬戸は16世紀末~17世紀初めのもので混入品である。土師器皿は13世紀後半~14世紀、珠洲はII期~III期である。

**SD04-1** 屋敷地4の西側および北側を区画する。幅1.5~1.8m深さ0.1~0.3mを測る。西側で南へ直角に折れ、東西方向に44.0m南北方向に14.0mを測る。SD04-2との重複部分はSD14-3セクションの1・2層がこの溝の覆土にあたる。中世後期の出土遺物は少なく土師器皿・珠洲（394・397）・瓦器（392）・瀬戸天目碗（384）が若干あるのみである。瀬戸天目碗は15世紀後半頃と考えているが、16世紀に下る可能性がある。

**SD02** 屋敷地5の西側および北側を区画する。幅1.3~1.8m深さ0.1~0.2mを測り、幅は東側で削平のためか浅くなる。東西方向に21.0mを測り、SD04-1同様、西側で南へ直角に折れ調査区外へ延びる。出土遺物には珠洲・瀬戸があるが、中世後期の遺物は15世紀前半の瀬戸天目碗（341）があるのみである。

#### c. 井戸（第19図・図版25）

井戸は4基が確認され、いずれも素掘り井戸である。そのうち屋敷地に伴うものは2基のみであるが、他の2基についても13世紀後半~14世紀前半のものである。

**SK31** 屋敷地1の北東隅で確認した。直径0.65m深さ0.6mを測る円形の井戸である。断面形はP1筒形である。すぐ西側に建物の可能性がある小穴群がある。覆土は複雑な堆積状況を見せる。出土遺物に土師器皿（337）がある。

**SK39** 屋敷地3の南側中央で確認した。直径0.8~0.95m深さ0.9mを測る楕円形の井戸である。断面形は円筒形である。出土遺物には土師器皿（338）のほか円形板（23）・まな板に転用された折敷底板（24）がある。

**SK11** 調査区の南側中央で確認した。直径0.9m深さ1.05mを測る円形の井戸で、井戸の周囲を一辺1.75m深さ数cmの方針に浅く掘り窪めている。何らかの上部施設があった痕跡であると思われる。湧水が激しく、断面形はプラスコ状になる。覆土の上層および中層~下層にかけてワラ状の植物遺体が多く混じる。出土遺物には土師器皿（315~320）、カマド壁（322・323）のほか箸（22）、箱物の側板（21）が出土している。土師器皿は13世紀後半~14世紀のものである。

**SK17** 調査区の東側のSD20延長上で確認した。直径1.55m深さ0.95mを測る円形の井戸であるが、断面形は擂鉢状になっている。特に南側には幅0.7m程度のテラス状の平坦面が見られる。現在も湧水が激しく壁の崩落が見られた

ことから、断面形は本来フラスコ状であったものが崩れた可能性がある。出土遺物はない。

d. 土坑・小穴（第18図・図版25）

SK01 出土遺物がないため確証はないが、位置的に屋敷地5に伴うと思われる。平面形は長方形で東西2.7m南北4.3mを測り、北側はわずかにSD14に切られる。また、北側2.1mは深さ0.55mを測るが、南側は一段高くなり深さ0.2~0.3mを測る。形状から土間状遺構と思われるが、貼り床・マンガン沈着など硬化面は見られない。10・11層は地盤が汚れた感じのよい黄褐色の層で床面であったと考える。

SK04・05・07・08 屋敷地1の西端でまとまって確認した。覆土の状況から探土穴ではないかと考える。平面形は隅丸方形または長方形である。中世後期の屋敷地4に伴う遺構の可能性も考えられるが、SK04から珠洲の小片(314)が出土しているのみである。

調査区南側小穴群 直径0.4m前後の小穴が10個前後確認した。柱のアタリが確認できるものや柱根が残っているものもあるが建物は復元できない。時期はいずれも出土遺物から13世紀後半~14世紀前半である。SK02は1辺1.9m深さ0.45mの方形の土坑で、P01・02出土の遺物と接合関係が見られたことから小穴群と同時期のものと考えていた。しかし、最下層より人形(309)や伊万里の色絵片(310)が出土したことから近世の擾乱であることが分かった。

P01 直径4cm深さ15cmの小穴であるが、珠洲の壺(302)・すり鉢(304・305)がぎっしりと詰まった状態で出土した。これらはP02・SK02と接合する。また、底には割石が水平な面を上に向けた状態で据えられていた。

P10 東側半分は排水路に切られるが、深さ45cmを測る小穴である。覆土は主に焼土混じりの灰層であり、数点の土節器皿と共に焼けた小骨片が出土している。また、底から焼けた川原石が1個出土した。

e. 溝（第17図・図版26）

SD01 調査区の南東端で確認された東西方向の溝である。幅1.6m深さ0.1mを測る浅い溝である。SD03にほぼ直交する位置にあり、その東側にはP01・02・10などの小穴群が存在することから、屋敷地1に伴う堀の一つである可能性がある。出土遺物には屋敷地1と同時期と思われる珠洲壺(339・340)がある。

SD05 SD02の東側でこれにつながる南北方向の溝である。削平のためか幅0.7~0.9m深さ数cmの浅い溝である。出土遺物も無く時期決定ができないため確証はないが、屋敷地5の東端を区画する堀の残欠の可能性がある。

SD08 調査区の西端で確認され、調査区内で東に「L」字に折れる。幅1.75m深さ0.2mを測る。断面は箱形を呈し方向は屋敷地の堀と同じくする。出土遺物は肩部に細かい櫛目文が巡る珠洲小壺がある。時期はII期~III期である。

SD13 調査区の南端で確認された東西方向の溝で、SD01を切る。幅0.6m深さ0.1mを測る浅い溝である。出土遺物も無く時期決定ができないため確証はないが、屋敷地5の南端を区画する堀の残欠の可能性がある。

SD23 調査区の南東端で確認された南北方向の溝である。A地区 SD06・B地区 SD01・F地区 SD02より続くものと思われる。幅1.1~1.3m深さ0.3m前後を測り、断面形は「U」字形を呈する。溝の方向が屋敷地の堀や他の溝と異なる。出土遺物には珠洲壺(379・382)・八尾壺(380・381)がある。八尾は今回の調査では数少ない口縁部片と測定が粗いタイプの胴部片である。

(越前慶祐)

#### 4 D地区

##### A 概要（付図2）

中世前期（13世紀後半～14世紀前半）と中世後期（14世紀後半以降）の遺構・遺物が確認された。中世前期の遺構はA地区的館跡1に付属するもので、堀と掘立柱建物が確認されたが、削平のため遺存状況は良くない。堀（SD04・SD05）の内側は館の北東部に位置する副郭になる。掘立柱建物は副郭内に位置せず、SD04の南側にこれに並行して位置する。中世後期の遺構はB地区的館跡2と同時期のものと思われ、その堀に並行する溝が確認された。

##### B 中世

###### a. 堀（第20図・図版29～31）

**SD04** 副郭の南側を区画する堀で調査区西側へ延びる。幅1.65m深さ0.25～0.5mを測り、底は凸凹している。覆土には炭化物・焼土が多く混じるほか粘土質シルトの（極）小ブロックが斑状に混じる。出土遺物には山茶碗小皿（290）・茶碗（茶白と同義）（291）がある。山茶碗の胎土は精良でやや黄色がかった灰白色で、北部系山茶碗である。口縁の一部に油煙が付着し、灯明皿として使用されている。なお、内面はかなり磨滅しておりかなり使い込まれたあと灯明具に転用されたものと思われる。時期は藤沢編年のIII期にあたる。茶碗は径20～21cm程度、残高8cmを測る破片で、石材は小角礫が若干混じるが緻密な砂岩（？）である。激しく被熱しており、赤色化している。廃棄時期の下限が14世紀前半であることから、茶碗としては全国的に見ても最古の部類と考えられる。

**SD05** 副郭の東側を区画する堀で調査区北側へ延びる。幅1.2～1.5m深さ0.1～0.2mを測る。覆土はSD04同様炭化物が多く混じる粘土質シルトの（極）小ブロックが斑状に混じる。出土遺物は珠洲（297）が出土している。

###### b. 掘立柱建物（第21図・図版30）

**SB01** 堀内には位置しないが、A地区的館跡1に伴うものと考える。削平のため依存状況が悪いため柱穴の痕跡のみが確認できるものや全く確認できないものもあるが、2間×3間の純柱建物と思われる。なお、P3-P5の柱列の南側延長線上にP6が確認されたことから、本来は3間×3間の建物であった可能性もある。柱筋・柱間は多少ばらつきがみられ梁行柱間（P3-P4-P5-P6）は2.0m-2.2m-2.0m、桁行柱間（P2-P4-P8-P11）は1.8m-2.6m-1.8mをそれぞれ測る。柱痕もしくは柱のアタリが確認できた柱穴は多い。建物内に位置するSK01は出土遺物がなく性格は不明であるが、建物に伴うものと思われる。

###### c. 溝（第20図・図版31）

**SD01・02・03** SD01・02は調査区南端で確認され、調査区外へ延びる東西方向の平行な溝である。SD02はSD01の東端を切り、これに直交する。SD01は長さ13.0m幅1.65m深さ0.25m（土層図化部分のみが深さ0.45mと深い）を測るが、東端は細くなり幅0.75mになる。出土遺物には13世紀後半～14世紀の土師器III（293）・八尾（292）がある。SD03は幅0.8m深さ0.15mの浅い溝である。出土遺物はない。SD02は幅0.5m深さ0.4mを測る。北端部分は幅0.95mと広くなる。出土遺物には15世紀後半の瀬戸美濃丸皿の小片（294）・土師器皿（295）がある。それぞれの時期であるが、SD01・03はB地区的館跡2の堀と方向を同じくしていることから中世後半（14世紀後半以降）と考えられる。SD02もこの時期の可能性があるが、覆土の状況が異なることから断定できない。

（越前慶祐）

## 5 E地区

### A 概要（第21・22・52図、図版32～34、付図4）

E地区は、調査区の一番北側に位置する東西に細長い調査区である。海拔は43～54cmである。古墳時代、弥生時代、中世、近世の遺構・遺物が発見された。また、現代の道路跡、時期不明の穴・溝もあるが、以下では、近世以前の遺構について解説する。

### B 弥生時代

#### 川 (SD09・10)

調査区西端に、深さ40cmの浅い落ち込みがあり、西側へ向かって深くなっていくようである。覆土は黒褐色の腐植土で板や自然木も含まれている。土器はないが、覆土の状況などから、この川はA地区のSD15の続きとみられる。

### C 古墳時代

中世の堀の覆土から、古墳時代と見られる土師器壺の胴部(495)が出土している。この時期の遺構は確認されていない。

### D 中世

#### 溝 (SD14)

幅40cm深さ10cmの西南から東北へのびる。遺物はないが、覆土の様子から中世の溝と考える。周囲に建物などはないので、SD09から水田へ水を引く水路であろう。

#### 堀 (SD04・05・07・08)

堀は、調査区東端で発見された。SD04は、幅1.4m深さ40cmの南北方向の溝、SD05は、幅1.4m深さ30cmの東西方向の溝で、SD04はC地区SD18とつながりSD20と対応し、SD05はSD07と対応するとみられ、その内側に南北32m東西32mの方形区画をつくる。内部は屋敷跡とみられ、SD04・05はその北側を画す堀と見られる。堀から、土師器皿(494)、珠洲の壺(496)・壺(497)・すり鉢(501・502)の副部片が出土した。時期は14世紀代とみられる。

SD07・08は、幅1.6m深さ40～60cmのL字形に曲がる一続きものである。その南側が屋敷地となっているのである。覆土からは、珠洲のすり鉢(498)・壺(499)・壺(505)が出土しており、時期は14世紀代とみられる。

#### 井戸 (SK01)

SK01は、直徑80cm深さ85cmの円筒形の素堀の井戸である。覆土から、土師器皿(481～484)、白磁碗(485)、珠洲の鉢(487)・すり鉢(488)・壺(489～492)、銅鏡(493)、カマドの焼上(図版54)が出土しており、時期は、14世紀代とみられる。

包含層から出土した遺物には、13世紀後半から15世紀前半代の珠洲すり鉢(508～509)・青磁碗(516)、瀬戸美濃の瓶(511)・香炉(517)などがある。

### E 近世

#### 道路 (SX01・SD11・12)

SX01は、幅約4mの道路である。SD11・12は、幅約1m深さ30～40cmの側溝とみられる。SD09の川岸に沿っていること、両側に探土穴があること、方向性ともA地区の道路跡と一致するので、その続きの道路とみられる。ただ、道路幅がA地区では約2mであるが、ここでは2倍の広さとなっている。SD11から越中瀬戸皿(504)が出土しており、時期は17世紀前半代である。

#### 探土穴 (SK08～19)

SK01の両側に沿って、長辺1.5～2.8cm短辺1.2～2.2m深さ50～80cmの穴が合計20個発見された。覆土は、シルト質砂に粘土ブロックを混じえたもので、形態・覆土の状況は、他地区の探土穴と共通する。SK12・13から、寛永通寶(520・521)が出土していることなどから、時期は17世紀代とみる。

包含層から出土した遺物には、越中瀬戸の皿(512・513)・向付(514)、砥石(522・523)、土錐(515)がある。（久々忠義）

## 6 F地区

### A 概要 (第54・55図、図版110~112、付図1)

F地区は、C地区とD地区の間に位置するV字状の調査区であり、平成10年度に調査を行なった。海拔は40~60cmである。遺構には中世・近世のもの他、現代の道路跡に伴うと思われる溝や用水跡がある。遺物には古代・中世・近世のものがある。古代に関しては、須恵器の壺(1)の破片が1点出土したのみであり、この他のことで特に記述することはないので、以下では中世以降のものに関してのみ記述する。

第54図は、遺構を集中して検出したX90~102 Y122~131の部分の遺構平面図である。第55図には主にその断面図を掲載した。なお、F地区的遺物実測図は下図のとおりであり、遺物番号もA~E地区とは別にして付した。F地区に関しては、以下で遺構・遺物を併せて記述することを断っておく。

### B 中・近世の遺構

検出した遺構のうち中・近世と思われるものはSD02・03・16・18・SK01・08~11・17である。

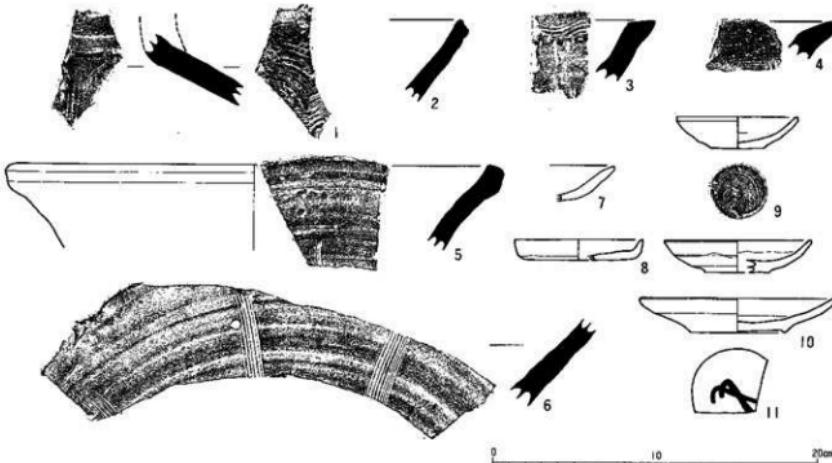
#### a. 溝

**SD02** 南北方向に流れる中世の溝であり、幅60~80cm深さは残りのよいところで16cmを測る。C地区のSD23につながるものと想定する。

**SD16** 南北方向の溝と思われるが、削平を受けているため溝の底の一部分のみしか検出しなかった。

#### b. 堀

**SD03・18** 中世の館跡に関連すると考える堀である。平成9年度調査区A・D地区に集中する中世の館跡に関連する遺構で、堀の一部分にあたると考える。SD03は幅80cm~1m深さ50cmを測り、SD18はちょうど鉤状に曲がる部分を検出した。調査区壁面の観察では幅1m深さ40cmを測る。遺物は、SD03から擂鉢(6)と土師器皿(8)が出土した。



F地区遺物図

## 探土穴

SK08～11・17 平成9年度までの調査において各地区で検出したものと同様の近世の探土穴と考える。

## C その他の遺構

上記以外で検出した遺構としてはSD4～7・12・SK13～15がある。SD4～7は現代の道路脇の測溝と思われるもので、SD04・06とSD05・07は直行し、A・B・D地区においてこれらとつながるものを検出している。SD12は暗渠である。SK13は風倒木痕、SK14・15は横円形を呈する土坑で、比較的深いものである。

## D 遺物

**中世の遺物** 中世の遺物には珠洲・土師器皿・越前・青磁・銅錢がある。実測図の2～6は珠洲の鉢および摺鉢である。時期は、2がII期、3・4がV期、5がIV期、6がII～III期の間とする。7・8は土師器皿で、いずれも非クロクロ成形のものである。7は口縁部内外面にタール状の付着物がみられ、時期は16世紀代、8は口径8cm器高1.2cmを測り、時期は13世紀後半～14世紀初頭。銅錢は劣化が激しく判読できない。12は越前の甕の破片である。

**近世の遺物** 越中瀬戸の皿・陶磁器がある。9・11は越中瀬戸の皿、9は口径7.4cm器高2cmを測り、時期は18世紀代、11は口径推定12.2cm器高2.2cmで底面に墨書きがあり、時期は17世紀代、10は無釉陶器で口径9.2cm器高2cm、口縁部内外面にタール状の付着物があり、時期は18世紀代である。

以上に記述した遺物の他に陶器(13)・繩の羽口(14)・鉄滓の付着した炉壁の一部(15)がある。表土中からの出土で詳細な時期は不明であり、中世以降のものとしておく。

(境 洋子)

## 引用・参考文献

上市町教育委員会1982『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町土器・石器編一』

下村1986『下村史』

吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

富山歴史博物館1996『春季企画展 日本の櫛』

宮田進一1997a『越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編 桂書房

1997b『越中瀬戸の変遷と分布』『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編 桂書房

下村教育委員会1997『富山県下村 下村加茂遺跡発掘調査報告書』下村埋蔵文化財調査報告書1

## 第V章 まとめ

### 1 要約

A 弥生時代前期（I期古段階）・弥生末～古墳時代・古代・中世（13世紀～14世紀前半・14世紀後半以降）・近世前期（16世紀末～17世紀）の各時期の遺構・遺物が確認された。そのうち主と/orなる時期は弥生時代前期（I期古段階）・中世・近世前期のものである。（表1）

B 弥生時代前期（I期古段階）の段階は、遺跡の西側にあった自然流路（旧銀治川）の中に設けられた貯木場とみられる遺構が確認されている。特に施設はみられないが、蛇行して流れる流路の淀みを利用したものである。ここからは切り倒された樹木や製材途中の木材に混じって、農具・紡織具・漁労具・祭祀具・建築材などの木器が大量に出土した。また、炭化米・ヒョウタン・コナラ・トチ・ヒシなども同時に発見された。同じ層序からは量的には多くないが縄文土器（条痕文土器）・弥生土器・石鏃・打製石斧・砥石なども出土している。これらはこれまで北陸ではほとんど出土例のないものであり、富山平野における稲作の開始時期・伝播経路・当時の植生等を知る資料として評価される。

C A地区SD15において当時の環境復元のための各種分析を行った。樹種同定の結果は、ハンノキ属ハンノキ節・トネリコ属がほとんどを占め、それにスギ・ヒノキ・コナラ属コナラ節等が混じるということであった。サンプルを行った資料は、周間に生えていたものを伐採し貯木のために投げ込まれたと考えている木材である。ハンノキ属ハンノキ節・トネリコ属が水辺を好む樹木で湿田地帯の稻作農耕には欠かせないものであったため、ほ場整備以前にはこれらの並木が多くみられた〔下村1986〕。

D 中世段階には各地区で計7つの館跡・屋敷地跡が確認されている。それらの初現は13世紀であるが14世紀前半に絶滅する（A・D地区館跡、C・E地区屋敷地1～3）。そして、14世紀後半以降（15世紀代か）に再び館・屋敷地が営まれる（B地区館跡、C地区屋敷地4・5）。

A・D地区の館跡1は周囲に1～2mの堀を巡らせた東西約37m南北約41mの方形屋敷地を主郭とし、南側および北東側にも堀を巡らせた副郭を持つ。最終的には南北約55mの規模となる。これに後続するとみられるB地区の館跡2も周囲に堀が巡るものであるが、ほとんどが調査区外へ延びるためその規模等は不明である。しかし、堀は幅2m前後を測り屋敷地は東西に約30mを測る。これをみる限りではひとまわり小規模になるようである。

C・E地区屋敷地1～3の規模は、屋敷地1が東西38.0m南北約24.0m、屋敷地2・3がそれぞれ推定南北約34.0m東西約16.0mを測る。この規模は館跡1の約2/3・約1/3である。そして、これに後続する屋敷地4・5の屋敷地範囲は明確ではないがそれぞれ東西44.0m南北15.0m・東西22.0m南北24.0m程度になる。館跡同様、規模は前段階より小規模になる。

出土遺物には、各館跡・屋敷地から上部器皿・珠洲・八尾・瀬戸美濃・青磁・白磁などの土器・陶磁器類のほか、横櫛・柄杓・箸・栓・曲物桶・漆器碗等の木器も多く出土している。特記すべき遺物としては土器鍋・山茶碗小皿・茶席・鐵鍋等が挙げられる。茶席は館1の堀出土であり、これによって上限を14世紀前半に押さえられる。この年代は全国的にみてもかなり古いものである。あまり知られていない地方における喫茶の普及の一端を伺い知ることができるものである。

時 期	文 字 記 入 れ	遺 跡
旧石器		
新石器		
縄文		
中期		
後期		
湖		
弥生		
中期		
後期		
3世紀		
4世紀		
5世紀		
6世紀		
7世紀		
8世紀		
9世紀		
10世紀		
11世紀		
12世紀		
13世紀		
14世紀		
15世紀		
16世紀		
17世紀		
江戸時代		
明治時代		
大正時代		
昭和時代		
平成時代		
新規		
南北朝		
室町		
安土桃山		
江戸		
時代		
明治		
大正		
昭和		
平成		

そして、同時にこの館の居住者の身分の高さ・教養の高さを伺わせるものであるといえる。

E 中世段階のこの周辺地域を考える際に重要なのは、下賀茂神社領倉垣莊と倉垣莊の總社とされる加茂神社の存在、さらに北西に4kmあまりに位置する放生津（当時の守護所）の存在である。中世において倉垣莊の莊官は中央から下向し居住していたとも伝えられる。遺跡の西側を流れていた旧鶴治川はつい最近まで水運が活発に行われており、放生津まではさほど時間がかからなかったという。また、鶴治川は調査区のすぐ南側で二又になっており、ここは内陸部への交通の要衝であった。

そこで、今回確認された館跡・屋敷地の性格について考えてみると、この時期の館跡については富山県内はもちろん近県においても調査例が少ないため比較材料が乏しい。石川県加賀市勤使館跡の内郭部分は東西約70m南北約80mの方形と推定され、南郭を含めると南北約110mを測る。副郭が設けられるのは13世紀前半段階とされている。ここに居住者は勤使の現地管理者と推測されている。また、石川県小松市白江梯川遺跡の中央区画（主郭）は東西80m奥南北32mを測り、南側の区画（副郭）がこれにつく。ここは、中世莊園南白江莊（皇室領・京都妙法院領）の拠点集落で在地領主層が居住していたと考えられている。これらと比較するとかなり小規模なものであるが、この立地をみると倉垣莊の中でもかなりの有力者の館跡と考えられ、興亡を同じくするC地区の屋敷地は館跡に関連した人々のものと考えられる。そして、14世紀前半の廃絶は鎌倉時代末の動乱に巻き込まれたためと思われる。

一方、加茂神社の東隣には弘仁年間の創建と伝えられる真言宗福王寺があり、戦乱などによって没落・中興を繰り返していると伝えられている。C地区付近にはかつての福王寺であったとの伝承や塚状のマウンド上に「一本杉」と呼ばれたスギの大木がみられた、屋敷地とした空間は寺院であった可能性も考える必要がある。

F 近世前期の遺構としては、A・E地区および平成7年度調査区・平成8年度調査区で確認された道路跡と採土穴群がある。道路跡の両側に6m前後の幅で比較的の整然と並んで確認され、南北200m以上にわたることが確かめられている。重複が少ないと出土遺物が少なく時期幅も小さいことなどから、掘削は組織的にかつ短期間になされたものと推定できる。遺物の時期から採掘は17世紀後半頃までに行われたことが分かる。ここで採掘された大量の土砂の多くは砂・シルト質砂であると思われ、製陶用や土壁用に採掘されたとは考えられない。そのことから大規模な公共事業（土木工事）に使用されたと考えられる。そこで、江戸時代前期の大規模な土木工事について調べてみると、1662年（寛文2年）に北陸街道と加賀集落（加賀宿）の建設が行われている。これは、慶長14年（1609）に加賀藩から分離した富山藩の領地が分散していたことから万治3年（1660）に両藩の間で領替えが行われた。そしてこの頃、加賀藩は富山藩内を避けて参勤交代をするために北陸街道の新往還をつくり、それまで三々五々点在していた民家を集め寛文2年（1662）に下村が宿立されたものである。その際には、大規模な造成が行われ大量の土砂が必要であったと思われる。採掘した土砂は、その際の盛土・造成のため道路跡を使って運ばれたと推測する。

(久々忠義・越前慶祐)

#### 引用・参考文献

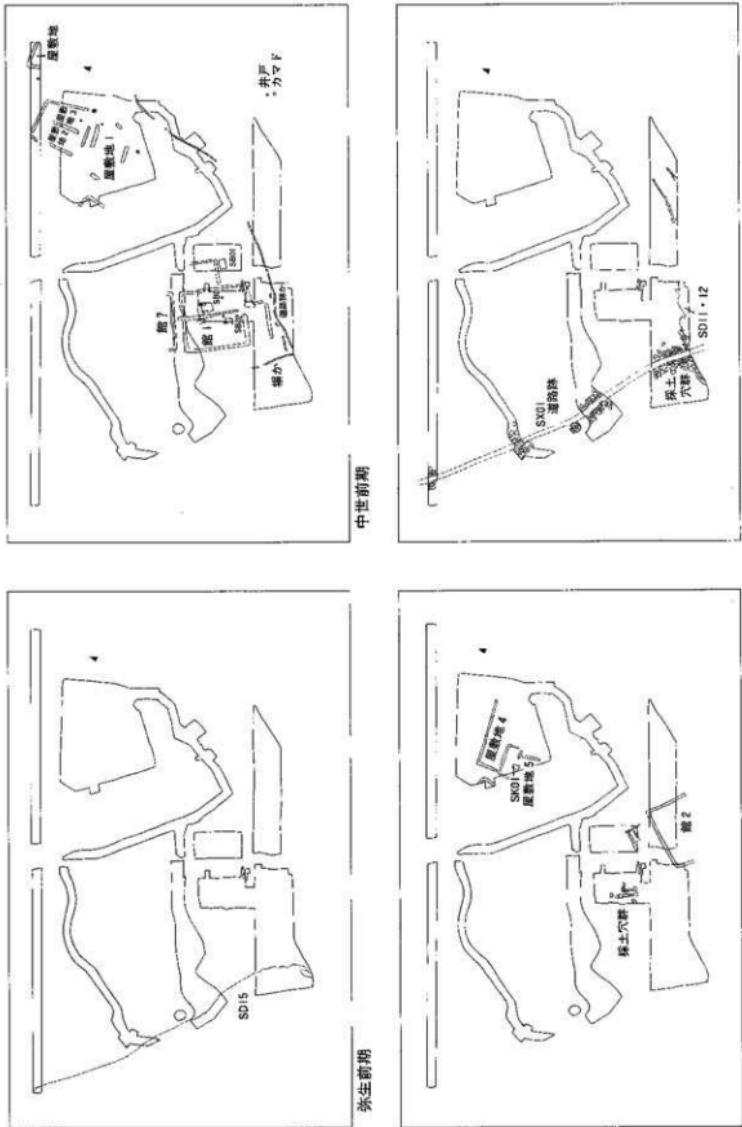
加賀市教育委員会1981「勤使館跡発掘調査報告」加賀市埋蔵文化財調査報告第9集

1986「勤使館跡」

下村1986「下村史」

石川県立埋蔵文化財センター1988「白江梯川遺跡」I

1989「白江梯川遺跡」II



遺構変遷図 (S=1/3,200)

## 2 北陸への弥生文化の波及について

下村加茂遺跡の旧鍛冶川の岸辺から、弥生時代前期に相当する土器・石器・木製品・米が発見された。米は、旧鍛冶川の岸辺に溜まっていた炭化物を集め、水洗して見つかったもので、今のところ1点だけの出土である。黒く炭化しているが、表面にはわずかに穀殻が付着している。大きさは、長さ4.8mm幅3mmで、長さと幅の比は、1.6といわゆる短粒米である。上市町江上A遺跡（弥生後期）の米は平均長さ4.8mm幅2.73mmであり、ほぼ同じ大きさである。現在射水平野で一般に作られているコシヒカリと比べてもあまりかわらないものである。

木製品は、農具・祭祀具・漁労具・建築材などがあるが、それらは金属刃物によって加工されている。

米の栽培と金属の使用は、弥生文化の大きな特徴であり、現在においても日本文化の基礎をなすものといえよう。

これらは、一緒に出土した土器の特徴や木材の放射性炭素C14年代測定から弥生前期古段階（紀元前3世紀）のものであり、今のところ、北陸さらには本州の日本海側では最古の稻作資料である。

これまで北陸では、石川県羽咋郡吉崎・次場遺跡（弥生中期初頭）の歯が最古の稻作資料であり、県内では、高岡市石塚遺跡（弥生中期中頃）の炭化米が最古の稻作資料であった。下村加茂遺跡は、それを遡るものとなる。

出土した条痕文土器・打製石斧（石器）や石錐は、縄文時代を特徴づけるものであり、当時の文化様相は、縄文文化に弥生文化があらたに加わった状況を示す。

下村加茂遺跡の発掘は、そのような当時の暮らしぶりをあきらかにするとともに、北陸への弥生文化の波及時期や列島内での弥生文化の波及経路などについて、あらためて考えさせる資料となる。

以下では、出土土器の編年的位置づけ、木器の組成・特徴について述べ、北陸への弥生文化の波及期について考えてみたい。

### 土器の編年的位置づけ

出土した土器は、点数約50点であり、調整手法や胎土からみて、個体数はその半数ぐらいになるものとみられる。その出土層位は、木器と同じSD15の基本土層第V・VI層からである。点数が少なく、出土層位が限られることからみて、一括りが高いと判断される。土器は次の4類型に分けることができる。

#### 1. 条痕文深鉢類型

外面に条痕文を施し、内面はナデの深鉢。口縁部は内湾ぎみに立つかやや外傾し、口縁部に比べ底部が小さく底部はすぼまる。口縁部に双頭突起を付けたものやさざ波状としたものがある。色調は灰色あるいは黒褐色。全体に占める比率は約85%である。

#### 2. ヘラ削り深鉢類型

外面をヘラ削り、内面はナデの深鉢。口縁部は不明だが底部はすぼまる。色調は黒色。比率は約4%である。

#### 3. ハケメ大型壺類型

外面はハケメの後ヘラミガキ、内面はハケメの壺。口縁部は不明で底部は円筒形である。色調は、褐灰色。比率は約8%である。

#### 4. 小型壺類型

磨滅著しい小片であるが、胴部が丸く張り出す壺とみられる。色調は、赤灰色。比率は約4%である。

以上の特徴を持つ土器は、北陸弥生土器編年のどこに位置づけられるのであろうか。

北陸における弥生土器編年は、石川県での調査例を中心に組み立てられてきている。これまでの研究成果をまとめた最新の編年案は、吉岡康暢「北陸弥生土器の編年と歴期」ではないかと思われる。まず、その論文を手掛かりとした「吉岡1991」。

吉岡氏は、北陸の弥生時代を6期に区分する。その目安を土器の調整手法と主文様でみると、第1期は、条痕文土

器と遠賀川系土器の共存する段階、第II期は、条痕文土器・遠賀川系土器に櫛描文土器が加わる段階、第III期は、条痕文土器が消滅し、櫛描文土器が発展する段階、第IV期は、櫛描文土器に凹線文土器が加わる段階、第V・VI期は、櫛凹線文土器が発達する段階ということができよう。

下村加茂遺跡の土器は、条痕文土器が多いことから、吉岡編年の中I期か第II期に位置づけられることになる。

吉岡編年の第I期は、畿内や東海の編年との対応関係から、弥生前期中段階（I 1期）と新段階（I 2期）に区分される。弥生前期古段階には、縄文晩期の下野式をあてるようであり、その段階は、北陸はまだ縄文時代ということになるらしい。下野式期は条痕文土器と無文土器の比率がほぼ同じであるに対し、I 1期には、条痕文約91%に刷毛目（ハケメ）の土器が3%加わるとされ、条痕文土器の増加に東海地方との結びつきを、刷毛目調整に遠賀川系土器の影響を認める。次の第II期（中期前葉）は、II 1期とII 2期に区分される。II 1期は、条痕文・遠賀川系に新たに畿内系の櫛描文が加わるが、II 1期では、条痕文と櫛描文の比率が1：1であるのに対し、II 2期には2：8となるとされ、畿内との結びつきが次第に強まる様相を見いだす。

下村加茂遺跡の土器群は、それが出土した際には、口縁部がさざなみ状で胴部に条痕文を施す深鉢があり、第II期に位置づけられる吉崎・次場遺跡の土器群によく似たものがあったことから、II 1期（中期初頭）と発表した。しかし、その後の調査では、II期の特徴となる櫛描文土器は1点も見つかっていない。また、胴部ヘラ削りの土器は、畿内の縄文晩期最終末に位置づけられる船橋式に類縁を求めることができ、条痕文深鉢に付く双頭突起は、東北の縄文晩期大洞式の影響を感じさせた。そのようなことから、下村加茂遺跡の土器群は、第I期あるいはそれ以前にさかのぼる可能性が出てきた。

吉岡編年では、弥生前期古段階に相当する土器をあげていないが、設楽博己「東日本における弥生時代の始まり」や国立歴史民俗博物館編「農耕開始期の石器組成1」の編年表では、下野式と弥生前期中段階から新段階に相当させる柴山出村式との間に、長竹遺跡出土土器群が位置づけられている〔設楽1995・国立歴史民俗博物館1996〕。

長竹遺跡の土器は、条痕文、列点文、凸帶文、晩期最終末の大洞A式に対比できる眼鏡状隆起帯・入組工字文・梢円文を特徴とする〔石川県教委1977〕。富山県内では、1994年に報告された小杉町針原東遺跡の土器が、長竹段階に相当する良好な資料ではないかと考えられる〔小杉町教委1994〕。(注1) 下村加茂遺跡土器群は長竹・針原東遺跡土器群とはどのような関係になるのであろうか。

下村加茂遺跡土器群には、長竹・針原東遺跡土器群にはみられない刷毛目調整の土器が含まれている。弥生前期中段階に位置づけられる石川県小島六十刈遺跡では、口縁部が外反する刷毛目の壺があり、遠賀川式壺の影響が考えられている。刷毛目は弥生土器の大きな特徴とみられている。下村加茂遺跡の刷毛目土器も、ほかに胴部が張る壺破片も含めて、遠賀川式土器の影響で生まれた可能性がある。そうであれば、下村加茂遺跡土器群は長竹・針原東遺跡より新しい弥生第I期に位置づけできそうである。

つぎに、第I期のどの段階になるのかということが問題にならう。北陸への遠賀川系土器の波及時期については、弥生前期中段階であると考えられている。佐原真氏は、「縄文／弥生一東北地方における遠賀川系土器の分布の意味するもの」で、東北地方への弥生文化の波及について、遠賀川系土器の木口沈線文を手掛かりとして、弥生前期中段階に、九州から日本海沿岸を北上して、東北地方へ至ったものと推定した〔佐原1986〕。この説は多くの研究者に指示され、今や定説のようである。

しかし、寺沢薰氏は、「弥生文化・北からの視点」において、沿海州南部島嶼部の遺跡に遠賀川系土器に類似する土器があることから、東北地方への中国北東部からの直接的な弥生文化の伝播の可能性をみる〔寺沢1998〕。

下村加茂遺跡の刷毛目壺は、底部しか残っていないために全体の器形は不明であるが、大きな円板と直線的に立つ胴部の感じは、弥生前期（大洞A'式段階）に入って、東日本各地に出現するとされる大型壺をイメージさせ、東日本

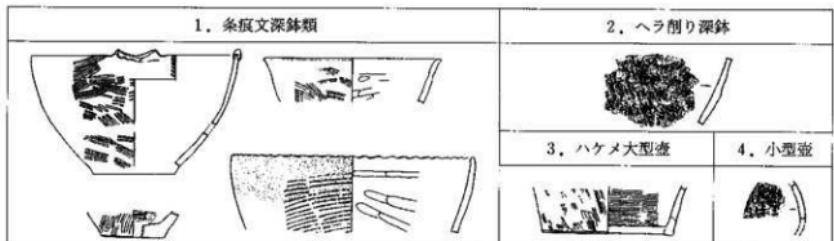
的な様相も感じられる。(注2)また、下村加茂遺跡の土器群には、長竹・針原東遺跡のように工字文などの文様は見出せないが、条痕文深鉢の口縁部に付けられた双頭突起は、大洞系のB字形突起の変化形とみることができる。同形の突起を持つ土器群は、大洞A式新段階あるいは大洞A'式段階に相当するとみられる浮線網状文系第2段階や、東海の弥生前期古段階に位置づけられる馬見塚式にも類例を見いだすことができる。馬見塚式には、近畿の影響とみられる削痕(ヘラ削り)の土器も含まれている〔増子1985〕。

北陸と東海の土器の類縁関係は、縄文晩期(五貫森式)から弥生前期中段階(樅式)・弥生前期新段階(水神平式)を経て弥生中期初頭(岩滑式)まで継続するものであり、下村加茂遺跡の土器群が馬見塚式と類似することはその流れのなかで理解できるものである。

下村加茂遺跡土器群は、条痕文深鉢の東日本(大洞系)的様相を主体とし、ヘラ削り深鉢・ヘラ磨き?小壺壺の西日本(畿内系)、東日本と西日本の折衷形ともいえるハケメ大型壺から構成されているといえよう。

そのようなことから、下村加茂遺跡の土器群は、北陸弥生前期古段階に位置づけできる。そして、崩毛目壺は、北陸の遠賀川式系土器の最も古いものとなり、土器からみた弥生文化は、前期古段階に北陸へすでに到達していることを示すものといえよう。

北陸への遠賀川系土器の波及経路については、日本海ルートが強調されており、富山県では、上市町正印新遺跡の木目沈線壺や高岡市石塚遺跡の壺がその証明とされている〔上市町教委1981・1982、上野1986〕。しかし、それらは、口辺部の外傾度を見る限り、弥生前期に遡るとは考えられない。(注3) 縄文晩期から弥生前期の北陸の土器様相からは、近畿・東海からの伝播であっても不思議ではない。また中国北東部あるいは朝鮮半島からの海を越えた直接伝播や、東北から逆に北陸へ入った可能性も考えられるのである。日本海ルートによる一方的な弥生文化の東漸については、まだ検討の余地を残しているといえよう。



弥生前期の土器分類

縄文晩期末(あるいは弥生早期)から弥生中期の遺跡・土器型式対応表

	九州	近畿	東海	石川	富山	新潟	中部高地	東北
晩期	山の寺	滋賀里IV	西之山	下野	丸山A	大洞C2古	佐野II	大洞C2古
早期	夜白	口酒井	五貫森(古)	長竹	針原東	鳥屋I	女鳥羽川	大洞C2新
	板付I	船橋	五貫森(新)	長竹				大洞A古
前期	板付IIa	I古(長原)	馬見塚		下村加茂	鳥屋2a	離山	大洞A新
	板付IIb	I中	樅王	小島六十刈	丸山A	鳥屋2b	水I	大洞A'・砂沢
	板付IIc	I新	水神平	八田中	正印新(古)	緒立・御代田	水II	青木畠
中期	城ノ越	II	朝日	吉崎・次場	正印新(中)	小丸山	庄ノ畠	寺下田

## 木器の特徴

出土した木製品は、約400点である。それには、自然木や棒・板の小破片を含んでおり、それを除いたおもなものは、本著に収録した180点である。その内訳は、農具9点（5%）、漁労具23点（13%）、紡績具4点（2%）、容器・食器具12点（7%）、祭祀具5点（3%）、工具1点、建築部材74点（41%）、その他棒・杭・加工木など52点（29%）である。

これらは、一緒に出土した土器の編年位置、そしてトネリコ材のC14年代測定値が紀元前約300年にあたることから、その時期は弥生前期古段階のものと考えてよい。

木製品は、板を例にとれば、厚さ2cm以下に整えられた製材段階の進んだもので、加工痕跡は鋭利で金属によることがあきらかである。金属そのものは出土していないが、その刃を研ぐための砥石もあり、金属の使用は疑いえない。

小矢部市桜町遺跡では、縄文時代中期の多くの木材が出土し、縄文時代における木材の加工技術を知ることができ。それらは、丸木あるいは半削したものに穴をあけるとか抉り込みを入れるというものであり、下村加茂遺跡の木材加工とは大きな違いがある。桜町遺跡で金属が使われていなかつたかどうかは断定できないが、おそらくその違いは、石器による加工と鉄や銅の金属による加工の差を示すものであろう。

下村加茂遺跡の木器は、弥生前期古段階に、北陸で金属刃物が用いられていたことを明らかにしたが、北陸では、これ以前に金属の使用を示すものは見つかっていない。それは、北陸で最初に使われた金属ということになる。この金属はどこからもたらされたものであろうか。

我が国では、縄文晩期終末から弥生初頭の時に、九州ではすでに金属が使用されている。鉄器は、福岡県長行遺跡で弥生I期の鉄斧があり、銅器は、福岡県今川遺跡で弥生I期前半の銅鐵・銅盤が出土している。日本での金属生産の開始はいつであろうか。佐賀県吉野ヶ里遺跡などで弥生II期の細形劍矛の鉄型が見つかっており、細形銅劍は日本独自の形態をしていることから、その始まりは、弥生I期末までさかのぼると考えられている。鉄は、広島県小丸遺跡で弥生後期の可能性がある製鐵炉が知られているが、弥生前期に遡るものにはまだ知られていない。そのようなことから、下村加茂遺跡の弥生前期古段階においては、我が国での金属の生産はまだ行われていないらしい。そのため、縄文晩期終末から弥生前期に我が国で出土する金属は、中国や朝鮮から伝來したものと考えられている。現段階では、下村加茂遺跡で、木製品の加工に使われた金属は、中国や朝鮮で作られ渡来してきたものようである。

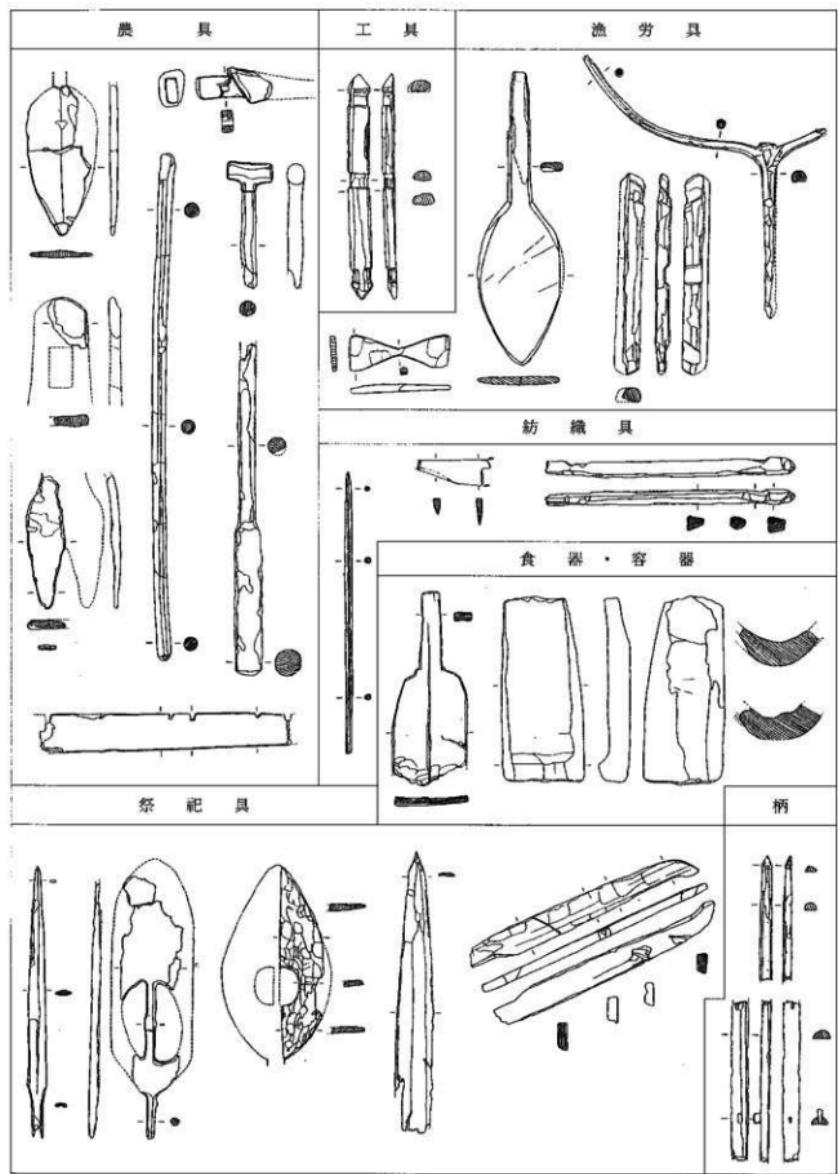
その経路については、九州・近畿を経てみるのが常識的であろう。しかし、山形県三崎山遺跡では、中国殷後期から西周（3,300～2,800年前、縄文後期後半～晚期前半）に作られたと見られる青銅製刀子が出土しており、この時期に、中国から東北へ金属器が伝来していた可能性も指摘されている。北から、あるいは日本海を渡って直接に北陸へ渡米した可能性もある。

木器の特徴を見ながら、その可能性を考えてみよう。

農具は、長方形の柄孔に組み合わさる柄、木の葉形歛、つき部が片方に付く堅杵など、全国的にみても例のないものがあり、その系譜が問題となる。

木の葉形の歛とするものは、船部が欠損しているので、鍔あるいは櫂の可能性があるが、小型であること、広葉樹を用いることから、膝柄の柄が付く鍔と考える。類例はないが、東海地方で弥生中期にみられる曲柄狭歛のようなものではないかと考えられる〔樋上1994〕。

長方形の柄孔をもつ歛は、九州に多くみられ、朝鮮半島からの影響が及んだものと考えられている。しかし、九州では長方形柄孔の歛は弥生中期後半からのようである。この歛は、韓國新昌洞遺跡（紀元前3～4世紀）や上市町江上A遺跡（後期）の例をみると、刃部の幅が狭いわゆる狭歛である。木の葉形歛も刃先が尖る。このような形態の歛がどのようにして使われたのか。刃部が狭いあるいは尖るということは、掘り返し土が硬いということではないか



弥生前期の主要な木器

と想像される。そうであれば、一つには島で用いるものである可能性がある。また、水田や水路を作るための土木開墾用具の可能性がある。結論は出せないが、もし島で用いるものであったなら、稻作の伝播経路についても再考する余地がある。

杵は、国内で発見されている堅杵がほとんど両端につき部を持つ対し、下村加茂遺跡は片側だけに付く変わったものである[村上1996]。類例を強いて求めると、中国良文化(2,000~4,000年前)の中に見いだすことができる[林1995]。下村加茂遺跡と良文化との年代的隔たりは大きいが、日本列島の稻作起源が大陸にあるとすれば、その類似は気になるところである。

祭祀具には、剣形と鳥形があり、東京都立大学の山田昌久氏が武器形ではないかと指摘する鎧状品(組み合わせ鎧)がある。剣形は、先端が鋸く北九州の前段末にみられる細形銅劍に似る。剣形は、今のところ弥生前期とされる奈良県唐古遺跡のものが国内最古であるが、それと同期かそれより古くなるものである。

鳥形は、大阪府山賀遺跡の弥生前期中~新段階のものが国内最古であったが、それを遡るものとなる。山賀遺跡のものは、立体的なものであり形態に違いがある。下村加茂遺跡のような板状のものでは、鳥根県西川津遺跡で類例があるが、弥生中期初頭のものとされている(注4)。

桶形の容器は、日本海沿岸に広く分布することが知られているが、これまで弥生後期のものが国内最古とされており、そうであれば、そのはじまりを400年あまり遡らせるものとなる。[奈良国立文化財研究所編1993]

建築材は、貫穴のある柱、心去りで相欠き仕口とみられる加工のある角柱、厚さが一定の板材、垂木材とみられる角材など、進んだ製材技術の存在がうかがわれる。

その他には、木釘による接合方法も注目される。タモ網や鎧状品に付けられる柄と考えられる断面かまぼこ形の柄があり、それに幅1.3cm厚さ5mm長さ1.9cm(先端が欠けている)の楔状の木釘が2か所に付いている。

木材の接合方法については、奈良県唐古遺跡(弥生前期)で、高杯の杯部と脚部の接合に、崩いほどと呼ばれる太さ8mmのジョイントを用いる例があり、上市町江上A遺跡(弥生後期)では、幅4mm厚さ2mm長さ1.4cmの木釘が残る栓が出土している。弥生時代の当初から、皮や紐による接合の他に木釘を用いる接合法があったことがわかる。

#### 弥生文化の伝播経路・時期について

さて、以上のような長方形柄孔鉢、武器形を用いる祭祀、鳥に対する信仰を示す木製品、桶形容器が、弥生前期古段階に北陸の下村加茂遺跡に存在するということをどのように考えればよいのであろう。

土器の要索では、近畿にこれらに先立つものが存在する可能性があるが、木製品の様相からは、畿内とのつながりを直には認めがたい。

時代は異なるが、縄文前期の福井県桑野遺跡出土玉類は中国東北部のものと近似することや、奈良・平安時代に北陸を中心とする日本海沿岸への渤海船の漂着などの事例がある。そのようなことから、朝鮮半島あるいは中国東北部から、直接日本海を渡り、北陸へ伝わった可能性が想定される[金津町教委1995・高瀬1983]。

その当時の中国は、戦国時代であった。紀元前300~400年前は、中国では、周・秦・韓・齊・魏・燕・越・楚・魯・趙・宋・中山・衛といった国々に別れ、戦いを繰り広げていた[尾形・平勢1998]。そのような中国での争いを逃れた人々が、さまざまなルートを通じて列島各地に渡来してきていたといわれる[王1996]。

その流れは、朝鮮半島から北九州へ向かったものが一番早く多かったであろうが、中国東北部から東北へ渡ったものもあった。そして、日本海を渡り、山陰や北陸の日本海沿岸へ直接渡ってきたものもあったのではなかろうか。下村加茂遺跡の弥生前期古段階の木製品は、大陸文化の北陸への直接渡来の可能性を考えさせる。

ところで、米はどのような方法で作られていたのだろうか。現在射水平野で主として行われているような水稻であるかどうかは実は不明である。また、北陸でのコメの栽培はさらに古く遡る可能性があり、それはいつまで遡るのか

という問題がある。

近年の列島内での発掘調査の成果では、コメはすでに縄文時代に栽培されていたことがわかっている。熊本県ワクト石遺跡や岡山県南溝手遺跡では縄文後期後葉の炭化した米が発掘されており、岡山県姫埜塚遺跡では縄文中期中頃の土器に、イネに含まれるプラントオパール（植物珪酸体）が含まれているという。縄文時代後半には、西日本ではすでに米の栽培が行われており、その栽培方法は陸稲の可能性が高いといわれる。【佐藤1993】

石川県中尾遺跡（縄文晩期中頃）では、イネの花粉が見つかっているから、北陸においても、米作のはじまりが縄文時代に遡る可能性は高く、近い将来縄文時代の米が発見されることであろう【久田1988】。

縄文時代と弥生時代の米作はどう違うのであろうか。広瀬和夫氏によれば、縄文時代の米作が畠作であるの対し、弥生時代以降の米作が、水田稲作が中心となつたことがあるという。水田稲作のために、原野を開拓し水田を造成し水路や堰を作り、それを維持管理するシステムが生まれ、それが縄文時代とは違う社会関係を日本列島に生み出したのだという。【広瀬1997】

県内におけるこれまでの発掘例では、陸稲と水稻の両者が存在したらしい。上市町中小泉遺跡（弥生中期・後期）では水路と堰があり、福岡町下老子岩川遺跡（後期）で水田跡が見つかっている。上市町砂林開北遺跡では、弥生後期の煮のなかに入った米とアワまたはヒエが出土している。富山市任海宮田遺跡や福光町梅原胡摩堂遺跡等では、陸稲を行ったとみられる奈良時代の痕跡が発掘されている。原始古代の米栽培の方法は、多様であったとみなければならない。【上市町教委1981・1988、県埋文センター1997、側富山県文化振興財団1977、福光町1977】

下村加茂遺跡の農具には、畠作に用いたとも見られる木の葉形の歟や狭鋤があること、また水田用と見られる広歎（柄のみ）もある。下村加茂遺跡で作られた米は、水稻・陸稲の両方の可能性があろう。

下村加茂遺跡では、弥生前期古段階（紀元前3世紀前半）の稻作民の存在があきらかになった。しかし、その村は長く続かなかった。1世代か、せいぜい2世代までのようなである。その村は、一旦途絶えた可能性もある。射水平野では、この後に稻作民の存在が確かめられるのは、弥生中期（紀元前2世紀）になってからである。

弥生中期の北陸の上器は、近畿の影響が強く認められるもので、中期末には、畿内で始まったとされる方形周溝墓も採用される。弥生中期には、畿内から下村加茂遺跡の弥生文化とは系統を異にする新たな弥生文化が伝播してきているのではないかと考えられる。北陸において弥生文化が定着するまでには、さまざまな波があったことが予想される。

（久々忠義）

注1 列点文がないことや眼鏡状跡起帶・入組工字文・稍円文の簡略化から、針原東遺跡の土器群をその新段階に位置づけておきたい。

注2 底部の作りは、底部円板の側辺に胴部の粘土を貼り付ける特徴的なもので、長竹遺跡に類例がある。また、直接関係があるのかどうか不明だが、家根祥多氏「弥生上器のはじまり—遠賀川式土器の系譜とその成立—」には、九州の弥生前期古段階（板付I式）に朝鮮無文土器の影響文を受けて、近似した手法があるようである【家根1987】。

注3 正印新遺跡では、口縁部がわずかに外反する条痕文深鉢と、波状口縁で胴部に工字文の変形とみられる沈線文と縄文を施す弥生前期新段階とみられる上器が別に存在する。

注4 烏形の時期については、【山田康広1994】では西川津遺跡を弥生Ⅰ期とするが、【奈文研編1993】では弥生Ⅱ期としているが、後者によった。

## 参考文献

- 石川県教育委員会1977『松任市長竹遺跡発掘調査報告』
- 上市町教育委員会1981『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町遺構編一』
- 上市町教育委員会1982『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町土器・石器編一』
- 高瀬重雄1983『古代海を渡った船と日本と渤海の文化交流』『シンポジウム古代日本海文化』
- 上市町教育委員会1984『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品・総括編一』
- 岸子嘉眞1985『愛知県を中心とする編文晩期後半土器型式と関連する土器群の研究』
- 佐原真1986『織文・弥生・東北地方における遠賀川系土器の分布の意味するもの』日本考古学協会昭和61年度大会研究発表要旨
- 上野章1986『高岡市石塚遺跡出土の壺』埋文とやまと第16号
- 久田正弘1988『稻作について』『八田中遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 吉岡康義1991『北陸弥生土器の編年と画期』『日本海域の土器・陶磁「古代編」』
- 奈良国立文化財研究所編1993『木器集成図録 近畿原始篇』
- 佐藤洋一郎1993『遺伝学からみた縄文の伝来と縄作文化の受容』『日本文化の起源―民族学と遺伝学の対話』
- 小杉町教育委員会1994『小杉町針原東遺跡発掘調査報告』
- 山田康広1994『登りを演出する道具―弥生時代の鳥形木製品一』季刊考古学第47号
- 健上 翼1994『東日本出土農具の状況―各地の画期と地域性 東海の概要』『古代における農具の変遷―稻作技術火を農具から見る』発表要旨集
- 金津町教委1995『桑野遺跡』『金津町埋蔵文化財調査概要平成元年~五年度』
- 林 己奈夫1995『!!! 国文明の誕生』
- 段楽博己1995『東日本における弥生時代の始まり』『展望考古学』考古学研究40周年記念論文集
- 河瀬正利1995『わが西古代の鐵研究をめぐって』『展望考古学』考古学研究40周年記念論文集
- 王建新1996『農耕の起源』季刊考古学第54号
- 国立歴史民俗博物館1996『農耕開始期の石器編成1 近畿(大阪兵庫)・中国・四国』
- 黒崎直1996『古代の農具』日本の美術№357
- 村上由美子1996『杵と臼』滋賀考古第15号
- 広瀬利雄1997『織紋から弥生への新歴史像』
- 岩永省三1997『歴史発掘② 金属性登場』
- 富山県埋蔵文化財センター1997『富山県富山市任海宮遺跡発掘調査報告書II』
- 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 1977『下老子笠川遺跡』『埋蔵文化財調査概要一平成8年度一』
- 福光町教育委員会1977『梅原湖摩堂遺跡』『富山県福光町梅原加賀坊遺跡I・梅原湖摩堂遺跡群I・梅原落』『遺跡群III』
- 寺沢 喜1998『弥生文化・北からの視点』『森井一70の疑問 古代探求』
- 尾形勇・平勢隆郎1998『世界の歴史2 中華文明の誕生』

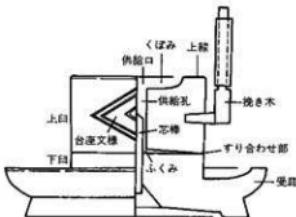
### 3 D地区 SD04(館跡1の堀)出土の茶磨について

今回出土したものは径20~21cm程度・上縁3cm・くぼみと上縁との高低差1cm以上・残高8cmを測る。上白の破片で、供給口や台座文様・挽木孔および白面は残存していない。石材は小角礫が若干混じる緻密な砂岩である。側面・上縁・くぼみは丁寧に磨かれており、くぼみ部分は使い込まれた様子が見られる。また、激しく被熱しており赤色化している。当初、小片であったため、この石臼が茶磨と断定しかねた。しかし、同志社大学工学部名譽教授三輪茂雄氏より作りが丁寧であることや僅かではあるが上部径より下部径が小さい(数mm程度のことが多い)ことから間違いないであろうとの御教授を受けた。また、出土状況をみてみると、出土地点はD地区の13世紀~14世紀前半のSD04(館跡の堀)底付近である。共伴遺物には13世紀前半と思われる北部系山茶碗小皿があり、茶磨同様SD04底直上から出土している。この山茶碗はかなり使い込まれたあと灯明具に転用されているようである。また、堀の覆土には炭化物・焼土粒が多くみられた。茶磨が激しく被熱していたことから、火災が発生・破損の原因であったと考えられる。

ところで、「茶磨=喫茶」と考えると、13世紀~14世紀前半の時点における喫茶の風習は寺社や一部の有力者など極めて限られた場所においてのみみられるときれている。そこで、一地方の館の主が茶磨を所持できた可能性とその背景を考えてみる。

まず、各方面における研究成果についてみてみる。考古学の立場での研究は少ないが桐山秀穂氏によって茶磨の集成・分類・編年試みがなされている(桐山1996)。これによると、15世紀前半までは都市遺跡(ただし都市とした基準は明確でない)および禅宗・律宗寺院跡から出土する傾向があり、東北北部・北陸・北部九州の一部では15世紀前半の居館跡より出土しているとある。なお、今回出土した茶磨は、桐山分類のB類・第1期にあたる。考古資料では13世紀中葉の大坂府西ノ辻遺跡出土の下臼小片(大阪府教委1986)や鎌倉市極楽寺旧境内出土の14世紀代のもの(鎌倉市教委1980)、同じく鎌倉市覚園寺境内遺跡出土の14世紀後半の上臼(鎌倉市教委1982)がある程度である。このうち大坂府西ノ辻遺跡は、天皇家への食物調理場の集落跡であり別格のものと考えられる。なお、新安海底引き揚げ遺物の中にも小型の茶磨が2点ある。この船からは「東福寺」や「至治三年六月一日(1323年)」や日本人名が書かれた木札などから日本行きの船であったことが分かっている。また、工学・民具学の立場では三輪茂雄氏(三輪1975-1978)によって集成・研究がなされている。伝世品をみても夢窓葛石が下向したりに残した高知県高知市吸江寺蔵の「貞和5年(1349年)」銘があるものや、鎌倉市極楽寺旧境内に残るもので良觀房忍性が教済に使ったと伝えられる石製の蒸鉢と千服茶臼があるなど極く少ない。さらに茶道史の立場で茶道に関連する絵画資料の集成が筒井絹一氏らによってなされている(筒井1992)。それによると南北朝期に描かれた「地蔵菩薩畫像記絵」に茶磨がみられるほか、14世紀に描かれた「幕帰絵詞」「不動利益線起」に喫茶の風景があることから茶磨の存在が伺われる程度である。また、文献の方面からの研究には筒井絹一(筒井1992)・竹内順一(竹内1992)・谷端昭夫(谷端1992)など多くの研究がなされている。それらによって「喫茶養生記」や「金沢文庫」などから茶磨の存在が伺える。

つぎに茶道史を簡単に振り返ってみる。まず、日本に喫茶の風習が伝わったのは805年(延暦24)のことと、伝えられた茶法や製茶の方法は隋唐茶法であった。この茶法は、团茶(採葉したものを蒸し、臼杵でついて固め、焙炉で炙って乾燥して作ったもの)を粉末にしたあと、煮立った湯の中へそれを入れ、茶碗へ汲み出して飲むという煎茶法である。それに対し、抹茶を茶碗に入れて湯を注ぎ茶筅を使って茶を点てる点茶法は宋代になって生まれたものである(ただし、茶の原地である地方では唐代において葉茶であった可能性があると考えられている)(筒井1994)。この



茶臼の各部位の名称(三輪 1978 b より改変)

喫茶法は、平安時代後期で宋文化の移入とともに持ち込まれたものの、この後の社会不安や武家社会の台頭などによって嗜好品として定着するに至らなかった。その後、平安時代末期に1187年・1191年の2度にわたって入宋した栄西が改めて宋代茶法の点茶法・茶種を持ち帰った。帰国後、彼は茶を九州の平戸島富春庵や肥前背振山の石上坊に植えた。さらに、茶種を送られた京都の明惠上人が梅尾の山中に植え、これがのちに本邦第一の茶（本茶）となった。また、栄西は、1199年将軍に招かれ鎌倉に入り、1214年に深酒で伏せていた将軍源実朝の加持祈禱に訪れ、良薬として一盞の茶とともに「喫茶養生記」を献上した。これ以降、上流武士の間に喫茶の風習が広がるようになった。このことは、金沢文庫の中にある茶についての記述や、鎌倉市出土の中国唐天祐茶碗の出土が13世紀中頃を最古例として13世紀後半から1333年前後に多くみられることからも分かる（鎌倉幕府滅後は激減する）（手塚1994）。そして、鎌倉時代末期に闘茶が中国から伝わり、南北朝時代以降公家・武家・僧侶をも巻き込んで爆発的ブームとなる。これは一種の賭事で、贅沢な景品が賭けの対象になった。これについては「二条河原落書」のなかでも非難されたほか、室町幕府も建武式目の中で禁止している。一方、寺院における喫茶は、薬効として的一面を保ちながら宗教儀礼の具としての役目を担っていた。喫茶は禪宗寺院以外にも律宗寺院でも嗜まれていたことは鎌倉時代末に始まった西大寺の大茶盛の行事や1262年（弘長2年）に西大寺長老叡尊が鎌倉へ下向した際の口記である「関東往還記」等でも分かる。では、一般庶民への喫茶の風習の広がりはどうであったかというと、絵画資料や考古資料からみて14世紀後半以降と思われ、それ以前の資料は乏しい。ただし、しかし、ある程度の広がりを伺わせるものに1280年に書かれた「沙石集」の中の説話がある。その中で牛飼いと僧侶との会話で茶の効能を例に出すことで「物事の表裏両面」について説いているものがある。これは、「茶の得失を比喩に使える程度には茶が普及していた当時の実態を示すものと考えられる」とされている（筒井・中村1994）。また、茶の産地が関東にまで広がっていることも茶種の一種である喫茶の風習が庶民にまで広がっていたことを示すものと考えられている。しかし、茶はまだまだ高級品であったと思われ、庶民における茶の普及が文献等から伺えるようになるのは1403年（応永10年）の「南大門一服一錢諸文」や1416年（応永23年）の「於殿上有雲脚順事」など15世紀頃以降である。しかし、文献・絵画資料などから伺い知ることができるのは有力寺院および中央部の事例であり、地方における喫茶の風習の広がりについては資料が少ない。少ない例には鎌倉の寺院が、尾張国富田荘の寺領回復のため尾張国守護土岐頼康に唐物を贈与している。このようにして唐物の各地への広がりを考えることができる。唐物（墨蹟・青磁花瓶・香炉・建蓋など）の流入は喫茶の普及に結びついており、このようにして喫茶の風習が各地へ広まっていたと考えられる（谷端1995）。

つぎに鎌倉時代後期から南北朝期の越中と下村加茂遺跡およびその周辺について考えてみる。鎌倉時代における越中守護は、1284年（弘安7年）から1333年（正慶2年・元弘2年）の鎌倉幕府滅亡と連命をともにするまで名越氏が相伝し、放生津に守護所を設けていた。名越氏は、始祖北条時が執権北条泰時の弟で得宗家に近い血筋にあたり鎌倉時代を通じて幕政の中枢に近い位置にいた。そのため名越氏は鎌倉に在中し、実質的な越中支配は守護代によつて行われていた。守護所があった放生津は、日本海交易における要港であった放生津湊を中心として経済的発達をしていた。放生津は下村加茂遺跡から北西に4kmあまり、遺跡のすぐ西側を流れている鍛冶川を利用すれば日と鼻の先と言える。ここには西大寺律宗寺院が建立され、時衆の道場が営まれた。そして時衆は、鍛冶川の水運を利用して上流域にまで勢力を伸ばしていた。西大寺など律宗寺院に喫茶の風習があったことは前述のとおりである。また、当時時衆は地方における文化の伝播・担い手として大きな役割を果たしていた。元弘年間（1331年から）になり討幕を画策する動きが活発化する中で、越中守護名越時有はその一族被官とともに支配強化のため越中に下国した。しかし、戦局の悪化の中で1333年5月17日一族もろとも自害して名越氏は滅亡する。鎌倉幕府の滅亡後は後醍醐天皇による建武新政が始まるが、1335年（建武2年）に北条高時の遺児時行による中先代の乱に呼応して越中・能登・加賀においては名越時有の遺児時兼を擁した反乱があった。これには、越中國内の多くの諸勢力が時兼に応じて挙兵している。

この反乱は鎮圧されたが、これを契機に新政府は分裂し南北朝時代が始まった。その際には宗良親王が南朝の拠点として放生津に1342年（興国3年）から1343年（興国4年）にかけて滞在している。越中守護は1336年（建武3年）から翌年までは吉見頼隆が、その後1344年（康永3年）までは普門（井上）俊清が、観応の乱の中断を挟み1351年（観応2年）までは桃井直常が在職していた。その間中央の勢力争い同様、各勢力のせめぎ合いが続き、斯波義将を経て1380年（康暦2年）の畠山基国が守護になるまで続いた。一方、下村加茂遺跡の周辺を知る手掛かりとなる文献は倉垣荘閑連のものに限られる。1090年（寛治4年）に成立した下賀茂神社領倉垣荘は、戦乱による混乱の中でも根本神領としてたびたび安堵され、不輸不入の権を保証されていたため守護・守護代などの介入を受けなかった。そして、1383年（永徳3年）には近衛大五郎が下向し、1395年（応永2年）に加茂神社の押殿を新築し祭礼の日を定めるなどしてこれを倉垣荘の總社とした。荘官が中央から下向するということがそれ以前にもあったのか不明であるが、都とのつながりが深いことを裏付けるものと思われる。そして、少なくとも1489年（延徳元年）までは文献によってその存在が確認できるが、その後は守護・守護代の介入が始まり下賀茂神社領としての実態を失っていったとされている。

このようにみてみると、鎌倉時代から南北朝期にかけて、当地は時代背景・放生津や鍛冶川との位置関係などから、政治的に中央との関係が深くかつ文化的にも先進的な文化を取り入れ易い環境にあったと思われる。とはいえ、茶磨が出土した館1の主人はこの地域でもかなりの有力者であったことは間違いないといえる。なんらかの功績によるためや味方勢力への引き込みのために贈与されたのではないだろうか。そして、その勢力由に幕末へ南北朝期の争乱に巻き込まれ焼失廃棄されたのではないかと推測する。茶磨のほかにいわゆる「茶道具」の類は出土していない。これについては、14世紀前半以前の茶道具としては茶碗（建盏・天目・青磁等）・茶筅・茶壺はあったが風炉や水指・建水などではなく、日常生活用具が変化していくと考えられている。水差は本来曲物桶などであったことが絵画資料から推測され、建水も浅い鉢を使用していた。また、いわゆる「茶碗」とよばれた青磁碗・白磁碗の使用は、「侘び茶」大成以前の典型であったらしい（竹内1992）。建盏・天目などの黒褐釉陶器は、新安海底引き揚げ遺物からみても輸入量もごく少なく手に入らなかったと思われる。同様に、瀬戸・美濃窯の天目茶碗も13世紀末頃から生産が始まったがまだ広く流通するといった状況ではなかった。館1は14世紀前半のうちに廃絶していることから、水指・建水など茶道具の出土がなくとも問題はない。ただし、「墓掃絵図」に14世紀中頃には風炉や水指のセットが描かれている。しかし、この時期に現在に近いセットが十分に普及していたというわけではなく、ましてや地方においてはそれらを十分に手に入れるのは困難であったろうと思われる。

以上は、あくまでも推論の域を出ないものの、全国的にみても最古級ともいえる茶磨が、越中という地方のそれも守護所など当時の政治の中心とは異なる地で出土したことは、地方史・茶道史・文化史を考える上で興味深い。

（越前慶祐）

#### 参考文献

- 芳賀幸四郎 1962 「茶の文化史」『図説 茶道体系』第2巻 角川書店  
西部文津 1972 「禪と茶」淡交社  
三輪茂雄 1973 「石臼の謎」 タオリ  
1978 a 「石臼探訪」 タオリ  
1978 b 「石臼」  
村井康彦 1979 「茶の文化史」岩波書店  
埼玉県立博物館 1992 「喫茶の考古学」展示図録  
竹内順一 1992 「絵画にみる茶道具」『茶の墨絵画資料集成』平凡社  
谷端昭夫 1992 「チャート茶道史」淡交社  
筒井敏一 1992 「喫茶風俗の歴史」『茶の墨絵画資料集成』平凡社  
1994 「茶法の移入とその展開—平安・鎌倉時代を中心に—」『特別展 唐物天目』茶道資料館  
平凡社 1992 「茶の墨絵画資料集成」平凡社  
伊藤嘉章 1994 「和物天目—瀬戸・美濃窯における天目の展開」『特別展 唐物天目』茶道資料館  
手塚直樹 1994 「鎌倉の天目茶碗」『特別展 唐物天目』茶道資料館  
熊倉功大・筒井敏一・中村利則・中村修也 1994 「資料による茶の湯の歴史（上）主婦の女社

# 第VI章 自然科学的分析

## 下村加茂遺跡出土木樹種識別

富山県林業技術センター・木材試験場  
資源利用課 研究員 塚本 英子

### 1. 識別方法

下村加茂遺跡から発掘された出土木（自然倒木等）15点について樹種識別を行った。樹種識別用バラブレート（永久標本）は出土木から横断面、接線断面、放射断面をカミソリで切り取り、それをガムクローラルで封入して作成した。プレバラートを顕微鏡下で観察し、木材の組織的特徴から樹種を識別した。また、観察した顕微鏡像を撮影記録した（撮影倍率10×, 25×, 50×）。

### 2. 識別結果

#### 1) ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus sect. Gymnothrysus* カバノキ科 (試料①②④⑨⑩⑪⑬)

小径の道管が単独ないし2～6個放射状ないし塊状に複合する環孔材。道管の直径は年輪内でほとんど変化せず、階段穿孔を有し、その階段の数は20本以上にもなる。軸方向柔細胞は短接線状ないし散在状に存在。放射組織は單列同性で、単列放射組織と集合放射組織とがみられる。

#### 2) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 (試料③⑤⑥)

大型（直径200～350μm）の道管が年輪のはじめに単独ないし2個複合して1～3層並び、晩材部では小道管が散在状に配列する環孔材。道管は単穿孔で、内腔にはチロースが存在し、複合道管壁が厚い。軸方向柔細胞は道管を囲むように配列し、傷害樹脂道（ビスフレック）が一部（試料⑤）みられる。放射組織は平伏細胞のみからなる同性で、3細胞幅の効鉢形である。

#### 3) スギ *Crypomeria japonica* D.Don スギ科 (試料⑦)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹。早材と晩材は明瞭で、早材から晩材への移行はやや急で、晩材部分が比較的多い。樹脂細胞は早材と晩材の境界付近に偏在し、接線状に並ぶ傾向がある。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～3個みられる。

#### 4) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinns* ブナ科 (試料⑧⑪)

大型（直径約150～300μm）の道管が年輪のはじめに単独で1～3層並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状ないし放射状に配列する環孔材。道管は単穿孔で、内腔にはチロースが存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列。放射組織は平伏細胞のみからなる同性で、単列放射組織と広放射組織がみられる。

#### 5) ムクロジ *Sapindus mukorossii* Gaertn. ムクロジ科 (試料⑯)

大型（約200μm）の道管が年輪のはじめに単独で配列し、晩材部では小道管が散在状に配列する環孔材。道管は単

穿孔で、内腔にはチロースが存在する。軸方向柔細胞は道管を囲むように配列。放射組織は平伏細胞のみからなる同性である。

6) ヒノキ Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ科 (試料⑬)

仮造管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹。早材と晩材とは明瞭で、早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は少ない。樹脂細胞は晩材部に偏在し、やや接線状に並ぶ傾向がある。分野壁孔はヒノキ型で1分野につき1~3存在する。

試料	和名	学名	科名
①	ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect.Gymnothrysus	カバノキ科
②	ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect.Gymnothrysus	カバノキ科
③	トネリコ属	Fraxinus	モクセイ科
④	ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect.Gymnothrysus	カバノキ科
⑤	トネリコ属	Fraxinus	カバノキ科
⑥	トネリコ属	Fraxinus	モクセイ科
⑦	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	スギ科
⑧	コナラ属コナラ節	Quercus sect.Prinus	ブナ科
⑨	ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect.Gymnothrysus	カバノキ科
⑩	ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect.Gymnothrysus	カバノキ科
⑪	コナラ属コナラ節	Quercus sect.Prinus	ブナ科
⑫	ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect.Gymnothrysus	カバノキ科
⑬	ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect.Gymnothrysus	カバノキ科
⑭	ムクロジ	Sapindus mukurossii Gaertn.	ムクロジ科
⑮	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ科

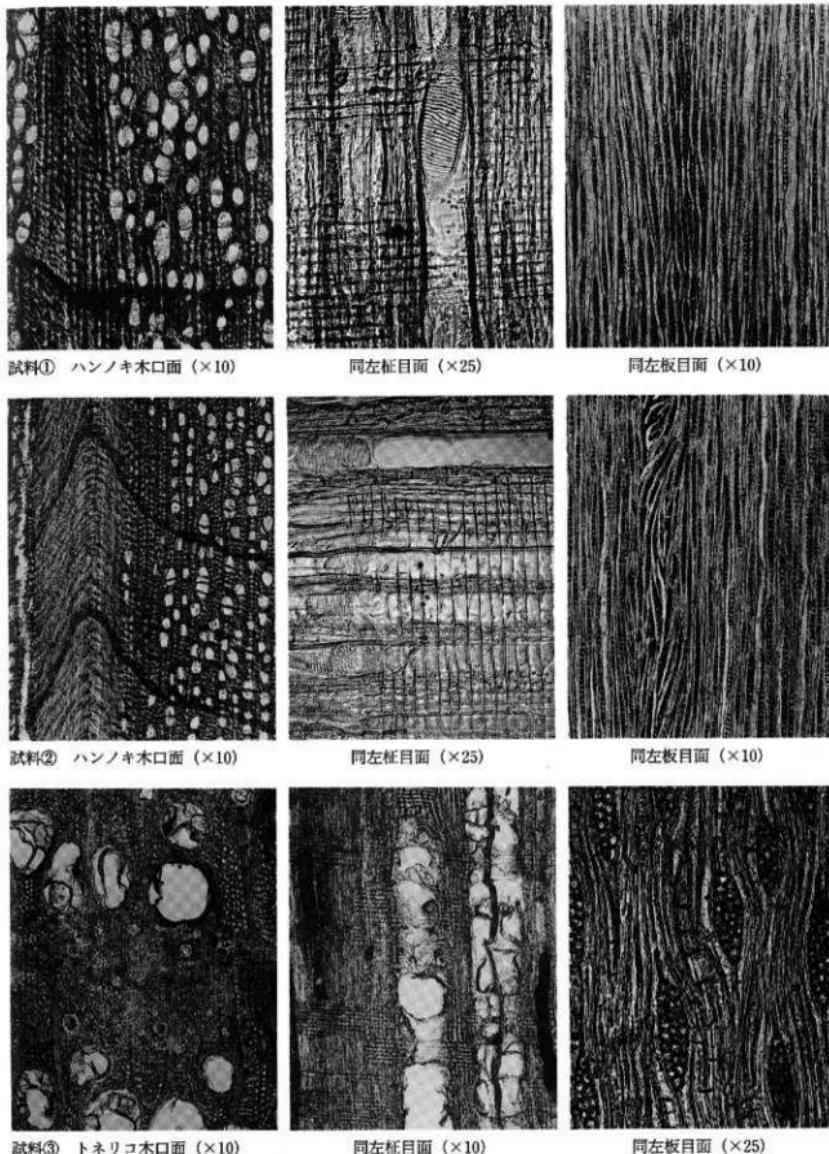
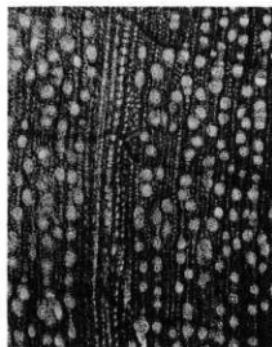


写真 1



試料④ ハンノキ木口面 ( $\times 10$ )



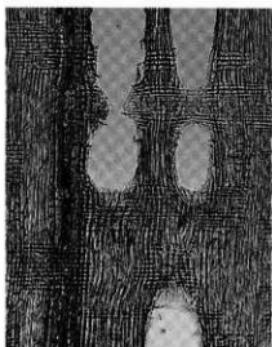
同左柾目面 ( $\times 25$ )



同左板目面 ( $\times 10$ )



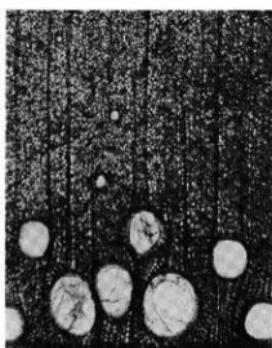
試料⑤ トネリコ木口面 ( $\times 10$ )



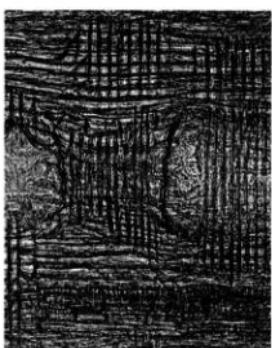
同左柾目面 ( $\times 10$ )



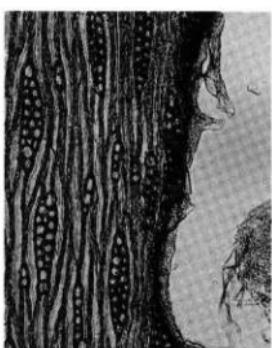
同左板目面 ( $\times 10$ )



試料⑥ トネリコ木口面 ( $\times 10$ )

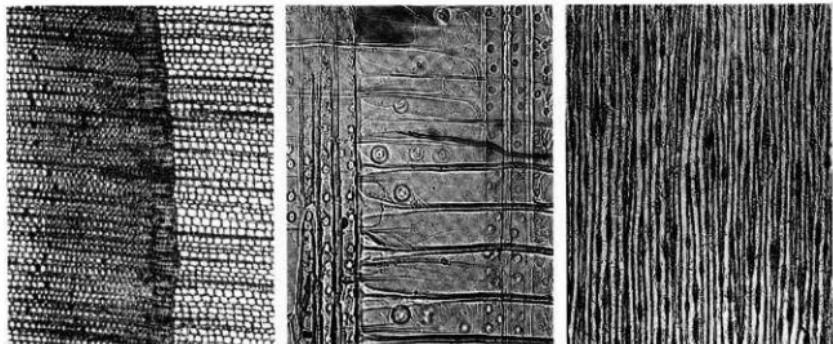


同左柾目面 ( $\times 25$ )



同左板目面 ( $\times 25$ )

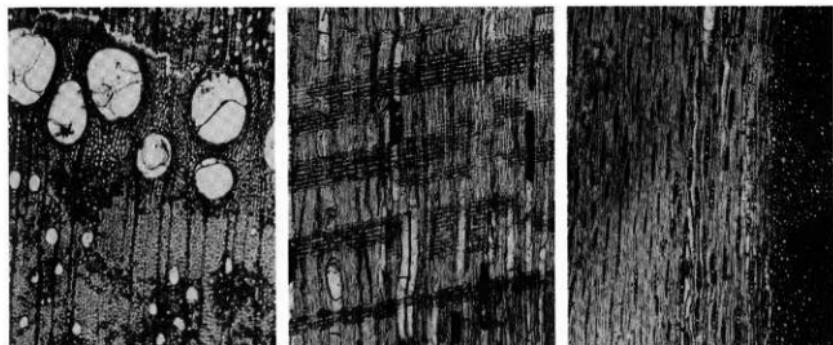
写真2



試料⑦ スギ木口面 ( $\times 10$ )

同左柾目面 ( $\times 50$ )

同左板目面 ( $\times 10$ )



試料⑧ コナラ木口面 ( $\times 10$ )

同左柾目面 ( $\times 10$ )

同左板目面 ( $\times 10$ )

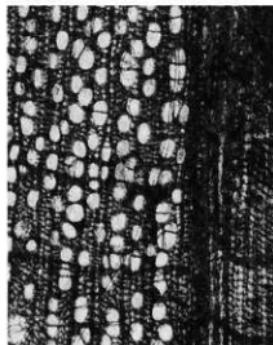


試料⑨ ハンノキ木口面 ( $\times 10$ )

同左柾目面 ( $\times 25$ )

同左板目面 ( $\times 10$ )

写真 3



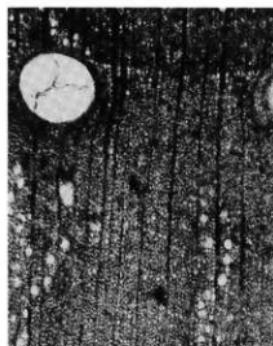
試料⑩ ハンノキ木口面 ( $\times 10$ )



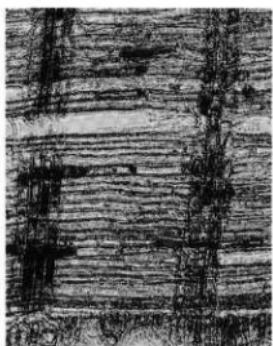
同左柾目面 ( $\times 25$ )



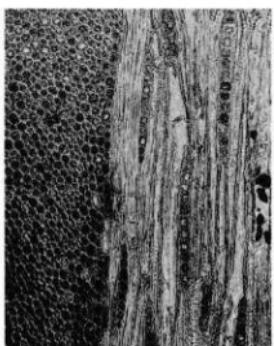
同左板目面 ( $\times 10$ )



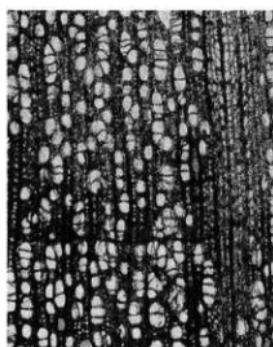
試料⑪ コナラ木口面 ( $\times 10$ )



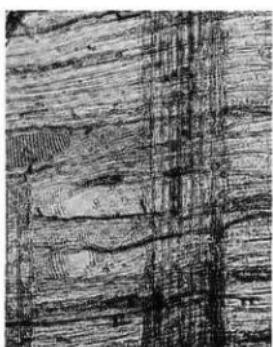
同左柾目面 ( $\times 25$ )



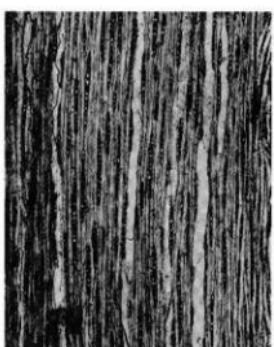
同左板目面 ( $\times 25$ )



試料⑫ ハンノキ木口面 ( $\times 10$ )

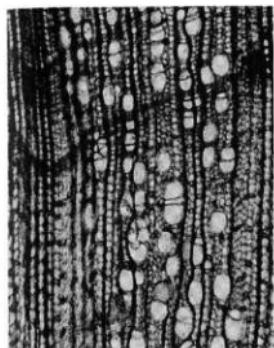


同左柾目面 ( $\times 25$ )

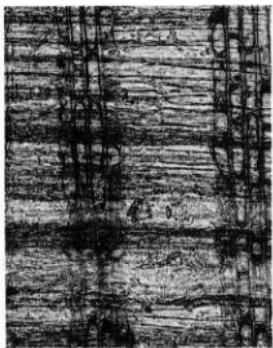


同左板目面 ( $\times 10$ )

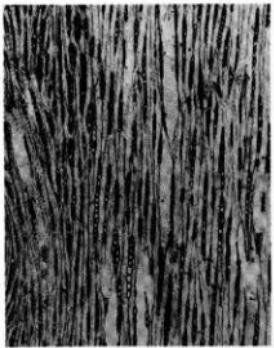
写真 4



試料⑩ ハンノキ木口面 ( $\times 10$ )



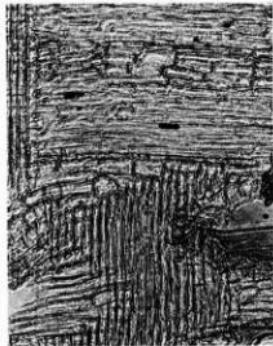
同左柾目面 ( $\times 25$ )



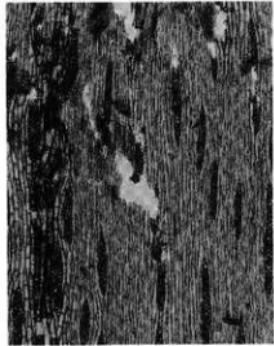
同左板目面 ( $\times 10$ )



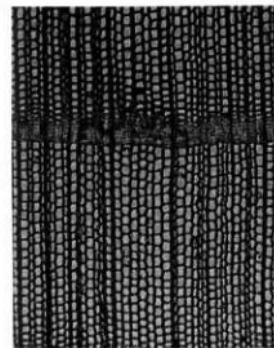
試料⑪ ムクロジ木口面 ( $\times 10$ )



同左柾目面 ( $\times 25$ )



同左板目面 ( $\times 10$ )



試料⑫ ヒノキ木口面 ( $\times 10$ )



同左柾目面 ( $\times 50$ )



同左板目面 ( $\times 25$ )

写真 5



## 下村加茂遺跡出土木製品の樹種調査結果(1)

佛吉田生物研究所 沙見 真  
京都造形芸術大学 岡田 文男

### 1. 試料

試料は下村加茂遺跡 SD15から出土した木製品136点である。

### 2. 方法

剥刀で木口（横断面）、征目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、プレパラートを作製する。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定する。

### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹3種、広葉樹11種）は木器観察表に記載し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

#### ◆イチイ科カヤ属カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.)

木口では仮導管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。征目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個ある。仮導管の壁には対になつた螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州（中・南部）、四国、九州に分布する。

#### ◆スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

木口では仮導管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。征目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端型はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

#### ◆ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

木口では仮導管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。征目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

#### ◆ヤナギ科ハコヤナギ属 (*Populus* sp.)

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい導管が単独または2～4個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。征目では導管は单穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は平状細胞からなり同性である。導管放射組織間壁孔はやや大きく、節状になっている。板目では放射組織はすべて単列で、1～25細胞高であった。ハコヤナギ属はヤマナラシ、ドロヤナギがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### ◆カバノキ科カバノキ属 (*Betula* sp.)

散孔材である。木口では中庸の導管が2～5個放射方向ないし集塊状に複合して分布している。軸方向柔細胞は

年輪界で顕著である。柾目では導管は階段数の少ない階段穿孔と側壁に多数の小壁孔を有する。放射組織は平状細胞からなる同性のものと、平伏と直立細胞からなる異性がある。板目では放射組織は1～4細胞列、1～40細胞高からなる。カバノキ属はマカンバ、シラカンバ、ミズメ等があり、北海道、本州、四国に分布する。

◆カバノキ科ハンノキ属 (*Alnus* sp.)

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい導管が2～数個半径方向に放射複合管孔をなして平等に分布する。軸方向柔細胞は短接線状柔組織を形成している。放射組織は多数の単列放射組織と列数の広い放射組織がある。柾目では導管は階段穿孔（バー数10～30）と小型で円形の対列壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなるが、ときに上下隣近に方形細胞が現れる。板目では多数の単列放射組織（1～30細胞高）と単列放射組織が集まつてできた集合型の広放射組織がある。ハンノキ属はハンノキ、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆ブナ科クリ属 (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

環孔材である。木口では円形ないし稍円形で大体単独の大導管が年輪にそって軸のかなり広い孔圈部を形成している。孔圈外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小導管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では導管は單穿孔と多数の有縫壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として導管、それを取り囲む短筒型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木継維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

◆ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

散孔材である。木口ではやや小さい導管がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では導管は單穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。導管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

◆ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Lepidobalanus* sp.)

環孔材である。木口では大導管が年輪界にそって1～3列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小導管が単独あるいは2～3個かたまって火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では導管は單穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。導管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大導管が1列で孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小導管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では導管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1～数列で多数

のすじとして見られる。柾目では大導管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小導管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少數の1~3列のものと大部分を占める6~7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下の端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

#### ◆クワ科クワ属 (*Morus* sp.)

環孔材である。木口では大導管が年輪界にそって1~5列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では小導管が2~6個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では導管は単穿孔と放列壁孔を有する。小導管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。導管内には充填物(チロース)が見られる。板目では放射組織は1~6細胞列、5~60細胞高からなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグマ、ケグワ、マグワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### ◆バラ科サクラ属 (*Prunus* sp.)

散孔材である。木口ではやや小さい導管の大きさはほぼ一定で、単独あるいは放射方向ないし斜方向に連なり分布している。柾目では導管は単穿孔と側壁に交互壁孔及び螺旋肥厚を有する。導管内には着色物質が見られる。放射組織は同性ないし異性で中央部の平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなる。板目では放射組織は1~4細胞列、2~10細胞高からなる。サクラ属はサクラ、ウメ、バクチノキ等があり、本州、四国、九州、琉球に分布する。

#### ◆ムクロジ科ムクロジ属 (*Sapindus mukorossi* Gaertn.)

環孔材である。木口ではやや大きい導管が数列で孔圈部を形成している。孔圈外では小導管が団塊状に集合している。軸方向柔細胞は幅の広い帶状をなして接線方向に連続している(帶状柔組織)。柾目では大導管は単穿孔と多数の壁孔を有する。小導管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1~3細胞列、2~30細胞高のものがある。ムクロジは本州(中南部)、四国、九州、琉球に分布する。

#### ◆モクセイ科トネリコ属 (*Fraxinus* sp.)

環孔材である。木口では大導管が単一数列で孔圈部を形成している。孔圈外では厚壁の小導管が単独ないし2~4個放射方向に複合して散在している。軸方向柔細胞は著しく網状、翼状、連続翼状に配列している。柾目では導管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1~4細胞列、3~45細胞高からなる。トネリコ属はシオジ、ヤチダモ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### ◆参考文献◆

- |           |                        |             |         |
|-----------|------------------------|-------------|---------|
| 島地 謙・伊藤隆夫 | 「日本の遺跡出土木製品総覧」         | 雄山閣出版       | (1988)  |
| 島地 謙・伊藤隆夫 | 「図説木材組織」               | 地球社         | (1982)  |
| 伊藤隆夫      | 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~III」 | 京都大学木質科学研究所 | (1995~) |
| 北村四郎・村田 源 | 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」     | 保育社         | (1979)  |

#### ◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEEX UFX-DX Type 115

## 下村加茂遺跡出土木製品の樹種調査結果(2)

勝吉田生物研究所 沢見 真

京都造形芸術大学 岡田 文男

### 1. 試料

試料は下村加茂遺跡から出土した中世・近世の木製品14点である。

### 2. 方法

剃刀木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、プレパラートを作製する。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定する。

### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹2種、広葉樹2種）は木器観察表に記載し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

#### ◆スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

木口では仮導管を持ち、早材から晚材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

#### ◆ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

木口では仮導管を持ち、早材から晚材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

#### ◆ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの導管が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帶状柔組織をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では導管は單穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。導管放射組織間壁孔は大型で櫛状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊りの間に導管以外の雜方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

#### ◆バラ科 (Rosaceae)

散孔材である。木口ではやや小さい導管の大きさはほぼ一定で、平等に分布しているが単独あるいは放射方向なし斜方向に連なっている。柾目では導管は單穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～4細胞列、2～20細胞高からなる。バラ科はバラ、サクラ、モモ、ウメ等が有り、北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### ◆参考文献◆

- |                              |             |         |
|------------------------------|-------------|---------|
| 島地 謙・伊藤隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」     | 雄山閣出版       | (1988)  |
| 島地 謙・伊藤隆夫 「図説木材組織」           | 地球社         | (1982)  |
| 伊藤隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～III」  | 京都大学木質科学研究所 | (1995～) |
| 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 | 保育社         | (1979)  |

#### ◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEEX UFX-DX Type 115

# 下村加茂遺跡の古環境復元

バリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

下村加茂遺跡（富山県射水郡下村所在）は、射水平野北西部の低地に立地する。射水平野は、大部分が埋積低地で、縄文海進以降の、内湾、潟、湿地という変化を経て形成されている（藤井、1992）。藤井（1992）の古地理図によれば、その中でも、本地域は遅くまで潟（放生津潟）として残った地域と考えられている。しかし、現在では、圃場整備や富山新港の整備などで、潟は失われている。聞き取り調査によれば、圃場整備の前は水郷地帯であり、水路や湿田が多数存在していたようである。

今回の発掘調査区（A地区）では、旧鍛冶川に相当する埋没河川（SD15）が確認されている。本流路は、その埋積途中段階にあたる弥生時代前期に、貯木場として利用されていたことが確認されている。そこで、今回の分析調査では、弥生時代前期～中期頃に埋没したと思われる旧鍛冶川埋積物を対象として花粉分析を行い、当時の古植生に関する考察を行う。また、この埋積物から出土した木材の放射性炭素年代を実施することにより、河川の埋積時期の推定を行なう。

## 1. 調査地点・試料

調査区で確認されている旧鍛冶川（SD15）は、A地区西部を北西方向に流下する。川幅は、西岸が調査区外にあたるため不明である。深さは調査区内で最大約1.4mである。本河川は、埋積物の累重関係から、一度埋没した後、再び同じ場所に流路が形成され、埋没したことが推定される。

旧段階の河川は、灰色砂と黒褐色砂の葉理からなる堆積物で充填されている。層相から流水下で堆積したことが推定される。新段階の河川は、シルト・粘土といった細粒碎屑物を主体とする堆積物で充填されている。堆積構造は塊状を呈していることから、比較的安定した環境で堆積したことが推定される。この新段階の埋積物上部で弥生時代前期の貯木場が確認されている。

花粉分析試料は、旧段階河川埋積物断面（南側セクション）と、新段階河川埋積物断面（北側セクション）で採取された。採取層位は、南側セクションが埋積物最下部にあたる54層（試料番号B）と上部の43層（試料番号A）、北側セクションが埋積物中部の19層（試料番号B、C）と上部の17層（試料番号A）である。このうち17層が貯木場が存在した時期に堆積した層である。

放射性炭素年代測定試料は、54層出土の枕（試料番号4）、SD15の19層最下部もしくは地山層中の木片（試料番号5）、17層出土の丸木（試料番号3）、の3点である。

## 2. 方法

### (1) 放射性炭素年代測定

試料を水でよく洗浄して表面の異物を取り除き、乾燥させる。粉碎後水酸化ナトリウム溶液で煮沸する。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返す。次に塩酸を加えて煮沸し、室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で40°Cに加热）する。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。得られた炭酸カルシウムから真空状態

で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。最終的に得られた合成ベンゼン 3 ml (足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して 3 mlとした) にシンチレイターを含むベンゼン 2 mlを加えたものを測定試料とする。測定は、1 回の測定時間 50 分間を 20 回繰り返す計 1,000 分間を行う。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するプランク試料と一緒に測定する。なお、放射性炭素の半減期として LIBBY の半減期 5,570 年を使用する。

## (2) 花粉分析

試料約 10 g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛 : 比重 2.2) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類 (Taxa) について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

## 3. 結果

### (1) 放射性炭素年代測定結果

結果を表 1 に示す。下部ほど年代値が古い傾向にある。

表 1 放射性炭素年代測定結果

試 料	性状	年代値	誤差	Lab No.
SD15 17層 No.3	木材	2,260	+240 -230	PAL-245
SD15 19層 or 地山 No.5	木材	2,580	+260 -260	PAL-247
SD15 54層 No.4	木材	2,680	+260 -250	PAL-246

年代値 : A.D. 1,950 年を基点とした値

誤差 : 測定誤差  $2\sigma$  (測定値の 95% が入る範囲) を年代値に換算した値

PAL : パリノ・サーヴェイ用で測定

### (2) 花粉化石

結果を表 2、図 1 に示す。花粉化石は各試料から比較的多く検出される。木本花粉の割合が高く、特に下部では顕著である。また、若干の増減はあるが、ほぼ同様な組成を示している。

木本花粉ではハンノキ属の割合が高いが、上位では減少し、かわってスギ属が漸増する。その他、マツ属、ブナ属、コナラ属、モチノキ属などが検出される。草本花粉ではイネ科の割合が高く、上位に向かって増加する。水生植物を多く含む分類群 (ミズバショウ属、カマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズオオバコ属、ミズアオイ属、コオホネ属、ヒシ属、ゴキヅル属など) の種類数が多いが、種類数、個体数ともに上位に向かって増加する傾向にある。

## 4. 考察

SD15 河川内の水城環境は、花粉化石の産状および層相から次のように推定される。II 階段の河川堆積物では、ハン

ノキ属などの木本が主体で砂質であるのに対し、新段階の埋積物では草本の水生植物も増加し、シルト質になる。このことから、旧段階の時期は水の流れも強く周辺に生育していた樹木などが流入して堆積しているのに対し、上部では流速が遅く、また水深も浅くなつたため、溝内に水生植物が生育できるような環境へと変化したことが考えられる。

堆積時期は、遺物などから弥生時代前期末～中期末に埋積していたと考えられているが、形成時期や埋積開始時期はそれより古いと考えられている。今回行った年代測定結果をみると、旧段階河川埋積物最下部の木材で約2,600年前、新段階上部の遺物包含層中の木材で約2,300年程度の値が得られている。年代測定の結果は遺物から推定された年代より若干古いが、測定誤差の範囲内にある。このことから、SD15の形成時期は縄文時代晚期に遡ることができ、その後埋積が進んでいったものと推定される。また、旧段階の河川埋積物下部と、新段階の河川埋積物下部の年代値が近似しているが、これは旧段階の河川が急速に埋没したことを意味するかもしれない。

弥生時代前期の貯木場から出土した材の年代値は2,260年前を示した。本地域では、弥生時代前期の遺構・遺物の放射性炭素年代値はほとんど得られていないため比較検討することはできない。今後、同時期の遺物の年代測定データを蓄積し、層年代に関する検討を行っていきたい。

SD15が形成されたと思われる縄文時代晚期頃は、海退が進行した時期、海岸近くの砂堤と丘陵とに挟まれた部分が湿地化し、軟弱な泥炭層が作られたとされている（藤井、1992）。

この時期、木本類では、ハンノキ属、トネリコ属、コナラ亜属などが、湿地やその周辺部に林を作っていたものと考えられる。また、モチノキ属はイヌツヅなど低湿地に生える種類に由来する可能性が高く、これらが低地に生育していたと考えられる。また、スギ類などのカヤツリグサ科、イネ科、ガマ属、コオホネ属、ミクリ属など草本類も湿地に生育していたと考えられる。このような縄文時代晚期のハンノキ湿地林を主とする植生は、大門町の布目沢東遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社、1991）や小泉遺跡（安田、1982）などでも同様な植生景観が復元されており、射水平野全体に湿地林が広がっていたと推定される。

弥生時代以降の新段階河川埋積物になると、スギ属の花粉化石が増加する。このような傾向は、前述した布目沢東遺跡の結果でも認められ、低地でのスギ林の存在が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1991）。富山平野でのスギ林は、「杉沢の沢杉」にみられるように、扇状地末端の湧水地帯に存在する。縄文時代末から古代にかけては、河川作用が活発となり、これまで渦や湿地であった場所が急速に埋積していくとを考えられている（藤井、1992）。スギの増加は、このような河川作用の活発化による砂層の発達などによって、渦や泥炭地が縮小してスギの生育する適地が広がったためと思われる。

ところで、貯木場層準にあたる17層では、花粉化石以外に、出土材の樹種同定や種実同定も実施されている（下村教育委員会、1998）。出土材の樹種同定では、スギ、トネリコ属、ハンノキ節、コナラ節、ムクロジが同定されている。種実同定では、アカマツ、オニグルミ、ヤシャブシ亜属、ハンノキ亜属（ハンノキを含む）、コナラ亜属、コブシ、アカメガシワ、トチノキ、クマヤナギ属、ノブドウ、ミズキ、エゴノキ、イネ、スギ属、ホタルイ属、オニバス、ハス、マツモ、ヒョウタン、ヒシなどが同定されている。これらの種類は、花粉化石で検出された種類とも調和的である。特に花粉・材・種実で共通して産出した種類は、堆積環境を考慮すると、河川近辺に生育していたものに由来する可能性が高く、多産する種類は植生の主体をなしていたことが推定される。これに対して、花粉化石だけで検出され、かつ出現率が低い種類は調査区遠方に分布していた可能性が高い。これらのことに基づいて、当時の植生を復元すると、河川内は浮葉植物のオニバス・ハス、抽水植物のオモダカ属、浮水植物のサンショウモが繁茂する池沼のような状態にあったと考えられる。旧段階の時期が流水域であったことを考慮すると、河川の流路変更に伴って、三日月湖のような状態に地形が変化したことを見曉している可能性がある。また、河川縁辺からその近辺低地にはハンノキ湿地林や、トチノキ属などの河畔林構成要素が分布していたことが推定される。

表2 花粉分析結果

種類	試料番号	A地区 SD15北側			A地区 SD15南側	
		A	B	C	A	B
<b>木本花粉</b>						
モミ属	-	3	5	-	1	2
ツガ属	-	4	1	-	1	3
トウヒ属	-	-	-	-	-	1
マツ属	18	19	18	6	5	-
コウヤマキ属	-	2	1	-	-	-
スギ属	58	56	44	35	16	-
イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科	-	3	2	-	1	-
マオウ属	-	-	-	-	-	-
ヤナギ属	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属	1	-	-	-	-	-
クルミ属	4	5	4	2	3	-
クマシテデ属 - アサダ属	6	6	4	4	1	1
カバノキ属	1	4	-	-	-	-
ハシノキ属	69	100	133	191	112	-
ブナ属	45	22	13	12	26	-
コナラ属	31	33	27	18	15	-
コナラ属	6	8	7	10	6	-
クリ属	-	2	1	-	-	-
ニレノキ属	14	14	12	7	13	-
エノキ属	1	2	1	1	1	-
ヤドリギ属	-	2	-	-	-	1
カラスザン	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	7	3	6	59	16	-
カエデ属	1	1	2	-	-	-
トキノキ属	1	-	1	1	1	-
ツタ属	1	2	-	-	-	2
ノブドウ属	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	2	-	-	-	-	-
ウコギ科	1	-	-	-	-	-
エゴノキ属	-	-	-	2	-	-
トネリコ属	3	1	5	2	1	-
<b>草本花粉</b>						
ミズバショウ属	-	-	-	-	-	1
ガマ属	-	-	-	-	-	2
ミクリ属	5	-	-	-	-	-
サジオモカ属	1	-	-	-	-	-
オモダカ属	2	-	-	-	-	-
ミズオバコ属	-	1	-	-	-	-
イネ科	72	48	28	11	8	-
カヤツリグサ科	17	22	12	4	2	-
ミズアヤメ属	-	-	1	-	-	-
サンエイタデ属	5	12	6	3	10	-
コオホネ科	-	1	-	-	-	1
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	-	-	1	-	-	-
ヒシリ科	-	2	-	-	-	-
セリ科	2	-	-	-	-	-
ゴキヅル属	2	-	1	-	-	-
ヨモギ属	2	5	4	-	-	-
他のキク科	1	-	-	-	-	-
不明花粉	-	1	1	2	-	-
シダ類胞子	2	-	-	-	-	-
サンショウモ	69	183	149	52	45	-
他のシダ類胞子	-	-	-	-	-	-
合計		289	291	285	356	226
木本花粉		109	91	53	18	24
草本花粉		0	1	1	2	0
不明花粉		71	183	150	52	46
シダ類胞子		469	565	488	426	296
総計(不明を除く)		-	-	-	-	-

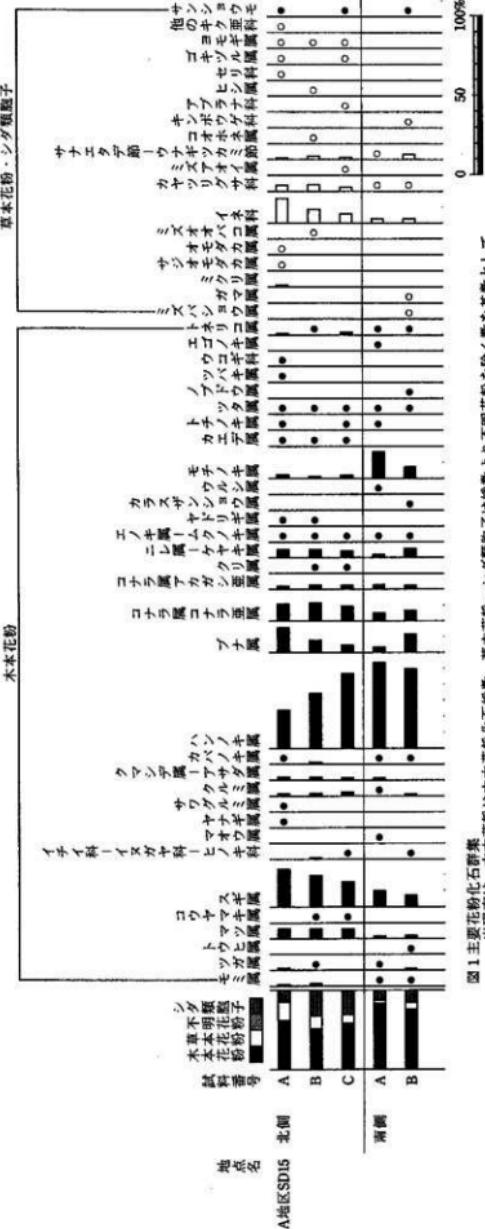
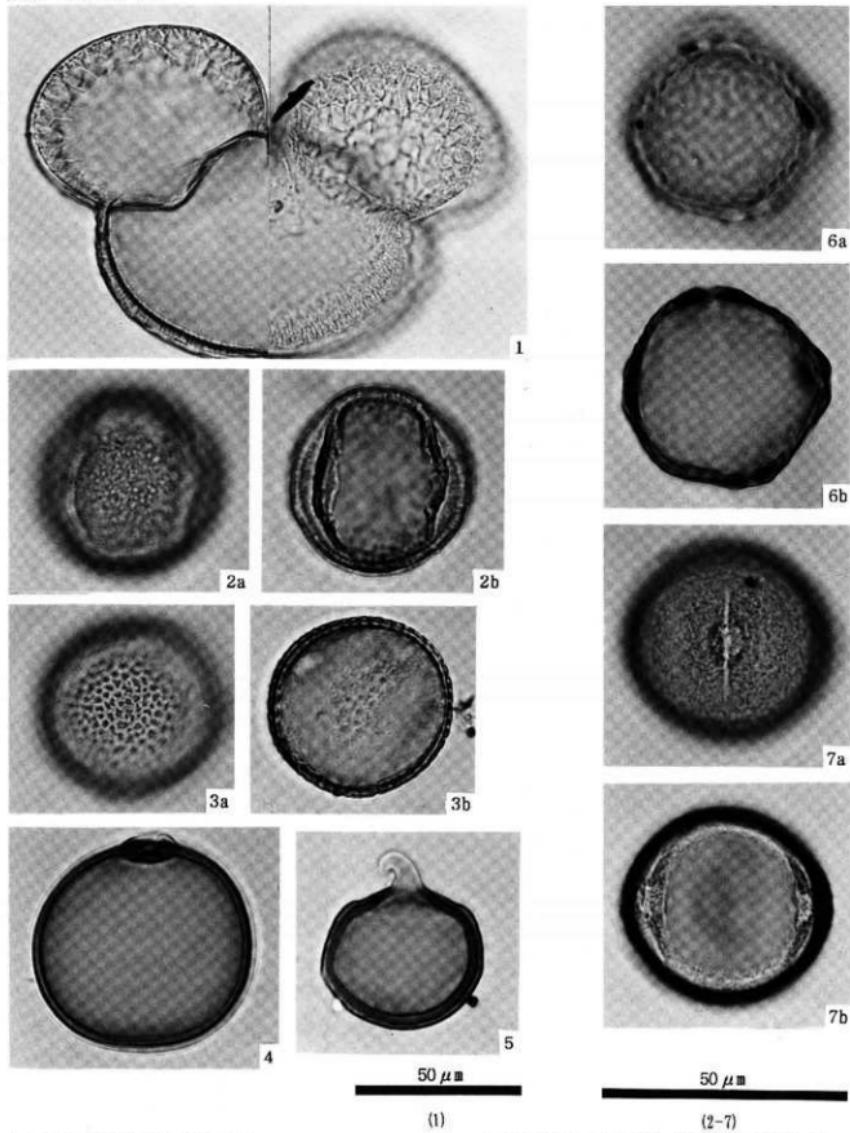


図1 主要花粉化石群  
出採取は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く値を基準として

#### 引用文献

- 藤井昭二（1992）富山平野。「アーバンクボタ」、31、p. 38-47、株式会社クボタ
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1991）布目沢東遺跡自然科学分析報告、「大門町埋蔵文化財調査報告第7集 大門町企  
業団地内遺跡発掘調査報告書(1)」、p. 81-118、富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会。
- 下村教育委員会（1998）下村加茂遺跡。30p.
- 安田喜憲（1982）花粉分析。「大門町埋蔵文化財報告第5集 小泉遺跡」、p. 48-66、大門町教育委員会。

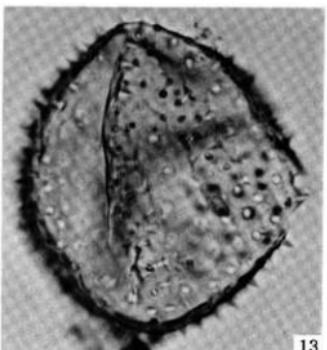
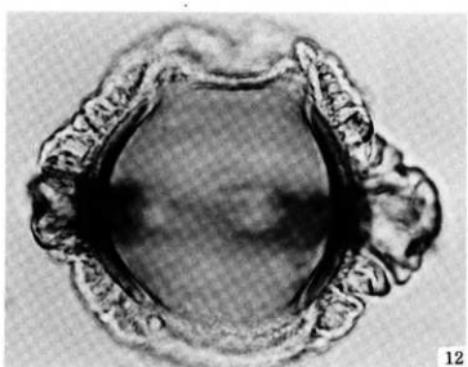
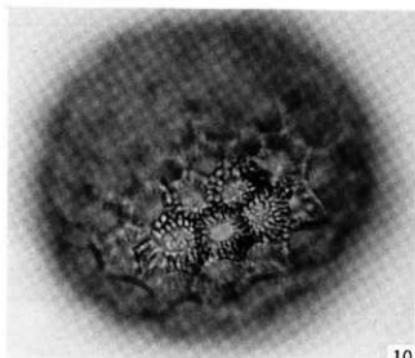
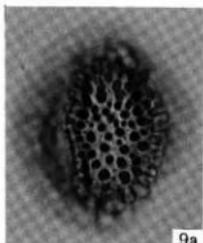
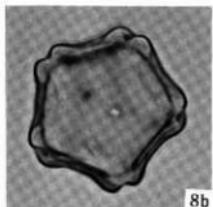
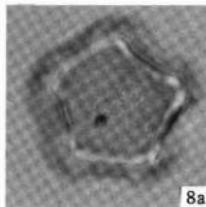
図版 花粉化石 (1)



1. モミ属 (A地区SD15北側; A)
3. ミクリ属 (A地区SD15北側; A)
5. スギ属 (A地区SD15北側; A)
7. ブナ属 (A地区SD15北側; A)

2. コナラ属コナラ亜属 (A地区SD15北側; A)
4. イネ科 (A地区SD15北側; A)
6. ニレ属-ケヤキ属 (A地区SD15北側; A)

図版 花粉化石 (2)



50  $\mu$ m

8. ハンノキ属 (A地区SD15北側; A)  
10. サナエタデ節—ウナギツカミ節 (A地区SD15北側; B)  
12. ヒシ属 (A地区SD15北側; B)

9. モチノキ属 (A地区SD15北側; A)  
11. コオホネ属 (A地区SD15北側; B)  
13. ミズオオバコ属 (A地区SD15北側; B)

## 下村加茂遺跡泥土の花粉分析

富山大学大学院人文科学研究科 山崎 雅恵

下村加茂遺跡は、射水低地に立地する弥生時代から中世まで断続的に利用された遺跡である。弥生時代には貯木場、鎌倉時代には倉垣在在間に關係すると考えられる館跡のほか、江戸時代前期の道路跡と大規模な採土坑が見つかっている。分析資料は、弥生時代に貯木場として利用された河川跡 SD15 の堆積物より採取した。SD15 は旧鍛冶川と考えられ A 地区西部を北西方向に流下する。調査区内で深さ最大約 1.4m を測る。SD15 の貯木場として利用していた層からは条痕紋土器とともに石鐵、打製石斧などの石製品、鍬、鋤、堅杵、桶、たも網枠、練道具、劍形、鳥形などの木製品のほか多くの建築部材、木材が出土している。花粉分析資料は、SD15 の中央地点（A 地点）と、河岸にあたる地点（B 地点）の 2 地点から 15cm の柱状に試料を採取した。（67P 第 4 図参照）

### 1 層位の記述

**A 地点（第 1 図、第 2 図）** 最下層は黒褐色シルト層である。地表下約 1.2m に堆積しており露頭部分で 20cm の厚さがある。炭化物、種子、木材片を最も多く挟在している。この上には灰色～淡灰色のシルト層が約 25cm の厚さに堆積し、漸移して黒褐色砂層に連続する。黒褐色砂層の厚さは約 10cm である。この層全体に木質片、植物細片が混じりこんでいる。この黒褐色砂層上部には灰褐色砂層が約 7cm、淡褐色砂層が約 6cm 堆積しており 3 層あわせて A 地点の層準のなかで砂の多い層を形成している。最上部の層は茶褐色の砂混じりシルト層であり、この層準は中世の遺物が出土している。A 地点の①～③試料は最上部の層準、④試料は淡褐色砂層、⑤⑥試料は灰褐色砂層、⑦試料は黒褐色砂層、漸移する層準からは⑧試料、灰色～淡灰色シルト層では⑨⑩試料、最下層からは⑪⑫⑬の 3 試料を柱状試料の内側から採取した。

**SD15B 地点（第 3 図、第 4 図）** 最下層は茶褐色シルト層である。地表下約 1.2m に堆積しており露頭部分で 7cm の厚さがある。茶褐色シルト層の上部には黒褐色シルト層が堆積している。この層は A 地点の木材を多く挟む層と対応するが木材が確認できる層は 6cm 程であり、それより上部は木質の多い層が約 10cm の厚さで堆積している。この上部には約 7cm の厚さに茶褐色のシルト質粘土層が堆積している。この層も植物細片が混じる。茶褐色シルト質粘土層の上に堆積する層は茶褐色でシルト質砂+粘土+シルトの質を示しており次の灰褐色砂質粘土層への漸移層である。層厚は約 10cm であり植物の細片を挟む。灰褐色粘土層は層厚が約 5cm であり同じく植物の細片を挟む。最上部層は茶褐色シルト層であり、A 地区の最上部の堆積物と対応しており、中世の遺物を包含し下層と同じく植物の細片を挟む。B 地点の①②試料は最上部の層準、③④試料は灰褐色砂質粘土層、⑤⑥試料は茶褐色シルト質砂+粘土+シルトの層、⑦試料は茶褐色シルト質粘土層、⑧⑨試料は灰褐色シルト層の上部、⑩試料は同層の下部、⑪試料は茶褐色シルト層、柱状試料の各部分の内側より採取した。SD15 の堆積物は下層のシルト質、粘土質の堆積していた段階と主に中世以降の遺物を含む上層の砂質の堆積物が堆積していた段階の 2 つに区分が可能である。層相からは下層が比較的安定した水域環境下での堆積物と考えられ、上層の砂質の多い堆積層は遺跡全体に広がる堆積層でありこの層が堆積した時期には河川はほぼ埋没していたと考えられる。

### 2 分析試料

試料は灼熱消費量で堆積物中の有機物量を測定したのちに行った。花粉分析は約 5% KOH 溶液処理、自然傾斜法、HF 処理、アセトトリス処理の順に物理、化学的処理を行い、試料はグリセリンに浸した後、同定、計数を行った。

分析から得られた結果については第1図～第4図に提示する。表は多量に検出され現地性の高い植物と考えられるハンノキ属を外した木本花粉の総数約200を基数として百分率を算出し示した。第2図、第4図は草本花粉の増減を示すため各地点における草本花粉の総数を基数として百分率を算出、表示した。

### 3 結果

花粉化石は各層準から多く検出される。分析の結果はA地点、B地点ともにほぼ同じ組成を示している。A地点の出現傾向は試料⑨までは木本花粉ではスギ、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属が卓越する。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が多い。

⑩試料からは砂の多い層になるが、この層から⑥試料まではスギが他の木本花粉を圧倒して出現する。減少傾向を示していたハンノキ属は増加に転じる。草本花粉ではイネ科が徐々に増加し、カヤツリグサ科の出現率が非常に高率となる。この層ではコウホネ属もみられた。またこの層以降、タデ科、ヨモギ属が恒常的に観察されるようになる。①～④試料の層準はハンノキ属が急増する。マツ属はこの試料以降顕著に出現する。またこの層準からはモチノキ属の急激な増加も看取できる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が卓越し、カヤツリグサ科が減少する。

B地点の灼熱消費量はA地点の木材を多量に混在する層の下層の試料、及び木材を多量に混在する層と対応する層準で50%以上の高い値を示す。B地点の花粉化石の出現傾向は試料⑦で変化が見られる。試料⑦までは木本花粉ではハンノキ属が卓越し、ヤナギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属に特徴づけられる。またモチノキ属、カエデ属、トチノキが普通に産するほかスギが増加傾向を示す。草本花粉はイネ科が多いほかガマ属が恒常的に出現する。カヤツリグサ科は増加傾向を示す。⑤⑥試料ではハンノキ属、イネ科、カヤツリグサ科が減少する。試料①～④は木本花粉ではスギが最も多く、マツ科、クルミ科、アカガシ亜属が多い。ハンノキ属、モチノキ属は急激な増加を示す。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が減少傾向を示す。イネ科の増減はA地点とほぼ同じような傾向を示している。この他試料⑧までガマ科、ミクリ科が多く④層以上でヨモギ属が増加する。

### 4 考察

SD15の堆積物は層相、花粉分析の結果から以下のように考えられる。花粉分析の結果は湿地的な要素が多く、こうした植物の生育できる安定した堆積環境下で形成されたものと考える。河川跡は徐々に埋没し上部の砂層は埋没後に形成されたものだろう。

埋没時期は、弥生時代の貯木場の木材がパリノ・サーヴェイの分析では約2260年前を示しており、河川跡の形成時期は繩文晩期に遡り、以降埋積していくと考えられている。弥生時代以降の堆積物は、包含されている遺物から中世に形成された堆積物と推定される。

下層は樹木の分類群にスギ、ハンノキ、コナラ亜属、アカガシ亜属などに特徴づけられ、周辺にハンノキ湿地林を主体としコナラ亜属、アカガシ亜属などを構成要素とする落葉広葉樹も遺跡周辺に生育していたと考えられる。貯木場として利用された層準の大形植物遺体の分析、材の分析でもこれらの種子・果実、木材が多く確認されている。

射水平野での花粉分析の事例はまだ少ないが、同様の植生が大門町の布目沢東遺跡（パリノ・サーヴェイ1991）、小泉遺跡（安田1982）で復元されている。草本花粉の中ではイネ科が比較的多く恒常的に現れる。遺跡出土のイネ科の花粉については中村純による一連の研究があるが、基礎研究として行われたイネ科花粉の散布と水田への残留量の実験によれば、イネ花粉の散布は空中に飛散するものは極めて少なく、稻薙、稻穂への残留花粉量による二次飛散が多いこと、水田面に残されるイネ科花粉の量は、現在の熟田の刈り入れ後の表層土のイネ科花粉比率は約30%以上を示すことが確認されている（中村1977,1984）。下村加茂遺跡ではイネ科の増加する2時期が認められ、増加するに伴つ

てタデ科、ヨモギ属といった花粉の増加も見られることなどから、この時期に遺跡周辺でイネの栽培が行われていた可能性が高い。

このほか水草植物が多いことなどは、ある程度植物が繁茂できるやや閉鎖的な水域であったと考える。中世の遺物包含層はグラフから、河川跡が貯木場としての機能を果たし終わり埋没した後に、表層を一度削平するなどの後、堆積したものと考える。この時期には堆積域にはハンノキ林を主体とし、周辺の微高地にモチノキ属が生育するようやや湿地的な環境にあったと考えられる。

射水平野での農耕を示す直接的な試料は1997年福岡町の「老子篠川遺跡」で古墳時代初頭の水田跡が検出されているのみだが、今後低地でのイネの栽培の可能性も考慮しつつこのような試料を蓄積していくことで弥生時代の射水平野の景観をより具体的に考えていくことが必要と考えている。

#### 参考文献

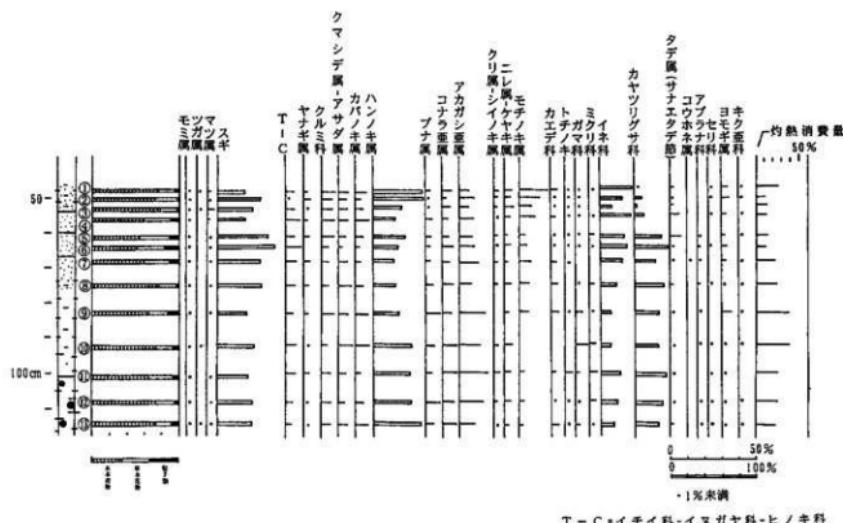
中村純1977「稻作とイネ花粉」『考古学と自然科学』10 日本国文化財科学会

中村純1984「古代農耕とくに稻作の花粉分析学的研究」『古文化財の自然科学的研究』同朋社

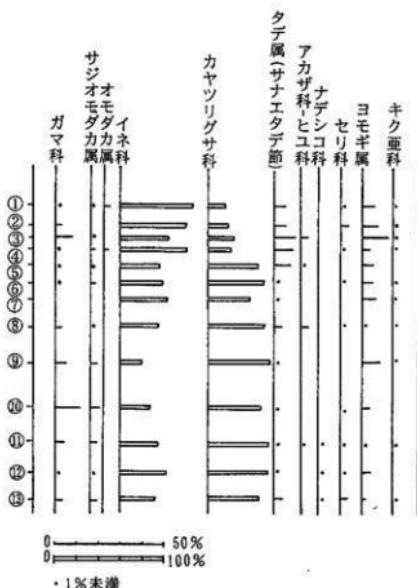
パリノ・サーヴェイ1991「布日沢東遺跡自然科学分析報告」「大門町企業団地内遺跡発掘調査報告」富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会

安田喜憲1982「花粉分析」「小泉遺跡」大門町教育委員会

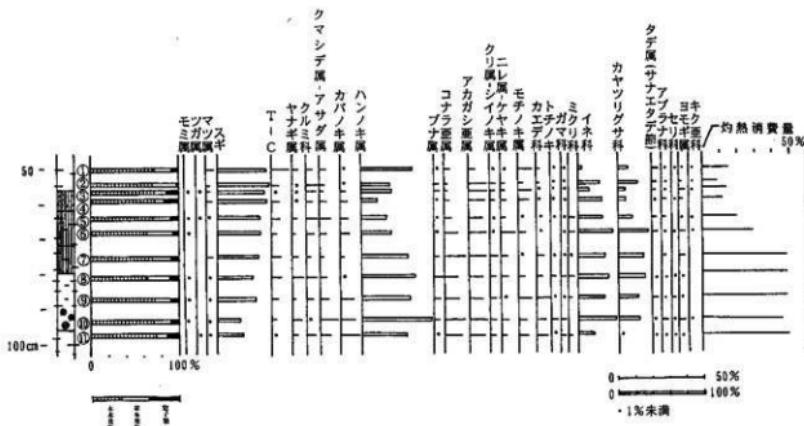
\* 今回不手際から花粉資料の写真を撮ることができなかった。サンプルは分析者が保存している。



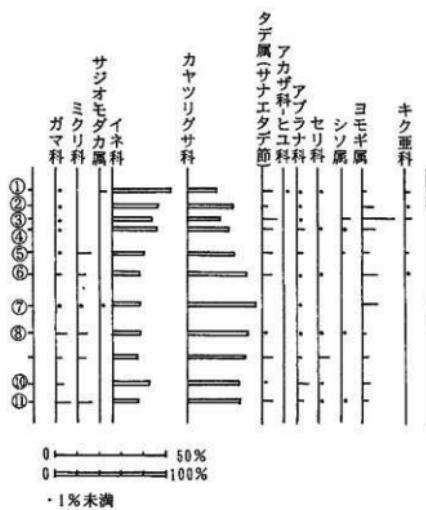
第1図 下村加茂遺跡A地点 花粉化石の層位的変化



第2図 下村加茂遺跡A地点 草本花粉化石の層位的変化



第3図 下村加茂遺跡B地点 花粉化石の層位的変化



第4図 下村加茂遺跡B地点 草本花粉化石の層位的変化

## 下村加茂遺跡 SD15出土の種実遺体

立山博物館 吉井 亮一

### 1 はじめに

下村加茂遺跡は、富山県中央部の射水平野に所在する。射水平野は、神通川、鍛治川、下条川、庄川、小矢部川によって形成された低湿な複合三角州で、下村村域の過半は標高1mに満たない。遺跡付近は鍛治川の影響を直接に被る一帯で、戦前には「アワラ田」、「ウキ田」などと呼称される湿地が卓越して著しく低湿な領域である。この中に、自然堤防・浜堤列などによって構成される微高地が点在している。

当該遺跡は、弥生時代前期初頭と中世・近世の遺構・遺物を検出する複合遺跡で、遺跡域は下村の中心集落加茂に所在する加茂神社の北西に隣接して広がっている。平成9年度の調査によって、弥生時代前期の貯木場跡と中世前期の井戸から種実遺体が検出された。この報文では、このうち、弥生時代前期初頭の河道（旧鍛治川）と推定されているSD15から出土した試料の検討結果を概報する。中世の試料を含む全体の検討結果については、別の機会を得て報告することにしたい。

### 2 供試料および検討結果

供試料（被検体）は、遺跡発掘の進捗にともない、現場にて採取された。また、考古遺物検出のために堆積物試料を水洗篩別した際に検出された種実遺体も併せて検討の対象に加えたが、今回は種実遺体の検出自体を目的に水洗篩別を行っていないため、特に数mmを下回るような被検体については遺漏の可能性がある点を断っておく。

種実遺体の遺存状態は、概ね良好であったが、コナラ属など、一部の分類群の概要を表1に掲げる。現段階で試料全体の検討を完了しておらず、当該資料の3分の2程度を概観したに留まっているが、同定に課題を残すものを含めて、木本15、藤本1、草木9の、19科25分類群を検出した。

木本15分類群のうち、常緑針葉樹のアカマツと、属レベルまでの同定に留まったコナラ属を除く13分類群はすべて落葉広葉樹で、常緑広葉樹と断定できる被検体は、これまで1点も検出されていない。また、木本分類群の多くは高木または小高木となって、林冠第一層の構成に寄与しうる樹種と判断され、これら全ての分類群を現在の富山県平野部または丘陵地一例えば、10数年前まで射水平野に存在していたハンノキ林や呉羽丘陵の二次林ーに求めることができる。

一方、草本9分類群のうち、4分類群は水生植物で、栽培植物にハス、ヒョウタン、イネの3分類群を検出した。ハスは種子1点を、ヒョウタンは果皮片1点を、イネは穎の断片を付着する炭化した果実1点と小穂・穂軸・内穎それぞれ数点を検出している。畠地雜草とみなしうる種類はノブドウのみである。

数多く検出されたものに、ハンノキの果序、コナラ属・コナラ亜属・コナラ節の堅果・殼斗・果皮片、トチノキの種子・幼果、ヒシの果実などがある。

### 3 堆積環境と植生環境

遺物包含層は粘土ないし細粒成分を多く含むシルトあるいは極細砂から成る。また、先に述べたように、種実遺体の遺存状態は、一部にかなりの損耗を認める被検体が含まれるものとの、概ね良好と評価して問題はない。以上を併せ考えると、旧河道は、この時期、安定した堆積環境を維持したと判断され、植物遺体は、現地性とは断定し得ないものの、その多くは遺跡近傍からもたらされたと推測して問題はないと考えられる。

このことは、水生植物のオニバス、ハス、マツモ、ヒシが検出されていることからも傍証され、河道域は、解放止水域ないし緩流水域であったと判断される。河道縁辺には、ホタルイ属などを主体とする挺水植物群落が分布し、かかる領域を含む水湿の場所にはハンノキ林が、また、コナラ亜属を主体とする落葉広葉樹が離水した微高地上に成林していた可能性が指摘される。

各々の種実遺体について、人為的な利用の証拠は確認されなかった。また、植生に対する人為的な干渉が相当規模であったという確証もなく、検出されたイネの遺体も僅少で、今回の分析結果から相当規模の水田が付近に存在したとは言い得ない。詳細は今後の検討に待たねばならない。

#### 4まとめ

下村加茂遺跡出土の種実遺体は、富山県の平野部、特に低温な領域の中心部における数少ない古植生復元のための試料を提示している。当該領域における弥生時代の試料としては最初の事例と判断される。その分析結果から、弥生時代前期初頭の当該領域には、現在、富山県の平野部に分布する二次林要素と共に通る落葉広葉樹を主体とする植生が分布していたと判断される。また河道を主体とする解放水域にはヒシなどの水生植物が繁茂し、稻作はあったにしても大規模なものではなかったと判断される。



表1 下村加茂遺跡で検出された種実遺体の分類群組成

分類群	出土部位
<b>Pinaceae マツ科</b>	
<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc. アカマツ	種果
<b>Juglandaceae クルミ科</b>	
<i>Juglans mandshurica</i> Maxim. オニグルミ	核
<b>Betulaceae カバノキ科</b>	
<i>Alnus</i> (Subgen. <i>Alnaster</i> ) sp. ヤシャブシ亞属	果鱗
<i>Alnus</i> (Subgen. <i>Alnus</i> ) sp. ハンノキ亞属	果鱗・果実
<i>Alnus japonica</i> (Thunb.) Stend. ハンノキ	果序・果鱗・果実
<b>Fagaceae ブナ科</b>	
<i>Quercus</i> sp. コナラ属	果皮
<i>Quercus</i> (Subgen. <i>Lepidobalanus</i> ) sp. コナラ亞属	堅果・殼斗
<i>Quercus</i> (Subgen. <i>L. Sect. Prinus</i> ) sp. コナラ節	堅果・殼斗
<b>Magnoliaceae モクレン科</b>	
<i>Magnolia plaecocissima</i> Koidz. コブシ	種子
<b>Nymphaeaceae スイレン科</b>	
<i>Euryale ferox</i> Salisb. オニバス	種子
<b>Nelumbonaceae ハス科</b>	
<i>Nelumbo nucifera</i> Gaertn. ハス	種子
<b>Ceratophyllaceae マツモ科</b>	
<i>Ceratophyllum demersum</i> L. マツモ	果実
<b>Rosaceae バラ科</b>	
<i>Rosaceae-indet. Malus / Pyrus</i> sp.? バラ科(不明) リンゴ属/ナシ属?	種子
<b>Euphorbiaceae トウダイグサ科</b>	
<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Mueller-Arg. アカメガシワ	種子
<b>Hippocastanaceae トチノキ科</b>	
<i>Aesculus turbinata</i> Blume トチノキ	種子・幼果
<b>Rhamnaceae クロウメモドキ科</b>	
<i>Berchemia</i> sp. クマヤナギ属	核
<b>Vitaceae ブドウ科</b>	
<i>Vitis</i> sp. ブドウ属	種子
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> (Maxim.) Trautv. ノブドウ	種子
<b>Cucurbitaceae ウリ科</b>	
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl. ヒヨウタン	果皮
<b>Trapaceae ヒシ科</b>	
<i>Trapa japonica</i> Flerov ヒシ	果実
<b>Cornaceae ミズキ科</b>	
<i>Cornus controversa</i> Hemsl. ミズキ	核
<b>Styracaceae エゴノキ科</b>	
<i>Styrax japonica</i> Seib. et Zucc. エゴノキ	果実・種子
<b>Gramineae イネ科</b>	
<i>Oryza sativa</i> L. イネ	小穂・穂/内穎・果実
<b>Cyperaceae カヤツリグサ科</b>	
<i>Carex</i> sp. スゲ属	果実
<i>Scirpus</i> sp. ホタルイ属	果実

# 下村加茂遺跡の珪藻分析

邑本順亮

## はじめに

下村で発掘調査中の下村加茂遺跡のA地区において採取した土層試料について、堆積環境を知るための珪藻分析を行った。

植物プランクトンである珪藻はあらゆる水域に生育し、その植生は水域環境を反映している。したがって、堆積物中の珪藻遺骸群集は堆積時の水域環境を知る重要な手掛かりとなる。ただし、堆積物の場合には、その場所に繁殖した珪藻遺骸のほかに、そこへ流入する後背地等からの珪藻遺骸が混ざって堆積するので、現在のいろいろな水域の底質に含まれる珪藻遺骸群集の組成を参考に堆積物の珪藻分析結果を考察する必要がある。

## 1. 試料について

試料は、下村加茂遺跡のA地区で1997年8月1日に珪藻分析を目的に、SD15北側セクションのA地点で11試料、B地点で10試料を採集した。採取位置および地層断面は図1に示した。

今回はそのうちA地点で採取した試料の検鏡結果を中心にB地点の概要も加味して報告する。

試料番号は上位より順にA01'、A01、A02、A03、…、A10、及びB01'、B01、B02、B03、…、B09とした(図1)。図1には各試料の採取位置を示し、約4.6m離れたAB両地点を対比し、調査員による分層と時代区分を付記した。

## 2. 試料処理の方法

珪藻分析に際して、試料は次のように処理を行った。

試料1～2 gを200ccビーカーに入れ、水2～3 ccを加えてガラス棒でかるくほぐした後、約15%の過酸化水素水を3～5 cc加え、10～20分間ヒーターで加熱し、炭質物の酸化と漂白を行う。

その後水を加えて懸濁させ、1昼夜静置した後、上澄み液を傾斜法で静かに捨てる。再び水を加えて懸濁させ、12時間程度静置した後、上澄み液を静かに捨てる。

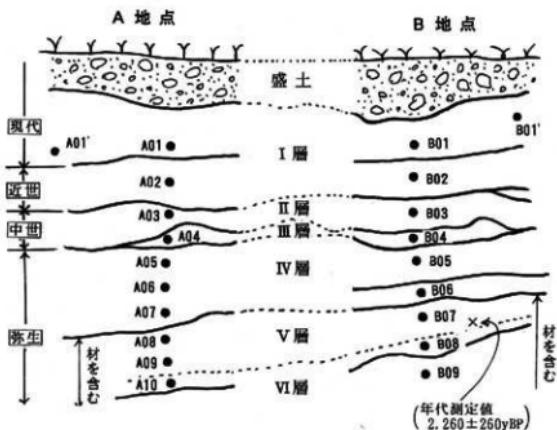


図1 試料採取状況と分層ならびにA B両地点の対比

この操作を5～7回繰り返し、可溶性塩類と粘土の微粒子を取り除き、水洗を完了する。

水洗を終えた試料一部に水を加えて適度に薄める。薄めた試料懸濁液をカバーガラスに一样に塗布し、徐熱して乾燥した後、プレオラックス(和光純薬製：商品名マウントメディア)でスライドガラスに封入し、永久プレパラートを完成する。

試料毎に4～5枚のプレパラートを作成した。

プレパラートは光学顕微鏡により600倍で検鏡し、必要に応じて1500倍で細部を観察した。

顕微鏡写真撮影にはオリンパス顕微鏡写真装置PM-6を使用した。フィルムはミニコピーフィルムを使用し、フィルム現像は指定現像液コピーナールを使用した。写真は1500倍になるように引き伸し種の同定を行った。

### 3. 分析の結果と考察

A地点の試料から検出した珪藻は表3(リスト)に示した。なお、種名についてはさらに検討中のものがある。この結果をもとに、遺骸群集を構成する種の水域環境への適応性から、各層の堆積時の水域環境の復元を試みた。B地点の試料については、含まれる珪藻群集の特徴を把握してA地点のそれに対比した。

A地点の結果を、その試料に含まれる珪藻の水域環境(水流、pH、塩分)別の割合を調べ、それぞれの種数(正しくはTaxa数)ならびに殻数について全体に占める百分比で表した(表1、表2)。殻数の結果を図にすることで、水域環境の変化を読み取ることができた(図2)。

その結果、この場所の地層を盛土を除いて6層に区分した。そして、上位からI層・II層・III層・IV層・V層・VI層とする(図1)。以下各層について説明する。

#### [I 層]

盛土を除く最上部層で、A01'、A01、A02の試料を含む。考古学的分層では上部は現代の遺物を含み、下部からは近世の遺物が検出されている。

珪藻はかなり多く含まれるもの、破片が多いのが特徴である。以下の層に比べ酸性水域を好む種は減りアルカリ水域を好む種が多い傾向で、流水性についても止水域を好む種が少なくなっている。塩分濃度に対しては淡水種がほとんどではあるが、若干塩分があっても成育できる貧塩不定性の種が多く、殻数で全体の76.5%を占めている。

この層では*Fragilaria construens*、*F. pinnata*などの微小種や*Eunotia*属が比較的多い。また*Cymbella*属が目立つことも特徴である。B地点の試料 A01'、B01、B02に対応する。

#### [II 層]

試料 A03を含む層で、珪藻は極めて少なく、微小片や、殻の厚い*Pinnularia*属と思われるものの中軸部分の溶食片がみられることがある。堆積物の粒度とも関係すると考えられるが、この層は珪藻の含有量が極めて少ないことがその特徴である。まれに同定できた種に*Eunotia lunaris*、*Rhopalodia gibberula*などがある。B地点の試料 B03も同様である。本層は中世の堆積物と考えられている。

#### [III 層]

試料 A04を含む層で、珪藻はやや多い。層はあまり厚くなく、しかも連続性に欠け、断続的にB地点へ続く。珪藻は*Aulacoseira granulata*が著しく多く、含まれる珪藻殻数のおよそ40%を占めていることが特徴であり、ほかの層ではこれほどまで多くの種が検出されることはない。B地点の試料B04も類似している。

水域環境については、止水域を好む種(真正水性・好止水性)が56.8%を占めることから流水の影響がほとんど無かったと考えられる。層が薄く、分布が不連続であることは堆積後の水流の影響とも考えられる。

#### [IV 層]

試料 A05、A06、A07を含む部分を一括した。珪藻は種数、殻数とも多い。含まれる珪藻の水域環境に対する適応

性からは下位の A07から A06、A05へと真正水性・好止水性の種が増加していくことが特徴で、流水の影響が段々弱くなり、上位のIII層へ移っていく過程がうかがえる。B地点の試料 B05・B06がこれに対応する。

考古学的には弥生期の遺物が出土している。

#### [V 層]

試料 A08、A09を含む部分を V層とした。この下位 A10も含めて一連の堆積物は腐植質で植物の種子や材を多量に含み、地層の色や堆積物の肉眼的な特徴からは区別できない。珪藻分析の結果上位の 2 試料と下位の試料 A10では特徴に違いがあるので、V層・VI層と区分した。

珪藻はかなり多くまた微小種が多く含まれる。*Navicula confervacea*, *Gomphonema parvulum* がめだつ。B地点の試料 B07も同様の特徴をもっている。

#### [VI 層]

採取した最下位の試料 A10には珪藻が著しく多く含まれ、しかも *Tabellaria fenestrata* が極めて多いのが特徴であり、殻数で242中59を數え41%を占めている。また、検出した珪藻について成育環境を見ると真正水性の種が殻数で全体の34.3%を占めることや、好酸性種が45.9%を占めること、塩分を少しでも含むと成育できない嫌塩性種が45.5%を占めるなど、上位の他の試料には見られない特徴がある。このことは表1、図2に明瞭である。このような点からこの試料を上位の A08、A09と区別した。B地点の試料では B08が類似しており、B09も似た傾向をもつ。

V層・VI層とともに弥生期の堆積物と考えられている。

B地点のV層下部の B07、B08試料採取位置の中間で採取された木片でおよそ2,260(誤差+240、-230)yrBP という<sup>14</sup>C年代値が得られている(PAL-245; パリノサーヴェイ、MS)。のことからV層とVI層との境界付近はおよそBC70~540年ということになる。

以上のように、珪藻分析の結果をふまえると、下村加茂遺跡周辺の水域環境は、当初弥生期初期あるいは繩文晩期末にはおそらく透明な水を湛えた池沼が点在していたのであろう。弥生期の気温が冷涼化した時期に富山平野にこのような池沼が点在したことは大門町などの他の地域の調査でも分かっている。

その後一旦は流水の影響下でも成育できる種が増加するが、IV層上部(弥生期末)からV層堆積時にかけて再び流水の影響の少ない時期を迎える。水の停滞に伴い水質は弱酸性から弱アルカリ性に移行する傾向が見られ、おそらく水域の富栄養化が進行したものと思われる。さらにII層(中世)からI層の堆積時期(近世・現代)にかけては真正水性種・好止水性種とともに減少し塩分に対する適応性も嫌塩性種が減少し貧塩不定性種すなわち若干の塩分があつても成育可能な種が増加する傾向がある。この時期に平野部に広がった水域では水はゆっくり移動していて、渦からの汽水の影響も場合によっては受けたのではないかと考えられる。

#### おもな参考文献

- Cleve-Euler(1951-1955) : Die Diatomeen von Schweden und Finnland, Stockholm.  
Foged, N.(1954) : On the Diatom flora of some Funen lakes, Folia Limnologica Scandinavica, no. 6, Kobenhavn  
Hustedt, F.(1930) : Bacillariophyta. In: Pascher, Süßwasserflora von Mitteleuropa, Heft 10, Jena  
Krammer, K.(1992) : Pinnularia — eine Monographie der europäischen Taxa—, Bibliotheca Diatomologica, Band 26, Berlin.  
Krammer, K.・H. Lange-Bertalot(1986-1991) : Bacillariophyceae I. Teil ~ 4. Teil. In: Ettl, H. et al, Süßwasserflora von Mitteleuropa, Stuttgart.  
Rex L. Lowe(1974) : Environmental Requirement and Pollution Tolerance of Freshwater Diatoms, prepared for National Environmental Research Center, Bowling Green State University, 333p.  
小島貞男・須藤謙一・千原光雄(1995) : 琉球微生物図鑑、講談社、758p.  
野尻湖珪藻群グループ(1984) : 5、第8次野尻湖発掘における野尻湖層の珪藻遺骸群集、野尻湖の発掘3、地図研専報、第27号、地学団体研究会、63-82.  
富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会(1991) : 大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1) ——布目沢東遺跡・布目沢北遺跡——、大門町埋蔵文化財調査報告書第7集、富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会

表1 珪藻殻の成育環境別構成比 (%)

環境		試料番号	0.1'	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0
水流	limbio	真止水性	5.4	3.4	5.2	—	16.8	20.7	11.1	11.0	8.0	10.9	34.3
	limphil	好止水性	2.9	4.4	2.9	—	40.0	22.2	9.7	4.2	5.6	10.8	47.5
	indif	不定性	82.6	80.6	75.2	—	27.2	48.5	64.7	67.9	70.9	70.9	47.5
	r-phil	好流水性	2.0	4.4	11.9	—	2.8	1.5	8.3	10.5	12.4	8.6	12.0
	r-bio	真流水性	—	—	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—
pH	acbio	真酸性	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	acphil	好酸性	10.8	10.7	8.6	—	20.8	36.3	30.2	22.4	21.1	25.0	45.9
	indif	不定性	29.9	26.2	30.0	—	16.4	12.4	17.9	30.4	30.2	22.7	30.2
	alkphil	好アルカリ性	50.0	53.9	54.3	—	48.8	43.0	40.9	38.0	36.7	33.9	25.6
	alkbio	真アルカリ性	2.5	1.9	1.9	—	0.8	1.2	4.8	3.0	4.8	3.6	2.9
塩分	halphob	貧塩性	11.8	10.7	9.5	—	20.8	37.1	31.7	24.9	21.9	25.4	45.5
	indif	塩不活性	76.5	76.2	80.0	—	65.2	52.4	60.3	59.4	53.2	51.0	45.5
	halphil	好塩性	4.9	5.3	5.2	—	0.8	4.0	8.7	6.8	10.8	12.9	0.4
	Meshal	中塩性	—	—	—	—	1.6	—	0.4	—	—	—	—
	Euhal	真塩性	0.5	1.0	1.4	—	0.8	0.8	0.8	3.0	2.8	1.6	0.4
不明	unknown	不明	6.4	6.8	3.8	—	10.8	6.8	6.0	5.1	5.2	6.9	2.1
	母数		204	206	210		250	251	252	237	251	248	242

表2 珪藻種 (Taxa) の成育環境別構成比 (%)

環境		試料番号	0.1'	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0
水流	limbio	真止水性	12.9	9.5	10.9	—	10.9	9.8	9.5	10.3	8.1	11.3	16.7
	limphil	好止水性	8.1	9.5	5.5	—	6.5	15.7	7.9	6.9	6.5	6.5	8.3
	indif	不定性	61.3	60.3	65.5	—	54.3	55.6	58.6	61.3	56.5	47.9	—
	r-phil	好流水性	3.2	6.3	5.5	—	4.3	5.9	9.5	10.3	11.3	11.3	16.7
	r-bio	真流水性	—	—	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—
pH	acbio	真酸性	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	acphil	好酸性	12.9	14.3	12.7	—	17.4	21.6	15.9	19.0	17.7	21.0	29.2
	indif	不定性	30.6	27.1	30.9	—	26.5	29.3	29.3	24.2	24.2	22.9	—
	alkphil	好アルカリ性	58.7	40.0	40.0	—	36.4	27.5	38.1	31.0	32.9	33.9	25.0
	alkbio	真アルカリ性	14.5	14.3	12.7	—	2.2	3.9	3.2	7.0	8.1	6.5	10.4
塩分	halphob	貧塩性	12.9	14.3	16.4	—	17.4	23.5	20.6	22.4	19.4	21.0	27.1
	indif	塩不活性	67.7	63.5	63.6	—	56.7	47.1	54.0	50.0	54.8	54.8	60.4
	halphil	好塩性	4.8	6.3	7.3	—	2.2	7.8	6.3	12.1	11.3	8.1	2.1
	Meshal	中塩性	—	—	—	—	2.2	—	1.6	—	—	—	—
	Euhal	真塩性	1.6	3.1	3.6	—	4.3	2.0	3.2	3.4	1.6	3.2	2.1
不明	unknown	不明	12.9	12.7	9.1	—	17.4	19.5	14.3	12.1	12.9	12.9	8.3
	母数		62	63	55		46	51	63	58	62	62	46

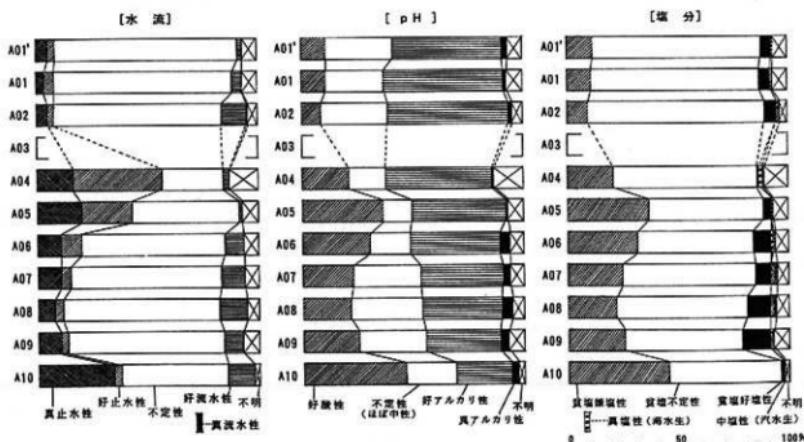


図2 珪藻殻の成育環境別構成比 (殻数 %)



番	名 (TAXA)	水塊	pH	場所	検出試料の番号
1.	Pleurosticta brasiliensis (GRUN.) CL. var. amphicarpa (A. KUETZ.) HUST.	indif	acidif	haibio	1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10
2.	Pleurosticta brevirostrata CL.	indif	acidif	haibio	3, 4
3.	Pleurosticta ciliata (L.) CL.	indif	acidif	haibio	1
4.	Pleurosticta glauca (L.) CL.	indif	acidif	haibio	1
5.	Pleurosticta heteropora (KUETZ.) CL.	indif	acidif	haibio	1
6.	Pleurosticta intermedia (S. W.) CL.	indif	acidif	haibio	1
7.	Pleurosticta melaleuca (GRUN.) CL.	indif	acidif	haibio	1
8.	Pleurosticta melaleuca (GRUN.) CL.	indif	acidif	haibio	1
9.	Pleurosticta mytilina (GRUN.) CL.	indif	acidif	haibio	1
10.	Pleurosticta mytilina (GRUN.) CL.	indif	acidif	haibio	1
11.	Pleurosticta mytilina (GRUN.) CL.	indif	acidif	haibio	1
12.	Pleurosticta mytilina (GRUN.) CL.	indif	acidif	haibio	1
13.	Pleurosticta mytilina (GRUN.) CL.	indif	acidif	haibio	1
14.	Pleurosticta mytilina (GRUN.) CL.	indif	acidif	haibio	1
15.	Rhabdulia gibberula (GRUN.) O. MUELL. var. musculus (KUETZ.) A. CL.	indif	acidif	haibio	1
16.	Rhabdulia gibberula (GRUN.) O. MUELL. var. musculus (KUETZ.) A. CL.	indif	acidif	haibio	1
17.	R. gibba (GRUN.) O. MUELL.	[A08]	indif	haibio	1
18.	Gomphoceras angustatum (KUETZ.) RABIL. var. products GRUN.	[A07]	indif	haibio	1
19.	G. constrictum (GRUN.) var. brevispinis (KUETZ.) CL.	[A09]	indif	haibio	1
20.	G. acuminatum (GRUN.) var. coronata (GRUN.) W. SM.	[A01]	indif	haibio	1
21.	Hastusschia amphioxys (GRUN.) GRUN.	[A02]	indif	haibio	1
22.	Caloëcis silicula (GRUN.) CL.	[A07]	indif	haibio	1
23.	Eunotia praerupta (GRUN.)	[A05]	indif	haibio	1
24.	E. formica (GRUN.)	[A08]	indif	haibio	1
25.	E. veneris (KUETZ.) O. MUELL.	[A10]	indif	haibio	1
26.	E. diodon (GRUN.)	[A05]	indif	haibio	1
27.	E. formica (GRUN.)	[A05]	indif	haibio	1
28.	E. tropica (HUST.)	[B07]	indif	haibio	1
29.	E. serra (GRUN.)	[A05]	indif	haibio	1
					24, 25, 26, 27, 28, 29
					26, 25, 25, 25, 25
					26, 25, 25, 25, 25
					26, 25, 25, 25, 25
					26, 25, 25, 25, 25

### 【淡水・海水環境の説明】

海水	鹹水性	鹹水地帯
海水	中性	中性地帯
海水	酸性	酸性地帯
海水	不活性	不活性地帯
淡水	鹹水性	鹹水地帯
淡水	中性	中性地帯
淡水	酸性	酸性地帯
淡水	不活性	不活性地帯

塗 分 水

p H

### 珪藻 PLATE I

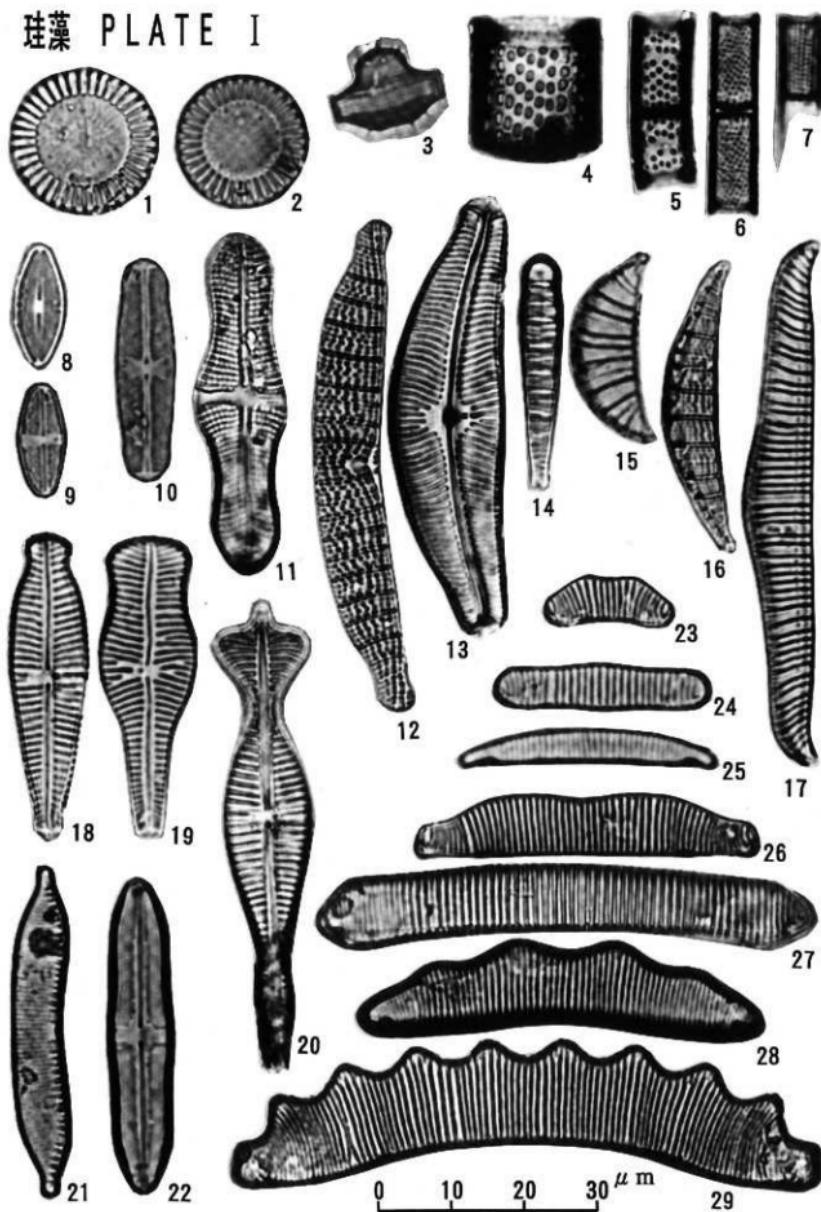
- Oscylorella senegalina (KUETZ.) [A05]
- O. senegalina (KUETZ.) [A09]
- Chacoceros sp. (resting spore) [B06]
- Aulacoseira granulata (GRUN.) SIMONSEN [A04]
- A. granulata (GRUN.) SIMONSEN [B07]
- A. italica (O. MUELL.) SIMONSEN [A08]
- A. italica (O. MUELL.) SIMONSEN [B09]
- Navicula confervens (KUETZ.) GRUN. [A06]
- N. mutica A. CL. [A08]
- N. pupula KUETZ. [A10]
- Achnanthus inflata KUETZ. [A01]
- Epithemia zebra (GRUN.) KUETZ. var. sauvonica (KUETZ.) GRUN. [A05]
- Ombella turrida (BEBR.) V. R. [A01]
- Meridion circulare AGARDH var. constrictum (RALFS) V. IL [A05]
- Rhabdulia gibberula (GRUN.) O. MUELL. var. musculus (KUETZ.) A. CL. [A07]
- R. gibberula (GRUN.) O. MUELL. [A05]
- R. gibba (GRUN.) O. MUELL. [A08]
- Gomphoceras angustatum (KUETZ.) RABIL. var. products GRUN. [A07]
- G. constrictum (GRUN.) var. brevispinis (KUETZ.) CL. [A09]
- G. acuminatum (GRUN.) var. coronata (GRUN.) W. SM. [A01]
- Hastusschia amphioxys (GRUN.) GRUN. [A02]
- Caloëcis silicula (GRUN.) CL.
- Eunotia praerupta (GRUN.) [A05]
- E. formica (GRUN.) [A08]
- E. veneris (KUETZ.) O. MUELL. [A10]
- E. diodon (GRUN.) [A05]
- E. formica (GRUN.) [A05]
- E. tropica (HUST.) [B07]
- E. serra (GRUN.) [A05]

### 珪藻 PLATE II

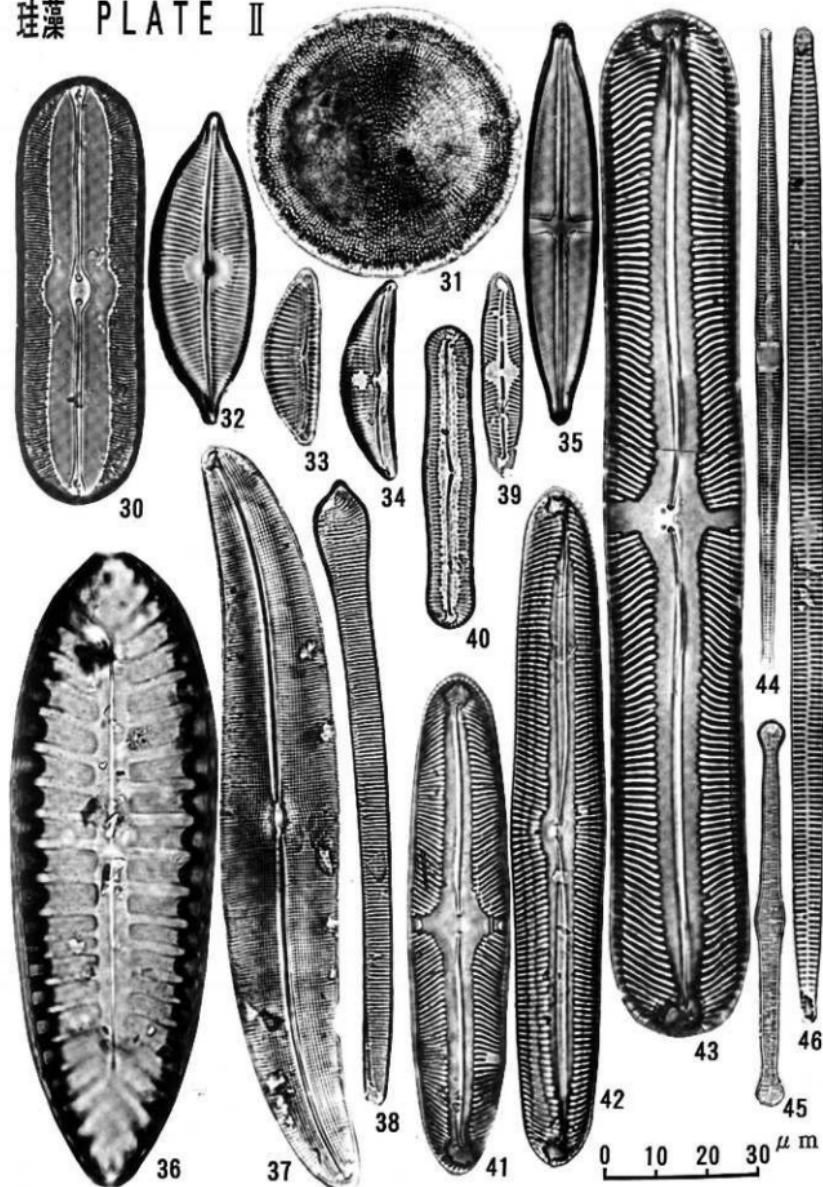
- Kivicula americana (GRUN.) [B05]
- Coscinodiscus lacustris GRUN. [A09]
- Cymbella ehrenbergii KUETZ. [A02]
- Cymbella sinata KUETZ. [A02]
- Aspera ovalis (KUETZ.) KUETZ. [A05]
- Stauroneis phoenixenteron (NITZ.) (GRUN.) [A09]
- Suriella robusta (GRUN.) [A10]
- Gyrosigma acuminatum (KUETZ.) RABIL. [A01]
- Actinella brasiliensis GRUN. [A05]
- Planularia microstaura (GRUN.) CL. [A07]
- P. acrosphaera (GRUN.) W. SM. [A05]
- P. divergens W. SM. [A06]
- P. viridis (NITZ.) (GRUN.) [A07]
- P. divergens W. SM. [A06]
- Synedra pulchella (RALFS) KUETZ. [A07]
- Tabellaria fenestrata (LYNGB.) KUETZ. [A06]
- S. ulna (KUETZ.) (GRUN.) [A08]

〔 〕は検出試料の番号である。

硅藻 PLATE I



硅藻 PLATE II



## 平成 8 年度調査区の自然科学分析について

平成 9 年度の調査では、川跡 SD15 の泥土について自然科学分析を実施した。分析の対象時期は弥生時代前期であった。しかし、遺跡は、ほかに鎌倉時代の館跡、江戸時代前期の土取り場跡も発見されており、それぞれの時期の自然環境の復元も重要である。さいわい、平成 8 年度の調査において、それぞれの遺構から泥土が採集されて、パリノ・サーヴェイ株式会社に分析が委託されている。その結果は、同報告書に掲載されている。しかし残念ながら、分析資料の時期について、明確にされておらず、わかりにくい点がある。以下では、分析試料の年代と性格を示し、分析の結果と考察・まとめの部分を再録し、鎌倉時代以後の自然環境を知る参考にしたい。

平成 8 年度は、SD30・38・46・50・62・84、SK14・

79・98・104 の 10カ所の泥土について行われたが、遺構の時代・性格は、右表のとおりである。

表 遺構の時代・性格

試料番号	遺構	時代	性格
1	SD30	鎌倉時代	館の堀
2	SD38	現代	ほ場整備前の排水路
3	SD46	鎌倉時代	A 地区館の堀 SD30 と同じ
4	SD50	鎌倉時代	A 地区館の堀 SD24・34 と同じ
5	SD62	鎌倉時代	A 地区館の西側溝
6	SD84	江戸時代	水路
7	SD14	江戸時代前期	江戸前期の採土穴
8	SD79	江戸時代前期	江戸前期の採土穴
9	SD98	江戸時代前期	江戸前期の採土穴
10	SD104	江戸時代前期	江戸前期の採土穴

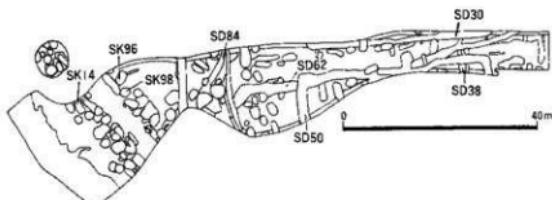
### 考察

#### 1) 遺構の性格

各遺構の堆積過程などに注目して遺構を分類し、それぞれの性格に関わると思われる情報について述べる。花粉分析と植物珪酸体分析の組成をみると、マツ属の花粉化石が多い点と、イネ属の植物珪酸体が多い点から、SD38 が他の試料と比較して異質である。また、珪藻化石群集からみると、埋積過程の違いにより SD38、SD46 と SD50、その他の遺構と 3 つに分けられる。今回は埋積過程に着目して、各遺構を 3 類にまとめ、特徴を述べる

##### ・ SD38

珪藻化石群の特徴は、好流水性種が多産することが特徴である。さらに、好流水性の *Gomphonema parvulum var. lagena*、流水不安定性の *Gomphonema parvulum*, *Nitzschia palea* は有機汚濁の進んだ富栄養水域に多産する群種である。これらのことから、本遺構の堆積環境として、水質的に富栄養で流水の影響のある不安定な堆積環境が想定される。本遺構では、マツ属の花粉化石が多産する。マツ属の増加は、全国的に見られる傾向で、人間の植生干渉に



平成 8 年度調査区分析遺構位置図

よりマツの二次林や植林の増加によるものと考えられている。マツ属が優先する時期は、北陸地方では近世以降顯著である(パリノ・サーヴェイ株式会社、1995など)。このことから、本遺構の堆積時期は近世以降と思われる。これに對して、他の遺構ではマツ属が少ないとから、これより古い時代(遺跡から検出される遺物の年代から見て12~13世紀?)に埋積したと考えられる。なお、土壤理化学分析の結果を見ると、亞鉛、炭素、リン酸の値が他と比べて高い。珪藻分析の結果、堆積環境が富栄養であったことを考慮すれば、動植物起源の有機物が水流によって運ばれるなどして遺構内に濃集したものと思われる。

#### • SD46、SD50

珪藻化石群集の特徴は、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Pinnularia Eunotia flexuosa*などの沼沢~湿地の環境指標種群や、好止水性で弱酸性水域多い *Tabellaria flocculosa* を含む貧塩嫌塞性種が多産する。また、真・好酸性種、真・好止水性種が優占し、流水性種はほとんど産出しない。このような傾向から、これらの遺構の埋積過程は、弱酸性の水質で流れ込みのほとんどない浅い水域で堆積したと考えられる。一方、土壤理化学分析の結果をみると、炭酸比重が軽い有機物は流下せず、遺構内にたまりやすかったと思われる。有機物のほとんどは動植物に由来するが、リン酸は動植物中に多く含まれていることを考えると、リン酸の富化も土壤中の有機物量に由来すると推測される。今回炭素含量とリン酸量が正の相関を示すのも、ともに堆積物中の有機物量に左右されているためと考えられる。

#### • その他の遺構 (SD30、SD62、SD78、SD84、SK104、SK98、SK14)

これらの遺構は、流水不定性種と好止水性種の多産が特徴である。流水不定性の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Cymbella naviculiformis*、*pinnularia gibba*、好止水性の *Gomphonema gracile*、陸生珪藻の *Eunotia praenupta*などは、水深が1m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢田地の湿地に生育する沼沢湿地付着生種群(安藤、1990)でもある。また、好流水性の *Navicula viridula* は、河川中~下流部や河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに多い中~下流性河川指標種群(安藤、1990)の一類である。よって、これらの遺構の内部は、流水の流れ込みのある沼沢~湿地のような状態であったと推測される。

### 2) 古植生と栽培植物について

先項でも述べたように、SD38覆土のみが近世以降の新しい堆積物であり、その他は中世ごろのものと考えられる。そこで、時代別に当時の植生について述べる。

SD38をのぞく試料では、ハンノキ属が多産する。本遺跡の立地が渕であることからすれば、周辺にはハンノキ湿地林が広く分布していたと思われる。水生の草本、シダ類として、サンショウモ、ミズワラビ属、オモダカ属、サジオモダカ属、ガマ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、スプタ属、ヒシ属、ヨシ属が検出されることから、湿地と渕には水生植物が繁茂する草地も広がっていたと推測される。また、植物珪酸体から花粉化石で、イネ属が比較的多く検出されていることから、周辺での耕作が示唆される。今回推定される植生からみれば、当時行われていた周辺の耕作は、湿田のような水域環境下であったと考えられる。

また、SD38ではマツ属の花粉化石が多産する。マツ属の増加は、人間の植生干渉によるマツの二次林や植林の増加によるものと考えられており、北陸地方の遺跡の結果では近世以降顯著にみられる(パリノ・サーヴェイ株式会社、1995など)。

### まとめ

今回分析を行った遺構の性格は、埋積過程などによって3つに区分できた。SD38の埋積過程は、流れの影響を受け、かつ富栄養な水域であったと考えられる。埋積時期は他の遺構と違って新しく、近世以降であると推測される。また SD46と SD50は埋積時に流水の影響が少ないのが特徴であった。その他の7遺構は、溝、土坑に関係なく流水の

影響を受けて堆積している。造橋の形状によって埋積過程に差がないのは、洪水等によって短期間のうちに埋積が進んだためと思われる。

周辺の古植生は、ハンノキ湿地林や水生植物が繁茂する湿地や潟湖が存在していたと考えられる。また、稻作が行われていたと推測されるが、周辺植生から考えれば、おそらく湿田的環境であったと思われる。本遺跡よりも砺波平野寄りにあたる大門町布目沢東遺跡では、ハンノキ属に加えコナラ亞属やスギ属などがみられ、丘陵や低地の縁辺部などの植生を反映していると考えられる。今後はより地点数を増やして植生変化を平面的にとらえるとともに、ボーリング調査なども加えて、植生変化を時代変遷としてとらえたい。

#### (引用文献)

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設

定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p. 73-88

パリオ・サーヴェイ株式会社 (1991) 布目沢東遺跡自

然科学分析報告。「大門町埋蔵文化財調査報告書第

7集 大門町企業団地内遺跡発掘調査報告書(1)」, p.

81-118, 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委

員会

パリオ・サーヴェイ株式会社 (1995) 分析調査の結果。

「石川県小松市平而梯川遺跡 I 梯川改修工事関係

埋蔵文化財調査報告書 I」, p. 91-112, 社団法人石川

県埋蔵文化財保存協会

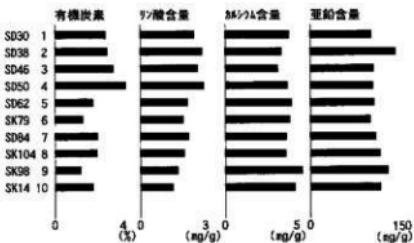


図4 土壤理化分析の組成

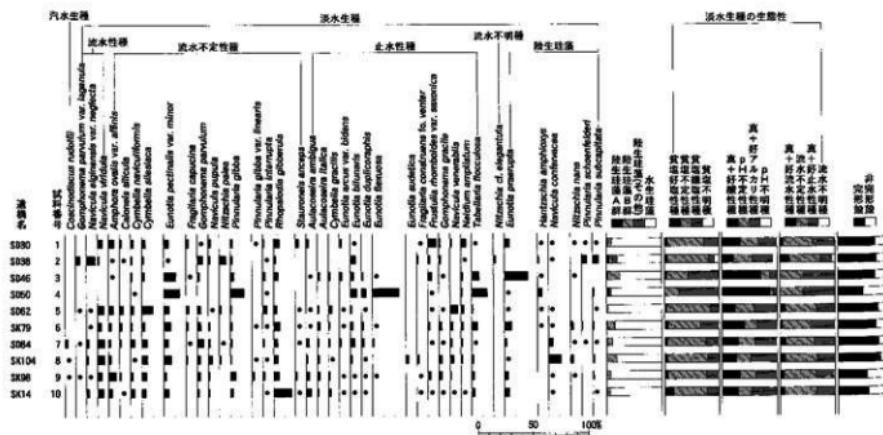


図1 主要化石組成

淡水-淡水生種出率・各種生種出率は全体基数、淡水生種の生残性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の種類を示す。

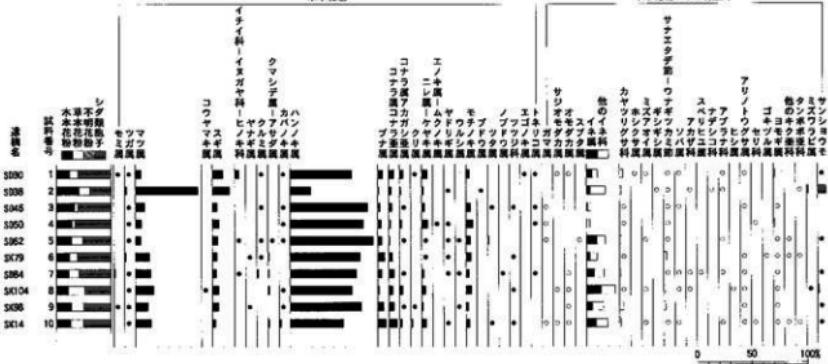


図2 花粉化石組成

出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ葉胞子は総数より不明花粉を除く数を基底として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の試料について検出した種類を示す。

## 短細胞珪酸体

## 機動細胞珪酸体

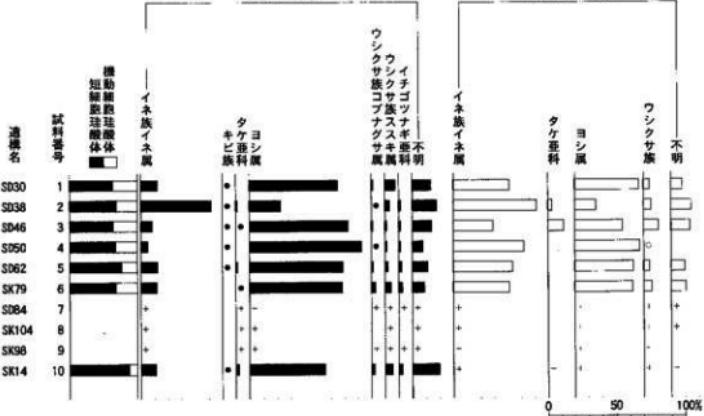
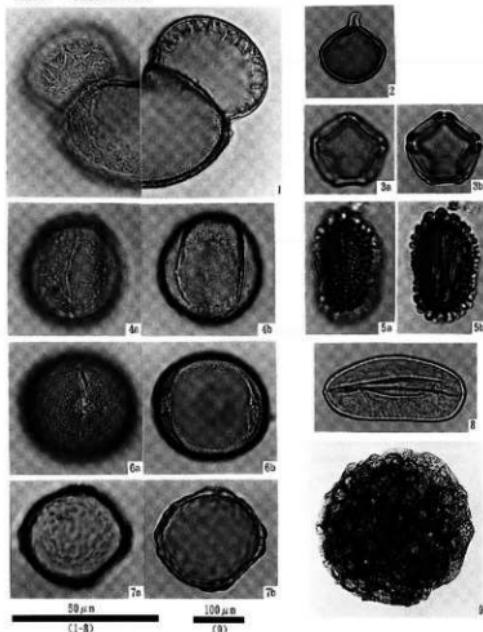


図3 植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基底として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

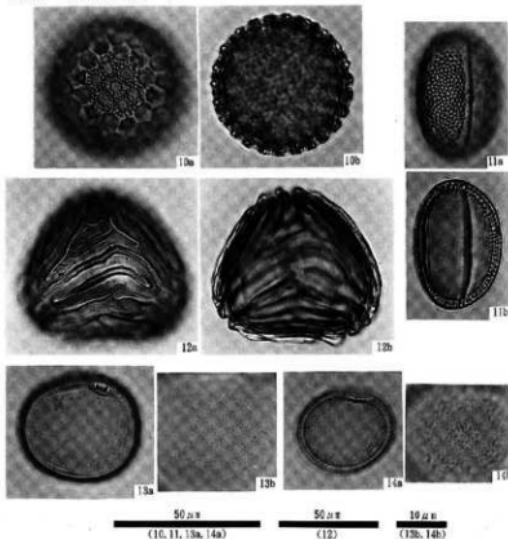
図版4 花粉化石(1)

1. マツ属(SD30)
2. スギ属(SD30)
3. ハンノキ属(SD30)
4. コナラ亜属(SD30)
5. モチノキ属(SD30)
6. ブナ属(SD30)
7. ニレ属 ケヤキ属(SD30)
8. ミズアオイ属(SD30)
9. サンショウモ(SD38)



図版5 花粉化石(2)

10. サナエタデ節－ウナギツカミ節(SK104)
11. ソバ属(SD30)
12. ミズワラビ属(SD38)
13. イネ属(SD30)
14. 他のイネ科(SD30)



## 平成8年度調査区 SD62出土漆椀の分析

創元興寺文化財研究所

下村加茂遺跡出土No.4漆椀の、漆の膜断面分析結果並びに樹種鑑定結果を、報告する。

### 分析概要

漆椀の赤色塗膜は、元素分析により使用顔料の推定を行う。さらに漆椀の内外の塗膜は、断面の顕微鏡観察を行い、塗構造を調べる。

#### 1. 使用機器・原理

- 電子線マイクロアナライザー (EPMA) (㈱堀場製作所 EMAX2000)

EPMAは試料に電子線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のX線を検出することにより元素を同定する。

- ミクロトーム (㈱日本ミクロトーム研究所製 ST-201)
- 金属顕微鏡 (㈱オリンパス製 BH2-UMA)

#### 2. 試料

- 漆椀内側の膜
- 漆椀外側の膜（紋様部分）

### 分析結果

#### 1) EPMAによる分析結果 (分析条件 加速電圧 25kV)

膜表面の赤色部分の元素分析で、Fe(鉄)が確認されたことより、赤色顔料はベンガラである。

#### 2) 塗構造

少量の漆片を採取し、樹脂に包埋後、ミクロトームで膜断面の切片を作製した。これらを永久プレパラートにした後、金属顕微鏡の落射光（暗視野）による観察を行った。

##### ① 漆椀内側

観察の結果、炭粉下地の上に50μmのほぼ均一な厚みの赤色漆層が1層観察された（模式図1、写真1）。

##### ② 漆椀外側（紋様部分）

観察の結果、紋様部分は、炭粉下地の上に45μmのほぼ均一な厚みの漆層が1層、その上に5μmの赤色漆層が観察された（模式図2、写真2）。

### 樹種鑑定の概要

樹種の分類は、花、果実、葉など種ごとに分化の進んだ器官の形態に基づいている。遺物の樹種鑑定は木材の組織の観察することにより行うが、木材組織は樹種ごとの分化が進んでいない。組織上大きな特徴を有する樹種を除き、同定できない場合がある。樹種の同定が困難な場合は、科・属・節・類名で表わした。

\*科・属・節・類名は主に原色日本植物図鑑の分類による。

#### ① 切片作製

カミソリの刃で遺物ができるだけ傷つけないように注意しながら、木材組織の観察に必要な木口面（横断面）、板目面（放射断面）、板目面（接線断面）の3方向の切片を正確に作製した。

② 永久プレパラート作製

切片はサフランで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤（EUKITT）を用いて永久プレパラートを作製した。

③ 同定方法

針葉樹については、早材から晚材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等、広葉樹については道管の大きさや配列状態および穿孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を生物顕微鏡で観察し、種または属、科を同定した。

### 鑑定結果

樹種名 ブナ（広葉樹、散孔材、ブナ科、ブナ属）



模式図 1

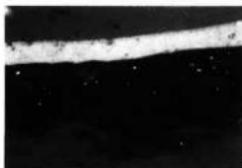
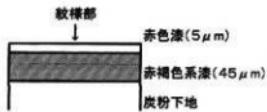


写真 1 (×100)



模式図 2

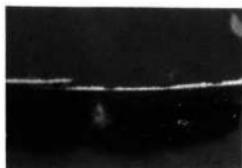
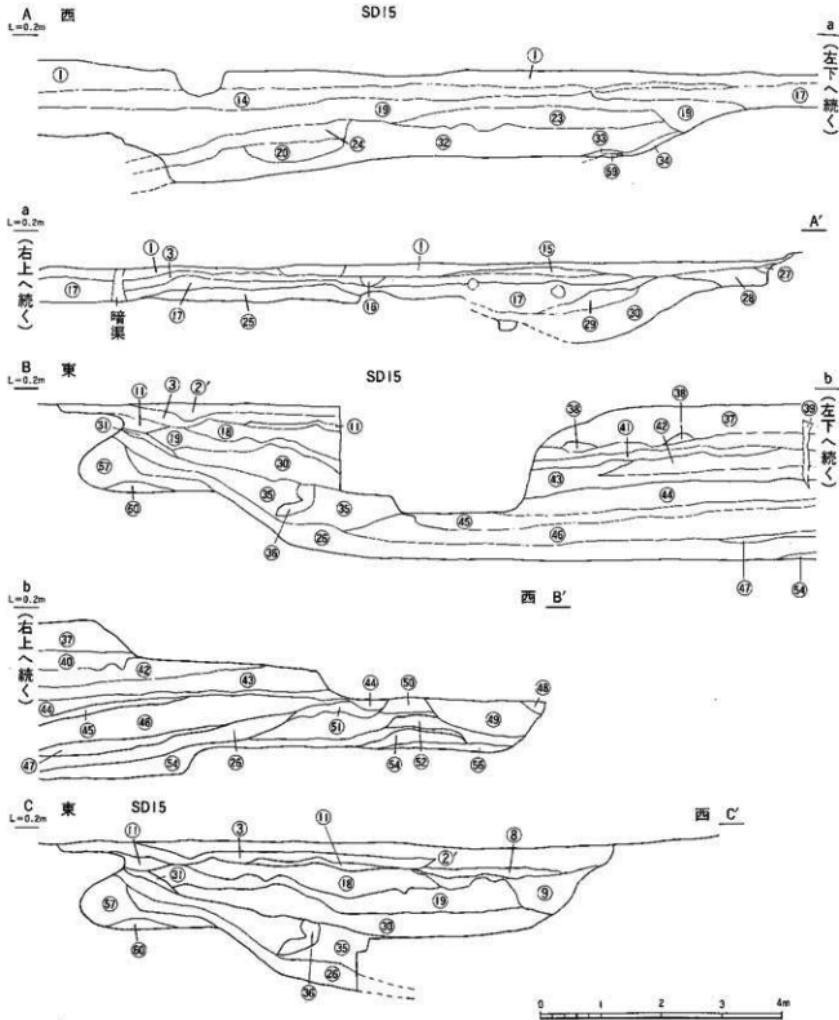


写真 2 (×100)

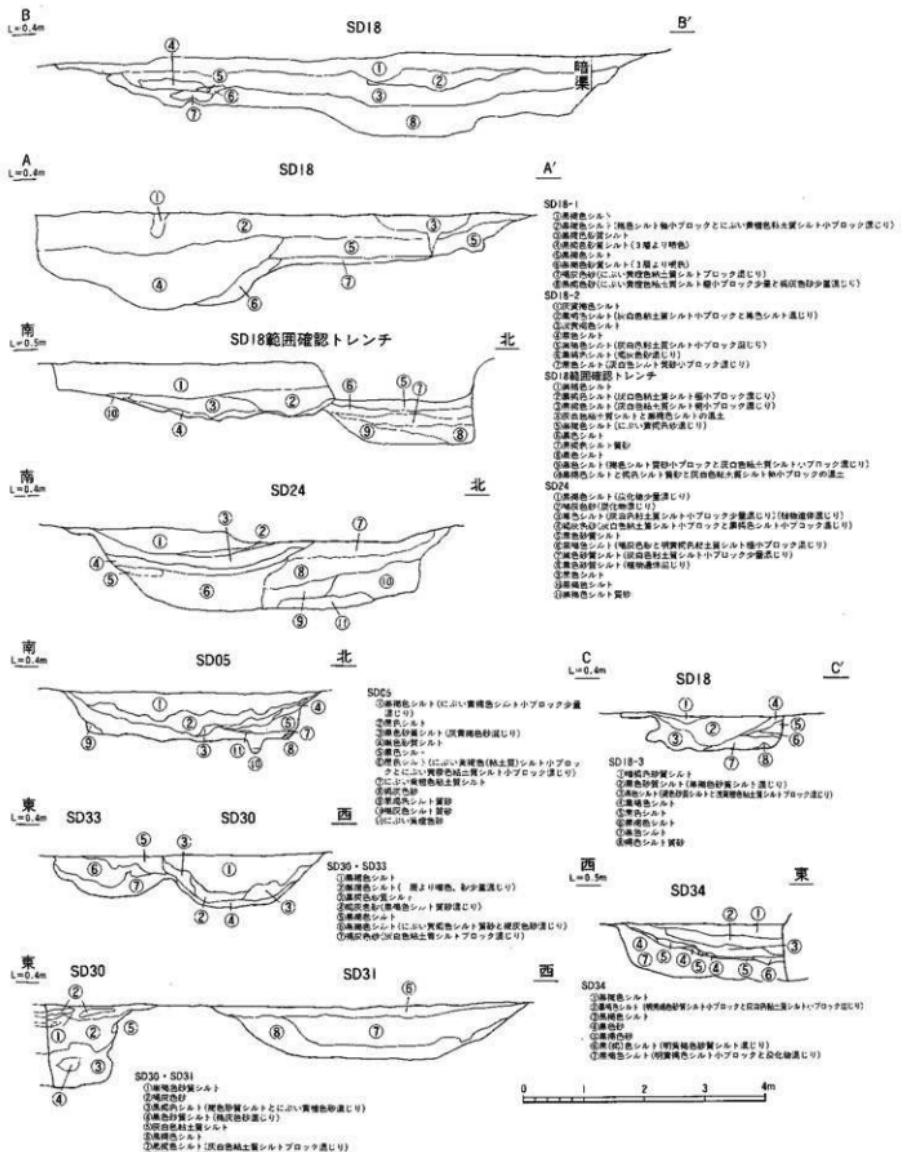


漆椀実測図 (1/4)

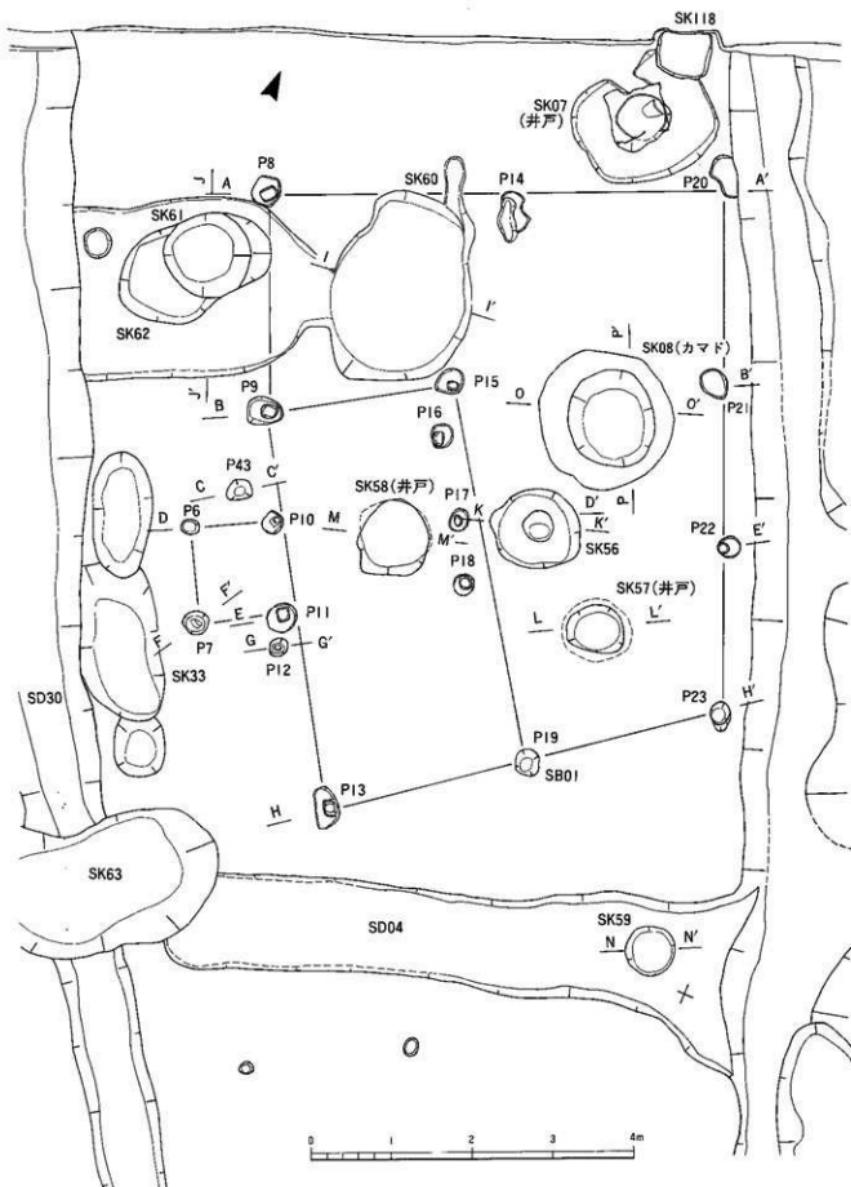




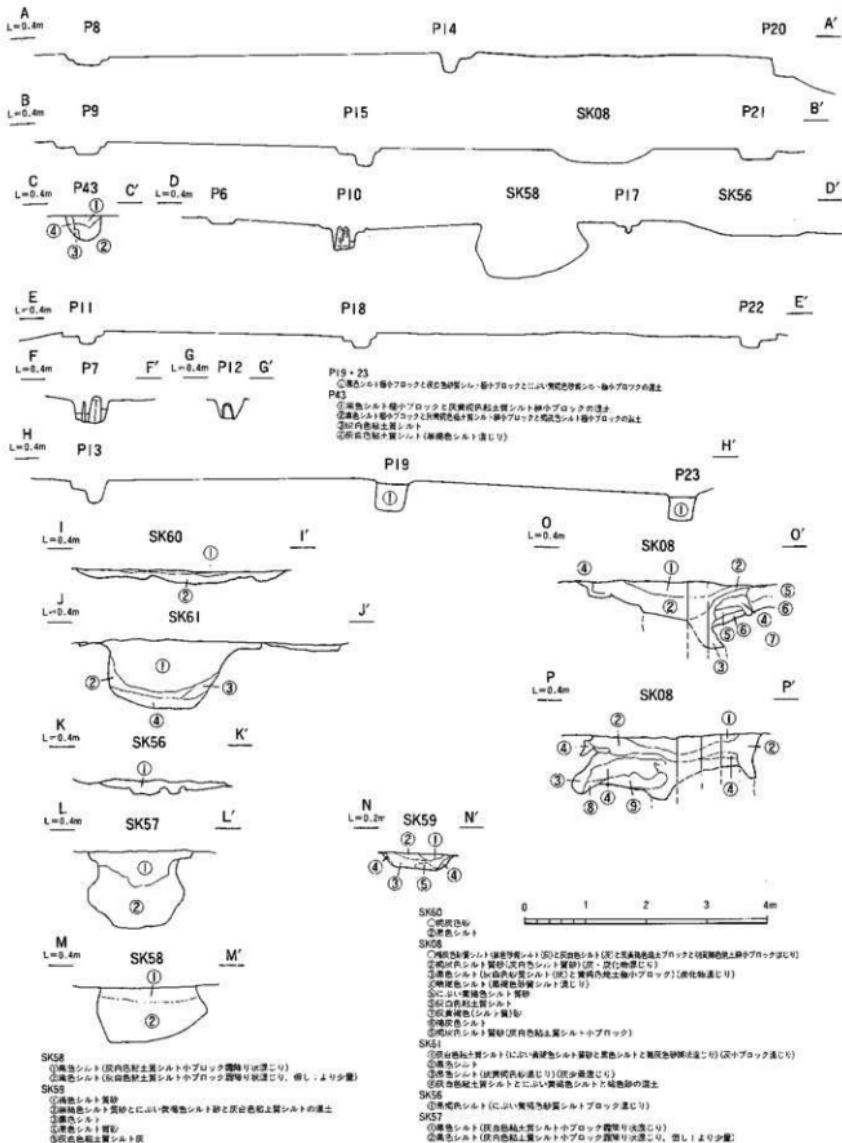
第5図 A地区造構図(2) 川SD15の土層



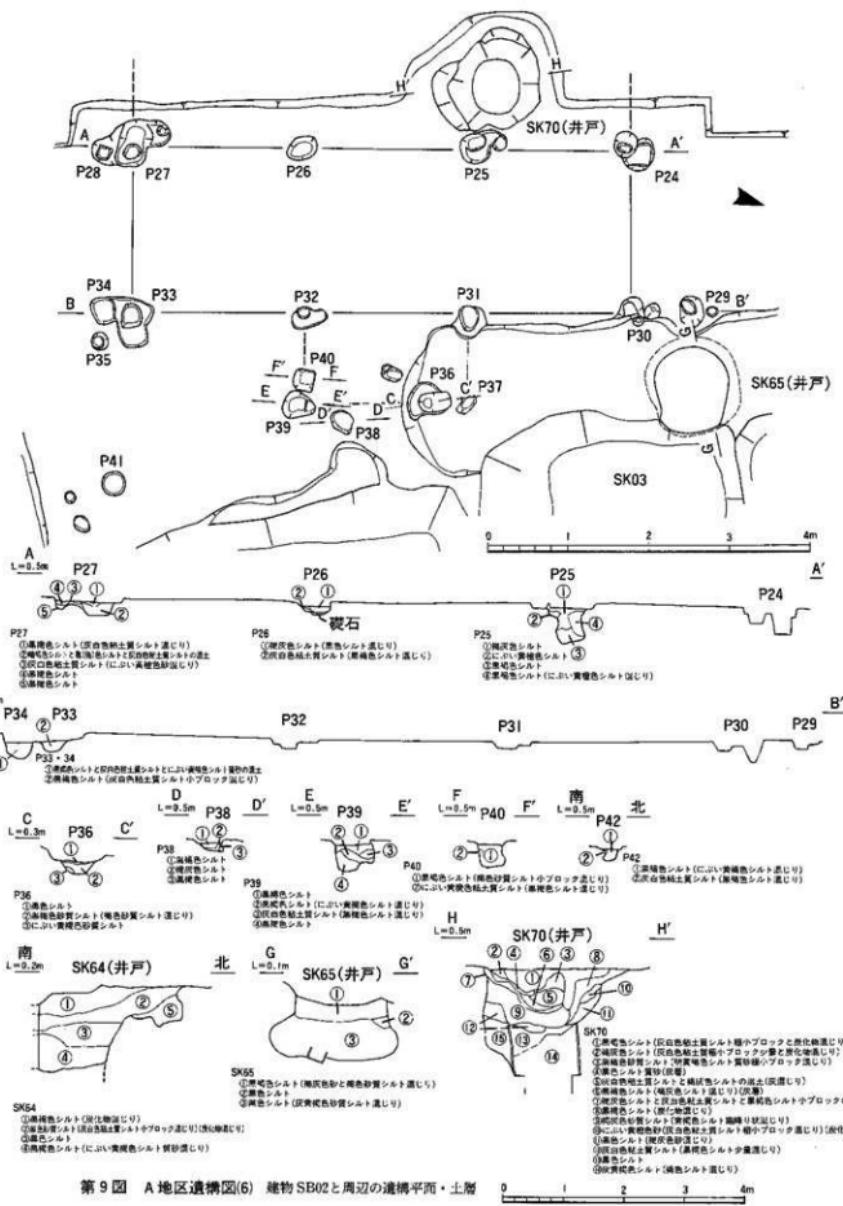
第6図 A地区構造図(3) 細SD18・24・05・30・31・33・34の土層



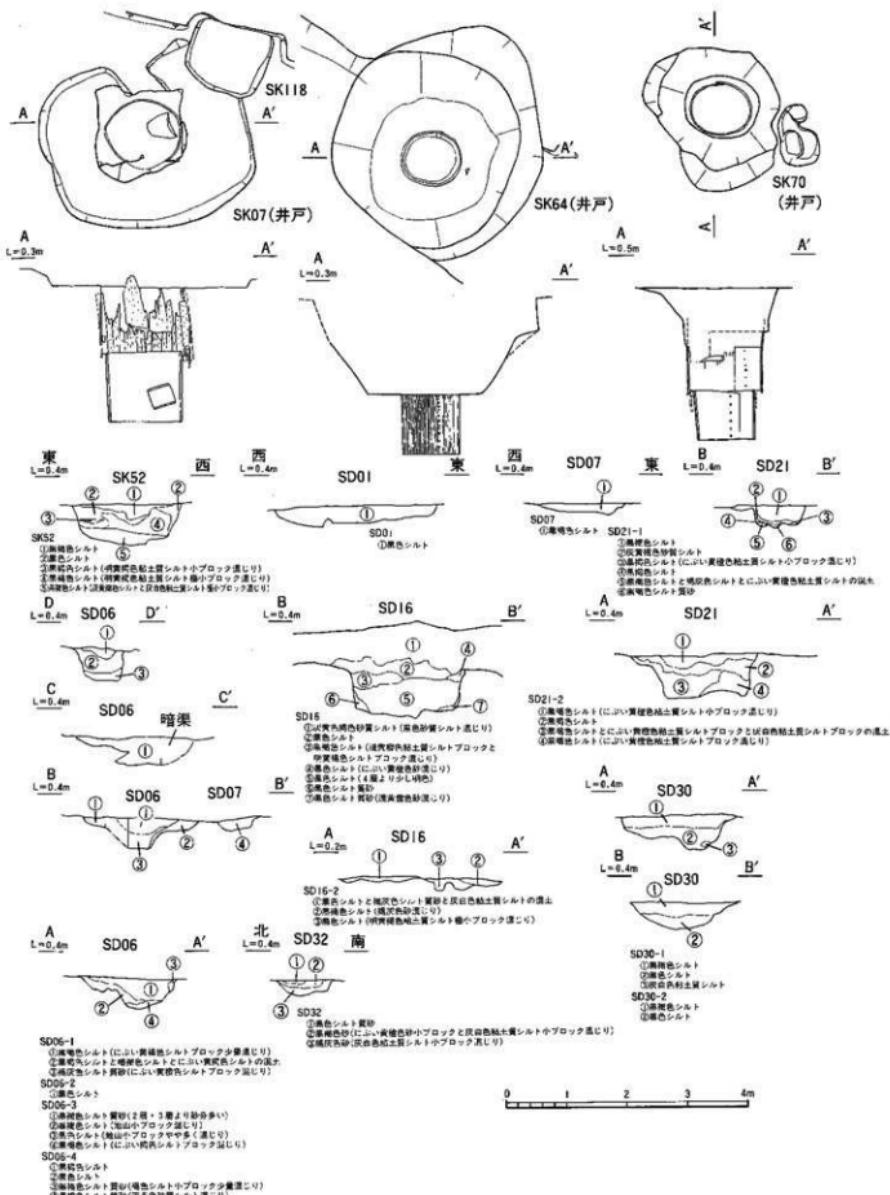
第7図 A地区造構図(4) 建物SB01と周辺の平面



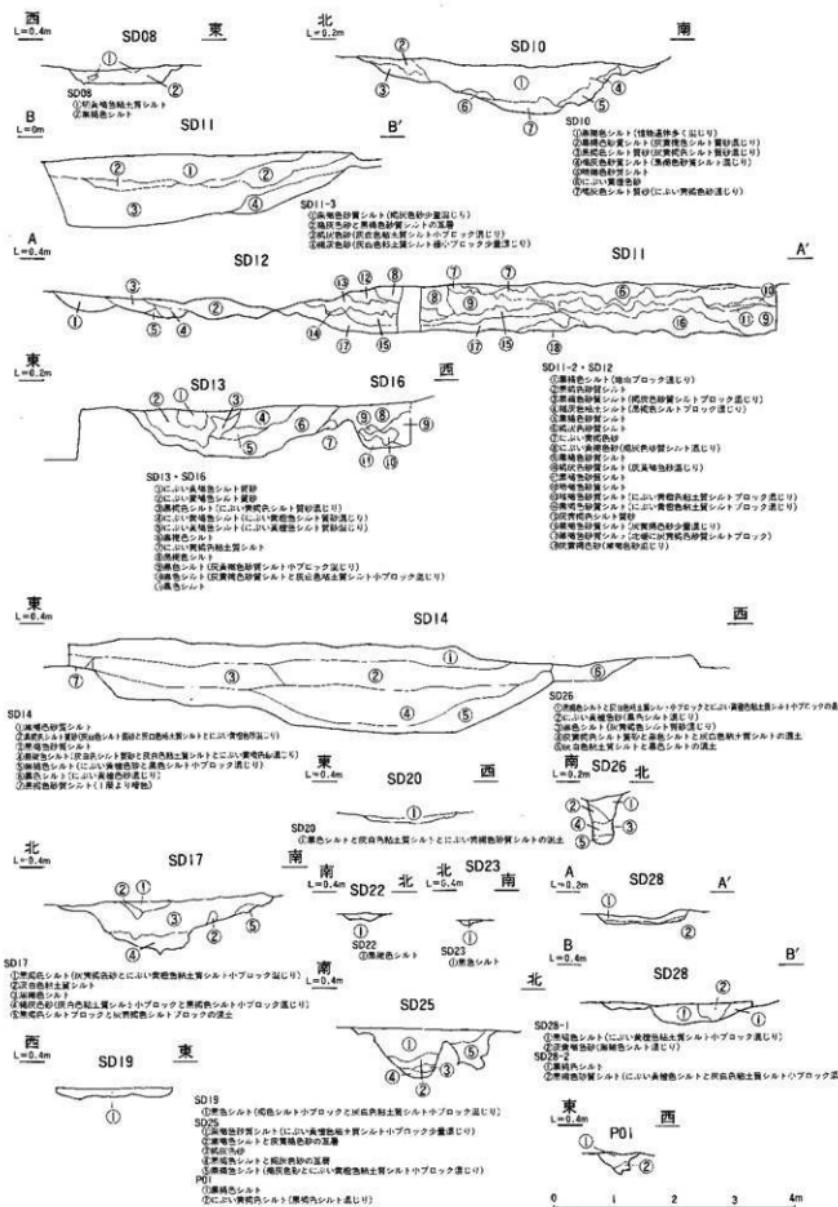
第8図 A地区遺構図(5) 建物SB01と周辺の土層



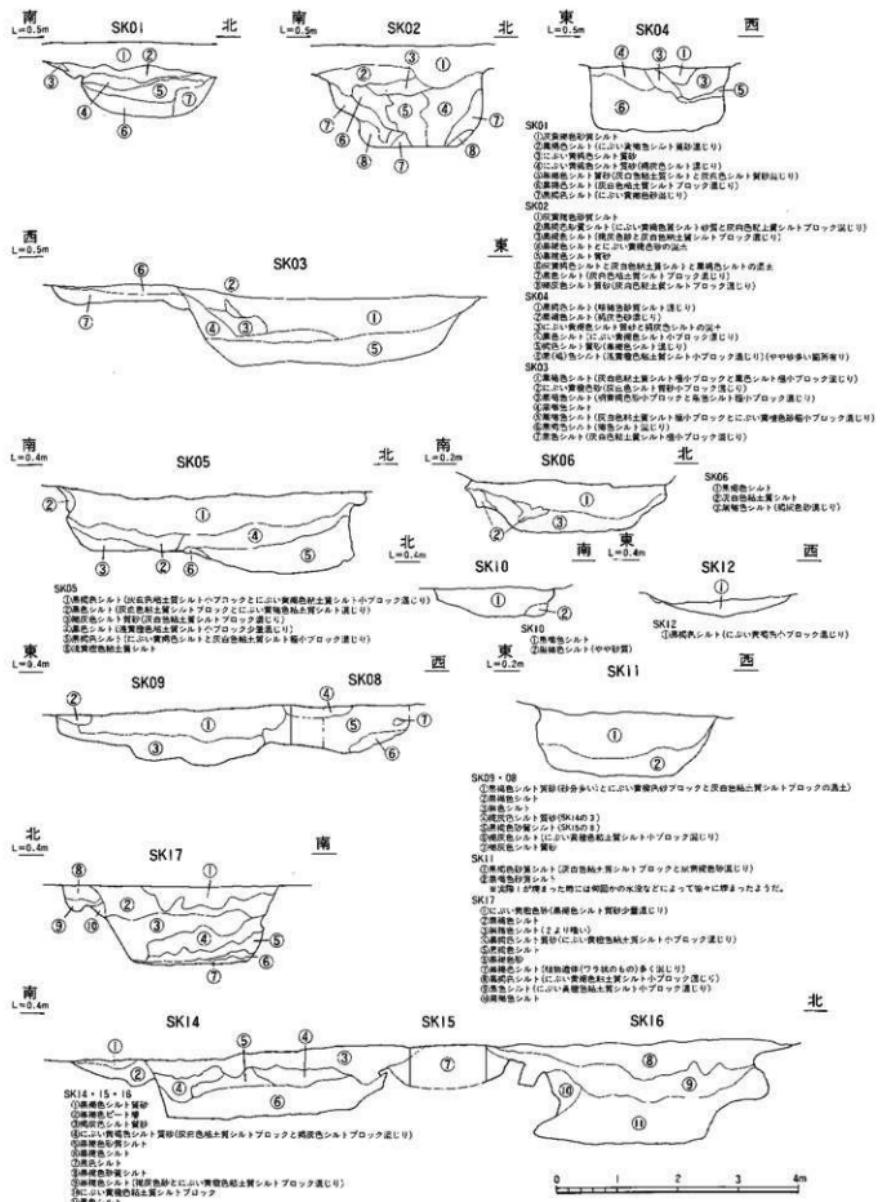
第9図 A地区遺構図(6) 建物SB02と周辺の遺構平面・土階



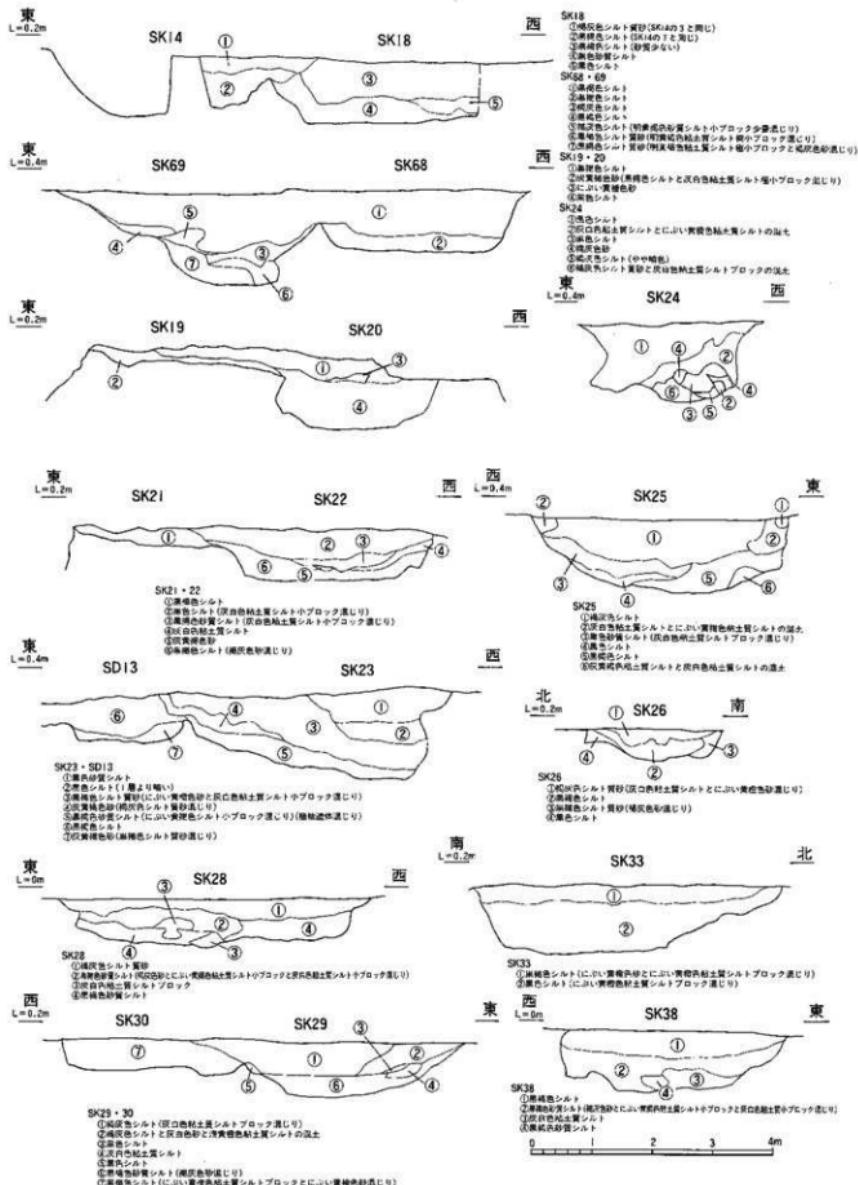
第10図 A地区遺構図(7) 井戸の平面・側面・穴・溝の上層



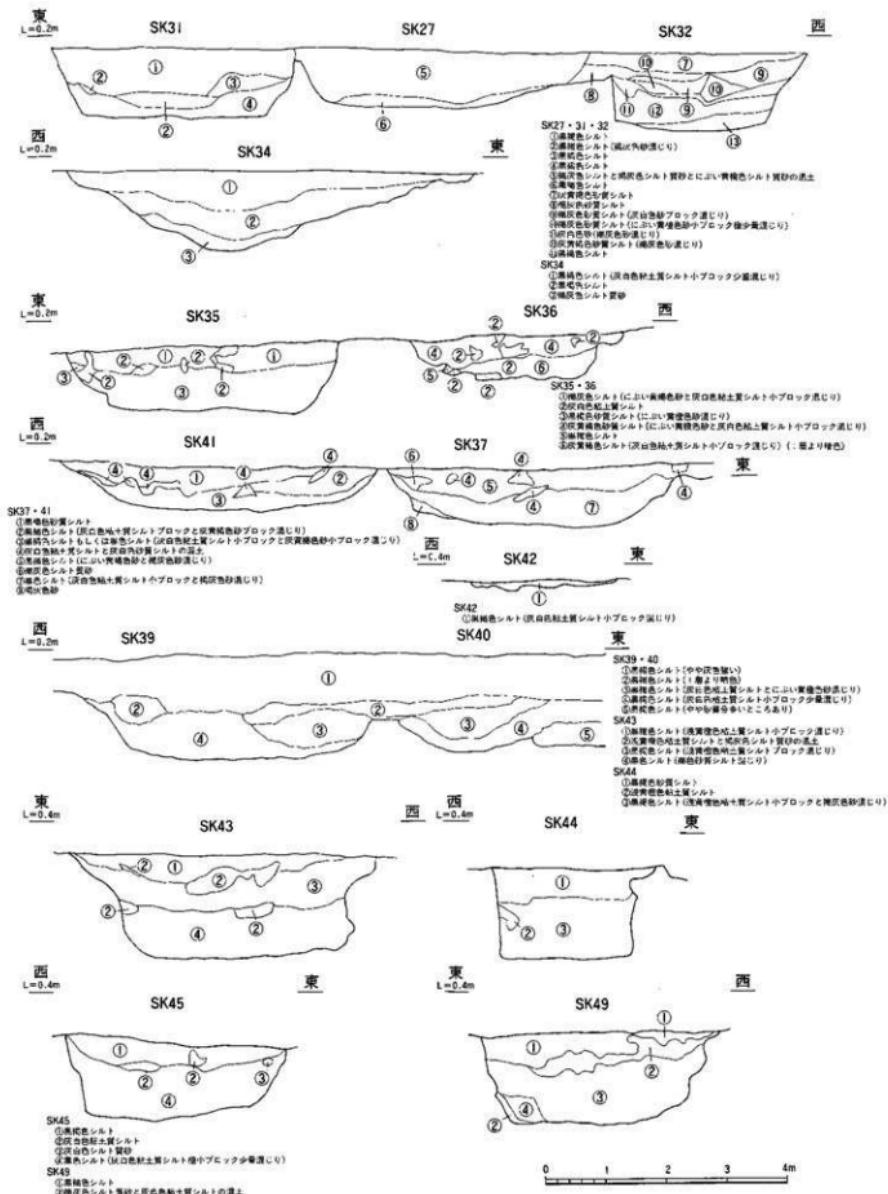
第11図 A地区地質図(8) 川・溝などの土層



第12図 A地区遺構図(9) 掘上穴の土層



第13図 A地区透構図III 採穴土層



第14図 A地区遺構図(II) 採土穴の土層

西

 $L=0.5m$ 

SK46・48

東

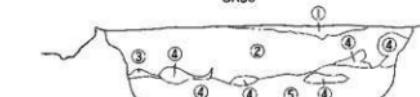


南

 $L=0.2m$ 

SK50

北

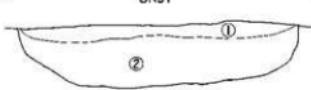


西

 $L=0.2m$ 

SK51

東

 $L=0.4m$ 

東

 $L=0.4m$ 

SK54

西

 $L=0.4m$ 

SK55

南

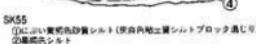
 $L=0.4m$ 

北

 $L=0.4m$ 

SK56

東



北

 $L=0.4m$ 

SK63

南

 $L=0.4m$ 

東

 $L=0.4m$ 

SK67

西

 $L=0.4m$ 

SK66

東

 $L=0.5m$ 

北

 $L=0.5m$ 

SK72

南

SK72  
 ①  
 ②  
 ③  
 ④  
 ⑤  
 ⑥  
 ⑦  
 ⑧

南

 $L=0.4m$ 

SK73

北

 $L=0.4m$ 

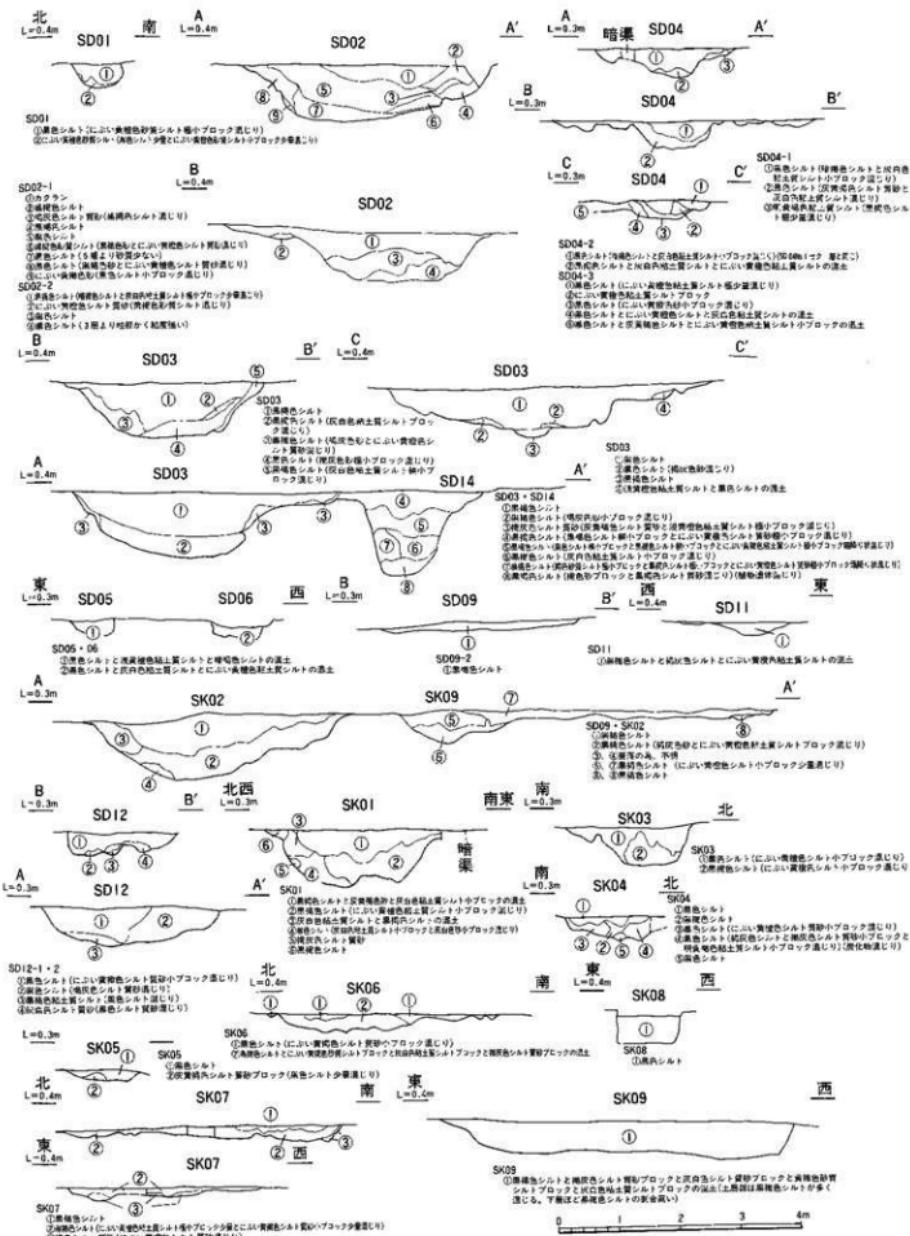
SK74

南

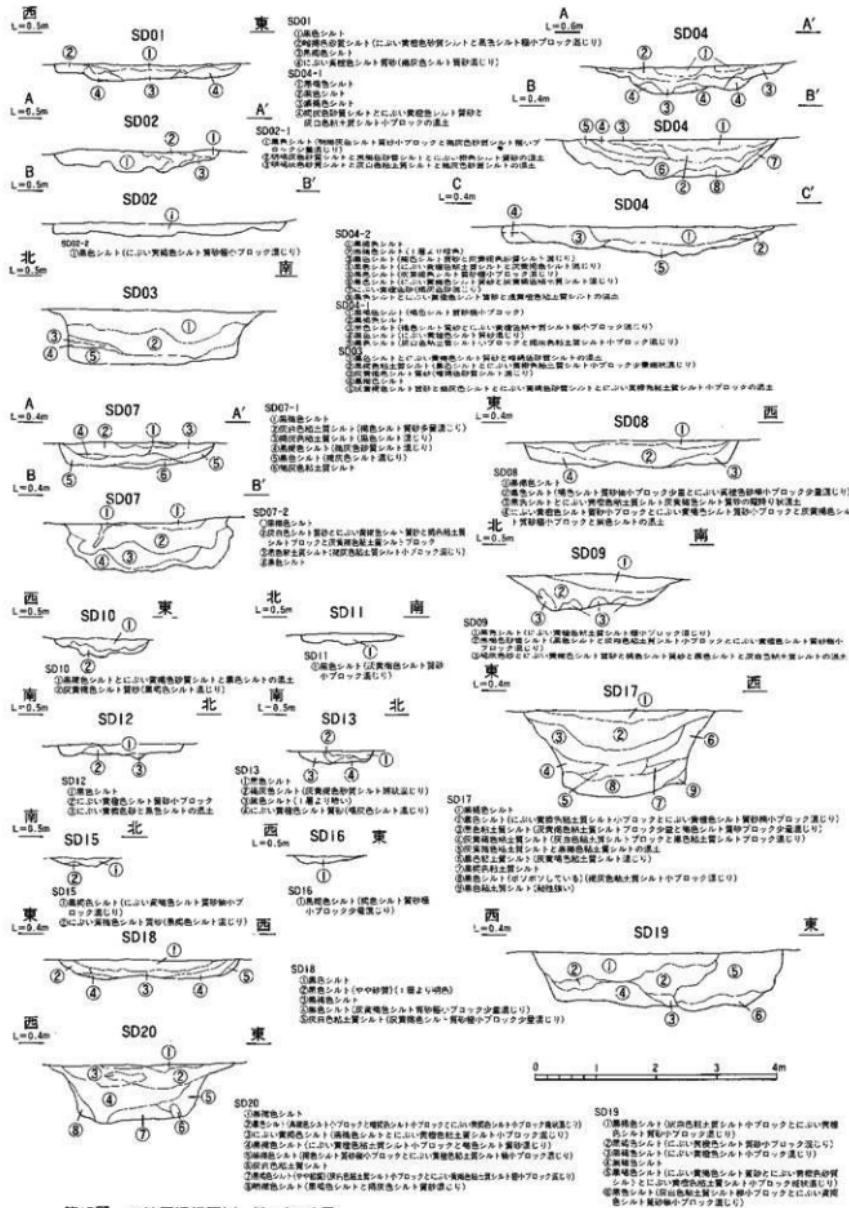
 $L=0.4m$ SK74  
 ①

0 1 2 3 4m

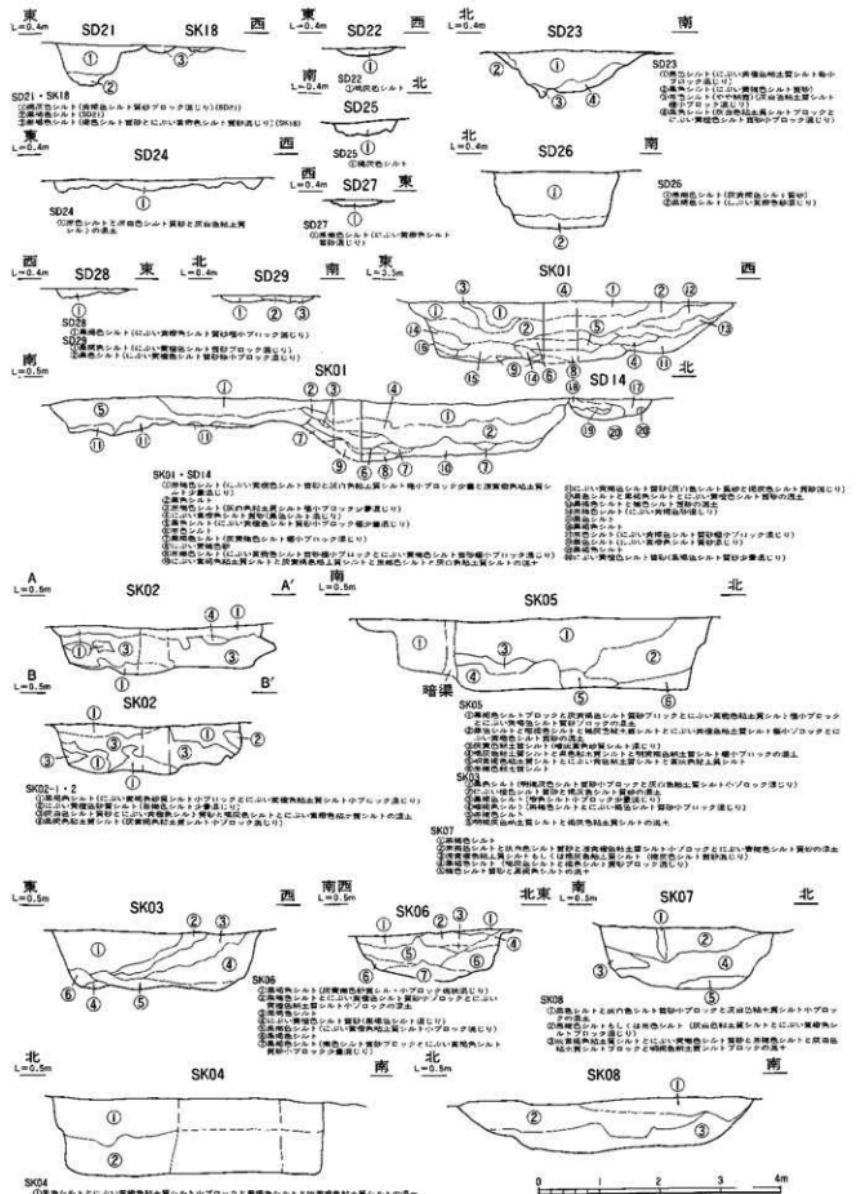
第15図 A 地区造構図(II) 掘土穴の土層



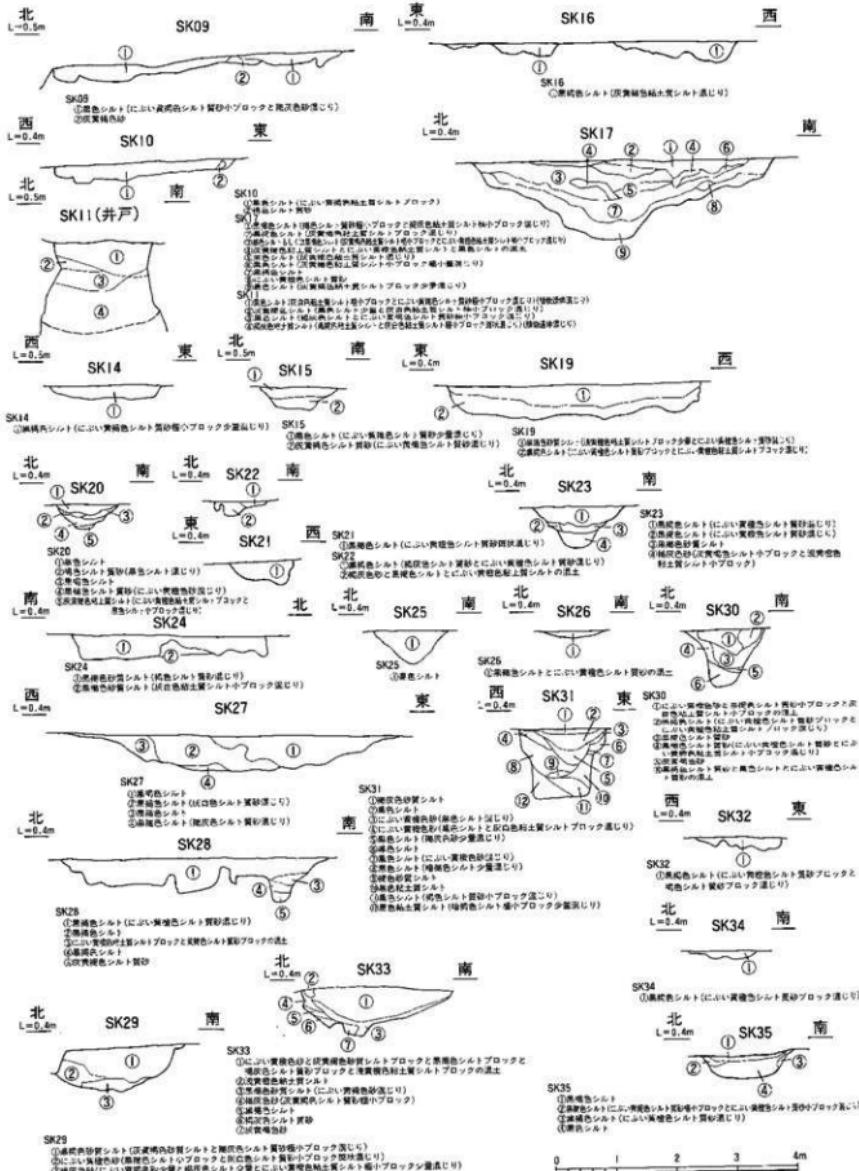
第16図 B地区遺構図 遺・穴の土層



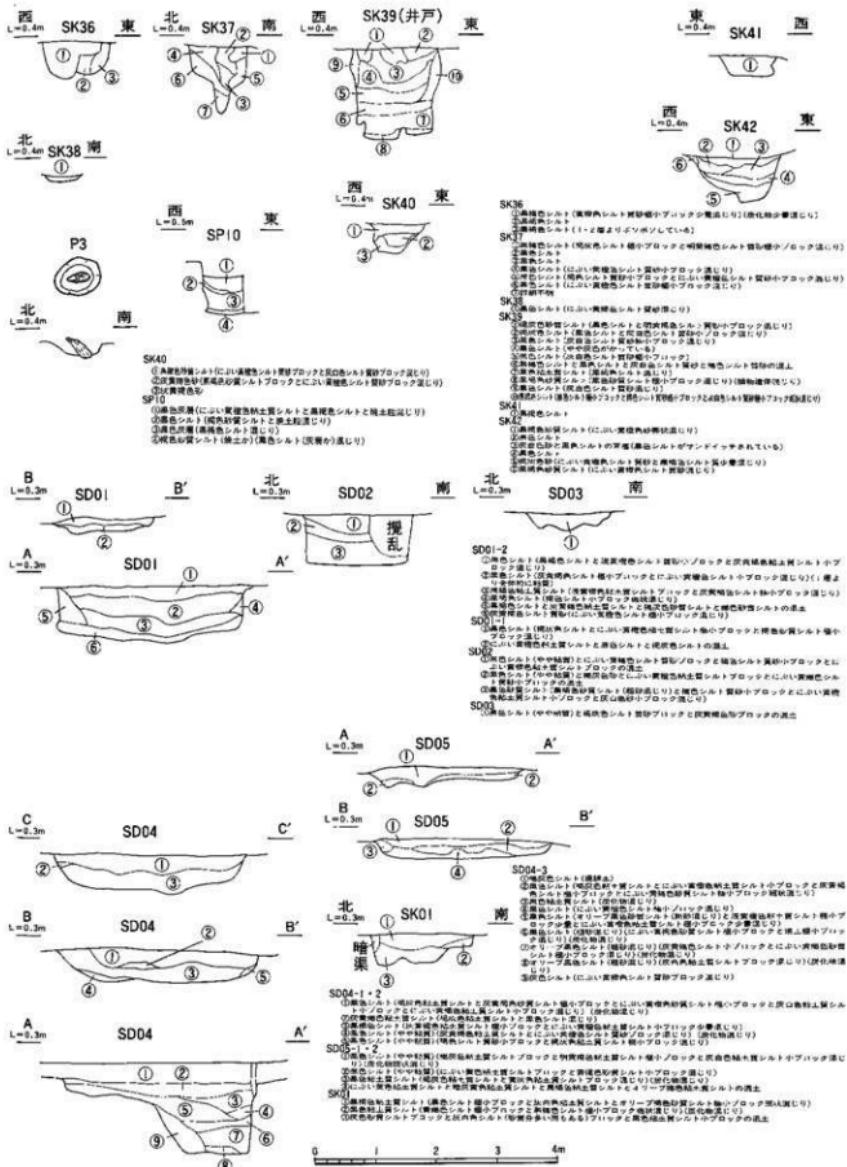
第17図 C地区遺構図(1) 道・穴の土層



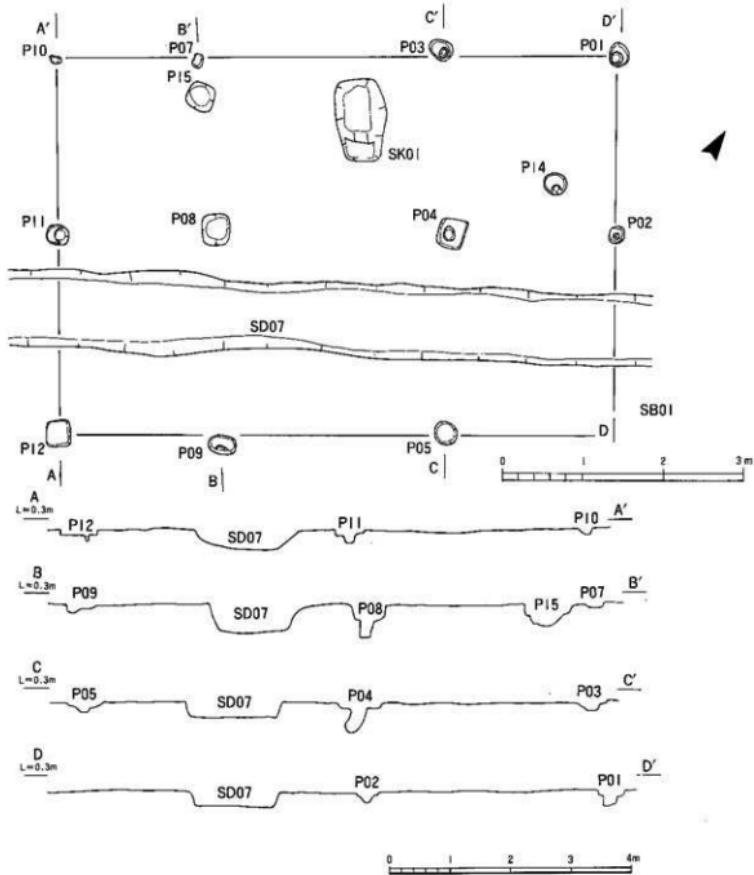
第18図 C地区遺構図(2) 溝・穴の土層



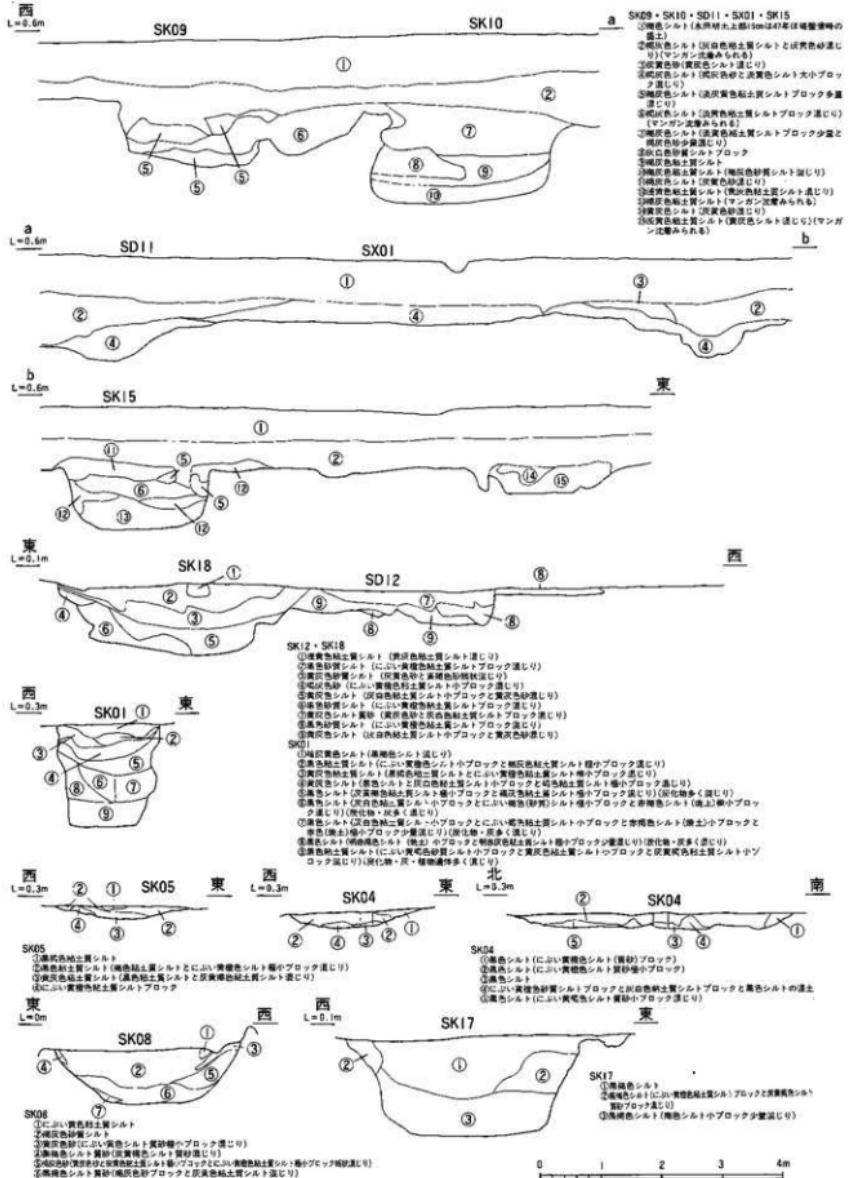
第19図 C地区構造図(3) 溝・穴の土層



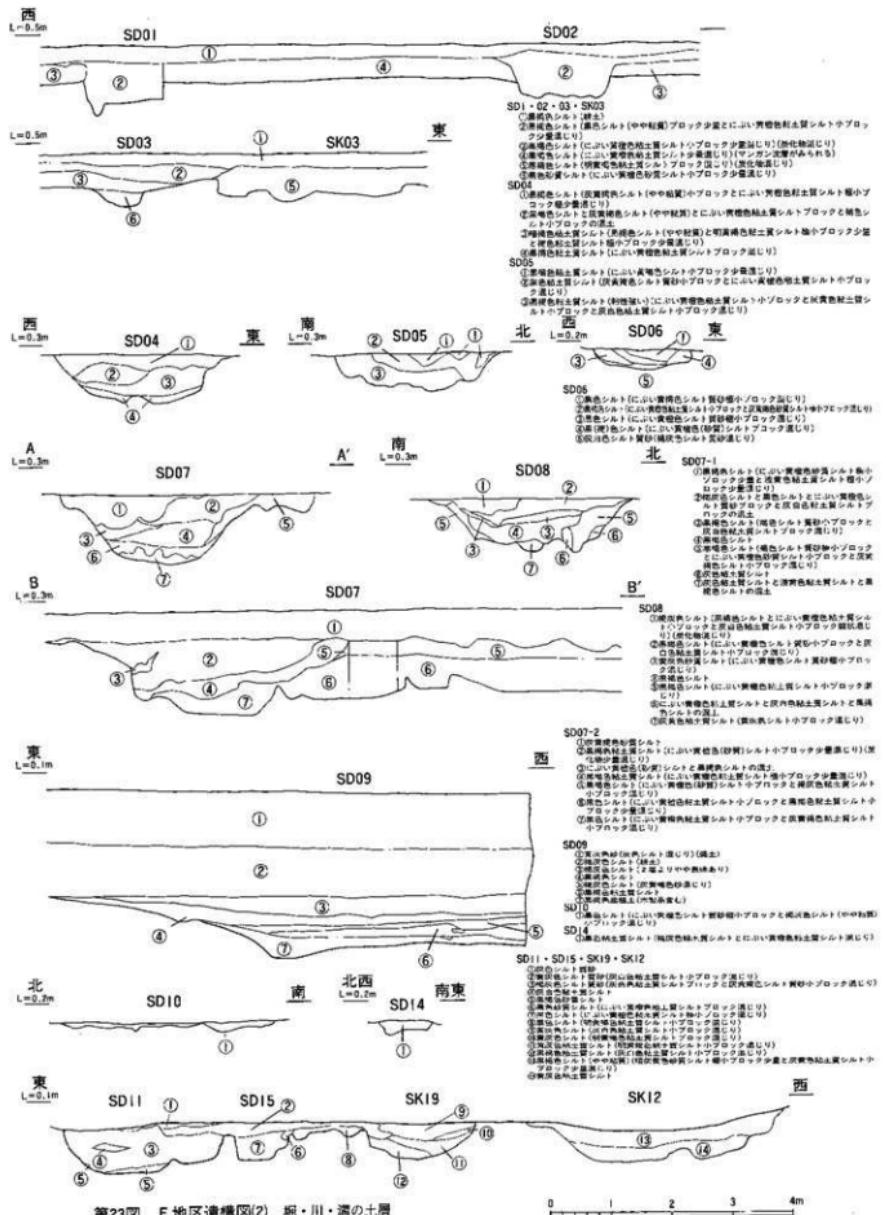
第20図 C地区遺構図(4)・D地区遺構図(1) 道・窓の上層



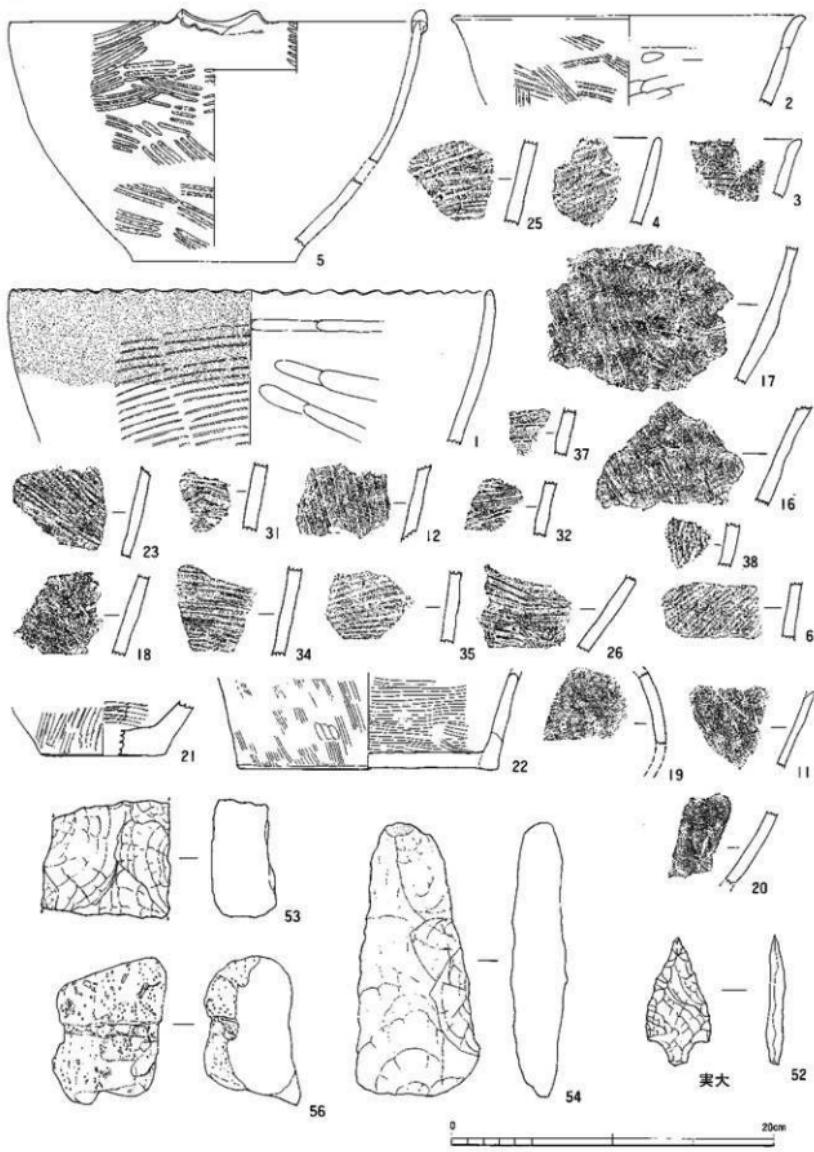
第21図 D地区造構図(2) 建物SB01の平面・柱穴断面



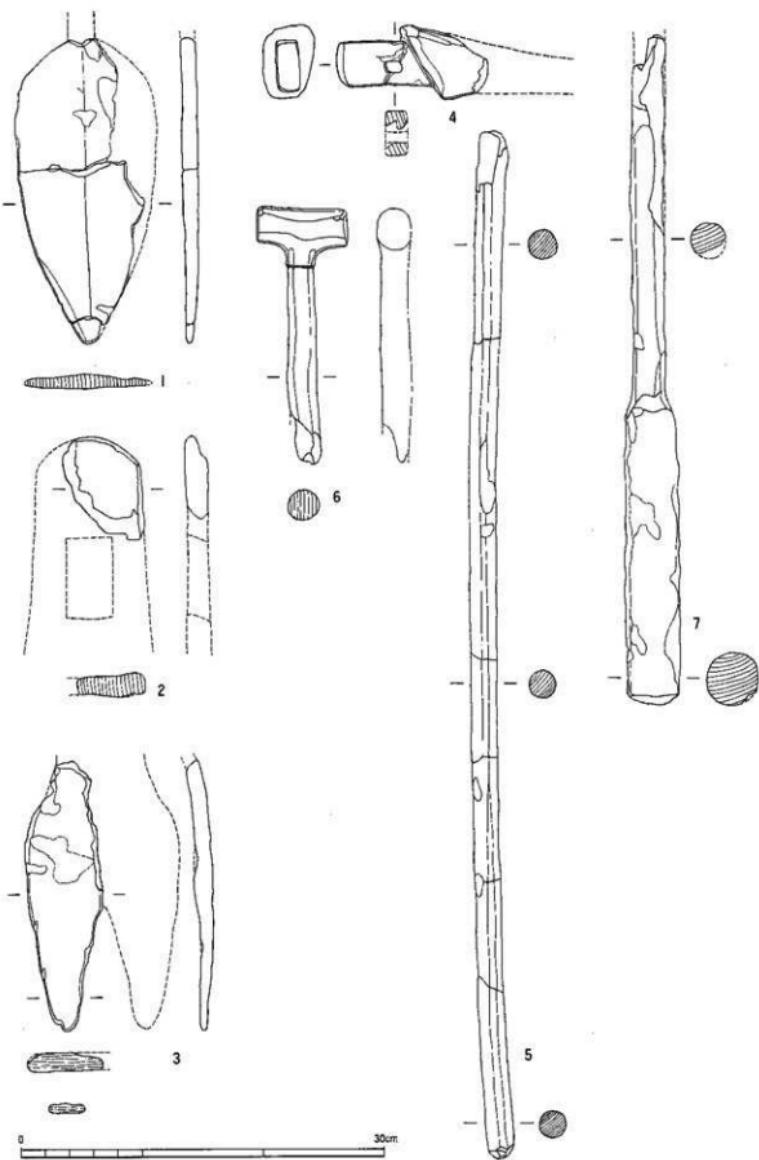
第22図 E 地区透構図(1) 道路 SX01・探土穴ほかの土層



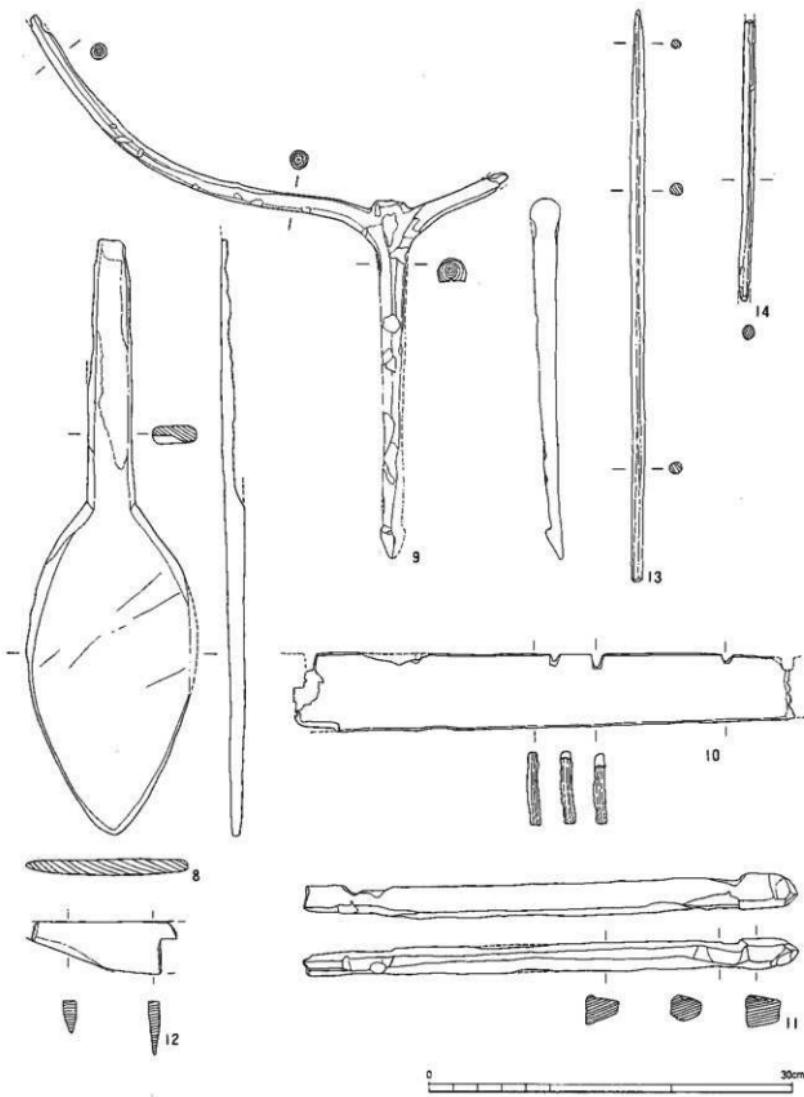
第23図 E地区遺構図(2) 塙・川・溝の土層



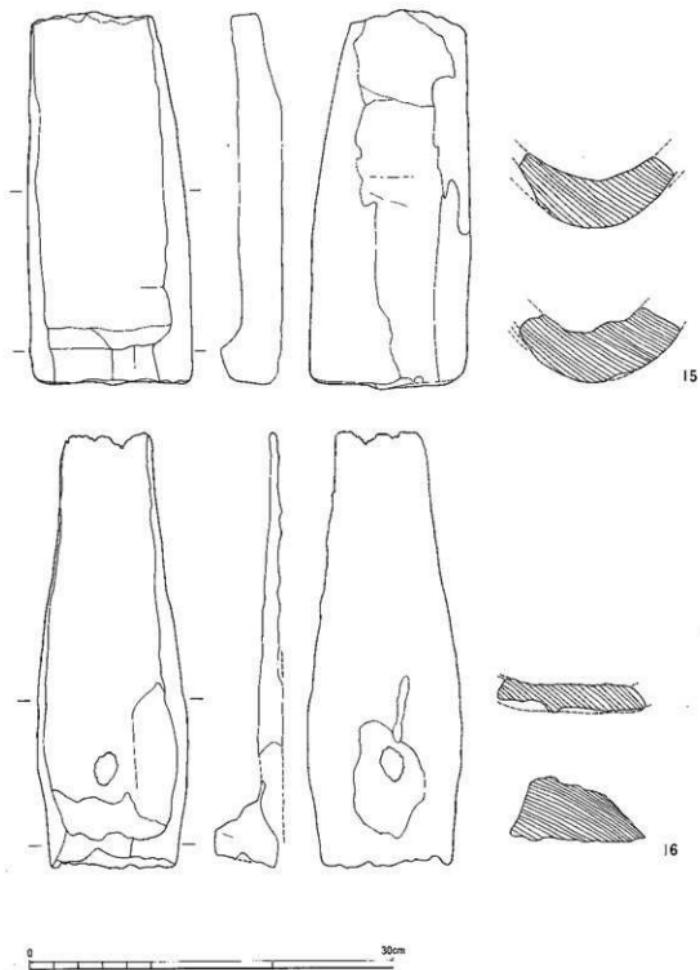
第24図 A地区遺物図(1) 裝文土器・彌生土器・石器



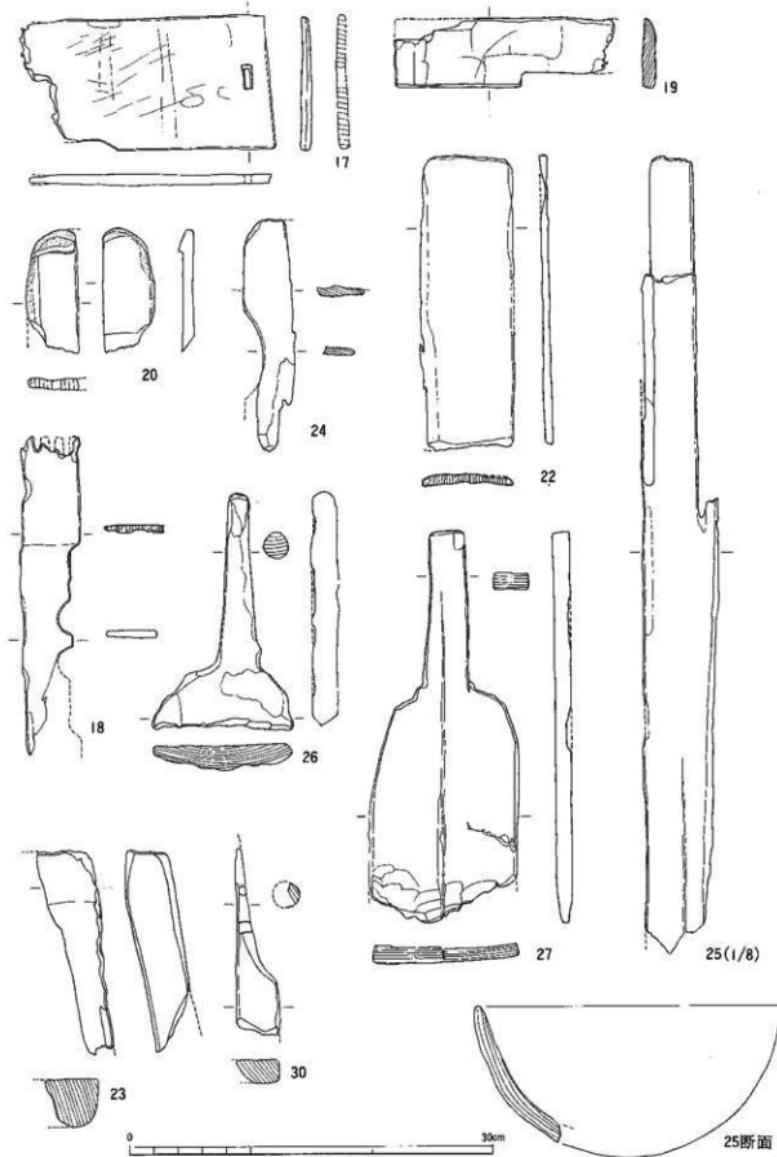
第25図 A地区遺物図(2) 弥生前期の木器(農具)



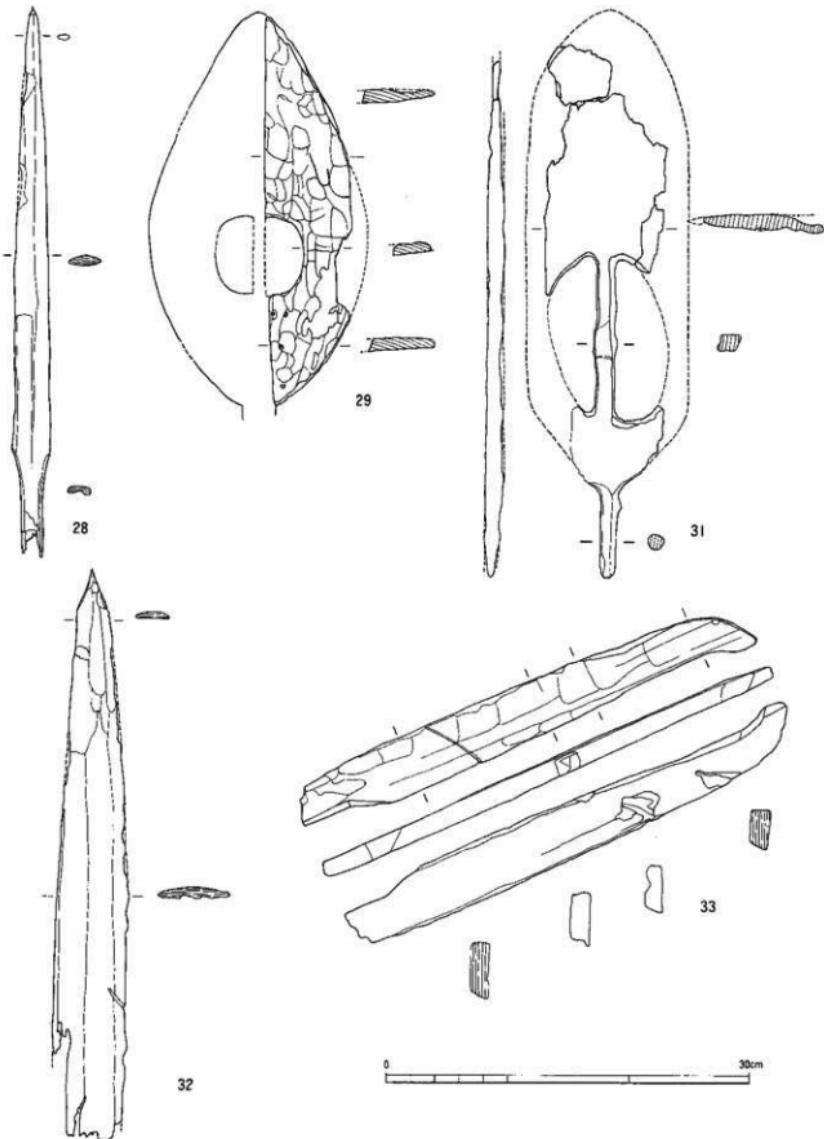
第26図 A地区遺物図(3) 弥生前前の木器(治労具・紡織具)



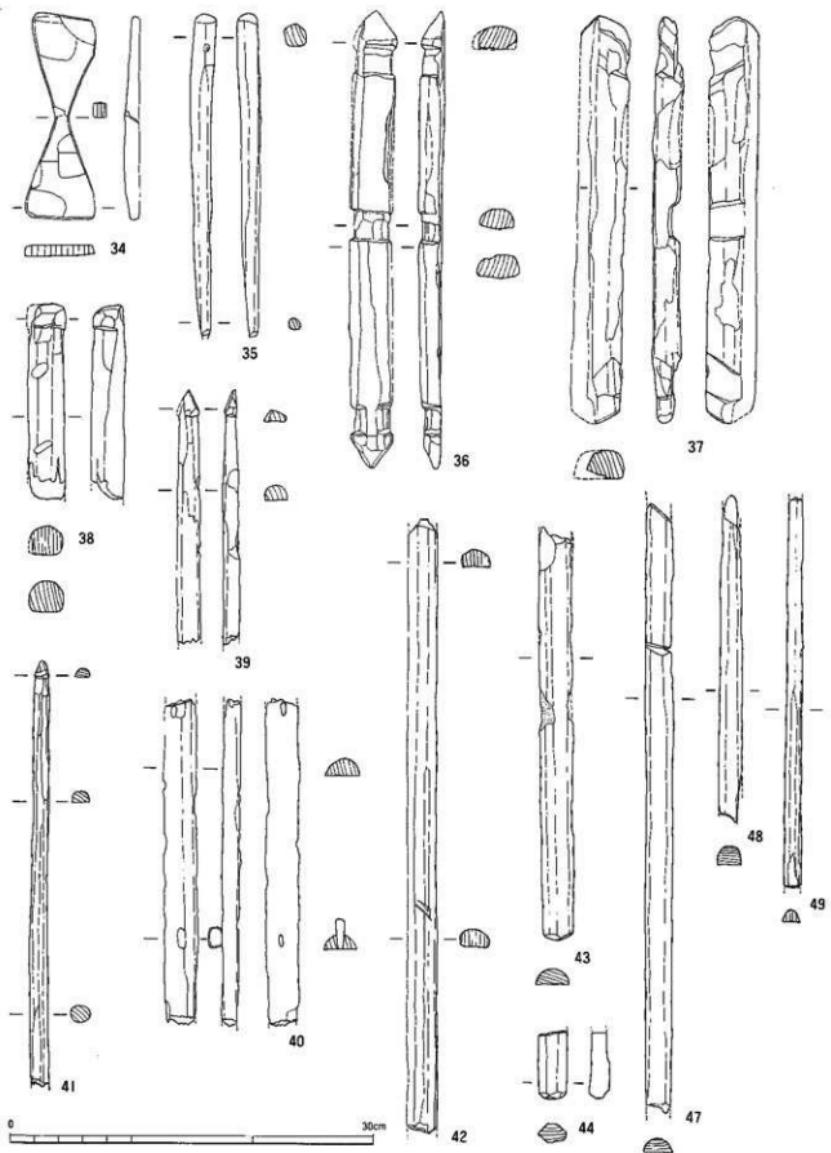
第27図 A地区遺物図(4) 弥生前期の木器(柶)



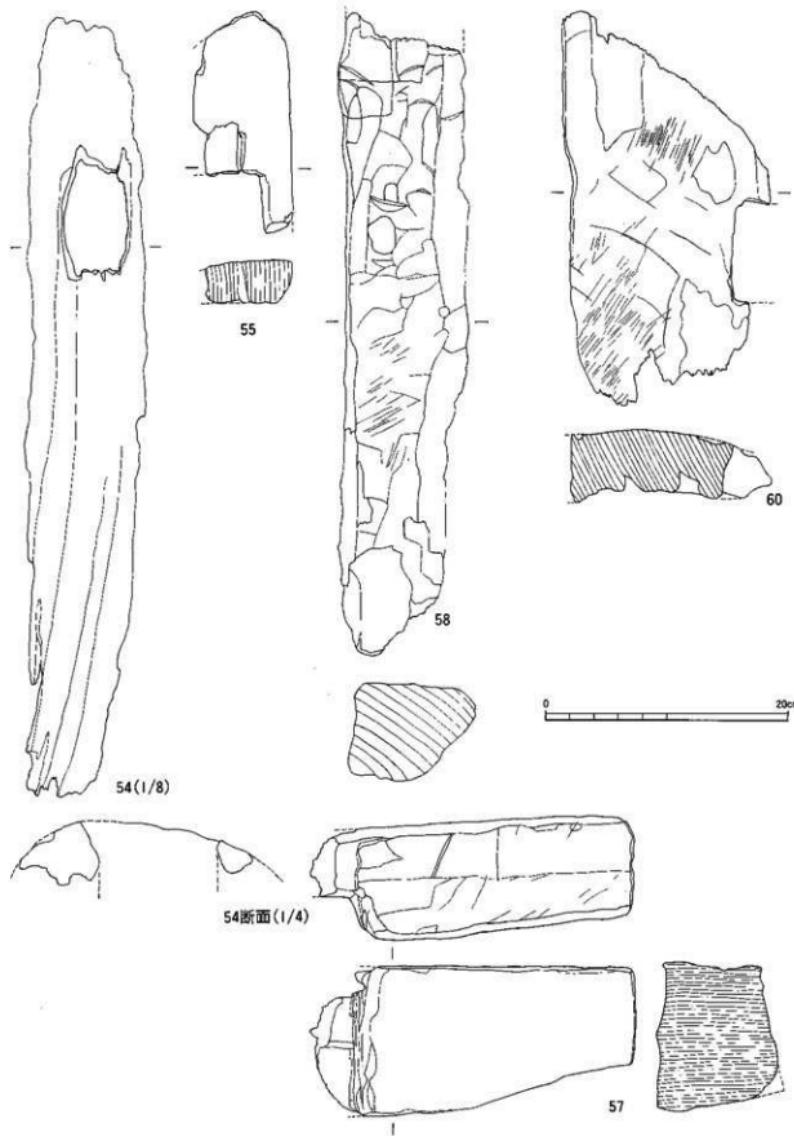
第28図 A地区遺物図(5) 弥生前期の木漆(箱・杓子・箸ほか)



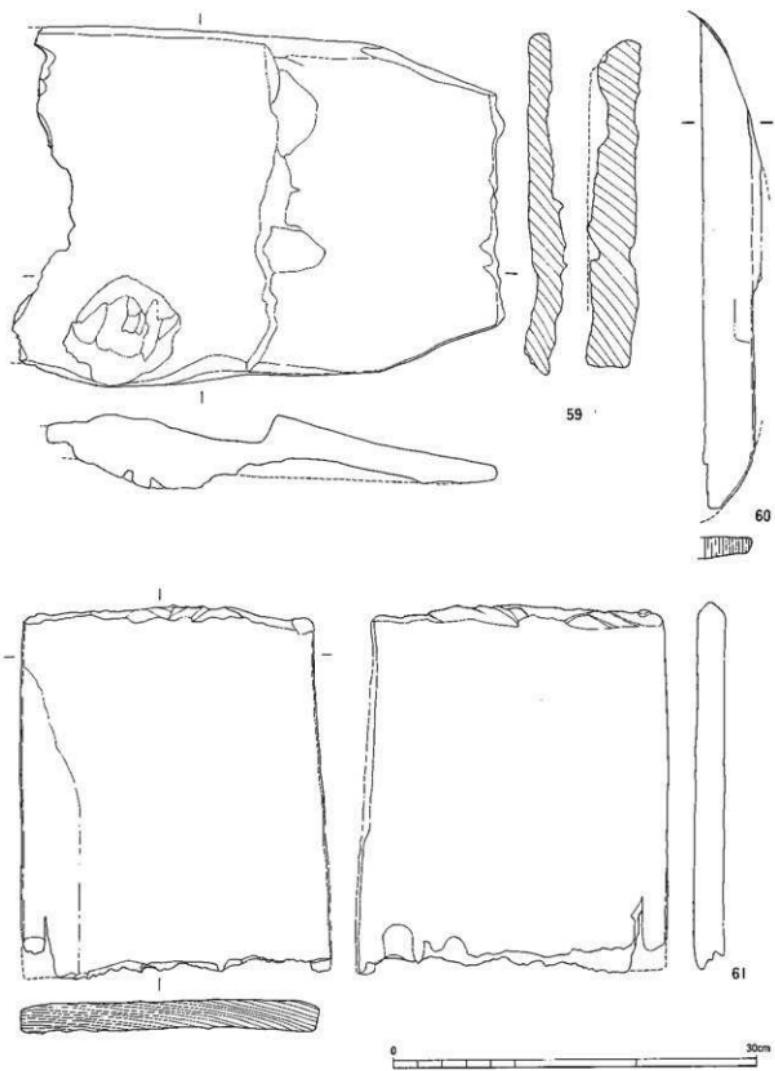
第29図 A地区遺物図(6) 余生前期の木器(剣形・鳥形はか)



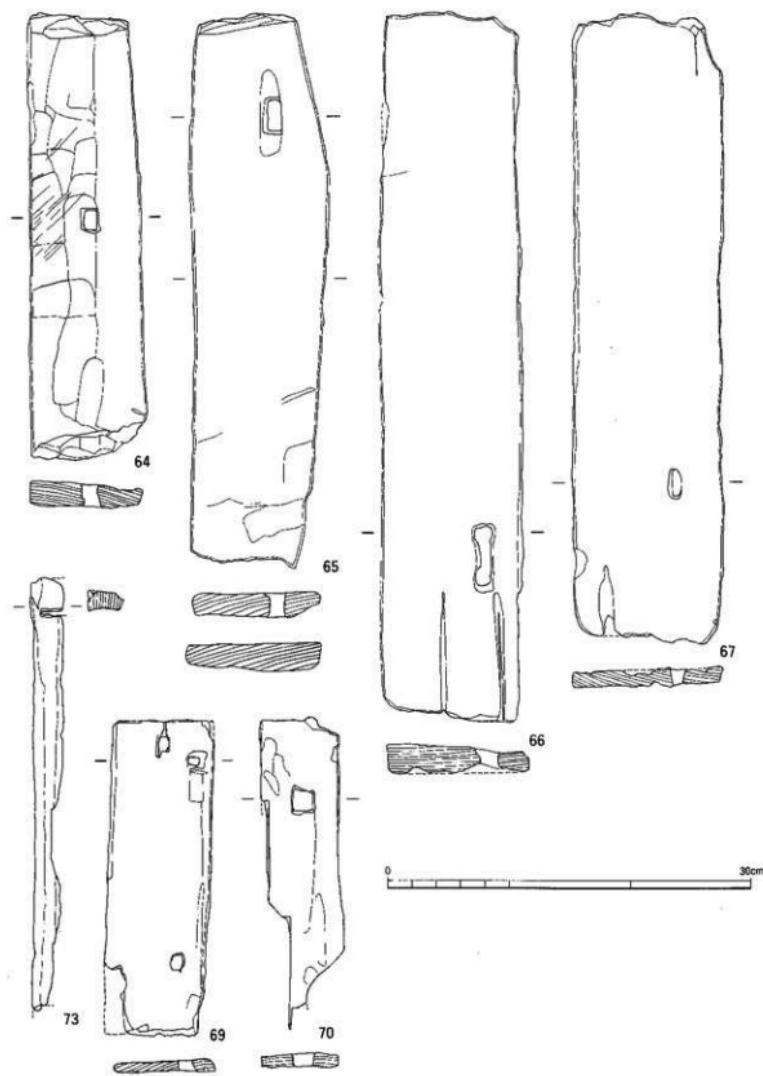
第30図 A地区遺物図(7) 弦生前期の木器(柄ほか)



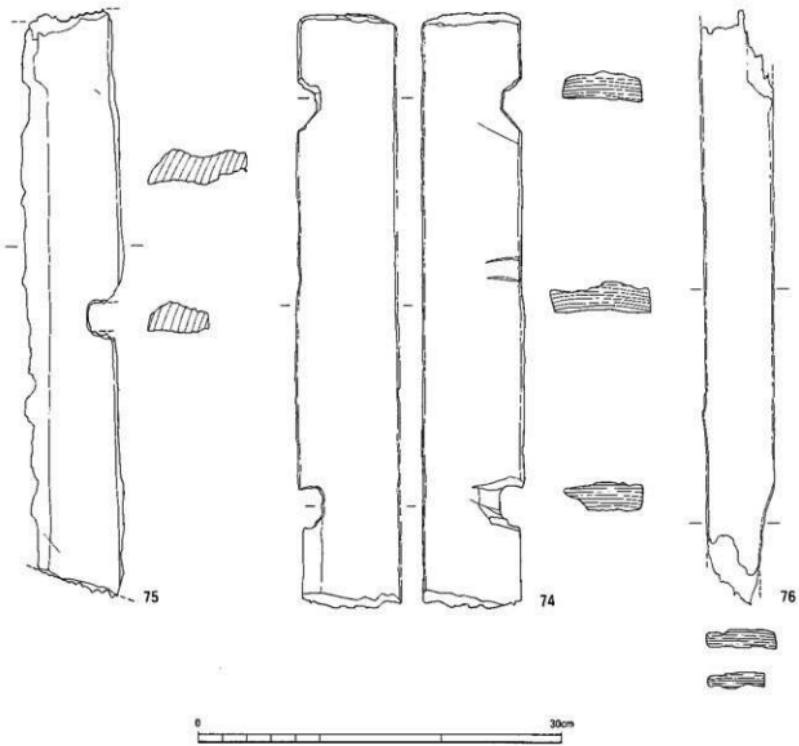
第31図 A地区遺物図(8) 弥生前期の木器(柱)



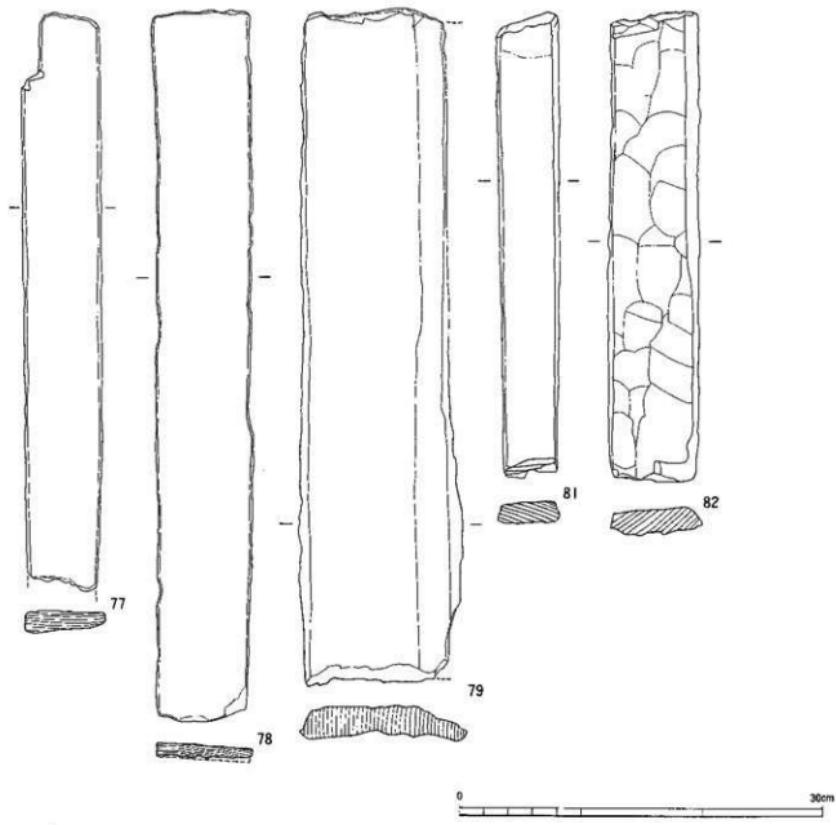
第32図 A地区遺物図(9) 新生前期内の木器(板)



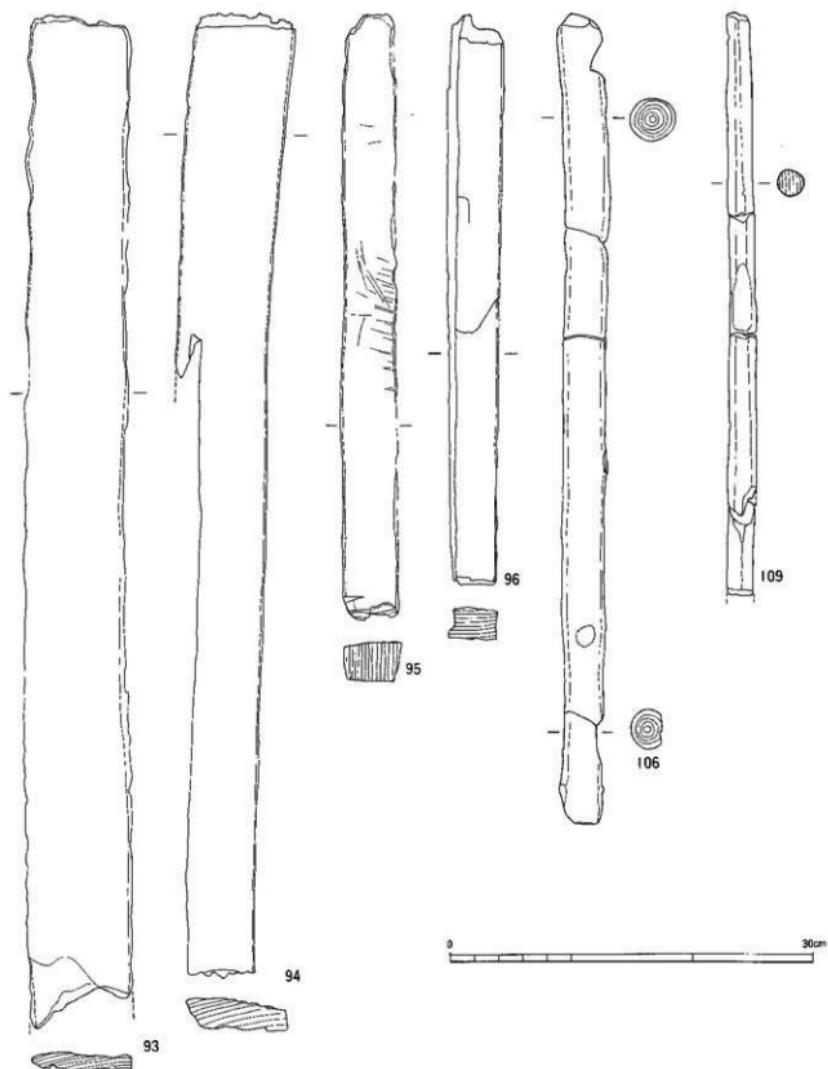
第33図 A地区遺物図(10) 弥生前期の木器(穴のある板)



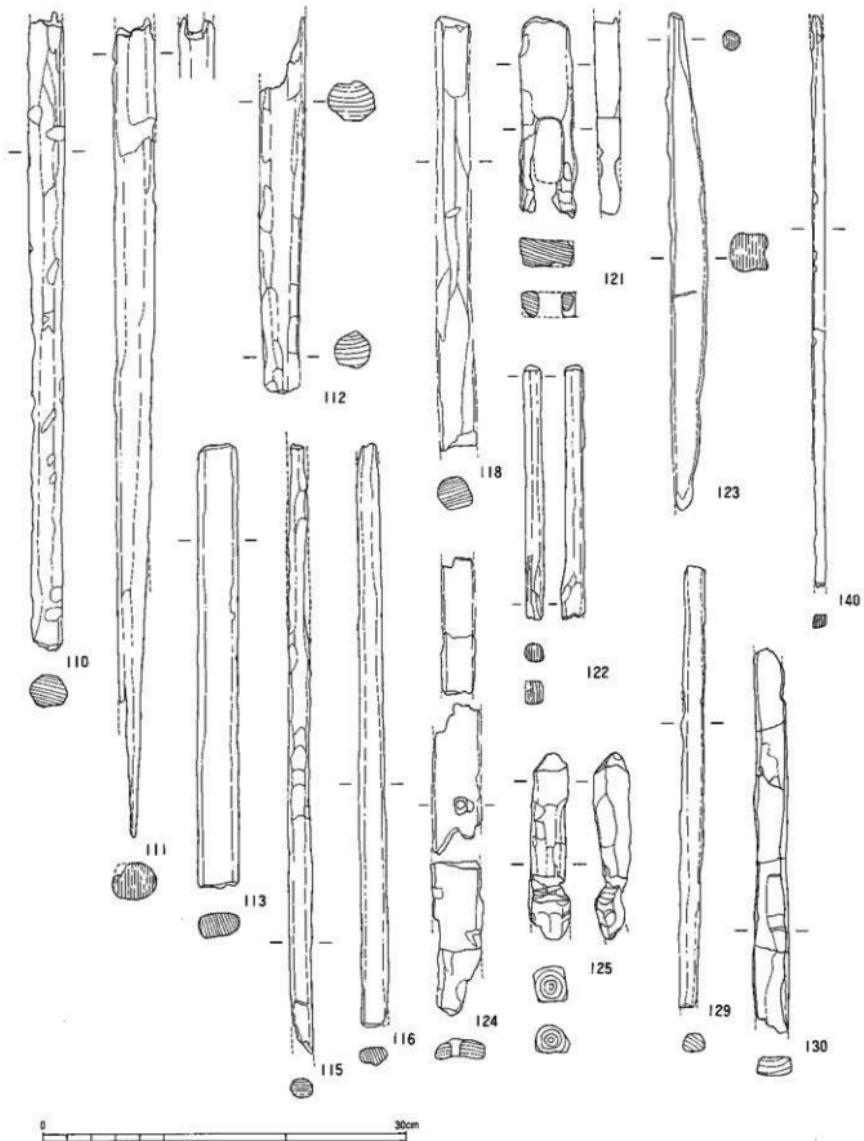
第34図 A地区遺物図(II) 畜生前期の木板(えぐりのある板)



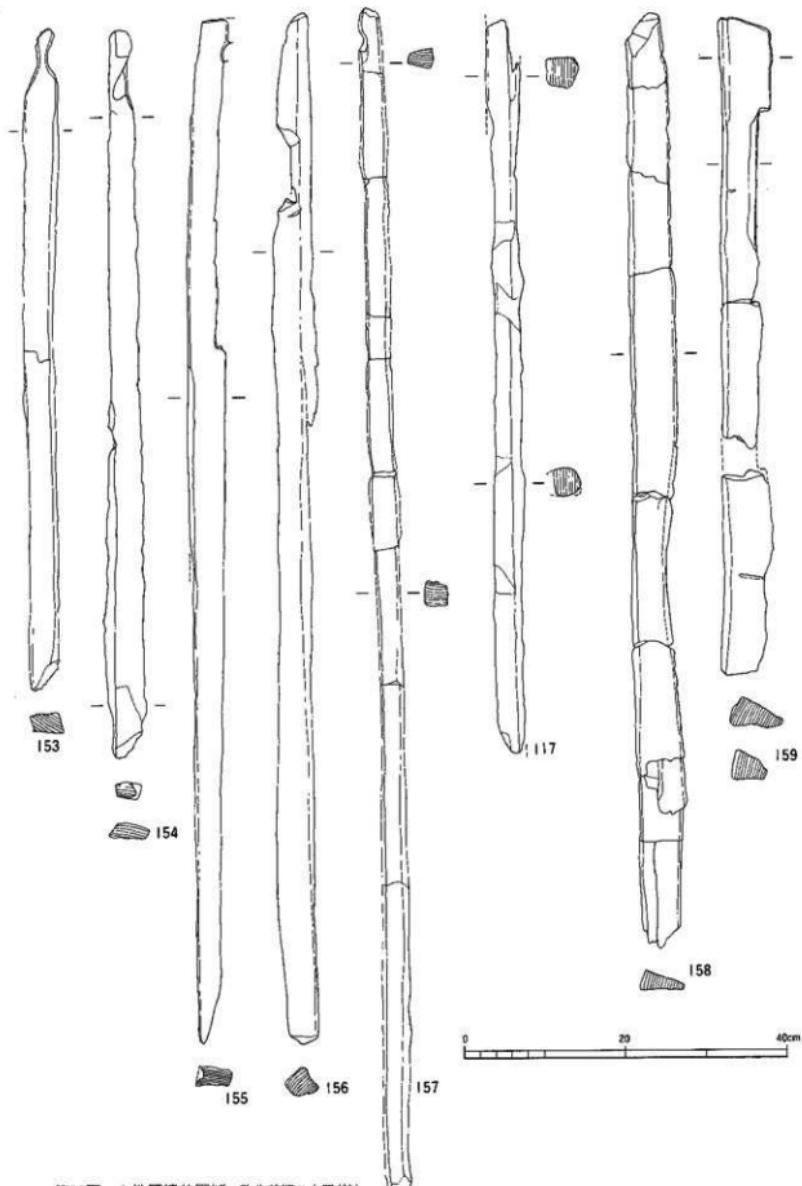
第35図 A地区遺物図(12) 弥生前期の木器(板)



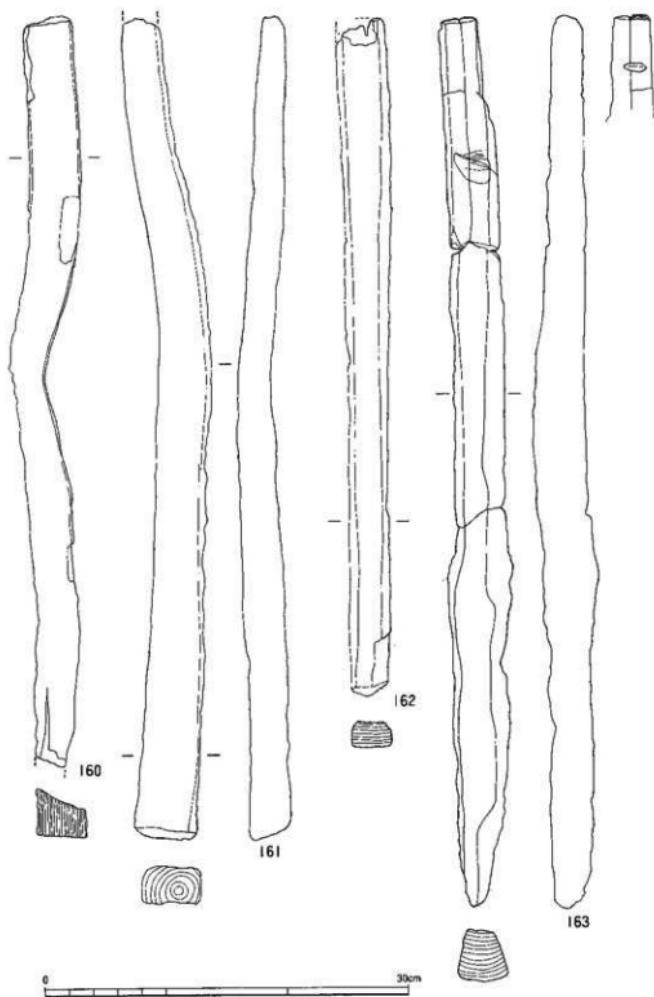
第36図 A地区遺物図(13) 弥生前期の木器(板・柱・棒)



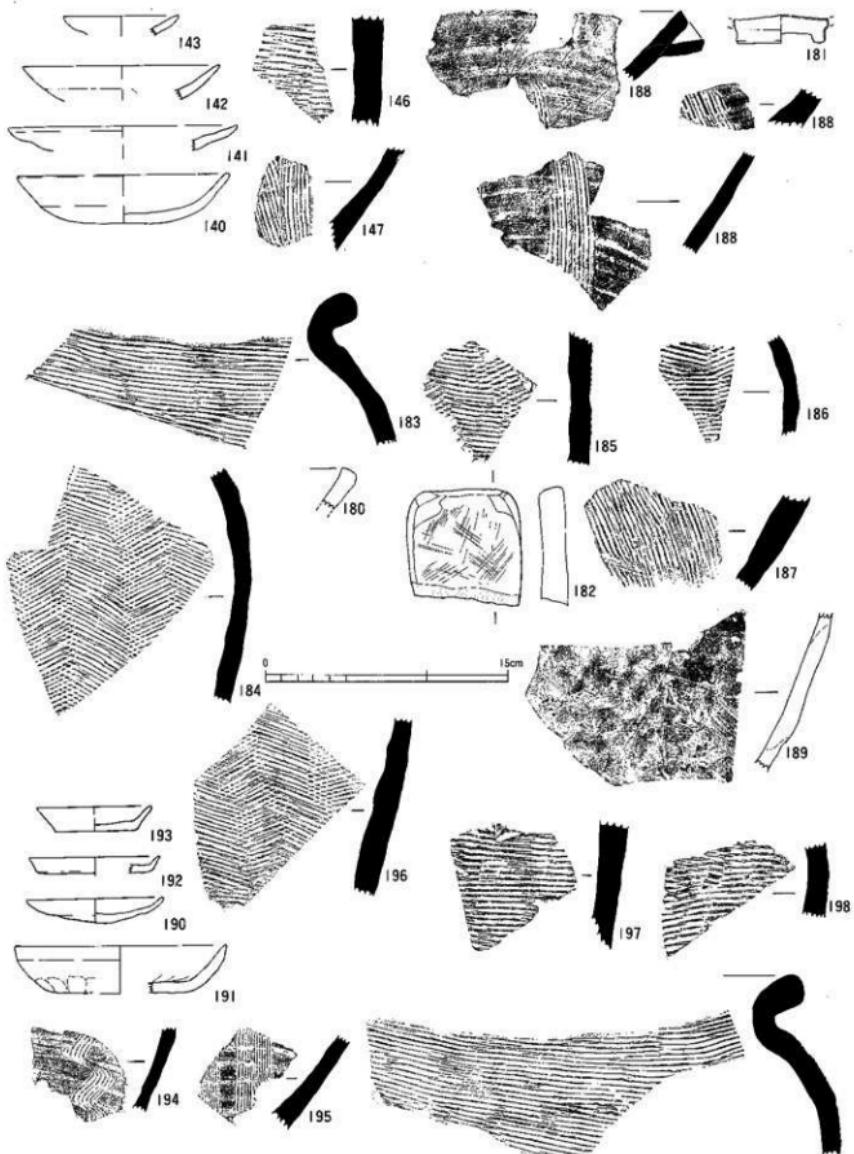
第37図 A地区遺物図(4) 先生前湖の木器(柄)



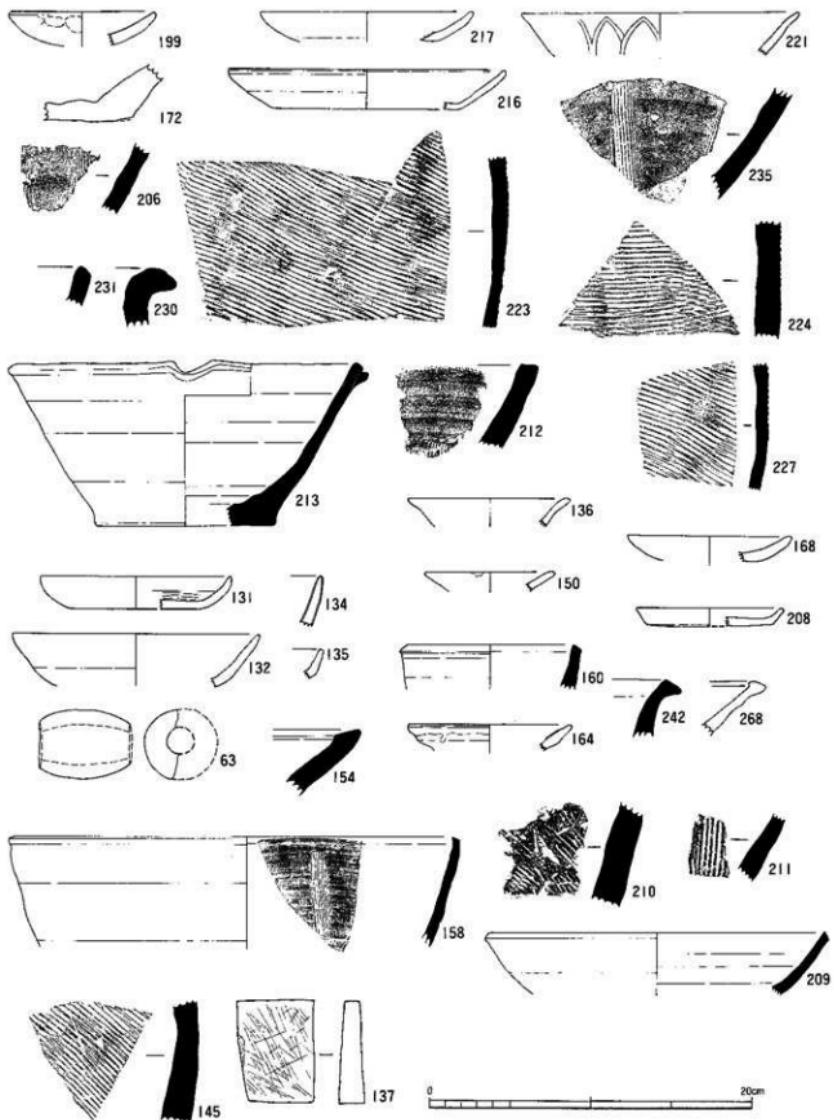
第38図 A地区遺物図(1) 猿生前期の木器(柱)



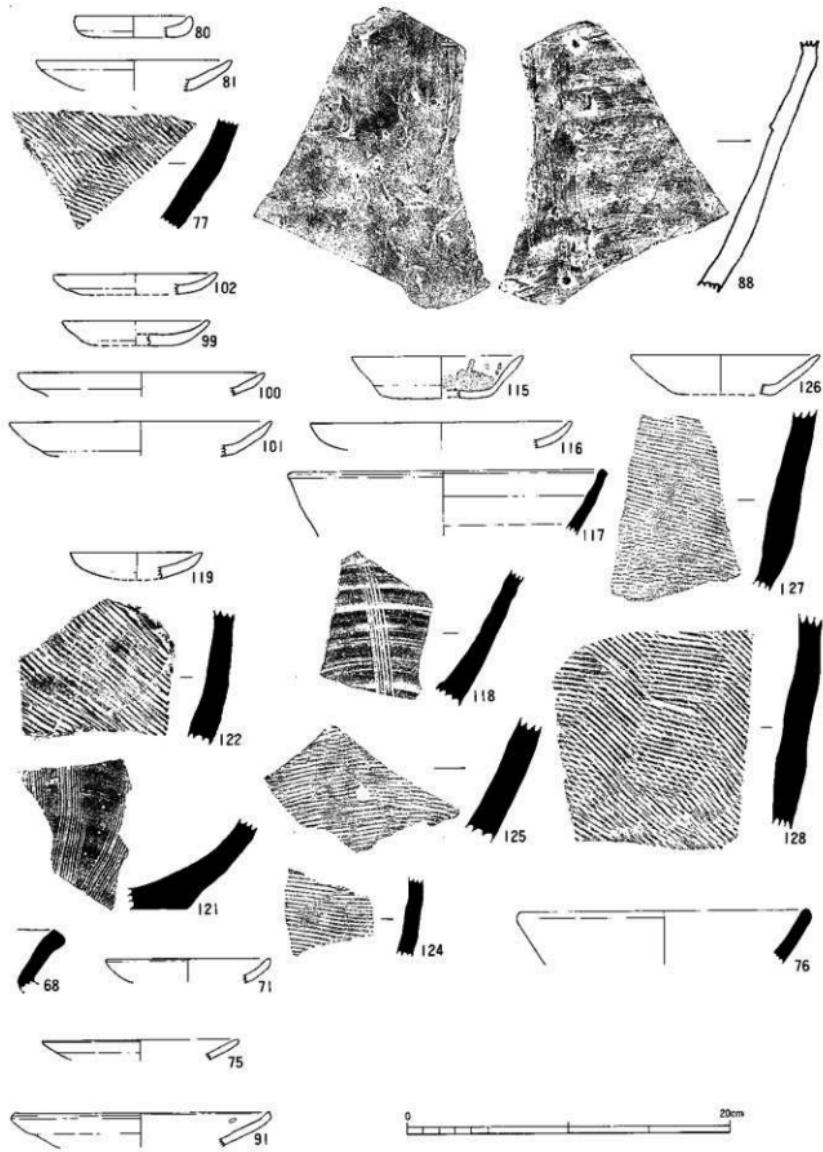
第39図 A地区遺物図(10) 赤生前期の木器(柱)



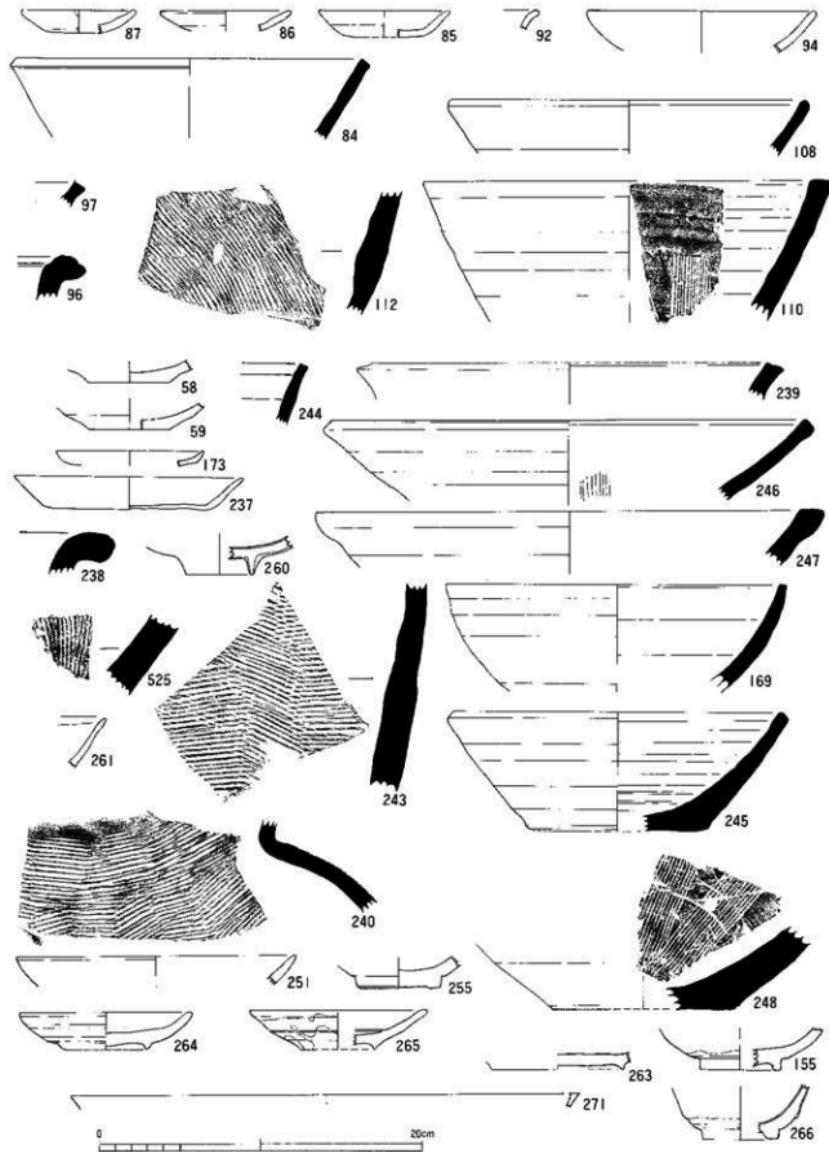
第40図 A地区遺物図(17) 中世の土器ほか SD05(140~147), SD18(180~189), SD24(190~198), SD31(222)



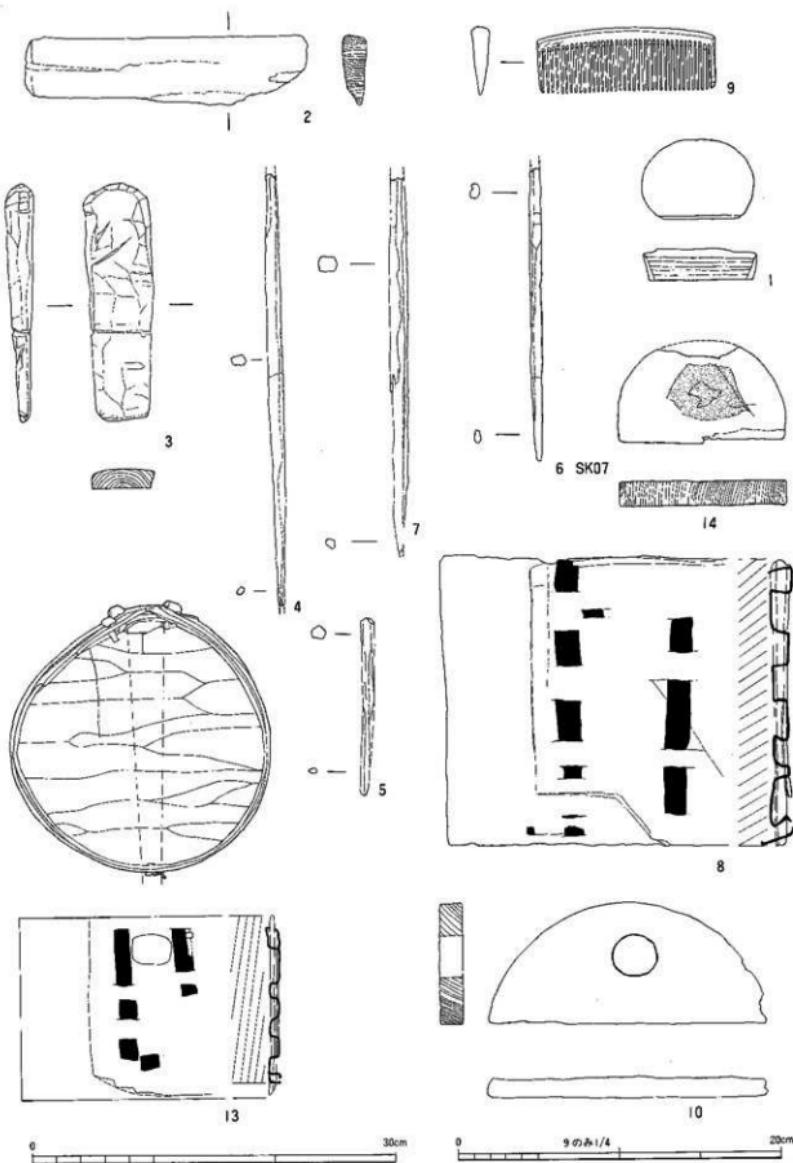
第41図 A地区遺物図8 中世の土器ほか SD30(172・199・206), SD31(216~235), SD34(212・213), SD01(63・131~136), SD02(136・137), SD12(150), SD13(158), SD14(160), SD15(164), SD05(145), SD25(168), SD32(208), SD33(209~211)



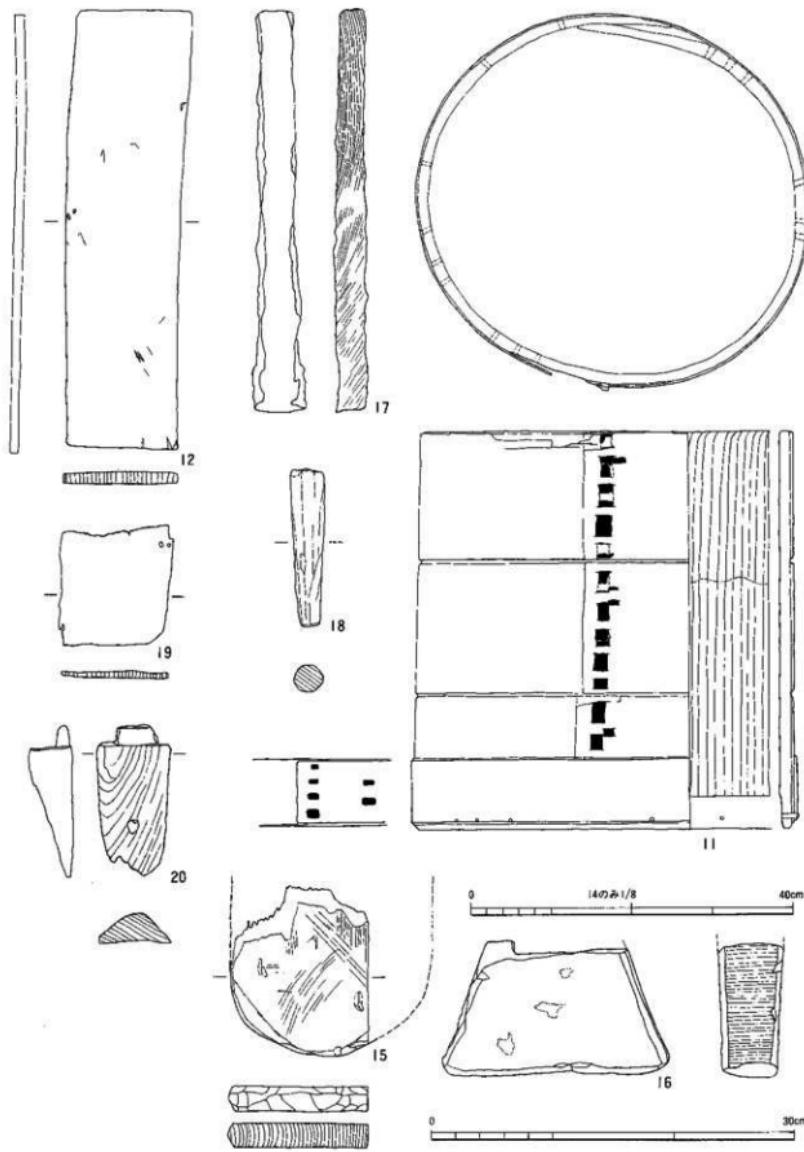
第42図 A地区遺物図(19) 中世の土器  
 SK07(77~88), SK57(99~102), SK58(115~118), SK64(119~122),  
 SK65(124~125), SK70(126~128), SK03(68・71), SK05(75),  
 SK07(76), SK09(91)



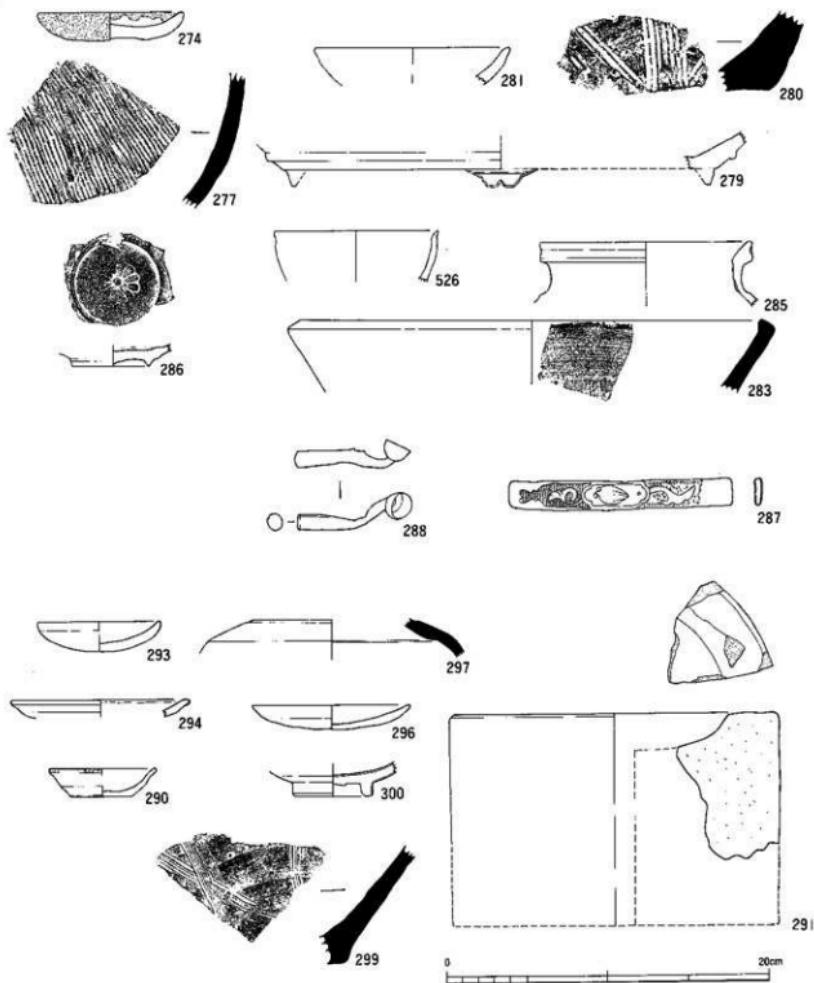
第43図 A地区遺物図20 中世・近世の土器 SK08(84~87), SK13(92), SK36(94), SK46(97), SK47(96), SK53(108~112), SD18上面(173), SD30上面(169), SD11上面(155)



第44図 A地区遺物図(2) 中世・近世の木器(櫛・箸・曲物ほか) SK03(1・2), SK05(3), SK07(4~9), SK08(14), SK65(13), SK33(10)

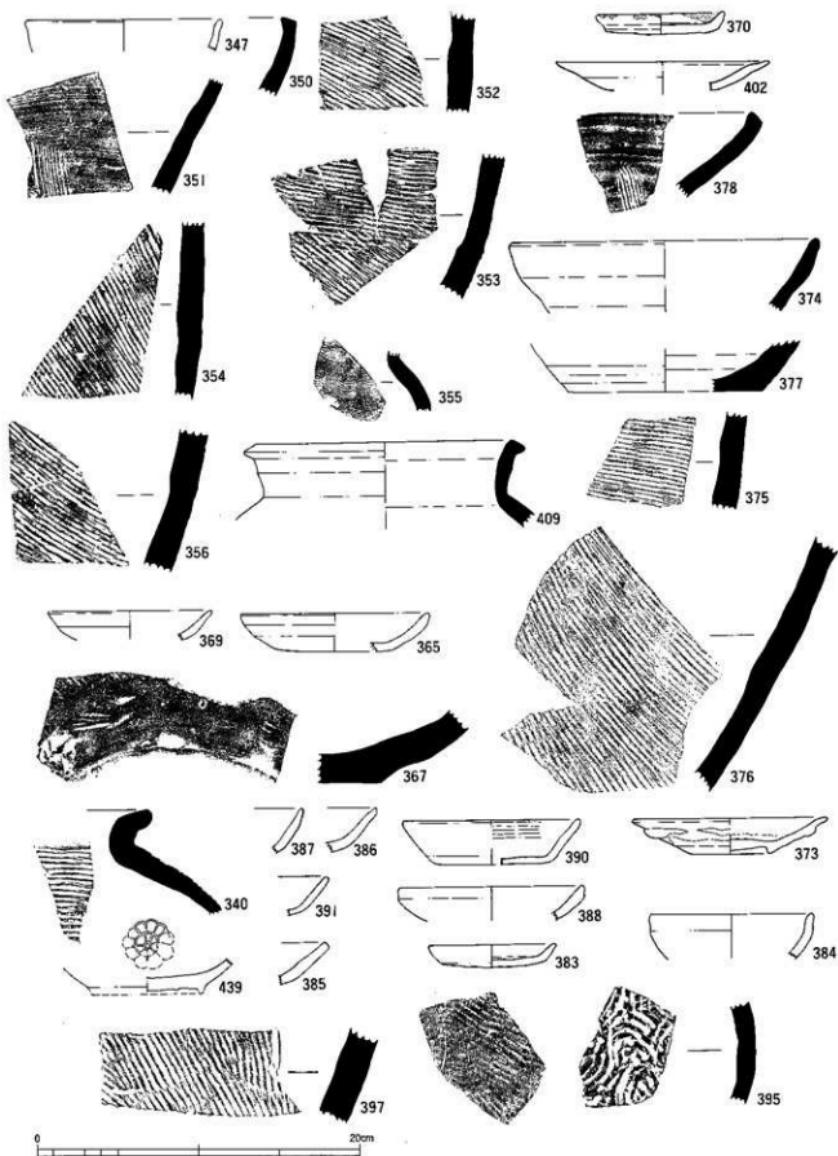


第45図 A地区遺物図22 中世・近世の木器(折筋・曲物・下駄ほか)  
SK64(11), SK65(12), SD11(15), SD16(16), SD24(17~20)



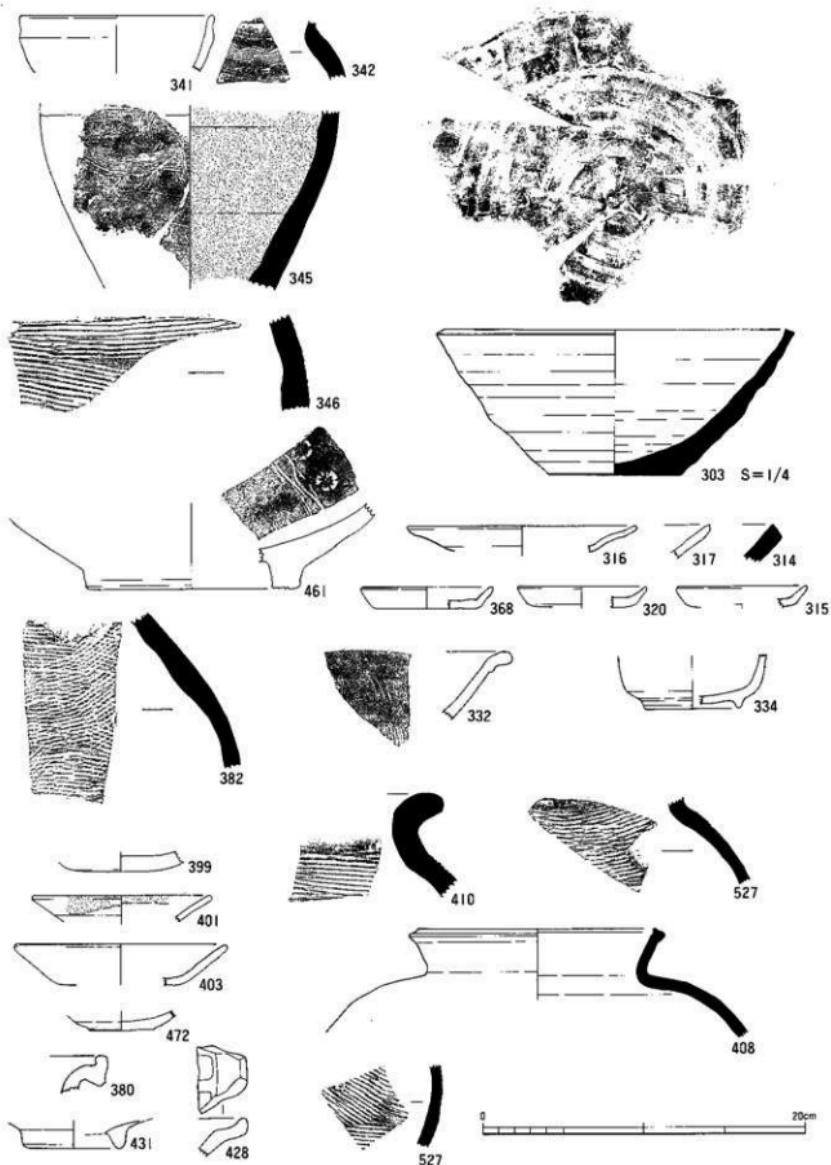
第46図 B地区・D地区遺物図 中世・近世の上器・金属製品・茶磨

B地区：SD02(274～279), SD03(280), SD04(281), SK06(283) D地区：SD01(293), SD02(294), SD04(290～291), SD05(297)



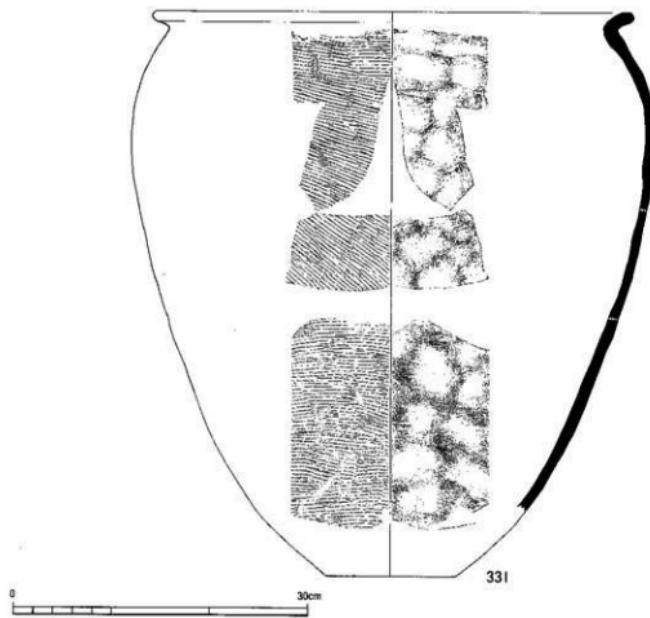
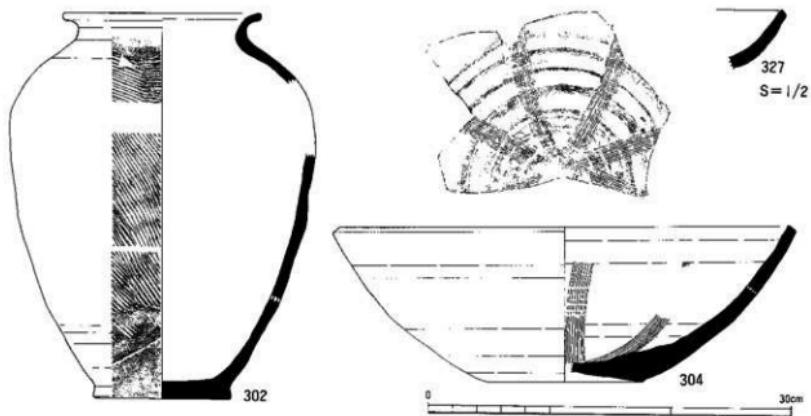
第47図 C地区遺物図(1) 中世・近世・古代の土器

SD03(347~354), SD07(356), SD08(355~409), SD17(365~369), SD20(370~378+402), SD01(340), SD04(383~397+439)

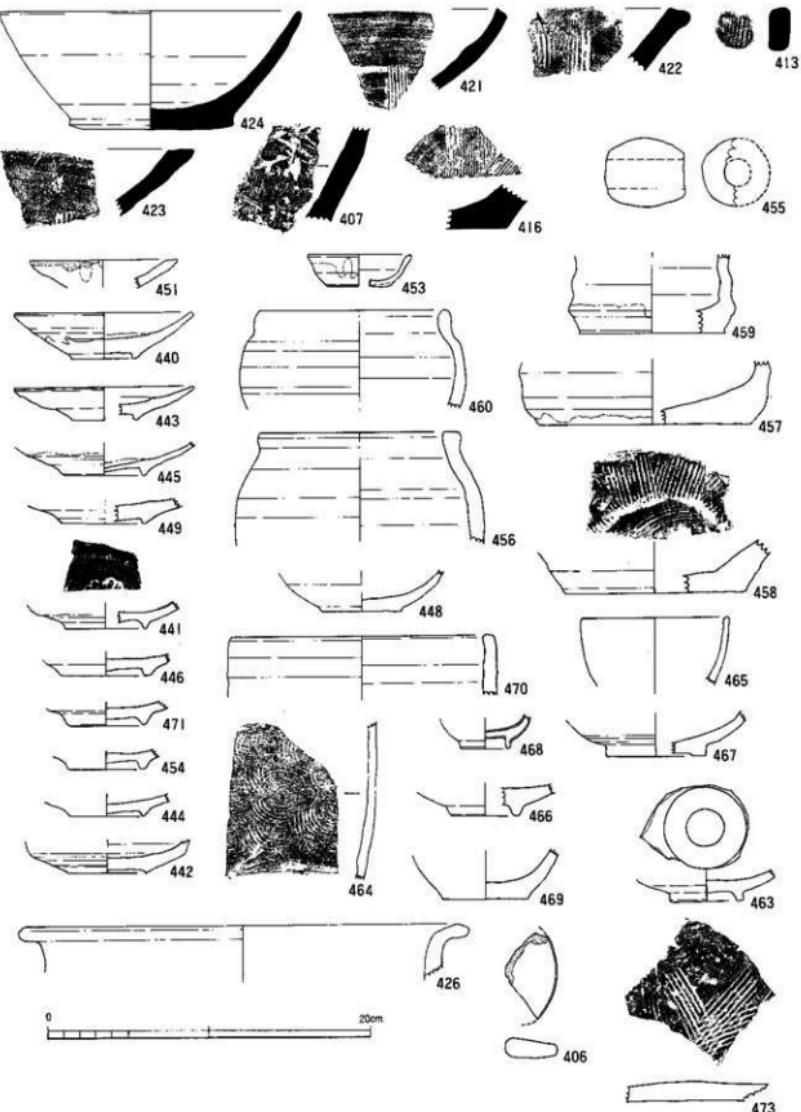


第48図 C地区遺物実測図(2) 中世・近世の土器

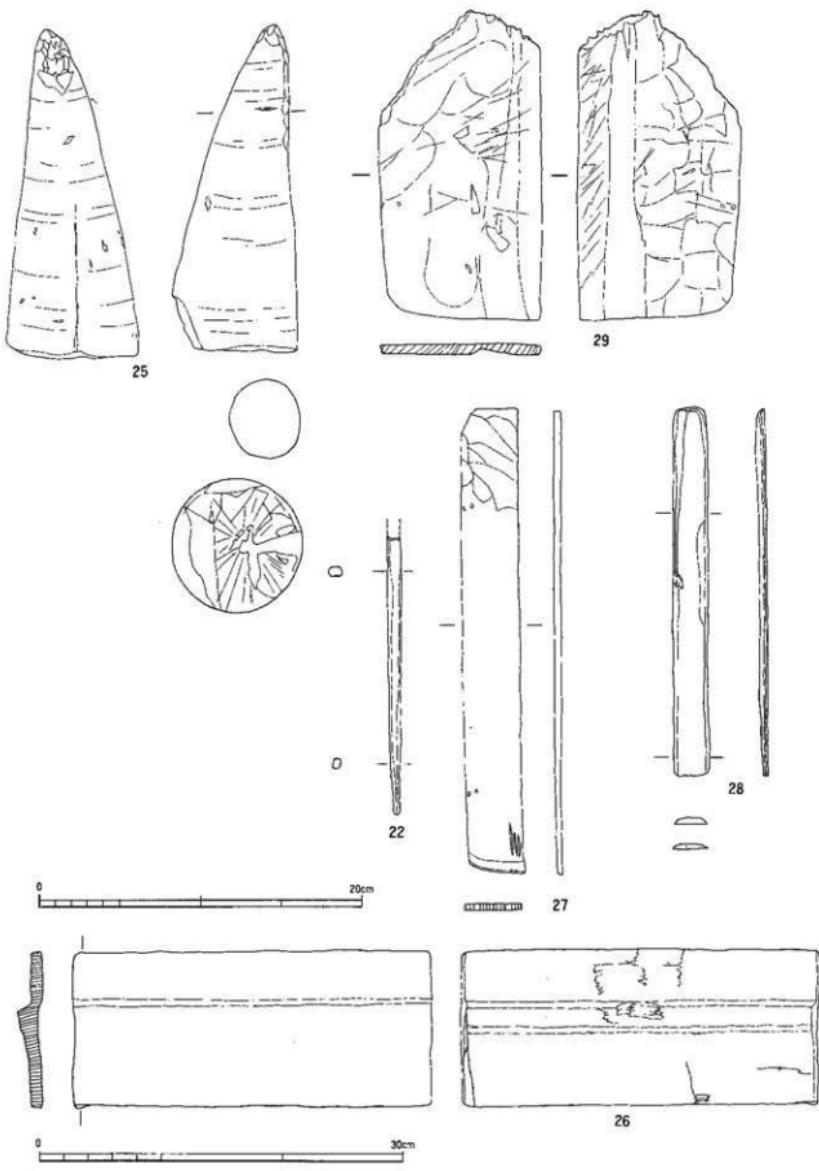
SD02(341~346), SD06(461), SD23(380~382), SK01-P02-SD02(303), SK04(314), SK11(315~317-320~368), SK24(332), SK27(324)



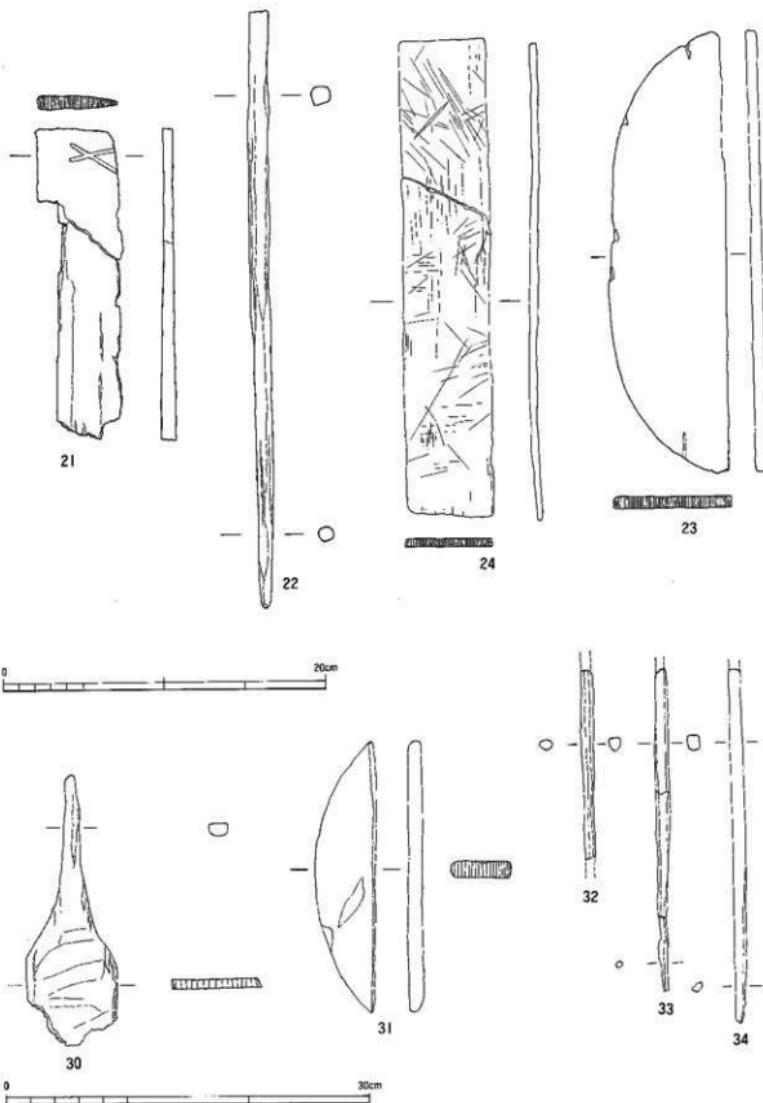
第49図 C地区遺物実測図(3) 中世の土器 SK02・P01・P02(302), SK02・P01・SD03・X111Y122(331), P01(304), P25(327)



第50図 C地区遺物図(4) 中世・近世の土器

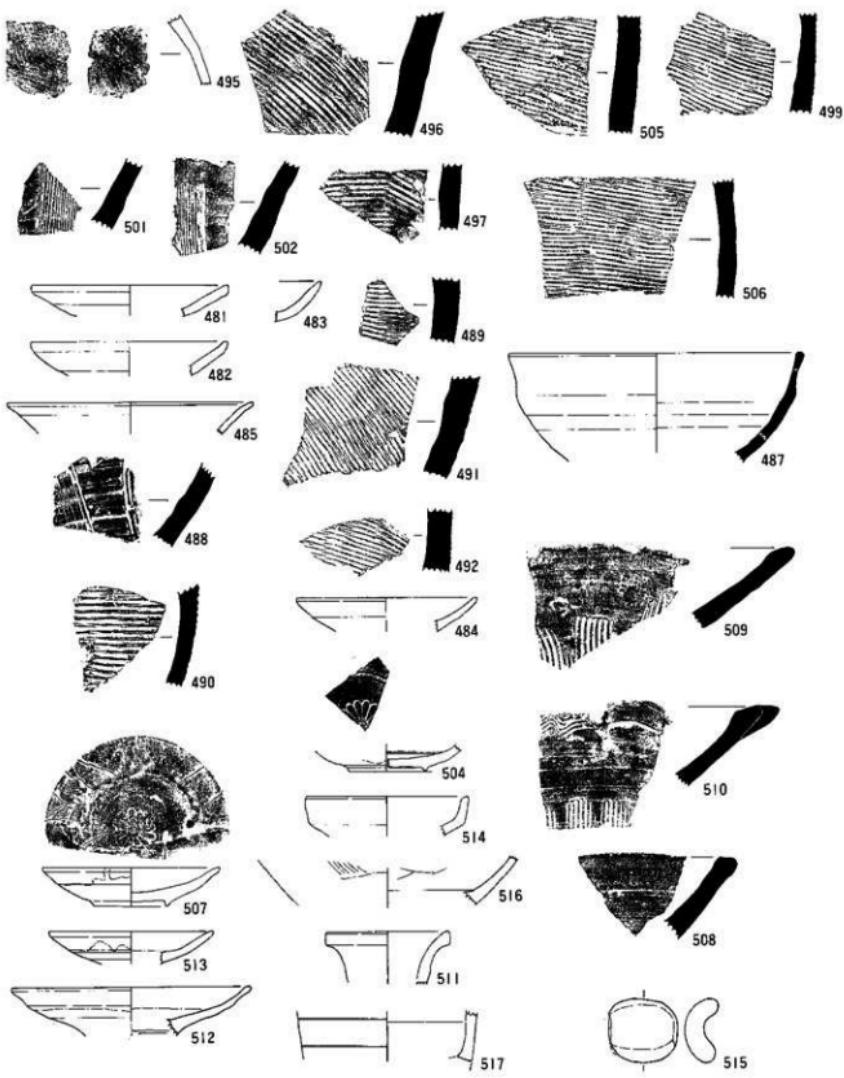


第51図 C地区遺物図(5) 中世の木器(折敷・板ほか) SK11(22), SD17(25~29)



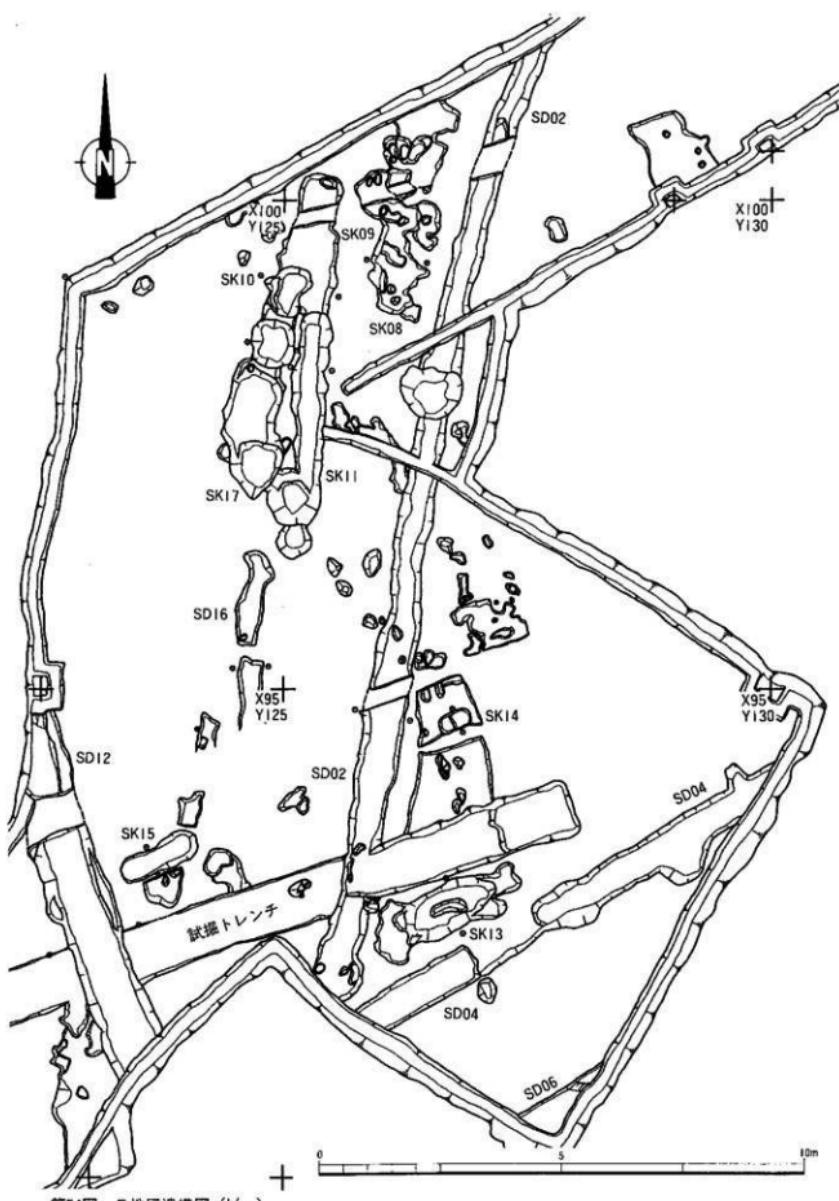
第52図 C地区遺物図(6) (D・E地区含む) 中世の木器(折敷・箸・柄ほか)

C地区: SK11(21・22), SK39(23・24), X120Y114(30) D地区: SD02上面(31) E地区: SK01(32~34)

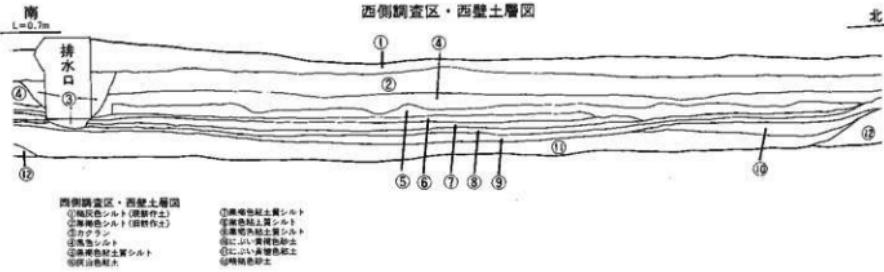
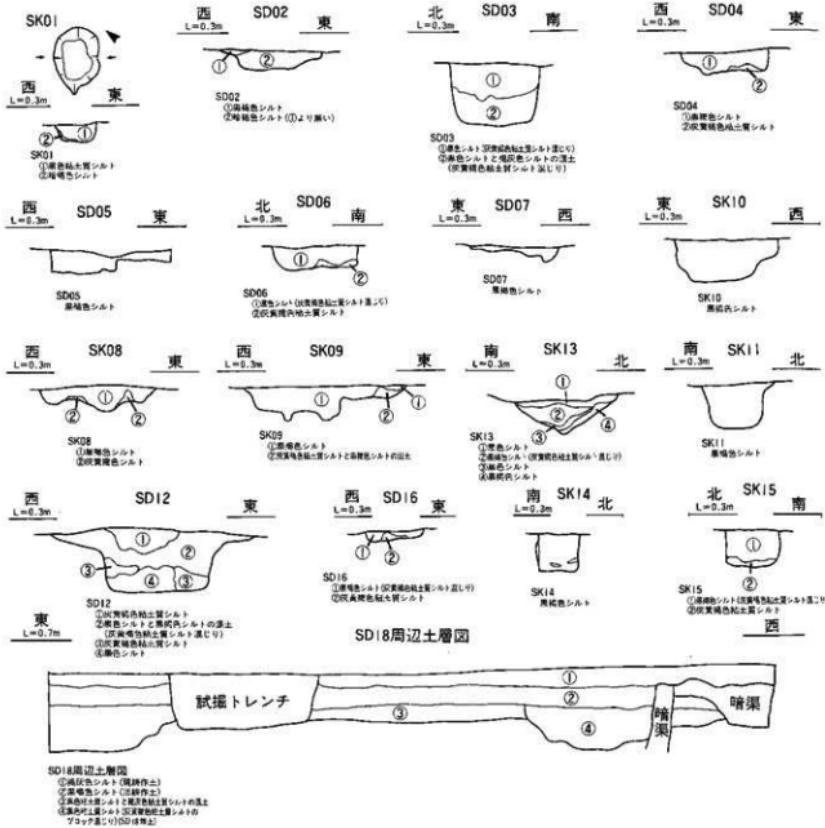


第53図 E地区遺物図 中世・近世の土器

SD04(495), SD05(496・497・501・502), SD07(499・505), P01(506), SK01(481～492), SD11(504)



第54図 F地区造構図 (1/100)



第55図 F 地区遺構図

表2 採土穴計測表(I)

地区名	造形番号	形 状	長 軸 (m)	短 軸 (m)	深 さ (m)	掘 剤 土量(m <sup>3</sup> )	時 期	出 土 遺 物	備 考
A地区	1	不明					近世か		ほとんどが調査区外
	2	方形	(1.1)	1.3	0.5		中世か	珠洲	
	3	方形		3	2.7	0.6	4.9	中世	土師器皿・珠洲・八尾
	4	円形		1.4	1.2	0.55	2.9	中世	珠洲
	5	楕円形(方形?)	2.2	1.5	0.6		2	中世か	珠洲・カマド壁
	6	楕円形		2.7	1.6	0.45	1.9	中世か	珠洲
	9	方形		4.3	1.6	0.5	3.4	近世	土師器皿
	11	楕円形		3	1.5	0.35	1.6	近世	
	12	方形		1.5	1.3	0.2	0.6	近世	採土穴ではない可能性あり
	13	方形	(3)	(2)	0.7		近世	土師器皿	
	14	方形		4.3	1.6	0.55	3.7	近世	
	15	不明			0.55				SK14・SK16に切られ形状不明
	16	円形		2.2	2.2	0.5	2.4	近世	
	17	円形		1.6	1.4	0.65	1.1	近世	
	18	楕円形		2.3	1.6	0.6	2.2	近世	
	19	楕丸方形	(1.4)	1.2	0.3		近世		
	20	楕円形		2.4	1.5	0.65	2.3	近世	
	21	楕円形		2	1.2	0.35	0.8	近世	
	22	方形		1.8	1.6	0.6	1.7	近世	
	23	方形		1.8	(1.8)	0.6		近世	
	24	楕円形?		2.6	1.2	0.55	1.7	近世	珠洲
	25	円形		2.2	2.2	0.6	2.3	近世	
	26	円形		1	1	0.3	0.2	近世	
	26-2	円形		1	1	0.35	0.3	近世	SK14・SK16に切られ形状不明
	27	楕円形?				0.5		土師器皿	調査区外へ延びる
	28	方形	(3)	1.7	0.5		近世		
	29	方形		3.1	1.8	0.45	2.5	近世	
	31	方形?				0.6			調査区外へ延びる
	32	円形?	(1.8)	(1.6)	0.65		近世		調査区外へ延びる
	33	方形		2.1	2.1	0.5	2.2	近世	
	34	方形		1.7	1.5	0.5	1.3	近世	
	35	方形		2.3	(1.5)	0.5		近世	
	36	方形		2.8	1.6	0.35	1.6	近世	唐津

空欄は不明、( )内数値は推定値

表3 採土穴計測表(2)

地区名	測査番号	形 状	長 軸 (m)	短 軸 (m)	深 さ (m)	掘 土量 (m <sup>3</sup> )	時 期	出 土 遺 物	備 考
A地区	37	方形	3.2	2.1	0.45	3	近世		
	38	方形		2	1.9	0.5	1.9	近世	
	39	方形		2.6	2.5	0.5	3.3	近世	調査区外へ延びる
	40	不明				0.6			SK13と切り合いあり
	41	隅丸方形		3.4	3.2	0.35	3.8	近世	
	43	方形		2.4	2.4	0.85	4.9	中世後	珠洲
	44	橢円形		2.3	1.4	0.65	2.1	近世	調査区外へ延びる
	45	方形	(2.5)	1.8	0.6		近世		
	46	凹形		1.8	1.8	0.65	1.7	中世後	珠洲・鉄滓(混入)
	47	方形		3.3	1.2	0.55	2.6	中世後	土師器皿・珠洲
	48	橢円形	(1.5)	1.3	0.5		中世後	珠洲	
	49	方形		2.3	1.9	0.7	3.1	近世	
	50	方形		2.5	2.3	0.6	3.8	中世後	
	51	方形		3	2.4	0.5	3.6	近世	
	53	方形		3.9	1.6	0.65	4.1	中世後	土師器皿・珠洲
	54	方形		1.6	1.3	0.6	1.2	中世後	
	55	方形		1.6	1.3	0.5	1	中世後	
	63	方形?		2.8	1.5	0.5	2.1	中世後	珠洲・瀬
	67	橢円形		2	1.6	0.35	1.1	中世後	用水路跡に切られる
	68	橢円形?			1.2	0.75		近世	用水路跡に切られる
	69	方形		2.2	1.6	0.5	1.75	近世	
	71	橢円形(方形?)		3.3	1	0.55	1.8	近世	
	71-2	橢円形(方形?)		3.1	0.8	0.4	1	近世	
	73	橢円形		4.5	2.2	0.55	0.7	近世	
	74	橢円形		1.7	1	0.4		近世	
	75	凹形?				0.55			調査区外へ延びる
	76	橢円形	(2.8)	(2.2)		0.6		近世	
	77	不明				0.65			複数の穴の可能性あり
	78	方形		1.5	1.3	0.45	0.9	近世	
	79	方形		2.5	(1.6)	0.45		近世	
	80	不明				0.5		近世	
	81	方形		3	1.9	0.5	2.9	近世	
	82	方形?		2.5	1.5	0.7	2.6	近世	
	83	橢円形		2.2	1.8	0.6	2.4	近世	

空欄は不明、( )内数値は推定値

表4 採土穴計測表(3)

地区名	遺構番号	形 状	長 軸 (m)	短 軸 (m)	深 さ (m)	掘 壁 面積(m <sup>2</sup> )	時 期	出 土 遺 物	備 考
A地区	84	円形	2.4	2	0.5	1.9	近世		
	86	楕円形	(3.8)	(2.5)	0.3		近世		
	87	方形			0.8	0.55		近世	
	88	楕円形	1.5	1.2	0.55	1	近世		
	89	方形	2.6	1.7	0.5	2.2	近世		
	90	方形	3	1.2	0.6	2.2	近世		調査区外へ延びる
	91	円形	1.3	1.3	0.6	0.8	近世		
	91-2	方形	2.8	1.6	0.5	2.2	近世		他の遺構に切られ不整形
	91-3	円形	1.5	1.5	0.5	0.9	近世		
	92	方形	1.7	1.5	0.6	1.5	近世		
	93	楕円形	2.3	1.4	0.55	1.8	近世		他の遺構に切られ不整形
	93-2	円形	1.2	1.2	0.55	0.6	近世		
	94	楕円形	1.8	(1)	0.5		近世		
	95	楕円形	2.8	(1.6)	0.55		近世		
	96	方形	1.2	1.2	0.55	0.8	近世		
	97	方形	1.8	(1.4)	0.4		近世		
	98	楕円形	(3.8)	2.3	0.4		近世		
	98-2	方形	2.1	2.1	0.6	2.6	近世		他の遺構に切られ不整形
	99	楕円形	(3)	1.8	0.35		近世		
	100	方形	2.5	1.5	0.55	2.1	近世		
	101	方形	1.2	1.1	0.6	0.8	近世		
	102	楕円形	1.3	0.9	0.4	0.5	近世		
	103	楕円形	(2.5)	1.7	0.5		近世		
	104	楕円形	1.6	1.2	0.5	1	近世		
	104-2	脇丸方形	1.6	1	0.5	0.8	近世		
	105	円形	2.2	1.8	0.4	5	近世		
	106	方形	(0.9)	0.7	0.5		近世		SK107と切り合いあり
	107	楕円形	2	1	0.7	1.4	近世		
	108	楕円形?			1.6	0.4	近世		調査区外へ延びる
	109	楕円形	1.6	0.9	0.4	0.6	近世		
	110	不明			0.55		近世		
	111	円形?			2.3	0.5	近世		
	112	円形	2.2	2.2	0.55	2.1	近世		
	112-2	円形	1.5	1.5	0.65	1.1	近世		

空欄は不明、( )内数値は推定値

表5 採土穴計測表(4)

地区名	遺構 番号	形 状	長 軸 (m)	短 軸 (m)	深 さ (m)	掘 削 量(m)	時 期	出 土 遺 物	備 考
A地区	113	方形	2.5	1.5	0.4	1.5	近世		
	114	楕円形(方形?)	4.3	1	0.55	2.4	中世		
	115	方形	1.7	1.5	0.5	1.3	近世		
	116	楕円形	1.3	1	0.5	0.7	近世		
	117	方形	2.5	(1.5)	0.55		近世		
	119	楕円形(方形?)	4.3	1	0.55	2.4	近世		
B地区	1	方形	1.2	0.9	0.55	0.6	近世		
	2	楕円形	2	1.8	0.5	1.8	近世		2段掘り状になっている
	10	楕円形	1.6	1	0.55	0.8	近世		2段掘り状になっている
	11	方形	1.7	1.6	0.5	1.35	近世		
	12	楕円形	1.8	1.2	0.55	1.2	近世		
	13	方形	1.3	1.2	0.4	0.6	近世		
C地区	4	方形	2.7	1.6	0.6	2.6	中世か 珠洲	SK107に切られる	
	5	方形	3.7	1.2	0.65	2.9	中世か		
	7	円形	1.7	1.7	0.5	1.1	中世か		
	8	方形	2.3	2.2	0.4	2	中世か	調査区外へ延びる	
E地区	8	円形	2.4	1.8	0.75	3.2	近世		
	9	円形	2.2	(1.1)	0.5		近世		用水路跡に切られ形状不明
	10	方形	1.5	1.5	0.8	1.8	近世		
	11	円形	1.5	1.5	0.8	1.4	近世		
	12	方形	2.8	1.8	0.45	2.3	近世	寛永通寶	
	13	楕円形	(2.2)	1.2	0.6		近世	寛永通寶	
	14	円形	1.7	1.7	0.6	1.4	近世		
	15	方形	(1.4)	1.2	0.5		近世		
	16	円形	1.5	1.5	0.8	1.4	近世		
	17	円形	2.1	2.2	0.8	3	近世		
	18	円形?	(2.2)	1.4	0.65		近世		

空欄は不明、( )内数値は推定値

表 6 遺物観察表(I)

遺物 名	種別	器形	出土地点	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調 査	鉢土色調	胎(色調・模様)	特 徴	備 考
1 A	縄文土器	深鉢	SD150X46Y59	29			外周:多底文(6条/ 3cm), 内底:ナメ	黒褐色		生1 期古段階	山根部等に波状, 外底上部に灰化物 多く付着, 1.3cm幅 の粘土帶
2 A	縄文土器	深鉢	SD150X46Y59	23.6			外周:多底文(4条/ 1.5cm), 内底:ナメ	黄褐色		生1 期古段階	内表面に灰化物多 く付着, 0.8cmの粘土 帶
3 A	縄文土器	深鉢	SD150X46Y59				外周:多底文(5条/ 2.2cm), 内底:ナメ	灰黄色		生1 期古段階	内表面に灰化物付 着, 1.3cm幅の粘土 帶
4 A	縄文土器	深鉢	SD150X46Y59				外周:多底文(6条/ 2cm), 内底:ナメ	にぼい黄褐色		生1 期古段階	外底に灰化物少 量付着, 1.3cm幅の 粘土帶
5 A	縄文土器	深鉢	SD150X46Y59	25			外周:(上部)多底 文(6条/3cm)(下 部)多底文(3条/ 1cm), 内底:ナメ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	内表面に灰化物付 着, 1.5~2.5cmの粘土 帶
6 A	縄文土器	深鉢	SD150X46Y59	25			外周:(上部)多底 文(6条/3cm)(下 部)多底文(3条/ 1cm), 内底:ナメ	灰色		生1 期古段階	口縁沿に突起あり, 内表面に灰化物付 着, 1.3cm幅の粘土 帶
5 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60	25			外周:多底文(6条/ 3cm), 内底:ナ メ	墨色~灰色		生1 期古段階	内表面に灰化物付 着, 1.5~2.5cmの粘土 帶
5 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60	25			外周:(上部)多底 文(6条/3cm)(下 部)多底文(3条/ 1cm), 7周底:ナ メ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	内表面に灰化物付 着, 1.5~2.5cmの粘土 帶
5 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60	25			外周:(上部)多底 文(6条/3cm)(下 部)多底文(3条/ 1cm), 内底:ナ メ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体
6 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60				外周:多底文(6 条/3cm), 内底:ナ メ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体か
7 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60				外周:多底文(5条/ 2.7cm), 内底:ナ メ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	内表面に灰化物多 く付着, 1.3cm幅の 粘土帶
8 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60				外周:多底文, 内底: ナメ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体か
9 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60				外周:多底文, 内底: ナメ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体か
10 A	縄文土器	深鉢	SD150X37Y59				外周:多底文, 内底: ナメ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体か
11 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60				外周:多底文のあ るナメ, 内底:ナ メ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体か
12 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60				外周:多底文, 内底: ナメ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体
13 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60				外周:多底文, 内底: ナメ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	内表面に灰化物付 着, 1.5~2.5cmの粘 土帶
14 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60				外周:多底文, 内底: ナメ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体か
15 A	縄文土器	深鉢	SD150X44Y60				外周:多底文, 内底: ナメ	灰色~灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体か
16 A	縄文土器	深鉢	SD150X33Y61				外周:ナメ, 内底: タグリ	暗灰色		生1 期古段階	
17 A	縄文土器	深鉢	SD150X33Y61				外周:ナメ, 内底: タグリ	黒褐色		生1 期古段階	20と同一個体, 内 面に灰化物付着
18 A	縄文土器	深鉢	SD150X33Y61				外周:タグリ, 内底: タグリ	黑褐色		生1 期古段階	20と同一個体, 内 面に灰化物付着
19 A	生1 期	深鉢	SD150X42Y34				外周:ハラメ?, 内 底:ハラメ?	灰褐色		生1 期古段階	表面凹凸感, 硬 膜らしい
20 A	縄文土器	浅鉢	SD150X37Y56				外周:ハラメ?, 内 底:ハラメのあとシガ キ	褐色		生1 期古段階	
21 A	縄文土器	浅鉢	SD150X42Y56	7.6			外周:多底文, 内底: 多底文, 内底:ナ メ	墨褐色~灰褐色		生1 期古段階	
22 A	生1 期	壺	SD150X44Y60 (X46Y59)	16			外周:ハラメ, 内底: ハラメ, 内底:ナ メのあとナメ	にぼい黄褐色~褐灰色		生1 期古段階	既述内面には指印 など有明瞭, 底部 外周:多底文, 表面と 底部との接合部
23 A	縄文土器	深鉢	SD150X46Y59				外周:多底文, 内底: 多底文のあとナメ	灰褐色		生1 期古段階	
24 A	縄文土器	深鉢	SD150X46Y59				外周:多底文, 内底: 多底文のあとナメ	灰褐色		生1 期古段階	5と同一個体
25 A	縄文土器	深鉢	SD150X46Y59				外周:多底文, 内底: 多底文のあとナメ	にぼい黄褐色		生1 期古段階	粘土やや肥厚, 25 と同一個体か

表7 遺物観察表(2)

遺物名	種別	基準	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	説 明	施上色調	性(色調・特徴)	時 期	考
26 A 面文土器 深鉢 SD15(X44Y60)								黒灰地		弥生I期古墳期	内面に炭化物多く付着
27 A 面文土器 深鉢 SD15(X45Y59)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	にぼい黄褐色～明赤褐色		弥生I期古墳期	
28 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y59)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	灰黄色地		弥生I期古墳期	粘土やや難成
29 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	灰黄色地		弥生I期古墳期	
30 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	灰黄色地		弥生I期古墳期	
31 A 面文土器 深鉢 SD15(X47Y59(附))							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	にぼい青褐色		弥生I期古墳期	
32 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y59)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	灰褐色		弥生I期古墳期	
33 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)(X45Y59)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	馬鹿毛地～灰黃褐色		弥生I期古墳期	粘土やや難成、外層に炭化物付着
34 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y59)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色地～灰黃褐色		弥生I期古墳期	粘土やや難成、25と同一個体か
35 A 面文土器 深鉢 SD15(X47Y59(附))							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色地～灰黃褐色		弥生I期古墳期	
36 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	にぼい青褐色		弥生I期古墳期	
37 A 面文土器 深鉢 SD15(X47Y59(附))							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	にぼい褐色～灰褐色		弥生I期古墳期	
38 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y59)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	灰褐色		弥生I期古墳期	
39 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色		弥生I期古墳期	
40 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色地～灰黃褐色		弥生I期古墳期	
41 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y59)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	灰褐色		弥生I期古墳期	
42 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色		弥生I期古墳期	
43 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色		弥生I期古墳期	
44 A 面文土器 深鉢 SD15(X47Y59)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色～にぼい青褐色		弥生I期古墳期	
45 A 面文土器 深鉢 XG781							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色		弥生I期古墳期	
46 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色		弥生I期古墳期	
47 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色		弥生I期古墳期	
48 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色		弥生I期古墳期	
49 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	海灰色		弥生I期古墳期	
50 A 面文土器 深鉢 SD15(X46Y55)							外面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ 内面:赤灰地、内面:赤灰地のあとナダ	にぼい黄褐色		弥生I期古墳期	内面に炭化物付着
51 A 弥生土器 豆 XG7Y62							不明	淡青色		弥生I期古墳期?	磨滅厳しい
52 A 石器 石器 SD15(X37Y62)	片 壁 2.5	幅 1.4								弥生I期古墳期	安山岩
53 A 石器 打削石器 SD15(X46Y59)										弥生I期古墳期	花崗岩、藍砂・芳那火成
54 A 石器 打削石器 SD15(X38Y60)	16.8	7.5								弥生I期古墳期	礫状
55 A 石器 砕 SD15(X46Y65)										弥生I期古墳期	泥岩、不定形
56 A 石器 摺丁 SD15(X47Y57)										弥生I期古墳期	粗石
57 A 土器 見 粘土中							内面:ナダ	にぼい黄褐色			外側一面に保
58 A 土器 見 破 XG7Y72	5						内外面:ナダ	黑褐色		平安	漆器柄剥落切?
59 A 土器 見 破 XG7Y73	5						内外面:ナダ	淡青褐色		平安	漆器柄剥落余切り
60 A 土器 見 破 粘土中							裏地	黑色		平安	
61 A 土器 見 破 粘土中							裏地	黑色		平安	
62 A 瓷器 見 磁 S024							外面:11.5cmの印記、内面:同心円 背面:真裏	灰褐色		平安	磁石に吸引、保け ているるは磁石に も吸収しているた めか
63 A 土器 S001	周 径 4.2							にぼい黄褐色			
64 A 土器 XG7Y77								にぼい黄褐色			
65 A 土器 S032								にぼい黄褐色			
66 A 瓷器 見 SK02							内外面:ナダ	灰褐色			
67 A 瓷器 見 SK02							内外面:ナダ	灰褐色			

表8 遺物観察表(3)

遺物 番号	性 別	年 齢	出土地點	口径 (cm)	底径 (cm)	高 さ (cm)	調 査	鉄土色	特 徴(色調・種類)	時 期	備 考
56 A 女性	女		SK03				ツコナダ	灰色		Ⅳ期	
57 A 八尾?	老		SK03				内凹:ヨコナダ	灰色			
58 A 土師器	男		SK03		9.5			淡黄色			
71 A 十約森	男		SK03	10			内外削:ナダ	淡黄色		13C後	
72 A 球形	男		SK05		29			灰色		Ⅳ期	
73 A 球形	老		SK05				10目/3cmの印き				
75 A 小山廬戸	男		SK06	12				に深い黄褐色	黒褐色鉄錆	13C	流入?
74 A カマド型			SK06								
76 A 球形	男		SK06	16				灰色		Ⅳ期	
84 A 球形	男		SK06	22				灰色		Ⅳ期	
77 A 球形	要もしくは老		SK07				10目/3cmの印き	灰色			
78 A 妇人	要もしくは老		SK07				10目/3cmの印き	灰色		Ⅳ期	
29 A 上部器	男		SK07					淡黄色		13C後	
80 A 土師器	男		SK07	7			ナダ	淡黄色		13C後	外側口縁に油煙付 着
81 A 土師器	男		SK07	12			ナダ	淡黄色		13C後	
82 A カマド型			SK07								
83 A カマド型			SK07								
85 A 土師器	男		SK08	8			一段ナダ	淡黄色		13C後?	
86 A 土師器	男		SK08	8			半円窓:一段ナダ	淡黄色		13C後?	
87 A 土師器	男		SK08	7			-段ナダ	淡黄色		13C後?	
88 A 八尾	要		SK07				片端上から下へ の幅広いナダ+ 内凹:ヨコナダ	に深い黄褐色			傷が付着する所見 あり
89 A 八尾	要		SK07, SD94				片端上から下へ の幅広いナダ+ 内凹:ヨコナダ	に深い黄褐色			
90 A 八尾	要		SK07				片端上から下へ の幅広いナダ+ 内凹:ヨコナダ	黄褐色			
91 A 上部器	男		SK09	16			ナダ, 内凹:横溝 まみ上げ	灰黄色		13C前	内側に斑斑, 保付 着, 外側に埋付
92 A 青磁	男		SK13					灰白色	透明白のあるオリ ーブ色		
93 A 球形	男		SK24				12目のおろし目	灰色		Ⅳ期?	
94 A 球形	大網		SK36					灰黄色	黄褐色系物		
95 A 球形	男		SK43				12目以上のおろし 目	灰色		Ⅳ期?	
96 A 球形	要		SK47					灰白色		Ⅳ期	11種類間に自然接
97 A 球形	男		SK46					灰色			
98 A 球形	要		SK48					灰色			
99 A 土師器	男		SK57	9	5.2	.5	ツコナダ	灰褐色	一段ナダ	13C後	
100 A 上部器	男		SK57	12				灰褐色		13C後	
101 A 土師器	男		SK57	16			一段ナダ, 内凹面 とともに無いナダ	淡黄色		13C後	
102 A 上部器	男		SK57	12	1.3		一段ナダ	淡黄色		13C後	
103 A 土師器	男		SK57					淡黄色			
104 A 球形	男		SK63					灰褐色			
105 A 球形	速		SK63					灰褐色			
106 A 土師器	速		SK62					に深い黄褐色			
107 A 小約森	男		SK62					に深い黄褐色		50と同 例体?	
108 A 青磁	男		SK53	22				灰色		Ⅳ期	
109 A 球形	老?		SK53					灰色			
110 A 球形	男		SK53	25			12目/2.5cmのおろ し目	灰色		Ⅳ期	
111 A 球形	老		SK53				10目/3cmの凹凸目	灰色			
112 A 球形	老		SK53				10目/2cmの凹凸目	灰白色			やや模様小良
113 A 球形	要もしくは速		SK53				10目/3cmの凹凸目	灰白色			
114 A 球形	要もしくは速		SK53				12目/3cmの印き目	灰色			難かしい褐色の吹き 出し物多い
115 A 上部器	速		SK58	10	6	2.6	角立:鋸めの一段 ナダ	灰褐色		13C後	内面弧底, 外閉口 縁型に復, 内外面 口縁の一部剥落
116 A 土師器	速		SK58	16			内面底:鋸めの一段 ナダ	灰褐色		13C後?	外側底部分に擦
117 A 球形	男		SK58	20				灰色		Ⅳ期	
118 A 球形	すり跡		SK58	25			6目/1.3cmのおろ し目	灰色		Ⅳ期?	

表 9 遺物観察表(4)

遺物 番号	性別	年齢	出土場所	口径 (cm)	溝深 (cm)	縦高 (cm)	縫合	胎土色調	性(色調・形態)	時期	備考
119 A 土師器 盆 SK64				8			やや深い一段ナメ	淡褐色		13C後	外型に被熱、底付脚
120 A 土師器 盆 SK64								灰褐色			焼成不良
121 A 土師器 すり鉢 SK64					15		10段/7.8cmの厚さ	灰褐色		Ⅳ期	使用による底部がふられる
122 A 土師器 壺 SK64							8.4/3cmの厚さ	灰白色			やや焼成不良
123 A 土師器 瓶もしくは壺 SK64							10段/3cmの厚さ	灰色			
124 A 土師器 壺もしくは壺 SK65							12段/3cmの厚さ	灰色			細かい黒色の吹き出しが多い
125 A 土師器 壺 SK65							12段/3cmの厚さ	灰色			細かい黒色の吹き出しが多い
126 A 土師器 皿 SK70				12	6	2.4		灰褐色		13C後	外周口縁部に保付、焼成不良
127 A 土師器 壺 SK70							12段/3cmの厚さ	灰色			細かい黒色の吹き出しが多い
128 A 土師器 壺 SK70							9段/3cmの厚さ、が	灰白色			
							化した様な状の叩き				
129 A 八咫 壺 SK70							粗いナメ	灰色			灰心の吹き出しがある
130 A 八咫 壺 SK70							ナメ				無し、折れあり、底部に落書き跡がある
131 A 土師器 盆 SD01				11.6	7.8	2	目の新しい一段ナメ	にぼい青褐色		13C前	漆器多く見られる
							内周沿部は灰				
132 A 土師器 盆 SD01					13P		一段ナメ	にぼい黄褐色		13C後	焼成不良
133 A 土師器 盆 SD01							粗い 細いナメ	にぼい青褐色			一定焼成
134 A 船中陶戸 丸窓 SD01								灰白色	黑色鉄釉	17C後	企画に入られた
135 A 船中陶戸 向付 SD01				9				灰白色	にぼい青褐色	17C後	向付陶器
136 A 陶戸 丸窓 SD02								灰白色	透明白感のあるオリーブ色灰釉	17C後～後	口縁端部に焼付
137 A 陶戸 陶石 SD02											4.5cm×6.2cm断面
138 A 土師器 壺もしくは壺 SD04					10~12段/3cmの厚さ			灰色			
139 A 土師器 壺 SD04							11段/3cmの厚さ				やや焼成不良
140 A 土師器 皿 SD05				15	4.8	3	やや深い一段ナメ	淡褐色		13C後	
141 A 土師器 皿 SD05					14		やや深い一段ナメ	褐色		13C後?	やや焼成不良
142 A 土師器 皿 SD05					12			褐色			やや焼成不良
143 A 上野器 丸 SD05								褐色			やや焼成不良、内表面ともに赤褐色
144 A 土師器 鋸?	SD05							にぼい青褐色			陶器骨董鑑定
145 A 土師器 壺 SD05							10段/3cmの厚さ	灰色			
146 A 土師器 皿 SD05							7段/3cmの厚さ	灰色			
147 A 土師器 すり鉢 SD05							8条以上の厚さ	灰色		IV期?	
148 A 土師器 壺 SD05							12段/3cmの厚さ	灰色			
149 A 上野器 皿 SD12								褐色			II部に凹痕
150 A 陶戸 丸窓 SD12				8				灰色	オリーブ色灰釉		外周口縁部に治癒、口縁部のみ鉄釉
151 A 土師器 皿 SD06								にぼい青褐色			
152 A 陶戸 壺 SD06								灰白色			
153 A 土師器 壺 SD11							7段/3cmの厚さ	灰色			
154 A 陶戸 すり鉢 SD11							5条以上の厚さ	灰色		V期	
155 A 船中陶戸 丸窓 SD11上面				5			萬石はりつけ	灰白色	黑色鉄釉	17C後	
156 A 陶戸 小鉢?	SD11						羽毛模様	灰色			黒色の吹き出しが少
157 A 陶戸 刷 SD11							萬石割り出し	褐色~灰褐色	灰オリーブ色灰釉	17C後	やや焼成不良
158 A 土師器 すり鉢 SD13				33.6			7.8/1.5cmの厚さ	灰色		Ⅴ期	
159 A 土師器 皿 SD14							にぼい青褐色				やや焼成不良
160 A 土師器 皿? SD14				12				灰色			
161 A 陶戸 オリ妙 SD14							2条/2.5上	灰色			
162 A 九曲 火入れ SD14				13D?			9段/3cm以上のおろし目	灰白色			近世以前
163 A 陶戸 すり鉢 SD15								灰色			黒色の吹き出しが少
164 A 陶戸 皿 SD15				10				灰色	オリーブ色灰釉	15C後	

表10 遺物観察表(5)

遺物 番号	地区 名	種 別	基 礎	出土 地点	口径 (cm)	高さ (cm)	厚 さ(cm)	調 査	胎 土色	胎 土色・種類	時 期	備 考
165 A	八戸	盤	SD15					内面上から下方 向へのナダ、内底: ヨコナダ	灰黄色			新石器下牛頭片
166 A	伊万里	鏡	SD15		3.4				白色	白色無鉛	13C	高台~高台方鏡
167 A	土師器	鏡	SD20					10日/3cmの叩き	灰青褐色~灰色			
168 A	土師器	皿	SD25	10	5.6	2		やや弱い ヨコナダ	淡黄色		13C 後	
169 A	土師器	盤	SD29上部	20.6					褐色~灰黑色		II期	
170 A	土師器	盤	SD30						灰黑色			
171 A	珠	皿	SD30					10日/3cmの叩き	灰色			
172 A	八戸	要もしくは環	SD30		18~20				灰青褐色			やや焼成不良
173 A	土師器	皿	SD18下部	7~9				一段ナダ	灰褐色			小片のうえ茎みあ らためれは不正確
174 A	土師器	皿	SD18		4.5cm				灰青褐色			
175 A	土師器	皿	SD18					にぼい黃褐色				裏面多く墨色
176 A	土師器	皿	SD18					褐色~にぼい青褐色				
177 A	土師器	皿	SD18					にぼい黃褐色				
178 A	土師器	皿	SD18					にぼい青褐色				
179 A	土師器	皿	SD18					にぼい青褐色				
180 A	土師器	鏡	SD18	10~13				ヨコナダ	にぼい青褐色			小片のため口部は 不正確、外底に炭化物多く付着
181 A	青磁	鏡	SD18		5.4				淡白色	オリーブ灰色	13C 後~14C 前	底丸~高台方鏡無
182 A	石製品	砥石	SD18									鏡状岩
183 A	珠	要	SD18	58				10日/3cmの叩き	灰色		II期~III期	
184 A	珠	鏡	SD18					10日/3cmの叩き	灰色		II期~III期	被移動叩き
185 A	珠	要	SD18					10日/3cmの叩き	灰色		II期	やや焼成不良
186 A	珠	鏡?	SD18					10日/3cmの叩き	灰白色			やや焼成不良、鏡 状跡有り
187 A	珠	鏡	SD18					10日/3cmの叩き	灰白色			やや焼成不良
188 A	珠	すり鉢	SD18	22~24				3.6cm/2.7cmのおろ し口	灰白色		III期	内部に炭化物多く 付着
189 A	八戸	盤	SD18					内面上から下方 向へのヨコナダ、 内底やや粗いナダ	灰白色			
190 A	土師器	皿	SD24下部	8.3	丸底	1.6	一段ナダ	淡黄色			13C	茎みあり、定期
191 A	土師器	皿	SD24	13	8	2.9		外底二段ナダ、内 底の粗いナダ	黄褐色~淡褐色		13C	外底下部に無鉛灰 色、外側のない鏡 面に浮遊物
192 A	土師器	皿	SD24	8	7.2	1.5	一段ナダ	淡黄色			13C 後~14C 前	被移動している
193 A	土師器	皿	SD24	7	5	1			淡黄色		13C 後~14C 前	やや焼成不良、既 溶と体溶との焼痕
194 A	珠	すり鉢	SD24					5.8cm/3cmのおろ し口	灰色		II期?	
195 A	珠	すり鉢	SD24					13cm/2.2cmのおろ し口	灰色		III期?	
196 A	珠	鏡	SD24					11日/3cmの叩き	灰色		II~III期	鏡状叩き
197 A	珠	鏡	SD24					9日/3cmの叩き	灰黄色			
198 A	珠	鏡	SD24					8日/3cmの叩き	灰色			
199 A	土師器	皿	SD30	9				各所: 1.5cm断面以 下縮5mmのナダ	淡黄色		14C 前	内外凹凸部に深 タルル付着
200 A	土師器	皿	SD30	9.6					淡黄色		14C 前	やや焼成不良
201 A	土師器	皿	SD30						にぼい橙色			赤切高台?、燒成 不良
202 A	土師器	皿	SD30	8前後					灰青褐色			焼成不良
203 A	土師器	皿	SD30	9前後					淡黄色			燒成不良
204 A	土師器	皿	SD30					ヨコナダ	にぼい橙色~淡黄色			
205 A	珠	鏡	SD30		16個後			11日/3.6cmの叩き	灰色		IV期(大島空窓 3期?)	
206 A	珠	すり鉢	SD30					5~6条/1.3cmのお ろし口	灰色			やや焼成不良
207 A	板中軒戸	皿	SD30	11.4					灰色	やや透明感のある 褐色颗粒	17C ?	風化?
208 A	土師器	皿	SD32	8.7	7.6	1.1	一段ナダ	灰青色			13C 後~14C 前	被移動と体溶との焼 痕
209 A	珠	鏡	SD33	20.5					灰色		III期	
210 A	珠	すり鉢	SD33					5cm/3cmのおろ し口	灰白色			燒成不良

表II 遺物観察表(6)

遺物 番号	内訳 名	種 別	種 種	出土地点	口径 (cm)	溝深 (cm)	若高 (cm)	刺 極	胎土 色調	釉(色調・質感)	時 期	備 考		
211 A	植付	すり鉢	SD03				4条/3cmのおろし目	にほい黄褐色	褐色銀粉					
212 A	植付	すり鉢	SD04		23		9条以上: 6cm以上のおろし目	灰褐色			IV期			
213 A	鉢附	片口鉢	SD04		21	11	10	外腹ナデ、内腹: ナデ	陶灰褐色		II期	底部糸切り、やや燒成不良		
214 A	八足	鉢	SD04				外腹: 上から下方骨への刺いやナデ、内腹: ナデ	陶灰褐色			調査底をあまり残さない丁寧なナデ			
215 A	八足	鉢	SD04				外腹: 上から下方骨への刺いやナデ、内腹: ナデ	にほい黄褐色			調査底を土壁に残す			
216 A	土師器	鉢	SD01	17	11.4	2.4	一段ナデ	灰白色			13C後	内面に微少量付着		
217 A	土師器	皿	SD01	13	7.6	1.8	一段ナデ	黄灰色			13C後			
218 A	土師器	皿	SD01				一段ナデ	青灰色				内面に堆積有		
219 A	土師器	皿	SD01				一段ナデ	にほい青褐色				内面に堆積有		
220 A	千葉鉢	カマド窯	SD01											
221 A	青磁	碗	SD01	17				灰色	灰オリーブ色青磁釉		13C後	全体に焼入多くみられる。片割り縫合文		
222 A	埴陶	甕	SD01	54			10fl/3cmの叩き	灰色			IV期			
223 A	埴陶	甕	SD01				10fl/3cmの叩き	灰褐色						
224 A	埴陶	甕	SD01				10fl/3cmの叩き	灰褐色				222と同一個		
225 A	埴陶	甕	SD01				10fl/3cmの叩き	灰褐色				222と同一個		
226 A	埴陶	甕	SD01				10fl/3cmの叩き	灰褐色				222と同一個		
227 A	埴陶	甕	SD01				10fl/3cmの叩き	灰褐色				222と同一個		
228 A	埴陶	甕	SD01				10fl/3cmの叩き	灰褐色				222と同一個		
229 A	埴陶	甕	SD01				10fl/3cmの叩き	灰褐色				222と同一個		
230 A	埴陶	甕	SD01					灰褐色			III期	13C後部に自然粘		
231 A	埴陶	鉢	SD01	22			6条以上: 1.3cm以上の おろし目: 三	灰褐色						
232 A	埴陶	すり鉢	SD01				6条以上: 1.3cm以上的 おろし目: 三	灰褐色				黒色の吹き出しが 多い		
233 A	埴陶	鉢	SD01					灰褐色						
234 A	埴陶	鉢	SD01					灰褐色						
235 A	埴陶	すり鉢	SD01				10条/1.8cmのおろし目	灰褐色				黒色の吹き出しが 少多あり		
236 A	八足	臺	SD01					灰褐色						
237 A	土師器	皿	X72Y76	14	9.6	2	一段ナデ	灰黄色			13C後	再手、豆み大きい		
238 A	埴陶	甕	X56Y86	44				灰褐色				IV期		
239 A	埴陶	甕	X73Y81	39				灰褐色				II期		
240 A	埴陶	甕	X60Y83				11fl/3cmの叩き	灰白色						
241 A	埴陶	甕	X63Y82					灰褐色						
242 A	埴陶	甕	X47Y56	30				灰白色			IV期	焼成不良		
243 A	埴陶	甕	X56Y83				10fl/3cmの叩き	灰褐色						
244 A	埴陶	鉢	X73Y78	24前後				灰褐色			II期			
245 A	埴陶	鉢	X58Y80	29.8	11	8.3		灰褐色			II期			
246 A	埴陶	すり鉢	X68Y77	28.8			11条/2.1cm以上の おろし目	灰褐色			III期			
247 A	埴陶	すり鉢	X61Y85	31			7条/1.5cmのおろし目	灰褐色			III期			
248 A	埴陶	すり鉢	X75Y81		11.2		11条/2.5cmのおろし目	灰褐色						
256 A	青磁	碗	表盤	31				灰白色	透明感に欠ける青 緑色					
249 A	八足	甕	X73Y78					灰白色						
250 A	八足	甕もしくは甕	X73Y74				内側底部: ケズリ	灰黄色					内側底部にタール 付着	
251 A	瓶	丸瓶	X45Y60	17				灰褐色	透明感に欠けるに よる灰褐色		13C後	やや焼成不良、地 の網膜感しい		
252 A	瓶	瓶子	X69Y74					灰白色	透明感のあるオリ ーブ色灰褐色		13C後	全体に焼入みられる		
253 A	瓶	大口	X36Y66					灰白色	透明感のあるオリ ーブ色灰褐色		13C後	下半無輪		
254 A	瓶	大口	X36Y81					灰白色	透明感のあるオリ ーブ色灰褐色		13C後	擦つぎ痕あり		
255 A	瓶	平瓶	X54Y85		5			灰白色	透明感のあるオリ ーブ色灰褐色		13C後	底部外面に無輪		
257 A	青磁	甕	X56Y87					灰白色	透明感のある青 緑色			縦縫合文		

表12 遺物觀察表(7)

遺物番号	地区名	著者	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	調整	胎土色調	釉(陶器・埴輪)	時期	備考
258 A	青磁	奥	表層					灰色	透明感のある翠状色		
259 A	青磁	磯	X42Y60					死亡色	透明感のない米色 がかった青緑色	羅北文化	
260 A	青磁	磯	X49Y72		4			灰白色	透明感に欠ける白 濁した青緑色	高台周縁部跡	
261 A	白磁	磯	X62Y78					灰白色	透明感のない灰白色	13C後	口部端部破損
262 A	窓戸	丸鏡	X66Y77					灰白色	端部焼色と暗オリ ーブ褐色斑駁		
263 A	窓戸	田	X65Y86		8			にぼい黄褐色	端褐色・基部黒燒色	高台内側部	
264 A	越中窓戸	瓦	X48Y57	10.6	5.2	2.2		にぼい赤褐色	端灰色斑駁	17C後	
265 A	越中窓戸	瓦	X59Y60	10.8	4.6	2.1		にぼい赤褐色	端黄色斑駁	17C後	網止みあり
266 A	越中窓戸	瓦	X67Y82			4.6		灰白色	にぼい赤褐色斑駁	17C後	
267 A	窓戸	瓦	X59Y83					灰白色	透明感のあるオリ ーブ褐色灰斑		
268 A	越中窓戸	すり鉢	X47Y58	20cm後		6cm以上/1.8cm以上 のおろし臼		にぼい黄色	底赤色斑駁	17C	
269 A	瓦茶	火鉢	X68Y83				内部ケズリ	にぼい黄褐色			
270 A	石製品	瓶(?)	X48Y82								
271 A	金剛樹脂	瓶	X59Y79	40						13C後~14C	
272 A	金剛樹脂	瓶									寛永通寶
273 H	漆器	漆	SD01				7mm/3cmの叩き	灰色			
274 B	土杓器	皿	SD02	9	(4)	1.7				14C前?	内外面に糊。油煙 多く付着
275 B	窓戸	皿	SD02					灰白色	黑色斑駁		
276 B	窓戸	皿	SD02					灰白色			
277 B	窓戸	皿	SD02				11mm/3cmの叩き	灰色			
278 B	八尾	皿	SD02				外周部に鋸いナ チ、内側ナック	にぼい黄褐色			弱い透明感の残る タイプ
279 B	瓦器	火鉢	SD02			34.4		灰白色			
280 H	漆器	すり鉢	SD03			14	6cm/2.2cmのおろ し臼	灰白色		IV期?	
281 B	越中窓戸	瓦	SD04		12			にぼい褐色	端黄色斑駁	17C後	
282 H	漆器	鉢	SD09					灰色			
283 B	漆器	すり鉢	SK06			28	10cm以上/2.1cm以 上のおろし臼	灰色		II~III期	
284 B	八尾	皿	SK07					灰黄色			
285 B	窓戸	皿	X73~75 Y139~135		12.8			灰色	透明感のない明度 褐色・茶色斑駁		石窓か
286 B	越中窓戸	皿	X70Y124			4.6		褐色	透明感のあるオリ ーブ褐色灰斑	16C末~17C初	輪止め鉄釦。内面 見込みに印花文あり
287 B	金属製品	小物	SD09付近								
288 H	金銀製品	キセル	鉢								
289 B	石製品	磨石	X66Y125								鉢灰石
302 C	漆器	皿	SK02, P01, P02	20	11.2	59.6	11mm/3cmの叩き	灰色		II~III期	
303 C	漆器	すり鉢	SK01, P02, SD02	28	16.6	12	13mm/1.5cmのおろ し臼	灰色		II~III期	
304 C	漆器	すり鉢	P01			12	9mm/1.6cmのおろ し臼	灰色		II期?	305,306と共に個 体
305 C	漆器	すり鉢	P01		34		9mm/1.6cmのおろ し臼	灰色		II期	内外壁に半部に四 角彫り・基部色の 移行付着物あり
306 C	漆器	すり鉢	SK02					灰色			内壁に暗灰黄色 ~茶褐色の液体付 着物あり
307 C	漆器	すり鉢	SK02				12mm以上/2.2cm以 上のおろし臼	黄灰色			
308 C	漆器	鉢?	SK02					灰色			内側?
309 C	土製品	土人形	SK02					にぼい青褐色			
310 C	伊万里	不夷	SK02					(灰)白色	灰白色		色絵
311 C	小圓筒付	皿	SK02					白色	やや青みがかった 白色		伊万里?
312 C	越中窓戸	小明	SK03				端部:丸切り、腹部: 深部	にぼい粉色	褐色斑駁		
315 C	上頭器	皿	SK11	8	6.6	1.3	一段ナゲ	にぼい青褐色		13C後~14C	
316 C	土頭器	皿	SK11		14		一段ナゲ(一段ナ ゲの名稱)	黑色		13C後~14C	
317 C	土頭器	皿	SK11				一段ナゲ。底部裏 取?	にぼい青褐色		13C後~14C	

表13 遺物観察表(8)

遺物 件名	地 質	基 礪	出土地点	口徑 (cm)	高 さ (cm)	審 査 (cm)	調 査	油土色調	緑(苔調・葉模)	時 期	備 考
318 C 土解離 皿	SK11						やや黄褐色の一段ナ ダ	黒色		13C後~14C	
319 C 土解離 皿	SK11			7			一段ナダ	淡黄色		13C後~14C	
320 C 土解離 皿	SK11			7	3.4	1.2	一段ナダ	灰黄色		13C後~14C	茎みあり
322 C 土解離 カマド壁	SK11						黒色~褐褐色				
323 C 土解離 カマド壁	SK11						黑色~黑褐色				
324 C 地面 鉢	P05						灰色				
325 C 土解離 皿	P10	8.4					一段ナダ	にほい青褐色		13C後~14C	
326 C 土解離 皿	P10						にほい青褐色				焼成不良
327 C 土解離 鉢	P25	25					灰色		II期	片口あり	
313 C 葉調 ナリ鉢	SK03					6㌢以上/1.2cm以 上のおろし口	灰色				
314 C 葉調 鉢	SK04						灰白色		III期?	半牛頭底不規	
321 C 瓦	SK13						灰白色~灰黑色				
328 C 伊万里 紅瓦	SK16	5	1	1.1			当色	透明感がある青み がかった長石釉			
329 C 近世青磁 不明	X120Y120						施部無切り	にほい赤褐色			内面に無付着
330 C 青磁 ナリ鉢	SK16					6㌢以上/1.2cm以 上のおろし口	青褐色	黄灰褐色鉄釉			
331 C 青磁 盤	TK01, SK02, SD03, X111Y122	50	II期前	II期前	9日/3cmの厚さ		灰色		II期	内面中段に黑色付 着物(?)あり、 38片	
332 C 青磁 ナリ鉢	SK21	23					土面剥落し目な で崩し	にほい青褐色	紫川がかった青褐色 鉄釉	13C後~	
333 C 鹿児・美濃 大皿鉢	SK24						灰色	紫川がかった青 色~青褐色鉄釉			
334 C 伊万里 鏡	SK27			3.6			灰白色	透明感のない青 色~青色石釉	13C後~		
335 C 伊万里 瓶?	SK28						灰白色	透明感のない青 色~青色石釉			
336 C 伊万里 鏡?	SK40						灰白色	透明感のない青 色~青色石釉			
337 C 土解離 皿	SK11						一段ナダ	にほい青褐色			
338 C 土解離 皿	SK39						一段ナダ	灰黄色			
339 C 地面 蒸らしきは皿	SD01					9日/3cmの厚さ	灰色				
340 C 地面 皿	SD01					9日/3cmの厚さ	灰色		II期	口縁部分	
341 C 銘印・美濃 天目鉢	SD02	12					にほい青褐色	黒褐色~暗褐色鉄 釉	13C後		
342 C 磁瓶 小器	SD02					5日/3cmの厚さ	灰色		II期?	内面に瘤付又あり	
343 C 磁瓶 壺	SD02						灰色		II期?	水垢?	
344 C 磁瓶 壺	SD02					12日/3cmの厚さ	灰色		II期?		
345 C 磁瓶 壺	SD02					12日/3cmの厚さ	灰色		II期?	水垢?	
346 C 磁瓶 壺	SD02					12日/3cmの厚さ	灰色		II期?	水垢?	
347 C 鹿児・美濃 天目鉢	SD03	12					灰白色	明褐色~黑色鉄釉	16C?		
348 C 土解離 皿	SD03						灰黄色				
349 C 磁瓶 壺	SD03	28					灰色				
350 C 磁瓶 壺	SD03						灰色				表面大きく風化を示 せない。
351 C 地面 すり鉢	SD03					8㌢/2.2cmの割ら し口	灰色				
352 C 地面 唐	SD03					9日/3cmの厚さ	灰色				
353 C 地面 要	SD03					9日/3cmの厚さ	灰色				
354 C 地面 要	SD03					9日/3cmの厚さ	灰色				
355 C 地面 小器	SD03					7日/3cmの厚さ	灰色				内面に瘤付又あり
356 C 地面 壺	SD07					9日/3cmの厚さ	灰白色				
357 C 伊万里 皿	SP06	12.4					(灰) 白色	青みがかった長石 釉	18C		
358 C 伊万里 鏡	SD06						(灰) 白色		18C		
359 C 土解離 土人形	SD09						青黄色				
360 C 砂小漁戸 碗	SD14						黄灰色	暗赤褐色鉄釉			
361 C 土解離 不明	SD14						深灰色~にほい青褐色				
362 C 磁瓶 蒸らしきは皿	SD18					11日/3cmの厚さ	灰色				
363 C 白磁 碗	SD05						灰白色	透明感のある明青 色~青色			内面に瘤斑あり
364 C 伊万里 皿	SD18	14	8	3.2			灰白色	长石釉			染付
365 C 土解離 皿	SD17	11.6	6	2.4			二段ナダ	褐色		18C	
366 C 磁瓶 鉢	SD17						灰色				やや燒成不良
367 C 磁瓶 要	SD17				20		灰色				

表14 遺物観察表(9)

遺物 番号	地区 名	性 別	性 質	出土地点	口径 (cm)	溝延 (cm)	厚さ (cm)	調 整	佔 土色調	佔 (色調・種類)	時 期	考 察	
368	C 千葉県	男	器	SD11	8	5.8	2	一段ナゲ	淡黄色		13C後~14C		
369	C 土師器	男	器	SD17		10		一段ナゲ	に赤い黃褐色		13C後~14C		
370	C 小鉢器	女	器	SD20		7.6	5.4	1.3	一段ナゲ	灰青色		13C後~14C	内外面口縁部に焼 泥跡付着
371	C 土師器	男	器	SD20					切切り?	褐色			
372	C 土師器	男	器	SD20			3	切切り?	褐色				地底不良、底部未 切りか
373	C 越中窯	女	器	SD20		12	4.8	2.2		に赤い褐色	灰白色底輪	16C末~17C	地底めあり、蓋な 焼き底あり
374	C 地附	株	器	SD20		19			灰色		日期		
275	C 磁器	男	器	SD20					11目/3cmの叩き	灰色			
376	C 磁器	男	器	SD20					9目/3cmの叩き	灰色			
377	C 磁器	男	器	SD20			12			灰色			
378	C 磁器	すり鉢	器	SD20		20前後			6目/1.5cmのおろ し目	灰色	日期		
379	C 磁器	皿	器	SD23					9目/3cmの叩き	灰色			
380	C 八足	裏	器	SD23						灰色			口縁部片
381	C 八足	裏	器	SD23						黄灰色			
382	C 磁器	皿	器	SD23					12目/3cmの叩き	灰色			
383	C 土器器	皿	器	SD04	7.8	6.8	1.4	一段ナゲ	淡黄色		13C後~14C	油井付着	
384	C 食器・羹匙	皿	器	SD04		10			灰青色		15C後?		
385	C 土器器	皿	器	SD04		14前後			一段ナゲ	に赤い褐色			
386	C 小鉢器	皿	器	SD04		7前後		2.3	一段ナゲ	淡黄色			
387	C 土器器	皿	器	SD04		12前後			一段ナゲ	淡黄色		13C	内側に油煙多く付 着
388	C 土器器	皿	器	SD04		12前後			やや強い一段ナゲ	に赤い褐色		13C	
389	C 土器器	皿	器	SD04					一段ナゲ	灰青色			内面に焼、底座 付着
390	C 土器器	皿	器	SD04	10.6	6.8	2.2	一段ナゲ、内側が の粗いナゲ	に赤い褐色		13C後		
391	C 土器器	皿	器	SD04		10前後			一段ナゲ、内側が の粗いナゲ	に赤い褐色		13C後	
392	C 瓦器	火鉢	器	SD04					灰色				
393	C 磁器	皿	器	SD04					1'目/3cmの叩き	灰色			
394	C 磁器	皿	器	SD04					9目/3cmの叩き	灰色			
395	C 磁器	瓶底?	器	SD04					外被油煙/2cmの粗 様子/口閉き+ナ メ、内底同心円あ て具	灰色			
396	C 磁器	皿	器	SD04						灰色			底座板目底
397	C 磁器	皿	器	SD04					8目/3cmの叩き	灰色			
398	C 磁器	皿	器	SD04		15前後			11目/3cmの叩き	に赤い褐色~灰色			や半壊成不良
399	C 説文土器			X128Y125						東灰色			
400	C 三脚器	土鍋	器	X127Y112						に赤い褐色			口縁内外面に油煙 多く付着
401	C 土師器	皿	器	X126Y123(SD00)	11					褐色		17C?	
402	C 小鉢器	皿	器	X126Y127	13					淡黄色		16C	S D 20%の遺物? や半壊成不良
403	C 土師器	皿	器	X111Y116	13	7	2.5			に赤い褐色			焼成不良
404	C 土師器	皿	器	X124Y131						灰白色			焼成不良
405	C 土師器	皿	器	X126Y131					余切り底	暗灰褐色			
406	C 丸瓦	裏	器	X101Y113						に赤い褐色			
407	C 通底?	すり鉢	器	X113Y118						橙色~灰色			焼成不良
408	C 磁器	皿	器	X112Y134	19.2				12目/3cmの叩き	灰色		日期	古磁胎多くかかる。 褐色の吹き出し物 多い。
409	C 磁器	皿	器	X125Y106(SD08)	15.4					灰色		日期	古磁胎多くかかる。 黑色の吹き出し物 多い。
410	C 磁器	皿	器	X111Y126					11目/3cmの叩き	灰色			古磁胎多くかかる。 黑色の吹き出し物 多い。
411	C 磁器	皿	器	X120Y122						灰白色		1期	
412	C 磁器	皿	器	X110Y117					9目/3cmの叩き	灰色			
413	C 磁器	不明	器	X130Y103						灰色			メンゴ、表面2.1cm
414	C 磁器	小物	器	X101Y119						灰色		日期?	2個の標印文あり
415	C 磁器	小器	器	X108Y109						灰色		日期?	2個の標印文あり
416	C 磁器	すり鉢	器	X136Y124		16前後			18目以上/3cm以上 のせらし目	灰色			

表15 遺物観察表(10)

遺物	名	種別	基 標	出土点	IP深 (cm)	底径 (cm)	最高 (cm)	測 容	地上色質	船(色調・黒幅)	時 期	備 考
417	C	麻糸	小瓶	X128Y105					灰褐色			内面に内凹部(底?)付外側に網状行有
418	C	漆器	鉢	X131Y126					灰褐色			
419	C	漆器	鉢	X137Y120					灰褐色			
420	C	漆器	瓶?	X134Y123	7				灰褐色			
421	C	漆器	ナリ鉢	X171Y124	30前後			8升/1.3mの計 し口	灰褐色		II期	
422	C	漆器	ナリ鉢	X116Y113				5升以上/1.7m以 上の計し口	灰褐色			片口部分のみ
423	C	漆器	酉	X112Y134				12升/3mの計 し口	灰白色			黒色吹き出し物多 い
423	C	衣類	すり縫	X138Y124					灰褐色		IV期?	
424	C	漆器	鉢	X119Y122	18	10.2	7.2		灰白色		II期	
425	C	八尾	提	X128Y127				上から下方へ のナデ	灰褐色			
426	C	瓦器	火桶	X120Y114	27.6				灰褐色			
427	C	石製品	硯石	X127Y116								船板岩 宝珠磨
480	C	金属製品	錢									豆銅鑄ね脱さ。船 底あり
440	C	越中漆戸	皿	X117Y108	11	4	2.8		にぶい橙色	淡褐色鉄輪		
441	C	越中漆戸	皿	X124Y114		5			灰褐色	薄褐色のあるイタ ・ア黄色鉄輪	17C前	買入前に泥丸 内面に泡みに仕上
442	C	越中漆戸	向付	X114Y125		4.8			灰褐色*	灰褐色(浅灰色) 鉄輪	17C前	
443	C	越中漆戸	皿	X105Y111	11	4	2		にぶい橙色	暗褐色鉄輪	17C前	軸止めあり。両台 内に網状あり
444	C	越中漆戸	皿	X129Y124		4.6			にぶい橙色	灰オーラー・ア 白色鉄輪	17C前	
445	C	越中漆戸	皿	X129Y124		5			にぶい黄褐色	暗褐色鉄輪		直接重ね焼き
446	C	越中漆戸	皿	X106Y112		5.6			にぶい橙色			
447	C	越中漆戸	皿	X122Y103		4.8			にぶい黄褐色	暗褐色鉄輪		
448	C	越中漆戸	皿	X126Y129		4.8		回転赤切り	暗赤褐色			腹?
449	C	越中漆戸	皿	X107Y112		5			灰褐色	灰褐色鉄輪	17C前	声音量ね脱さ。ガ ラガラした底が上 より
450	C	越中漆戸	碗	X121Y123					灰白色	にぶい黄褐色		
451	C	越中漆戸	皿	X108Y118	9				にぶい黄褐色	(浅)オーラー・ア 白色鉄輪		外側山腹部に擦痕
452	C	越中漆戸	鏡	X115Y118					灰白色	にぶい黄褐色とオ リーブ褐色鉄輪		2個類似の軸のかけ 分け
453	C	越中漆戸	小瓶	X114Y127	9.9	3.8	1.9	四輪赤切り	灰白色	褐色鉄輪	18C以前	
454	C	越中漆戸	皿	X06Y128		4.8			にぶい黄褐色	浅青色鉄輪		
455	C	土器	陶輪	X119Y103	径4.1	火 径 (1.8)	8	4.8	淡黄色	全表面鉄輪		越中山型
456	C	越中漆戸	壺	X136Y128	12				にぶい黄褐色	内外埋理兩色鉄		
457	C	越中漆戸	押輪	X127Y123		12		回転赤切り	にぶい黄褐色	外側のみ灰白色鉄 輪		外側に擦痕、底部 に油汚れ多く付着
458	C	越中漆戸	すり鉢	X131Y126	10.8			四輪赤切り/12升 3.1mの計し口	淡青色	全表面褐色鉄輪		
459	C	越中漆戸	香炉	X122Y134		8.8		四輪赤切り	灰褐色	外側のみ暗褐色鉄 輪		
460	C	越中漆戸	皿	X124Y114	10.4				灰褐色~灰黑色	内外埋理兩色鉄		外側に自然擦
461	C	肥前陶器	大皿	X117Y104(SD06)		13			にぶい青色	にぶい黄色鉄輪	17C末~18C前	砂口模
462	C	肥前陶器	鏡	X127Y106					にぶい青色	灰褐色鉄輪	18C	鏡子柄
463	C	肥前陶器	皿	X129Y102		4.4		見込み粘の物鉄削	深灰色	觸跡	17C後~18C前	内野山西窓
464	C	肥前陶器	空	X128Y119				内面:青色或赤 色	暗赤褐色			
465	C	肥前陶器	鏡	X127Y121	4.5				灰白色	透羽輪	17C後~18C	高級品。買入組 かくみられる
466	C	肥前陶器	皿	X127Y121		4		見込み粘の目鉄削	灰白色	青みがかった白		両面に擦れ跡
467	C	肥前陶器	皿	X123Y107		6			灰褐色	浅青色透羽輪		海船荷物
468	C	肥前青磁	鏡	X131Y116		2.6			灰白色	緑灰色鉄		両面触跡、金等に 貯入される
469	C	越中漆戸	鏡	X132Y137		5		回転赤切り	灰褐色	褐色鉄輪		やや地感不良
470	C	越中漆戸	香炉	X116Y113	16				灰褐色	浅青色鉄輪		
471	C	越中漆戸	皿	X128Y105		5			灰褐色			外側面に煤付着
472	C	土器	直	X117Y103		4		回転赤切り	にぶい黄褐色			
473	C	越前	すり鉢	X129Y106				内面:6升/1.9m の計	にぶい青色			

表16 遺物觀察表(II)

遺物	地名	基準	出土地点	L.L.(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	調査	胎土色調	釉(色調・形態)	時期	備考
478 C 石製品	石	X126Y112									縦灰岩
479 C 石製品	石	X121Y116									砂岩
476 C 土製品	土人形	X131Y111					による黃褐色				砂岩
477 C 土製品	土人形	X119Y103					による黃褐色				砂岩
478 C 土製品	土人形	X111Y118					による黃褐色				砂岩
475 C 土製品	土人形	X135Y111					による黃褐色				砂岩
428 C 富士	富	X139Y117					灰白色	オリーブ状	13C中~14C初		
429 C 富士	富	X116Y106					灰白色	オリーブ状			
430 C 富士	移	X116Y110					灰白色	オリーブ状			縦つばきあり、買入られる
431 C 富士	移	X109Y107			6.2		灰色	オリーブ状			高台部分まで鉄鉢
432 C 富士	富?	X109Y109			6.6		灰色	明オリーブ状	15C		高台部分まで鉄鉢、内側見込みに花(?)の跡
433 C 漢戸・美濃	天目鏡	X116Y104					灰白色	黒色鉄鉢			
434 C 漢戸・美濃	鏡	X124Y118					灰白色	黒色鉄鉢			
435 C 漢戸・美濃	げんこつ鏡	X117Y131					灰白色	黒色鉄鉢	17C?		
436 C 漢戸・美濃	鏡	X110Y135					灰白色	黒色鉄鉢			
437 C 漢戸・美濃	鏡	X126Y118		12			灰白色	透明感のある淡青色物	16C後		
432 C 漢戸・美濃	鏡	X111Y124					灰白色	透明感のある淡青色物	15C前		
439 C 漢戸・美濃	丸皿	SD80(X108Y111)			(6.6)		灰白色	透明感のある淡青色物	16C中~後		買入にみられる、更迭みかたばらの印花、高台内に織田氏城あり
250 D 山茶碗	小皿	SD04盛上	6.6	3.6	1.7	底部凹凸切り	灰白色				山茶碗第6段階(13C後)
291 D 石製品	窓口	SD04	径20.2				灰白色			13C後~14C前	山茶碗小皿と共に、角窓透彫りの珍美、焼成による赤化が比較的多い
292 D 八尾	鏡	SD01					灰白色				やや焼成不良
293 D 土師器	皿	SD01	7.6		1.8	一段ナメ(皿は裏い)	による青色			13C後~14C前	火風
294 D 漢戸・美濃	丸皿	SD02	11				灰白色	透明感のあるオリーブ黄色	15C後		
295 D 三郎皿	皿	SD02					灰白色~灰青色				
296 D 上部器	皿	X60Y98	9.5	2	1.5	一段ナメ	による青色			13C後~14C前	火風
297 D 箕輪	小皿	SD05ト皿					灰白色				
298 D 蔵中盤	鏡	X81Y91(5D05上 蓋?)					灰白色	黒色鉄鉢	17C		
299 D 洗拭	すり鉢	X76Y90				96mm/4cmのおろし臼	灰白色				
300 D 骨壺	調	X72Y99			4.8		灰白色	透明感のあるオリーブ灰色			骨壺見込み開始、 縦つばきあり、高台風致
301 D 金剛製品	袋	SK01	径2.2	穴 径 0.6							更永運営
481 E 土解器	鏡	SK01	12			一段ナメ	灰黄色			13C後~14C	
482 E 土解器	鏡	SK01	12				黄白色				
483 E 土解器	皿	SK01	13前後			一段ナメで1種類 皿に伴い墨取り	灰白色			14C前	外周底部分に墨付帯
484 E 土解器	皿	SK01	11			一段ナメ	黑色				
485 E 土解器	鏡	SK01	15				白色	灰白色	13C中~14C初	墨取り、ロハグ	
486 E 漢戸・美濃	天目鏡	SK01					灰白色	黒色鉄鉢			
487 E 漢戸?	鏡	SK01	(20)				黑色				
488 E 球形	すり鉢	SK01				66mm/1.7cmのおろし臼	灰白色				
489 E 球形	鏡	SK01				7目/3cmの身口	灰白色				
490 E 球形	鏡	SK01				7目/3cmの身口	灰白色				
491 E 球形	鏡	SK01				10目/3cmの身口	灰白色				
492 E 球形	鏡	SK01				10目/3cmの身口	灰白色				
493 E 金剛製品	袋	SK01									更永運営
494 E 三郎皿	皿	SD04					灰黄色				
495 E 土解器	鏡	SD04				内外墨ハケノ	灰白色				古墳時代 外面に炭化物付着
496 E 球形	鏡	SD05				8目/3cmの身口	灰白色				
497 E 球形	鏡	SD05				10目/3cmの身口	灰白色			14C	鹿島不良
498 E 球形	鏡	SD07					灰白色				やや焼成不良

表17 遺物観察表(2)

遺物 番号	地名	種類	出土地点	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	高 板	胎上色調	胎(色調・種類)	時期	備考
499 E 津田	豆	SD07				11mm/3cmの角型	灰色				黑色吹き出し物多 い。
500 E 津田	不明	SD05					灰色				燒成不良
501 E 佐野	すり鉢	SD05				16mm以上/2.7cm以 上のおろし口	灰色				
502 E 佐野	イリ鉢	SD05				11mm以上/3cm以 上のおろし口	灰色				
503 E 越中飯戸	碗	X156Y135					灰白色	透明感のある褐色 鉄輪			鍵入?
504 E 越中飯戸	皿	SD11		4.8			浅黄色	灰白色鉄輪	17C前		難止めあり、見込 み要花印記
505 E 津田	甕	SD07				10mm/3cmの角型	褐色				黑色吹き出し物多 い。
506 E 井利	甕	P01				11mm/3cmの角型	灰白色				黑色吹き出し物少 量
507 E 越中飯戸	皿	大深	4.4	11	2.1		淡黄色	淡黄色とオリーブ 青(鉄輪)			見込み番花印記
508 E 佐野	林	X146Y104	(25)				灰白色				III~IV期
509 E 佐野	すり鉢	X136~127 Y31~62	32			6条/2.3cmのおろ し口	灰色				III~V期
510 E 津田	すり鉢	X119Y31				5条/1.7cmのおろ し口	灰色				V期
511 E 飯戸・苦瀬	瓶	X122Y47	5.2				灰白色	透明感のある褐色 鉄輪			
512 E 鳥小頭戸	皿	X122Y47	14.6				浅黄色	褐色~鉄色鉄輪			
513 E 越中飯戸	皿	X145Y119	10				に4つ黄褐色	灰白色鉄輪	17C前		
514 E 鳥小頭戸	舟付	X132Y49	10				灰白色	褐色~褐色~褐色鉄 輪	17C前		
515 E 土製品	土器	X136Y98	(6)3.8				に5つ灰色				
516 E 有澤	碗	X137Y95					灰白色	透明感のあるオリ ーブ灰色			
517 E 湯戸・美濃	壺	X117Y35	(10.5)	穴径?	吳84		灰白色	透明感のあるオリ ーブ灰色			
518 E 陶器	壺?	X131Y76				内外面ナメ	灰白色				鐵汎出
519 E 陶器	甕	X108Y5				内外面やや粗めの ナメ	陶灰白				
520 E 金銀製品	鏡	鏡上中									寛永通寶
521 E 金銀製品	鏡	鏡上中									寛永通寶
522 E 金銀製品	鏡	鏡上中									寛永内、刀形
523 E 石綿島	砲石	X126Y47									褐色包、小盤形
524 E 土製品	カマド壺	SK01									
525 A 庄田	すり鉢	X52Y80					灰白色				日期
526 E 越中飯戸	鏡	X65Y106	18				浅黄色				口縁階部鉄剝ぎ
527 C 佐野	皿	X112Y134				12mm/3cm	灰白色				日期

表18 SD15出土木器觀察表(i)

番号	品目	出土区	大きさ(cm) 欠は欠損していること	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
1	歛身	X39Y61	長さ24.8欠、幅10欠、厚さ0.5~1.3	ケヤキ・柾目	No.4
なで肩で先が尖る。中軸線上は厚く、端部が薄い。上部に着柄軸が付くとみられるが欠損している。鍔あるいは櫛の可能性があるが、樹種と身の先端が尖る特徴から歛とみる。そうであれば櫛柄のものが付くのであろう。					
2	歛身	X40Y60	長さ8.7欠 幅6.7欠 厚さ2	ブナ属・柾目	No.120
平面形が短冊型をした身の上部とみられる。頂部は隅丸方形である。下部は大半が欠損しているが、方形柄穴が付くものと考えられる。					
3	二又鉤	X41Y55	長さ22欠 幅6.2欠 厚さ1.5	トネリコ属	No.13
磨滅が著しい。なで肩で先が二又に分かれる身の部分と考えられる。身はそりがあり、鍔の可能性もある。木質は柔らかい感じであり、土を掘り起こすための道具ではないかもしない。					
4	歛柄	X37Y56	長さ12.5欠 幅6.4 厚さ4.2	トネリコ属	No.109
柄穴が方形の鍔の頭部と考えられる。長さ7cm幅3.6cm厚み1.8cmの断面方形の突起部を作り出しており、突起部には一辺約1cmの方形穴がある。突起根元に歛身をあてがい、この穴に栓を差して歛身を固定したものと考えられる。着柄角度は約60度である。					
5	歛柄	X40Y59	長さ107 太さ3	ムクロジ・心去り	No.36
柄穴が円形の鍔の柄と考えられる。端を丸く削り出している側がわずかに細いので基部とみられる。頭部は裂けているところがある。くさびを打って固定してあったことも考えられるがはっきりしない。					
6	鍔柄	X37Y58	長さ21欠 把手幅7.2 太さ2.2	クワ属・心去り	No.7
把手がT字形をした組み合わせ鍔の柄と考えられる。把手と柄の境に段が刻まれ、全体にきれいに磨かれていて黒光りしている。杖あるいは櫛の把手の可能性も考えられる。					
7	堅杵	X43Y61	長さ55欠 捩部太さ3 つき部太さ4.3	ムクロジ・心去り	No.1
握部が一定の太さで、つき部との境がなで形の段となる。つき部先端はまるく張り出す。握部には節帯がみられない。もう一方のつき部は欠けているとみられるが、なかつた可能性もある全体に細身である。					
8	櫛	X43Y59	長さ48.9欠 身長27 身幅13.5 厚み1.3	スギ・柾目	No.89
身はなで肩で先端が尖る木の葉形。身の断面は平坦で両端が薄くなる。正面がわずかにくぼむ柄は幅3.5cmで断面は丸が丸い長方形である。柄の頭は欠けており、一本の製品とみられる。					
9	たも網棒	X43Y59	長さ44欠 幅39.4欠 柄太さ15	カヤ・枝	No.90
対角して枝別れる枝を棒とし、茎を柄として利用したもの。棒になる枝はほとんど欠損している。柄は長さ29.5cmで端に亀頭状の瘤部を作り出す。柄の片側は平坦に削ってあり断面がまばこ形を呈する。頭部と平坦面は、別々の柄を添えて縛るために造作とみられる。網の大きさは直径30cmほどであったろうか。					
10	櫛板	X41Y60	長さ41欠 幅11 厚さ1	スギ・板目	No.66
片方の側辺に5箇所にえぐり込みがある。えぐりは、幅1cm深さ6mmの三角のものと、幅1cm深さ1cmの四角の二種がある。両端が欠けているので全体は不明であるが、三角の間隔は14cm四角の間隔は15.5cmを測る。間隔の異なる二種の網の網目が織られたのであろう。網目間隔から、杖あるいは櫛を編むための道具と考えられる。					
11	絹糸巻具	X40Y60	長さ40.8 幅2.5 厚さ2.5	スギ・心去り	No.49
断面台形の角棒の両端に削り出しにより頭部を作り出したもの。機織り具の部品である絹糸を固定した道具と考えられる。削り出し部分は立木などに結び固定するための工作とみられる。そうであれば、削り出し部分の間が約24cmであり、織られた布の幅を示す。					
12	縫打具	X35Y60	長さ12欠 幅4.4 厚さ1	クワ・柾目	No.108
片方の側辺を薄くして刃部を作り出したもの。機織り具の部品であると横糸を押し込む道具と考えられる。両端が欠けているが、左端は細くなり、手すれよるとみられる磨滅が認められるので、そこが手に握られる部分、刃部は横糸を押し込む部分とみられる。					
13	紡錘車の軸	X39Y59	長さ46.5欠 太さ1	スギ・心去り	No.10
断面が丸くなるように全面をきれいに削った棒である。下端は折れているようであるが、上端は細く尖るようである。紡錘車を取り付け糸に燃りをかける道具とみられるが、矢柄の可能性も考えられる。					
14	紡錘車の軸	37Y60	長さ23欠 太さ1	スギ・心去り	No.34
断面が丸くなるように全面をきれいに削った棒である。上端下端ともに折れている紡錘車の軸と考えられる。下端は細く段になっているようでもあり、何かに差し込むための工作であるかもしれない。					

表19 SD15出土木器観察表(2)

番号	品目	出土区	大きさ(cm) 欠は欠損していること	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
15	剣物柄	X40Y60	高さ30.6 幅12.6欠 厚さ3.8	スギ・柾目	No11
			筒状の剣物柄の一部である。底部は内面に張り出しを設け段をなす。外面は側辺が垂直に立つが、口縁部は外側を削り内傾させる。断面形から直径を測ると15cmの細いものとなるが、おそらく小判形になるものであろう。口縁部が内傾するのには、蓋がかかるためかもしれない。		
16	剣物柄	X42Y62	高さ36 幅12.6欠 厚さ5	スギ・柾目	No25
			筒状の剣物柄の一端である。底辺は内面に張り出しを設け段をなす。残りは無いが、外面は側辺がほぼ垂直に立ち、口縁部はわずかに内傾するらしい。		
17	箱	X39Y59	高さ20.3欠 幅11 厚さ0.9	スギ・柾目	No69
			板の短辺に幅1.8cm高7mmの方形穴がある。長辺の片側側辺は角が丸く、反対側の辺には台形のえぐり込みを施す。丸みのある側に上にした箱の側板とみられる。方形穴は直交する横板をはめ込んで固定するためのものと考えられる。木口に段があるが、面を切りそろえる際にできた丸い窪いとみられる。表面に刃物傷が残る。		
18	箱	X37Y57	高さ26欠 幅4.7 厚さ0.6	スギ・柾目	No159
			板の短辺に幅0.5cmのえぐり込みが3箇所以上入る。長辺の片側側辺には曲線的なえぐり込みを施す。箱の側板とみられ、短辺のえぐり込みは、横板を組み合わせるための工作であろう。曲線のえぐりは装飾であろう。		
19	箱	X37Y61	高さ18欠 幅5.6 厚さ1	スギ・柾目	No43
			板の短辺に平行して刃物による線刻がある。線と木口の間に横板がある箱の側板と考えられる。長辺片側側辺に段状のえぐりがある。		
20	蓋	X40Y60	縦5欠 横2.1欠 厚さ0.6	スギ・柾目	No54
			縫が炭化しており、本来の形状は不明である。しかし、片面の周囲は一段高く残し、中央は厚厚さ0.5cmと少し薄くなっている。合子状容器の蓋ではないかと考えられる。		
21	剣物	X43Y58	長さ220 径40 厚さ35	ハンノキ・心持ち	No110
			丸木を円筒形にくりぬいたもの。表面に加工痕が残る。柄の木製品か井戸杵であろう。		
22	蓋	X36Y61	長さ24.2 幅7.6 厚さ0.8	スギ・板目	No71
			周辺が薄く、断面がわざかに山形である。箸箱のような箱物の蓋ではないかと考えられる。		
23	舟か檜		長さ17.2欠 幅4.5欠 厚さ4	スギ・柾目	No119
			舟か檜の舳先部分とみられる。先端部は幅4.5cmだけ水平に面取りし、あとは湾曲している。側辺は次第に広がるようである。		
24	底板か蓋	X42Y61	長さ19.2欠 幅4欠 厚さ0.8	スギ・板目	No53
			隅丸の薄板である。曲物のような容器の底板か蓋と考えられる。側辺に弧状のえぐりがはいる。		
25	舟か檜	X45Y59	長さ270欠 幅26欠 厚さ3	スギ・板目	No111
			直径約50cmの丸木をくり抜いたもの。外側に炭皮を残している。くりぬきにあたっては、焼きこがしが行われたようであ、炭化したところがある。片側側辺は丸く仕上げている。		
26	鎧状品	X45Y59	長さ19.5欠 幅11.5欠 厚さ2	スギ・板目	No17
			身は先がはつりとられて欠失しているが、上部がなで肩の鎧状品である。長さ14.5cm直径2cmの断面形が丸い柄が付く。断面形が丸いのでこのまま手に持って使ったと考えられる。		
27	鎧状品	X44Y59	長さ31.8欠 幅12.2 厚さ1.3	スギ・板目	No6
			身は先端を欠くが、やや円を張る四角形になるとみられる。長さ13cm幅3cmの断面形の柄が付く。身の肩部が豊つていないことや断面形が方形であることから、未製品の可能性がある。		
28	剣形	X42Y59	長さ45.2 幅3.2 厚さ0.8	ヒノキ属・板目	No2
			身の断面は菱形で中央に棱(鈍)を作り出している。先端へ行くに従い細く尖る。基部は両側辺を削り茎を作り出している。茎と身の境は緩やかであるので、槍や矛にみられる槍首を表しているともみられ、槍形あるいは矛形であるかもしれない。長いので細剣銅劍(槍・矛)を模したものと考えられるが、鎧製石器を模したものである可能性もある。		
29	鎧状品	X41Y60	長さ32.1 幅7欠 厚さ1	スギ・板目	No15
			本の葉形の身の片側部分とみられる。身の上部に半円形の穴がある。穴は身の中心を通る軸部をはさんで二箇所にあつたものと考えられる。また身の上部にも、軸部が伸びていたと考えられる。本來の身幅は18cmほどであったろう。身は先が尖り、側辺も薄く仕上げており、先端を表現しているのである。		
30	脚	X41Y60	長さ15欠 幅3.5欠 厚さ2	スギ・柾目	No16
			檜または盤の脚部とみられる。長辺側辺に弧状のえぐりが入る。えぐり部分と短辺の角を丸く仕上げている。		

表20 SD15出土土器観察表(3)

番号	品目	出土区	大きさ(cm) 欠は欠損していること	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
31	鍔状品	X42Y61	長さ44欠 幅10欠 厚さ1.3	スギ・板目	No.5
身の先端と側辺を欠くが、やや細長い木の葉形になるとみられる。身の上部に軸をはさんで半円形の穴が二個あいている。身の上部には長さ7.5cm太さ1.5cmの輪部が伸びている。輪部の断面はかまぼこ形を呈する。平坦な面に別木の柄が付くのである。					
32	矛形か	X36Y56	長さ47.1欠 幅6 厚み0.9	スギ・板目	No.95
先端を尖らせた板である。裏面は平坦、表面はわずかであるが山形に盛り上がりしており、その表面は刀子状の工具でていねいに削ってある。					
33	鳥形	X42Y60	長さ40欠 幅4.7 厚み1.5	スギ・板目	No.3
板の一方を鳥頭状に細く尖らせ、反対側は削り出しにより段を設け尾羽根を表している。片側側面の頭部寄りと腹部にあたる側邊に浅いえぐりが施されている。側面のえぐりのある面とは反対側に刀子などによるていねいな削りが行われている。					
34	バチ形木器	X42Y59	長さ12.5欠 幅4.2 厚み0.8	クワ属・板目	No.8・9
35	又歯の齒か		長さ19.7欠 太さ8~1.4	ケヤキ・心去り	No.122
先の尖った棒である。基部はきれいに削られている。齒は差込み式の可能性がある。					
36	柄		長さ28 幅2.6 厚さ1.3	スギ・心去り	No.14
刀子などの工具の柄ではないかと考えられる。断面かまぼこ形、両端は三角形に削り出し、両端付近と中央に幅1.5cmの深い溝が巡る。同様のものを二枚合わせその間に工具の基部をはさんみ、溝のところに樹皮などに巻いて固定したものと考えられる。					
37	部材		長さ25.1 幅2.5 厚さ1.6	スギ・心去り	No.26
タモあるいは熊手などの組み合わせ部材とみられる。断面かまぼこ形、山形の面には両端に幅1.5cmの浅い溝が斜めに巡る。平坦な面には、両端には幅と中央に幅2cm深さ5mmの溝が掘られている。両端の溝は反対方向へ向かい、外側へ向かう方に網状あるいは熊手の歯がとり付けられるものと考えられる。平坦部分の溝に棒材をはめ込み、山形部分の溝は、それを縛り付けた跡と見られる。					
38	柄	X37Y60	長さ12欠 幅2.1 厚み1.9	スギ・心去り	No.12
断面がかまぼこ形の棒である。先端に浅い段を設け丸い頭部を作り出す。平坦面に別木の身をあて、段の下のところで紐で縛って取り付けたものとみられる。					
39	柄	X37Y60	長さ15.8欠 幅1.5 厚み0.8	スギ・心去り	No.30
断面がかまぼこ形の棒である。先端に三角形の頭部を作り出す。平坦面に別木をあて、頭部下のところで紐で縛って取り付けたものとみられる。					
40	柄	X39Y60	長さ20欠 幅2 厚さ1.1	スギ・心去り	No.67
断面がかまぼこ形の棒である。2箇所に木釘が打ち込まれている。木釘は、頭部の幅1.3cm厚み0.5cmのくさび状のものである。先端は欠けているが、頭部が1cmほど外へ出ている。両端を欠いているが、先端に三角形の頭部を作り出すものと考えられる。平坦面に別木をあて、木釘で固定したものとみられる。					
41	柄	X39Y55	長さ26欠 幅1.2 厚さ1	スギ・心去り	No.112
断面がかまぼこ形の棒である。先端に三角形の頭部を作り出す。平坦面に別木をあて、頭部下のところで紐で縛って取り付けたものとみられる。					
42	柄	X39Y55	長さ37.5欠 幅1.8 厚さ1	スギ・心去り	No.113
断面がかまぼこ形の棒である。					
43	柄		長さ25.7欠 幅2 厚さ0.8	スギ・心去り	No.35
断面がかまぼこ形の棒である。先端を丸く削りだしている。三角形の頭部を作り出す柄の基部にあたるとみられる。					
44	柄		長さ4.2欠 幅1.8 厚さ1.1	スギ・心去り	No.125
断面がかまぼこ形の棒である。先端は山形に切りとられている。					
45	柄		長さ20欠 幅2.2 厚さ0.9	スギ・心去り	No.97
断面がかまぼこ形の棒である。					
46	柄		長さ14.2欠 幅1.8 厚さ0.8	スギ・心去り	No.124
断面がかまぼこ形の棒である。					
47	柄	X40Y59	長さ37.8欠 幅1.6 厚さ0.7	針・心去り	No.65
断面がかまぼこ形の棒である。					
48	柄	X35Y61	長さ26欠 幅1.6 厚さ1.3	スギ・心去り	No.96
断面が丸い棒である。					

表21 SD15出土木器観察表(4)

番号	品目	出土区	大きさ(cm) 欠は欠掛けていること	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
49	柄		長さ20欠 幅1.4 厚さ1.1	スギ・心去り	No46
断面がかまぼこ形の棒である。平坦面ははがれかもしれない。					
50	柄	X36Y61	長さ24欠 幅1 厚さ0.7	スギ・心去り	No104
断面がかまぼこ形の棒である。					
51	柄		長さ32.2欠 幅1.1 厚さ0.8	スギ・心去り	No132
断面がかまぼこ形の棒である。					
52	柄		長さ29.5欠 幅2 厚さ0.8	スギ・心去り	No144
断面がかまぼこ形の棒である。					
53	柄		長さ51欠 幅2.3 厚さ0.8	スギ・心去り	No146
断面がかまぼこ形の棒である。					
54	柱	X42Y62	長さ128欠 幅19.5欠 厚さ5欠 直径約40cmの丸木に、縦16cm横10.5cmの方形の穴(穴貫)があいている。一部にのみ残存。	クリ・心持ち	No83
柱部木口に縦3cm深さ5cmのえぐりが入り二叉になるらしい。鴨居あるいは敷居材か。					
55	柱	X35Y60	長さ18.2欠 幅8欠 厚さ3.5	ハンノキ・柾目	No100
角柱である。端部木口に縦3cm深さ5cmのえぐりが入り二叉になるらしい。鴨居あるいは敷居材か。					
56	柱	X37Y56	長さ26.2欠 幅6.5欠 厚さ2.5	スギ・板目	No101
角柱である。端部木口にえぐりが入り二叉になるらしい。鴨居あるいは敷居材か。					
57	柱	X39Y56	長さ27欠 幅12 厚さ10	スギ・柾目	No21
角柱である。端部の片面を斜めに削り落としている。高床建物の床材とみられる。主柱や横材と交差するとみられるところに、相欠き状のえぐり込みがある。					
58	柱		長さ53欠 幅10.5 厚さ8	ハンノキ属・心持ち	No78
一部に表皮を残す角柱である。表面に削りや刃物傷が残る。					
59	厚板	X42Y62	長さ39.6欠 幅29.5 厚さ5.5	スギ・柾目	No24
端部の両角を削り落としている。また、端部から20cmのところに約3cmの段を設けている。段を足掛け部とみて、はじめははしごと見たが、段の幅が狭いことから、建物の床板ではないかと考えられる。					
60	厚板	X38Y56	長さ32.5欠 幅16.5欠 厚み5.5	スギ・柾目	No166
右寄りに一辺8cmの方形の穴があいている。三角形を呈することから、建物妻部分の壁板とみると穴は桟木がはまる穴ともみられる。また断面の木目が斜めに走ることから、舟のようなくくり物の一部の可能性がある。表面に削りと刃物傷が残る。					
61	厚板	X40Y60	長さ30 幅25.5 厚み2	スギ・板目	No29
上端は、両側から切断して切り揃えた板である。表面が焼け焦げている。もとは建物の壁板であったものと考えられる。					
62	厚板	X39Y60	長さ35欠 幅11.6欠 厚み2	スギ・柾目	No70
表裏ともに焼け焦げている。建物の壁板とみられる。					
63	丸い板	X37Y61	長さ40欠 幅4.6欠 厚み1.8	スギ・柾目	No106
側邊が曲線を描く板である。柵の底板ともみられるが、ねずみ返しの可能性もある。					
64	穴のある板	X39Y58	長さ37 幅9.2 厚み2	スギ・板目	No22
両端を切り揃えた板で、中央に縦2cm横1.5cmの長方形の穴があいている。下端右側は丸みをついている。建物などの部材と考えられ、穴は他の板材との接合のための紐穴と考えられる。表面に削り痕と刃物傷が残る。					
65	穴のある板	X44Y58	長さ46 幅11.5 厚み2.2	スギ・板目	No18
上部右側を斜めに切り落とした板である。その部分の横に縦3cm横1.5cmの四角い穴があいている。端部木口は切り揃えてある。建物など部材とみられ、穴は他の板材との接合のための紐穴とみられる。					
66	穴のある板	X40Y61	長さ58 幅11.8 厚み1.7	スギ・柾目	No39
下端右寄りに縦5cm横1.5cmの長方形の穴があいている。穴は他の板材との接合のための紐穴とみられる。穴は両端が丸みを持っており、紐すれの跡を示すものであろう。建物など部材とみられる。					
67	穴のある板	X37Y61	長さ52 幅12.5 厚み1.4	スギ・板目	No40
下端右寄りに縦5cm横1cmの長方形の穴があいている。穴は他の板材との接合のための紐穴とみられ、建物など部材とみられる。					

表22 SD15出土木器観察表(5)

番号	品目	出土区	大きさ(cm) 欠は欠損していること	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
68	穴のある板		長さ35.2幅6.2 厚み1.5	スギ・板目	No155
上端右寄りに縦1.5cm横0.6cmの長方形の穴があいている。穴は他の板材との接合のための紐穴とみられ、建物など部材とみられる。					
69	田下駄か	X46Y60	長さ26 幅8.5 厚み1	スギ・板目	No94
側辺の角の部分が少し削り落としてある。上端中央と右寄りに、また下端右寄りに一辺1cm前後の方形の穴があいている。輪かんじき田下駄の足板の可能性がある。					
70	穴のある板		長さ23.7 幅6.5 厚み0.9	スギ・板目	No44
上端中央に一辺3cm前後の方形の穴があいている。下部は両側から斜めに切断している。					
71	穴のある板		長さ16 幅5.4 厚み1.9	スギ・板目	No164
板の中央に不整形の穴がある。					
72	くさび		長さ11.4 幅3.5 厚み1.3	ハンノキ鶴・板目	No179
断面が台形の棒である。先端が薄くなっている。					
73	穴のある板		長さ35.7 幅2.5 厚み2.2	スギ・板目	No72
上端部に縦2cm横0.6cmの長方形のえぐりがある。右側辺が欠けているので、そのえぐりは本来穴になるとみられる。穴は他の板材と栓あるいは紐で接合するための穴とみられる。					
74	えぐりのある板	X40Y60	長さ48.5 幅8.3 厚み2.6	スギ・板目	No27
片側の側辺2箇所に幅3~4cm深さ約1cmのえぐりがある。えぐりはそれぞれ異なる面から行われていて、断面の傾斜が対称になる。両端部は両側から切り揃えられている。					
75	えぐりのある板	X40Y60	長さ48.2 幅7.7 厚み2.6	スギ・板目	No42
右側辺に幅3cm深さ3cmのえぐりがある。下端は斜めに切り揃えられている。					
76	板		長さ49欠 幅5.6 厚み1.3	針・板目	No51
右側辺下部が斜めに削り落とされている。					
77	板	X38Y60	長さ47.5欠 幅6.5 厚み1.5	スギ・板目	No99
上端右角がL字形に切られている。					
78	板	X38Y60	長さ58.2 幅8 厚み1	スギ・板目	No23
79	板	X35Y61	長さ55.5 幅13.8 厚み2.5	スギ・板目	No98
右側辺が薄く斜めに傾斜している。両端を切り揃えられている。					
80	板	X39Y60	長さ58.5 幅5.5 厚み1.8	針・板目	No154
81	板	X44Y57	長さ38.4 幅4.7 厚み1.7	スギ・板目	No37
下端は切り揃えられている。上端は先端が削け焦げている。					
82	板	X40Y60	長さ39 幅7.2 厚み2	スギ・板目	No41
両端は両側から切り揃えられている。表面は削り痕がよく残る。					
83	板	X42Y55	長さ40 幅6.7 厚み1.5	スギ・板目	No38
両端は切り揃えられている。					
84	板	X42Y58	長さ40.5欠 幅5 厚み0.8	針・板目	No168
85	板		長さ37欠 幅6.4 厚み0.7	針・板目	No158
86	板		長さ44欠 幅6.9 厚み1.2	針・板目	No153
87	板		長さ29欠 幅7 厚み1.5	針・板目	No151
88	板	X37Y61	長さ29.6欠 幅12.5 厚み1	スギ・板目	No162
89	板		長さ26.5 幅11.3 厚み1.5	針・板目	No152
表面に削り痕が残る。					
90	板		長さ22欠 幅8 厚み3.8	スギ・板目	No180
91	板	X40Y60	長さ33.7 幅4.3 厚み1.9	針・板目	No64
両端は切り揃えられている。					

表23 SDI5出土木器観察表(6)

番号	品目	出土区	大きさ(cm) 欠は欠損していること	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
92	板		長さ36 幅5 厚み1.1	針・板目	No52
表面右寄りに浅い段がある。この段に板を置いた箱状のものの可能性がある。両端は切り揃えられている。					
93	板	X39Y60	長さ83.5欠 幅8.5 厚み1.7	スギ・板目	No87
94	板	X41Y59	長さ79 幅8 厚み1.8	スギ・板目	No86
両端は切り揃えられている。					
95	角材	X40Y61	長さ49.7 幅4.6 厚み2.8	スギ・柾目	No62
表面に刃物傷がある。					
96	角材	X40Y59	長さ47 幅4 厚み2.4	針・板目	No63
97	板	X40Y59	長さ40.7 幅3.2 厚み1	針・板目	No161
98	板	X41Y60	長さ33.2 幅4 厚み1	針・板目	No157
99	板		長さ33.8 幅4.5 厚み1.5	針・板目	No169
100	板		長さ27.7 幅3.4 厚み0.8	針・板目	No163
101	板	X42Y60	長さ28.5 幅5 厚み1.9	針・板目	No156
102	板		長さ23.9 幅4 厚み1	針・柾目	No160
103	板	X42Y59	長さ15欠 幅7 厚み1.2	スギ・板目	No165
上端が斜めになっている。表面に刃物傷がある。					
104	板		長さ18.1欠 幅3.5 厚み1.5	針・板目	No182
105	板		長さ20.7欠 幅4.6 厚み1	針・板目	No181
106	棒	39Y60	長さ66.5欠 太さ3.7	ハコヤナギ属・心持ち	No56
表皮付きの枝材。上端にV字状のえぐりを入れる。下端は欠損しているが、その手前にも浅いえぐりがある。えぐりは横材に削るつけるための工作とみられる垂木のような建築部材とみられる。					
107	棒	42Y59	長さ57.9欠 太さ3	トネリコ属・心持ち	No73
表皮がはぎ取られ、表面に細かい削りが行われている。					
108	棒	40Y59	長さ52欠 太さ3	広・心持ち	No74
109	棒		長さ47.8欠 太さ2.2	トネリコ属・心去り	No31
断面形が丸くなるようにていねいに削り出している。手に握る柄のようである。					
110	棒		長さ52.5欠 太さ2.8	スギ・心去り	No28
断面形が不整形な九面形になるように削り出してある。下端は切っている。建築部材か。					
111	棒		長さ67.5欠 幅3.6 厚さ3	スギ・心去り	No32
断面形が扁平な八面形になるように削りだしている。上端に幅1.2cmの方形の穴があいている建物の部材か。					
112	棒	X44Y56	長さ31欠 幅3.9 厚さ3.2	スギ・心去り	No68
断面形が扁平な八面形になるように削りだしている。下端は太さ3cmで細くなっている。建物の部材か。					
113	棒	X41Y60	長さ36.4欠 幅3.2 厚さ2	スギ・心去り	No55
断面形が隅丸の長方形になるように削りだしている。建物の部材か。					
114	棒		長さ48欠 幅4.3 厚さ2.5	スギ・心去り	No147
断面形が半円形になるように削り出している。建物の柱材とみられる。					
115	棒	X37Y61	長さ49.5欠 幅1.8 厚さ1.3	針・心去り	No59
断面形が扁平な六面形になるように削りだしている。					
116	棒	X37Y60	長さ47.8欠 幅2.2 厚さ1.2	スギ・心去り	No57
断面形が隅丸の長方形になるように削り出している。					
117	棒		長さ90欠 幅4 厚さ4	スギ・心去り	No19
断面形が不整形な方形になるように削り出している。建物の柱材とみられる。					
118	棒	X40Y60	長さ35.8欠 幅3 厚さ2.5	トネリコ属・心去り	No58
断面形が隅丸の長方形になるように削り出している。					

表24 SD15出土木器観察表(7)

番号	品目	出土区	大きさ(cm) 欠は欠損していること	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
119	棒		長さ13.5欠 幅1.7 厚さ1.4	スギ・心去り	No140
120	棒		長さ42.3欠 太さ1.5	スギ・心去り	No47
断面形が丸い棒である。両端が欠けている。火きり棒か。					
121	棒		長さ16.5欠 幅4.2 厚さ2	スギ・心去り	No33
断面形が長方形の棒である。正面に幅2.5cm長さ5.5cmになるとみられる隅丸方形の穴があいている。上端は丸くなっている端ともみられるが、開辺をみるとわずかにえぐれているので穴がうがたれているようにも見える。端が生きておれば、建築物の柱を固定する栓か。					
122	棒		長さ20.7欠 幅1 厚さ1.8	スギ・心去り	No121
上部は直径約1.5cmの断面かまぼこ形、下部は欠けているが長方形になる。糸巻き(糸枠)の部材か。					
123	棒	X40Y61	長さ41欠 幅2.8 厚さ3	スギ・心去り	No60
上端部は直径約1.5cmの断面かまぼこ形、下部は欠けているが同様になるとみられる。中央部は一辺2.7cmの方形である。棒形巾下駄(大足)の横棟材か。					
124	棒		長さ36.2欠 幅4 厚さ1.4	ハンノキ属・心去り	No107
断面形が長方形でやや山形に反った棒である。正面に一辺0.8cmの方形の穴がある。穴に軸木を通して他の部材と組合せるものであろうか。					
125	棒	X36Y61	長さ15.3欠 幅6 厚さ2.8	クワ・心持ち	No50
断面形がかまぼこ形である。下部に段を作り出している。下部は欠損しており、長く延びるものと考えられる。何かの柄か建築物の乗木であろうか。柄であれば、平坦な部分に何かを添えて段の所で縛り固定するのであろう。					
126	棒		長さ22.5欠 幅2.2 厚さ1.1	スギ・心去り	No48
先が尖った板状の棒である。					
127	棒		長さ17.6欠 幅1.7 厚さ1.6	スギ・心去り	No123
先が尖った棒である。基部の断面形は方形である。					
128	棒	X36Y61	長さ11.2欠 幅1.5 厚さ0.6	スギ・心去り	No105
先が尖った板状の棒である。					
129	棒	X41Y60	長さ27欠 太さ1.4	スギ・心去り	No45
全体に焼け焦げている。火きり棒か。					
130	棒	X40Y60	長さ31.5欠 幅2.8 厚さ1.5	トネリコ属・心去り	No77
断面形が長方形の棒である。表面がきれいに削って有る。組み合わせ品の部材とみられる。焼けこげている。					
131	棒	X37Y60	長さ48欠 幅3.6 厚さ1.7	針・心去り	No136
断面形が長方形の棒である。					
132	棒	X35Y60	長さ44.5欠 幅2.6 厚さ1.7	針・心去り	No135
断面形が長方形の棒である。					
133	棒	X40Y61	長さ30.7欠 幅2.5 厚さ1.1	針・心去り	No137
断面形が長方形の棒である。					
134	棒		長さ29.2欠 幅2.1 厚さ1	針・心去り	No138
断面形が長方形の棒である。					
135	棒	X41Y59	長さ30欠 幅1.8 厚さ1.5	針・心去り	No134
断面形が方形の棒である。					
136	棒		長さ29.7欠 幅1 厚さ0.7	針・心去り	No131
断面形が方形の棒である。					
137	棒		長さ24欠 幅1.2 厚さ0.7	スギ・心去り	No133
断面形が方形の棒である。					
138	棒		長さ17.3欠 幅2.4 厚さ1.1	針・心去り	No139
断面形が方形の棒である。先が尖る。					
139	棒	X37Y60	長さ46.8欠 幅3.8 厚さ2.5	トネリコ属・心去り	No61
断面形が方形の棒である。					

表25 SD15出土木器觀察表(8)

番号	品目	出土区	大きさ(cm) 欠は欠損していること	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
140	棒	X37Y60	長さ47欠 幅1 厚さ1	針・心去り	No102
断面形が方形の棒である。					
141	棒	X41Y60	長さ57欠 幅3 厚さ1.5	針・心去り	No171
断面形が方形の棒である。					
142	棒	X37Y61	長さ46.5欠 幅3 厚さ1.9	針・心去り	No170
断面形が方形の棒である。					
143	棒	X40Y60	長さ36.3欠 幅2.3 厚さ2.1	針・心去り	No145
断面形が方形の棒である。					
144	棒		長さ40.5欠 幅1.2 厚さ1	針・心去り	No141
断面形が方形の棒である。					
145	棒		長さ33.3欠 幅2.3 厚さ0.7	針・心去り	No143
断面形が方形の棒である。					
146	棒		長さ12.6欠 幅2.7 厚さ2.3	ヒノキ・心去り	No177
断面形が方形の棒である。					
147	棒	X37Y61	長さ39.4欠 幅2.2 厚さ1.1	針・心去り	No142
断面形が方形の棒である。					
148	棒		長さ44.5欠 幅3.5 厚さ2.8	針・心去り	No185
断面形が方形の棒である。					
149	棒		長さ40.3欠 幅2.3 厚さ1.4	針・心去り	No174
断面形が方形の棒である。					
150	棒		長さ40欠 幅1.8 厚さ1	針・心去り	No175
断面形が方形の棒である。					
151	棒		長さ35.7欠 幅3 厚さ1.4	針・心去り	No176
断面形が方形の棒である。					
152	角材	X45Y60	長さ82欠 幅3.5 厚さ2.8	スギ・心去り	No103
断面形が方形の棒である。先端に両側からえぐりを入れ、頭部をつくり出す。垂木のような建築部材とみられる。					
153	棒	X36Y60	長さ90欠 幅3.5 厚さ1.8	スギ・心去り	No88
断面形が方形の棒である。先端に片側からえぐりを入れ、頭部をつくる。垂木のような建築部材とみられる。					
154	柱	X40Y60	長さ168.5欠 幅6 厚さ3.5	スギ・心去り	No84
断面形が方形の棒である。先端部と中央部の側辺にえぐりが入る。下端は斜めに削られ尖っている。垂木のような建築部材とみられる。					
155	柱	X41Y56	長さ130欠 幅4.5 厚さ4.5	針・心去り	No20
断面形が三角形の棒である。先端に片側からえぐりを入れ、頭部をつくる。垂木のような建築部材とみられる。					
156	柱	X41Y59	長さ194 幅4 厚さ4	トネリコ属・心去り	No75
断面形が台形の棒である。先端にあるえぐりは新しい傷であるが、垂木のような建築部材とみられる。					
157	柱	X40Y59	長さ115欠 幅5.6 厚さ3	トネリコ属・心去り	No76
断面形が台形の棒である。上端右側辺の2箇所に浅いえぐりが入る。垂木のような建築部材とみられる。					
158	柱		長さ53+25.5欠 幅6.5 厚さ3.5	ムクロジ・心去り	No93
断面形が台形である。上端右側辺に段状のえぐり込みがある。建築部材とみられる。					
159	柱	X43Y55	長さ92欠 幅6.5 厚さ6	ムクロジ・心去り	No85
断面形が方形である。屈曲しているが建築部材とみられる。					
160	柱	X38Y60	長さ101欠 幅7.5 厚さ4.5	トネリコ属・心持ち	No82
断面形が方形である。屈曲しているが、建築部材とみられる。					
161	柱	X40Y60	長さ84欠 幅5.5 厚さ4	クリ・心去り	No81
断面形が台形である。建築部材とみられる。					

表26 SD15出土木器観察表(9)

番号	品目	出土区	大きさ(cm) 欠は欠損していること	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
162	柱	X42Y58	長さ182.5欠 幅5.5 厚さ4	カバノキ・心去り	No80
断面形が台形である。上端の側辺と裏面にえぐりが入る。建築材とみられる。					
163	柱	X32Y60	長さ168欠 幅13 厚さ12	ハンノキ属・心去り	No91
断面形が方形である。一部に表皮が残る。製材途中の割材か。					
164	柱	X42Y62	長さ262欠 幅8 厚さ7	トネリコ・心去り	No92
断面形が方形である。一部に表皮が残る。製材途中の割材か。					
165	柱		長さ41.2欠 幅6.5 厚さ5.2	ニレ属・心去り	No148
断面形が三角形である。					
166	柱		長さ51.7欠 幅5.8 厚さ4.8	スギ・心去り	No172
断面形が三角形である。上端にえぐりがあるかもしねない。					
167	柱		長さ49.7欠 幅3.8 厚さ3.5	スギ・心去り	No173
断面形が三角形である。					
168	柱		長さ59欠 幅9 厚さ8.7	広・心去り	No184
断面形が台形である。					
169	角材		長さ25.5欠 幅6.7 厚さ3	広・心去り	No183
断面形が三角形である。					
170	槽か		長さ28.5欠 厚さ5 cm	スギ・心去り	No126
槽あるいは舟の破片とみられる。					
171	杭	最下層	長さ104欠 太さ6	トネリコ属・心去り	No118
下端を削り尖らせる。					
172	杭	X35Y60	長さ33.8欠 幅4 厚さ2.3	針・心去り	No150
下端を削り尖らせる。					
173	杭		長さ40.1欠 幅5 厚さ2.5	針・心去り	No149
下端を削り尖らせる。					
174	剝片		長さ18.5~23.5 幅5~6 厚さ0.3~0.8	スギ・心去り	No127
175	柱		長さ24.5. 直径8.5	ハンノキ属・心持ち	No167
表面に削り痕が残る。					
176	柱	X33Y59	長さ49.5 幅15 厚さ5	ハンノキ属・心去り	No79
断面形がかまぼこ形をした丸木の割材である。					
177	切断木		長さ46 太さ11	コナラ節・心持ち	No114
下端に切断痕が残る。					
178	切断木		長さ39 太さ7	ハンノキ属・心持ち	No116
刃部幅約3.6cmの斧の切断痕が残る。					
179	切断木		長さ36.5 太さ8.5	コナラ節・心持ち	No115
刃部幅約4 cmの斧の切断痕が残る。					
180	切断木		長さ52 太さ4.5	サクラ属・心持ち	No117
刃部幅約3 cmの斧の切断痕が残る。					

※ 針は針葉樹を示す

表27 中・近世木器観察表(I)

番号	品目	出上区	大きさ(cm)	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
1	円形板	S K 0 3	長径4.5cm 短径3.5cm前後 厚さ1.3cm 断面は台形をしている。近世の曲物柄物の底板かと思われるが、木釘などの痕跡はみられない表面の剥離が著しい。	針葉樹(スギか)	NO.12
2	柄	S K 0 3	長さ11.5cm 幅2.9cm 最大厚1cm 断面は三角形を呈する。近世である。	針葉樹	NO.11
3	楔形木器	S K 0 5	長さ9.8cm 裏部幅2.7cm 刃部幅2.2cm 頭部の厚さ1.2cm 刃部の厚さ0.5cm 2つに折れている。頭部は丸く整形し、工具痕明顯にみられる。楔と思われるが、明瞭な用痕はみられない。時期は近世である。	ヒノキ属 芯持ち材	NO.13
4	箸	S K 0 7	長さ17.7cm以上 径0.4~0.6cm 両端を欠損している。断面は五角形を呈する。時期は中世(13C後半~14C前半)である。	針葉樹	NO.4
5	箸	S K 0 7	長さ7.3cm以上 直径0.3~0.5cm 先端部のみの残存で、断面は五角形を呈する。時期は中世(13C後半~14C前半)である。	針葉樹	NO.5
6	箸	S K 0 7	長さ12.2cm以上 断面長軸0.4~0.6cm 断面短軸0.3~0.4cm 基部は欠損し、断面は縱長五角形を呈する。時期は中世(13C後半~14C前半)である。	針葉樹	NO.31
7	箸	S K 0 7	長さ15.4cm以上 径0.4~0.8cm 両端を欠損しており、断面は六角形を呈する。時期は中世(13C後半~14C前半)である。	針葉樹	NO.31
8	曲物	S K 0 7	復元径約21.0cm 高さ17.5cm 厚さ1.0cm 中世(13C後半~14C前半)の井戸枠に転用されたが、湧水のために横転したため土圧でかなり歪む。縦じ皮は、材質は不明が、2箇所皮縫じで1列上外下内2段継じと1列内3段継じである。木釘痕あり。	ヒノキ	NO.7
9	櫛	S K 0 7	長さ11.2cm 幅4.0cm 厚さ1.1cm 櫛幅0.75cm 歴期は中世(13C後半~14C前半)である。施塗式の横櫛で、墨塗造りである。	樹種等不明	NO.8
10	蓋	S K 5 3	徑17.4cm 厚さ1.0cm 穴徑2.6cm 時期は近世である。中心よりやや端に偏った位置に穴があいている。	針葉樹(スギか)	NO.19
11	曲物	S K 6 4	徑47.0cm 厚さ1.5cm 高さ49.0cm 時期は中世(13C後半~14C前半)である。曲物を二重にしており、さらに外側にタガをはめて緊縛している。内側のものは、外径46.8cm厚さ1.3cm高さ49.0cmで1列内14段継じの大型の物。外側のものは、三段積みになっており、いずれも外径47.0cm厚さ0.2cm高さ8.2cmのものである。タガは、外径47.2cm厚さ0.2cm高さ8.2cmのもので2箇所皮縫じで1列内4段継じと1列内2段継じのものである。内曲物の内面は、底から3.0cmに底板のアタリがある。同じく底から30cm付近までは黒いシミがある。転用前の内容物のシミと思われる。木釘の打込み痕は、15箇所確認できる。	スギ	NO.36
12	折敷底版	S K 6 5	長さ26.8cm 残存幅7.2cm 厚さ0.6~0.8cm 時期は中世(13C後半~14C前半)である。側板結合の穴1箇所あり。	スギ	NO.15
13	柄杓	S K 6 5	徑15.7cm 高さ11.2cm 時期は中世(13C後半~14C前半)である。曲物部分のみが井戸の底から出土で、柄部分は欠損している。柄穴は隅丸方形を呈し、1.8cm×2.4cm×1.2cm×1.2cmの穴の両側を皮縫じしている。また、曲物は、2箇所皮縫じで1列内3段継じと1列内2段継じである。底板は、徑14.8cm厚さ0.9cmで、工具痕明顯に残る。曲物を見る限りでは、木釘痕は見られない。	スギ	NO.1
14	円形板	S K 7 3	徑6.4cm 厚さ1.0cm 時期は近世である。曲物の底版と思われる。理由は不明だが、中心よりやや偏って直径2.5ほどのがげて炭化した箇所がある。	ヒノキ属	NO.3
15	杓文字か	S D 1 1	現存幅5.2cm(推定幅約8.5cm) 厚さ1.0cm 時期は近世である。縁の角を両面から落とし、丸く整形している。本来はもっと縁身に仕上げるつもりであったらしく、筋引きがしてある。	ヒノキ属	NO.9
16	高下駄	S D 1 6	最大幅13.9cm 最小幅8.7cm 上部厚さ4.0cm 下部厚さ3.2cm 時期は近世である。上端部は欠損している。	ヒノキ属	NO.2

表28 中・近世木器観察表(2)

番号	品目	出土区	大きさ(cm)	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
17	柄	S D 2 4	長さ以上24.6cm 幅2.0~3.2cm 厚さ1.6~2.0cm	針葉樹	NO.6
時期は中世(13C後半~14C前半)である。両端が欠損しており、詳細は不明である。					
18	栓	S D 2 4	長さ6.5cm以上 最大径1.4cm 最小径0.8cm	スギ	NO.14
時期は中世(13C後半~14C前半)である。断面は八角形を呈する。					
19	折敷底板	S D 2 4	7.3cm以上×7.0cm以上 厚さ0.3~0.4cm	針葉樹 (ヒノキか)	NO.10
時期は中世(13C後半~14C前半)である。側板接合穴が1箇所確認できる。					
20	栓か	S D 3 0	長さ6.2cm 幅3.0cm 穴径0.5cm	スギ	NO.30
時期は中世(13C後半~14C前半)である。縦に約半分に割れている。栓としたが浮子である可能性もある。栓と栓をする対象とを紐で結ぶためと思われるの穴があいている。					

## C地区

番号	品目	出土区	大きさ(cm)	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
21	板	S K 1 1	長さ19.0cm以上 幅5.0cm以上	針葉樹(ヒノキか)	NO.17
時期は中世(13C後半~14C前半)である。箱物の側板と思われる。断面三角形を呈し、端に「×」の刻みがみられる。					
22	箸	S K 1 1	長さ25.0cm以上 直径0.5~0.8cm	針葉樹(スギか)	NO.21
基部を欠損しており、断面は不整な六角形を呈する。他の箸に比べ一際長く、かつ太い。時期は中世(13C後半~14C前半)である。					
23	円形板	S K 3 9	径不明厚さ0.7cm 現存:長軸27.0cm 短軸7.2cm	スギ	NO.20
時期は中世(13C後半~14C前半)である。約1/3程度しか残存しない。曲物の底板で平衡円形を呈する。極く細い木釘の痕跡が5箇所確認できる。					
24	折敷底板	S K 3 9	29.4cm×5.5cm以上 厚さ0.5cm	針葉樹(ヒノキか)	NO.18
時期は中世(13C後半~14C前半)である。一部のみの残存で、まな板に転用されている。					
25	角形木製品	S D 1 7	全長13.5cm 最大径5.6cm	アカガシ亞属	NO.22
時期は中世(13C後半~14C前半)である。用途不明の木製品である。加工痕は先端部と底部にみられるのみで、側面は磨いて滑らかに仕上げている。何らかの祭祀具の可能性を考えるが頭部にわずかに段がみられ、栓である可能性がある。					
26	板	S D 1 7	幅14.8cm 高さ6.4cm 厚さ0.4cm(最大厚0.9cm)	スギ	NO.28
時期は中世(13C後半~14C前半)である。箱物の側板と思われる。上端から2.0cmの所に、0.5cmの段がみられる。ここに麻板を掛けるものと想定している。両端は、内側に斜めに面取りをしている。しかし、木釘痕などは確認できず、どのように組み合わせるものか不明であるなど検討の必要がある。					
27	折敷底板	S D 1 7	28.2cm×3.5cm以上 厚さ0.4cm	針葉樹	NO.24
時期は中世(13C後半~14C前半)である。加工痕が比較的明瞭に残る。側板結合穴が2箇所確認できる。側板のアタリ部分と思われる部分に筋がひかれている。					
28	籠状木器	S D 1 7	長さ15.0cm 幅1.4cm 厚さ0.2cm	スギ	NO.26
時期は中世(13C後半~14C前半)である。縁を取りして断面形を蒲鉾形にしている。糞篋の可能性がある。					
29	折敷底板	S D 1 7	19.0cm以上×10.0cm以上 厚さ0.6~0.7cm	針葉樹	NO.25
部分のみ焼残しており、両面ともに加工痕明瞭に残る。側板結合穴1箇所・木釘の痕跡が1箇所確認できる。時期は中世(13C後半~14C前半)である。					
30	杓文字	X120Y114	長さ11.2cm以上 身幅3.8cm 柄幅0.8cm	針葉樹(スギか)	NO.16
加工痕が確認できる。近世のものと思われる。					

表29 中・近世木器観察表(3)

## D地区

番号	品目	出土区	大きさ(cm)	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
31	円形板	SD02上層	径不明厚さ0.9cm	針葉樹(スギか)	NO.38
時期は近世である。部分のみ残存。					

## E地区

番号	品目	出土区	大きさ(cm)	樹種・木取り	台帳番号
特記事項					
32	箸	SK01	長さ7.7cm以上 径0.6cm×0.4cm	針葉樹(スギか)	NO.39
時期は中世(13C後半～14C前半)である。両端を欠損している。断面形は、そろばん玉形を呈する。					
33	箸	SK01	長さ13.2cm以上 径0.5cm	針葉樹(スギか)	NO.39
時期は中世(13C後半～14C前半)である。基部を欠損し、断面形は調丸三角形を呈する。					
34	箸	SK01	長さ14.5cm以上 径0.5cm×0.5cm	針葉樹(スギか)	NO.39
時期は中世(13C後半～14C前半)である。基部を欠損し、断面形は四角形を呈する。					

図版 1

1. 明治40年  
の旧鎌冶川  
右の森は加  
茂神社（南  
から）



2. 明治40年  
の旧鎌冶川  
(北から)



図版 2

1. 昭和31年  
の旧鐵治川  
南から太鼓  
橋を望む  
右側は加茂  
神社



2. 昭和35年  
の下村加茂  
集落



図版 3

1. 昭和28年

やんさんま

走馬風景



2. 昭和37年加茂神社神幸式

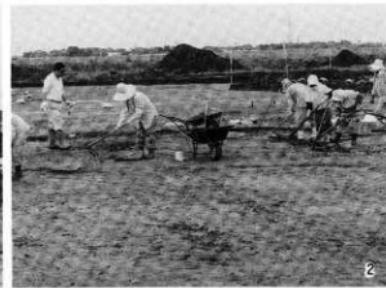


3. 一本杉 C地区とB地区の中間あたりにあつた 奥は加茂神社

図版4

作業風景

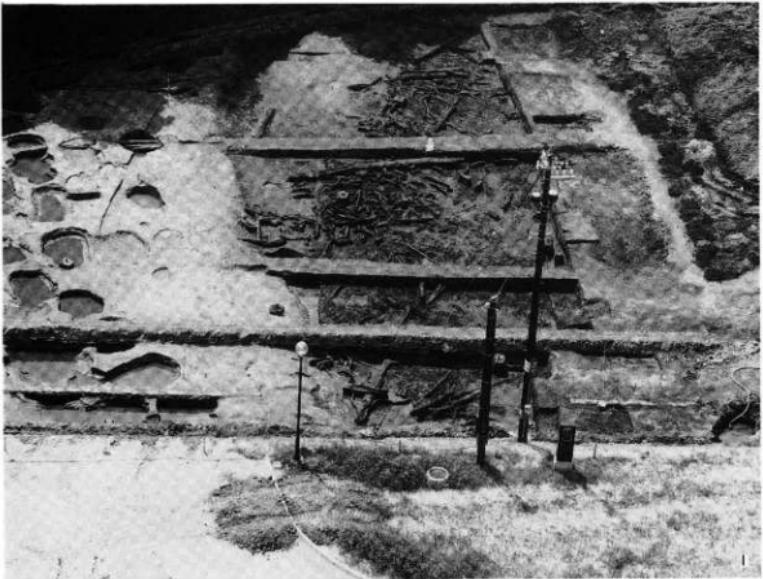
1. 表土除去
2. 遺構検出
3. 遺構発掘
4. 樹種同定
5. サンプリング
6. 現地説明会
7. 空中写真測量
8. 土壌洗浄



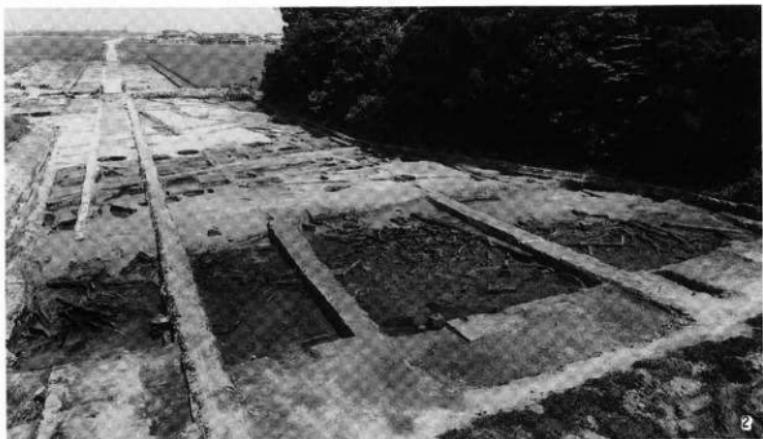
図版 5

A地区

1. SD15木  
材・木器出  
土状況（北  
から）



2. SD15木  
材・木器出  
土状況（西  
から）



3. SD15層序



図版 6

A地区

1. SD15木器

出土状況



2. SD15木器

出土状況



3. SD15木器

出土状況



図版 7

A地区

1. 繩文土器  
出土状況



2. 鋼出土状  
況



3. 建築材出  
土状況



4. くりもの  
出土状況



5. 床板出土  
状況



6. 鍋の把手  
出土状況



7. 壁杵出土  
状況



8. 柱出土状  
況



図版 8

A 地区

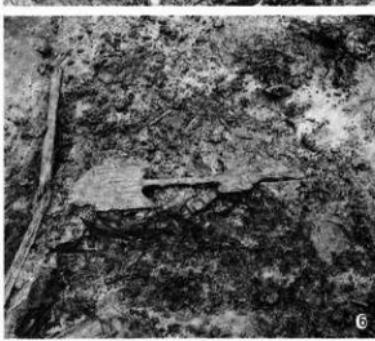
1. 槽出土状況



3. 叉鍬出土状況



5. 鳥形出土状況



7. 鋸状品出土状況



8. タモ出土状況

図版 9

A地区

1. SD15振り

下げ状況

(上空から)



2. SD15振り

下げ状況

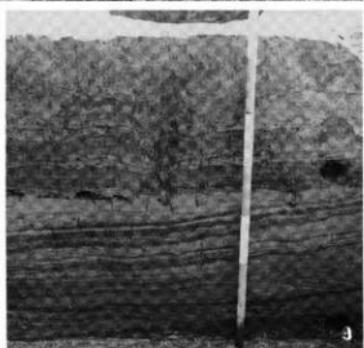
(北から)



3. 中州断ち

割り状況

(北西から)



4. 中州断ち

割りセクシ

ョン

図版10

A地区

1. 管理棟予定地ブロック(南から)



2. 農免道路・駐車場予定地ブロック(東から)



図版11

A地区

1. 主郭入り  
口の掘込み  
違い状況  
(西から)

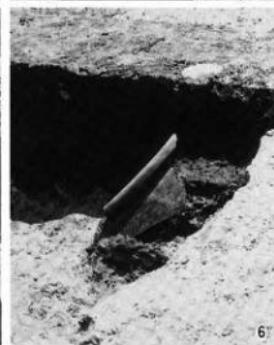


3. SD05南北  
セクション  
(東から)



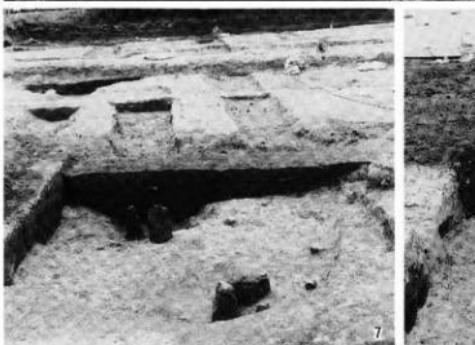
4. SD05土師  
器皿出土状  
況

5. SD18遺物  
出土状況  
(南から)



6. SD18遺物  
出土状況

7. SD18-2南  
北セクショ  
ン(西から)

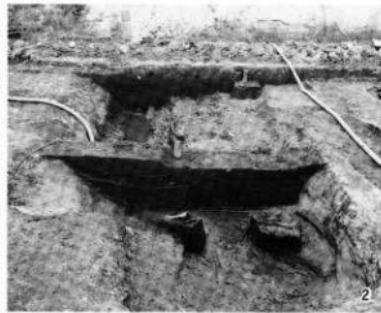


8. SD18-3東  
西セクショ  
ン(南から)

図版12

A地区

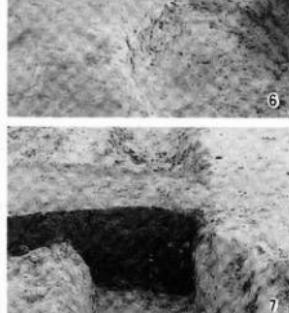
1. SD24（東から）  

2. SD24南北セクション（東から）  

3. SD30セクション（南から）  

4. SD30セクション（南から）  

5. SD30（南から）  

6. SD16（北から）  

7. SD16セクション（北から）  

8. SD31東西セクション（南から）  

9. SD31遺物出土状況（南から）  


図版13

A地区

1. SK01プロ  
ック（西か  
ら）



2. SK07遺物  
出土状況



2



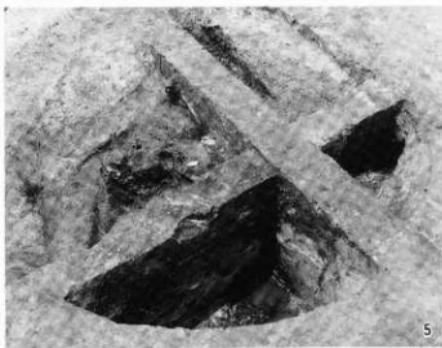
3

3. SK07

4-5. SK08  
(カマド)



4



5

図版14

A地区

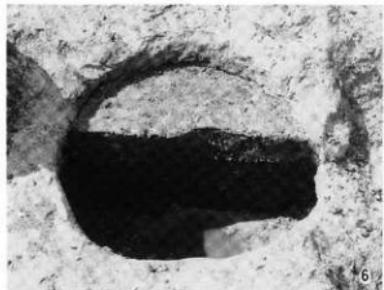
1. SK61南北セクション（西から）
2. SD30・33東西セクション（北から）
3. PI2柱根出土状況

4. P7柱根出土状況

5. SB02プロック（西から）

6. SK65東西セクション（南から）

7. SK65柄杓出土状況

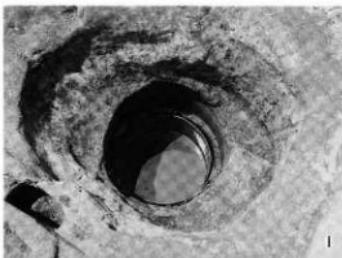


図版15

A地区

1. SK70

2. SK70南北  
セクション  
(西から)



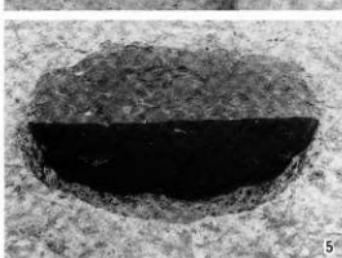
3. SK64

4. SK64南北  
セクション  
(西から)



5. SK52東西  
セクション  
(南から)

6. P05根石  
出土状況



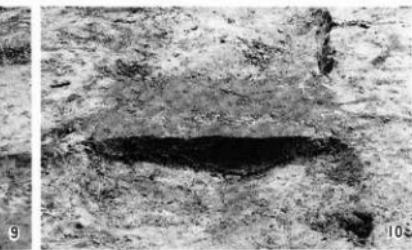
7. SD06-5  
セクション  
(西から)

8. SD06-7  
セクション  
(西から)



9. SD21セク  
ション (北  
から)

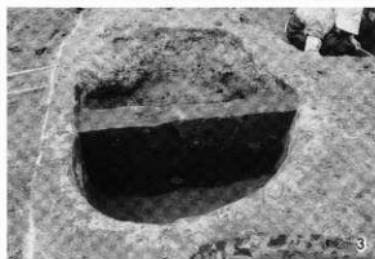
10. SD22セク  
ション (北  
から)



図版16

A地区

1. 管理棟部  
分探土穴群  
(西から)
2. SK03東西  
セクション  
(南から)



3. SK04東西  
セクション  
(南から)

4. SK06南北  
セクション  
(西から)

5. SK43東西  
セクション  
(南から)

6. SK44東西  
セクション  
(南から)

7. SK46東西  
セクション  
(南から)

8. SK54東西  
セクション  
(北から)

9. SK63南北  
セクション  
(東から)

10. SK67東西  
セクション  
(南から)

図版17

A地区

1. 近世道路  
跡及び採土  
穴群（北か  
ら）



2. 近世道路  
跡及び採土  
穴群（東か  
ら）



図版18

A地区

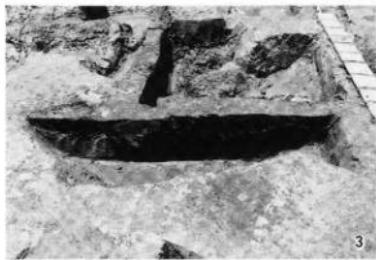
1. SK08南北セクション(東から)
2. SK11東西セクション(北から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

3. SK14.15南北セクション(東から)

4. SK23東西セクション(南から)

5. SK21.22東西セクション(北から)

6. SK29.30東西セクション(南から)

7. SK36東西セクション(北から)

8. SK41東西セクション(南から)

9. SK49東西セクション(南から)

10. SK51東西セクション(南から)

図版19

A地区

1. SD08

セクション  
(南から)



1



2

3. SD11-3

セクション  
(西から)



3



4

5. SD13・16

東西セクシ  
ョン(北か  
ら)



5



6

6. SD14東西  
セクション  
(南から)



7



8

7. SD25南北  
セクション  
(東から)



7



8

8. SD26南北  
セクション  
(西から)



9



10

9. SD27東西

セクション  
(北から)

10. SD28東西

セクション

(南から)

図版20

B地区

1. B地区全景  
(東上空  
から)  
奥はA地区



2. B地区全景  
(北上空  
から)  
奥は福王寺  
(中央)  
加茂神社  
(右)  
加茂集落  
(上)



3. B地区全景  
(西から)



図版21

B地区

1. SD01-02・

03ブロック

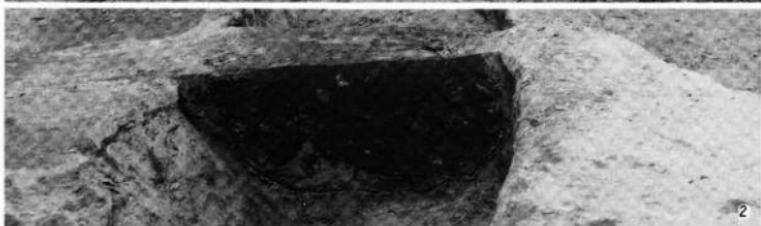
(東から)



2. SD01南北

セクション

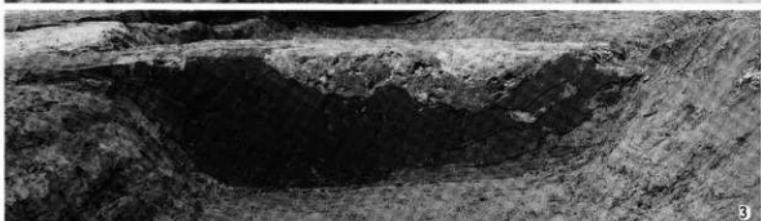
(西から)



3. SD02-1セ

クション

(西から)



4. SD02-2セ

クション

(東から)



5. SD03セク

ション

(北から)



図版22

B地区

1. SD04 (北東から)

2. 近世(?)  
採土穴群  
(北東から)

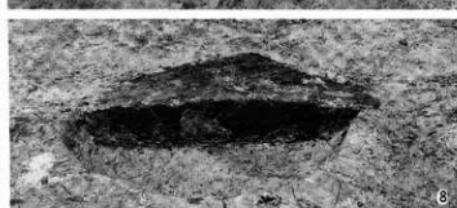
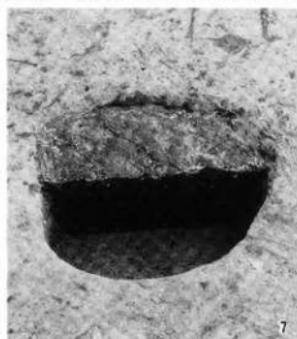
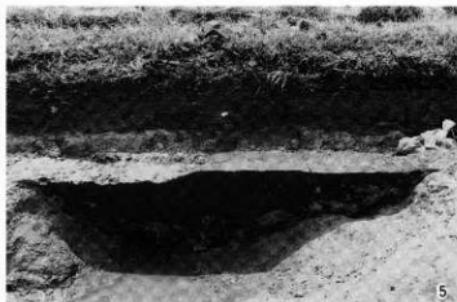
3. SD04-Iセクション  
(北東から)

4. SD04-3セクション  
(北東から)

5. SK02東西セクション  
(北から)  
6. SK09 (北から)

7. SK08東西セクション  
(北から)

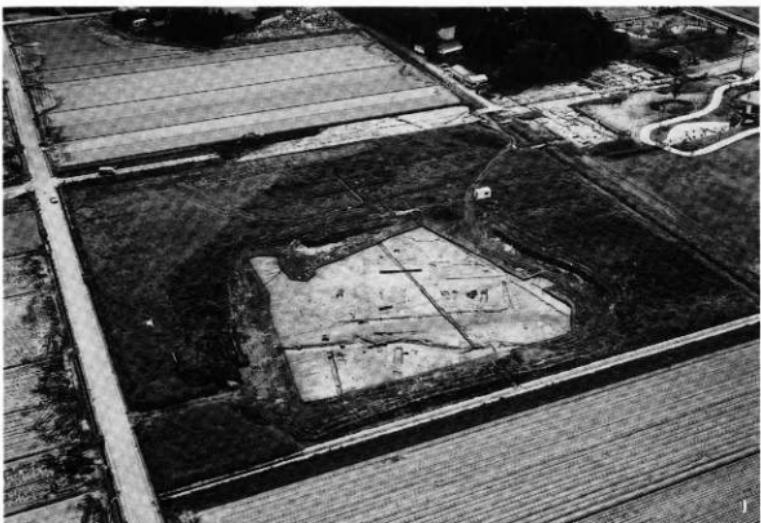
8. SK05東西セクション  
(東から)



図版23

C地区

1. 全景（北  
上空より）



2. 全景（西  
上空より）



3. 調査区中

尖部

鎌倉時代後  
半屢敷地ブ  
ロック（東  
から）



図版24

C地区

1. 調査区中央部  
鎌倉時代後半屋敷地及び近世屋敷地ブロック  
(西から)



2. 鎌倉時代後半屋敷地ブロック  
(北東から)



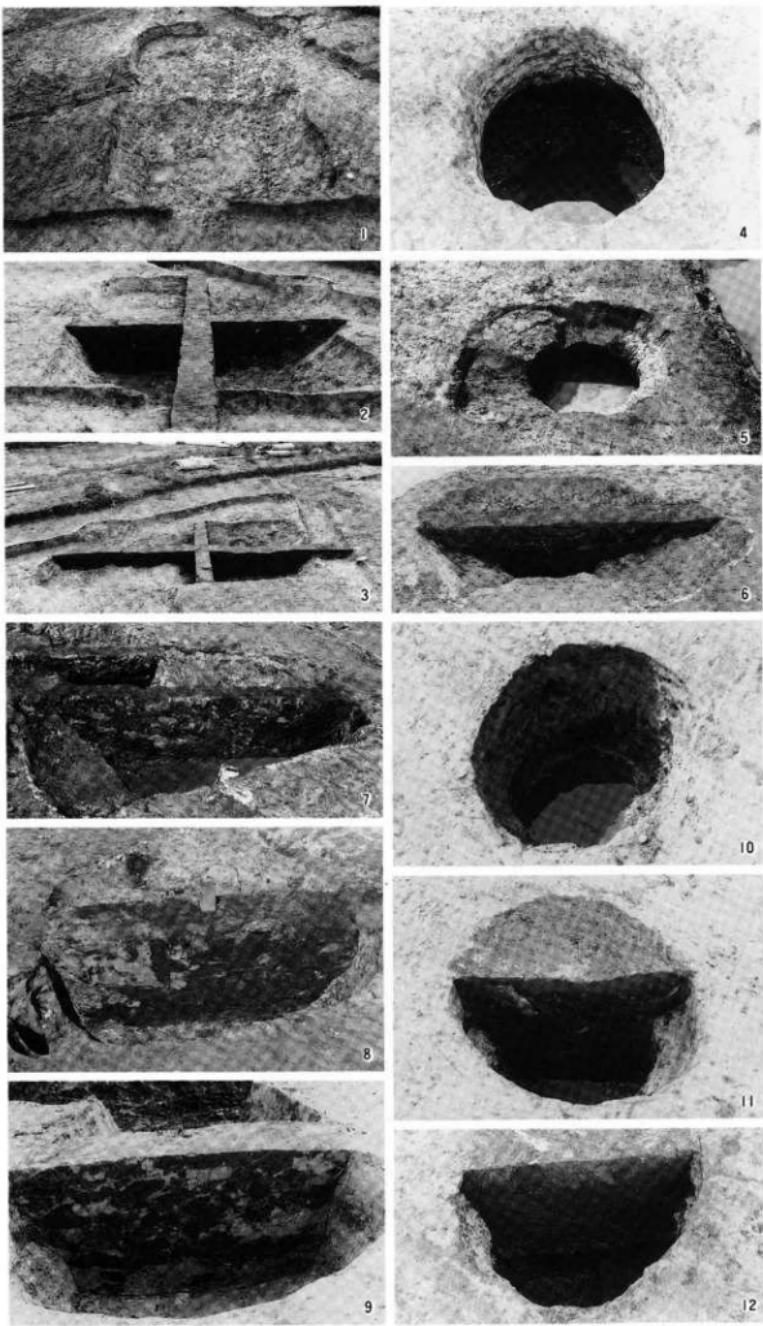
3. XII 10  
Y115~120付近小穴群  
(南から)



図版25

C地区

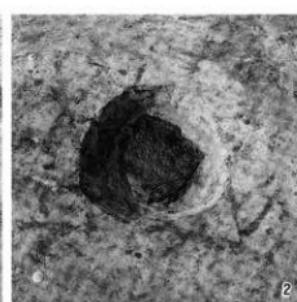
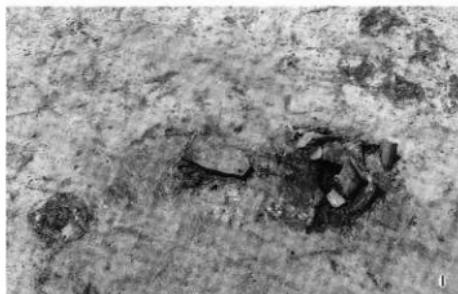
1. SK01 (北  
から)
2. SK01東西  
セクション  
(南から)
3. SK01南北  
セクション  
(東から)
4. SK11
5. SK17
6. SK07南北  
セクション  
(西から)
7. SK05南北  
セクション  
(東から)
8. SK07南北  
セクション  
(東から)
9. SK22南北  
セクション  
(西から)
10. SK31
11. SK31東西  
セクション  
(南から)
12. SK39東西  
セクション  
(南から)



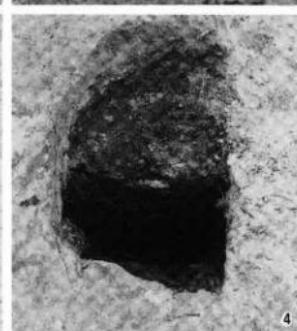
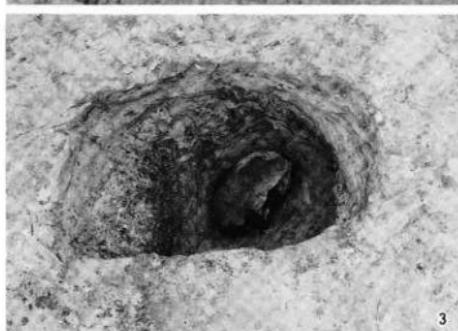
図版26

C地区

1. P01・25遺  
物出土状況

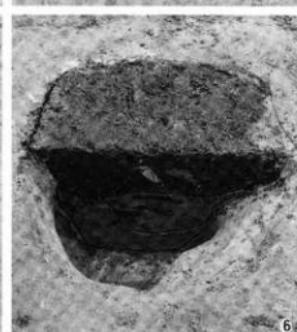
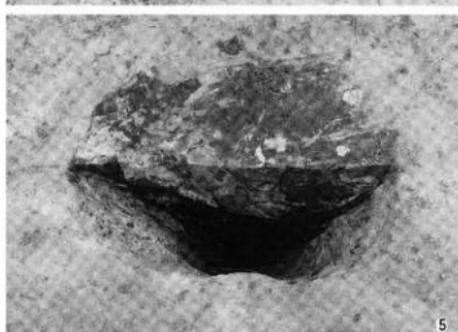


2. P01底の  
炭石



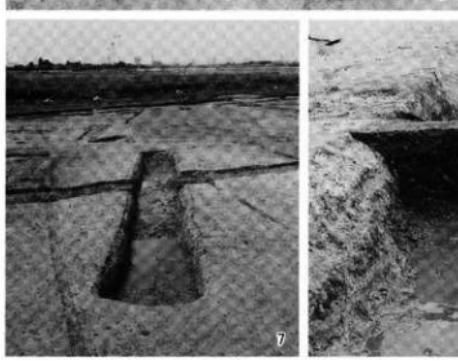
3. P10内の  
焼け石

4. P10東西  
セクション  
(南から)



5. SK30南北  
セクション  
(西から)

6. SK40東西  
セクション  
(南から)



7. SD03 (東  
から)

8. SD03南北  
セクション  
(西から)

図版27

C地区

1. SK03(南から)
2. SK03東西セクション(北から)



3. SD17(南から)



5. SD19(南から)



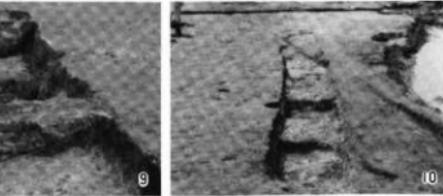
6. SD19東西セクション(南から)



7. SD04南北セクション(西から)
8. SD04(X125Y115付近)新旧溝重複箇所(東から)



9. SD07-Iセクション(西から)

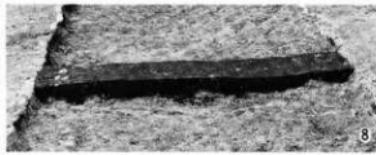
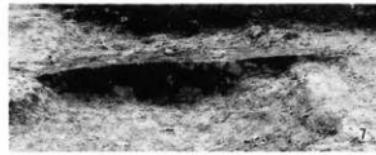
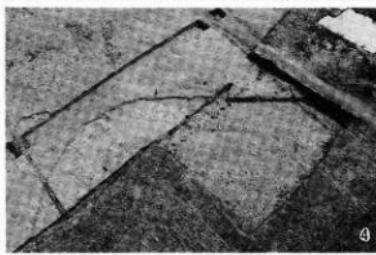
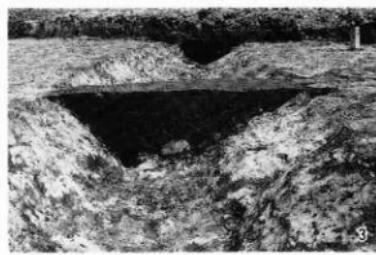
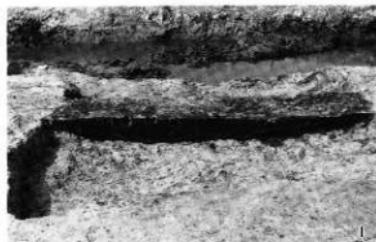


10. SD07(東から)

図版28

C地区

1. SD18東西セクション（南から）
2. SD20東西セクション（南から）



3. SD23南北セクション（西から）
4. SD08上空から
5. SD01東西セクション（南から）
6. SD08東西セクション（南から）
7. SD02-1セクション（北から）
8. SD02-2セクション（東から）
9. 鎌倉時代後期と近世の屋敷地全景（西から）

図版29

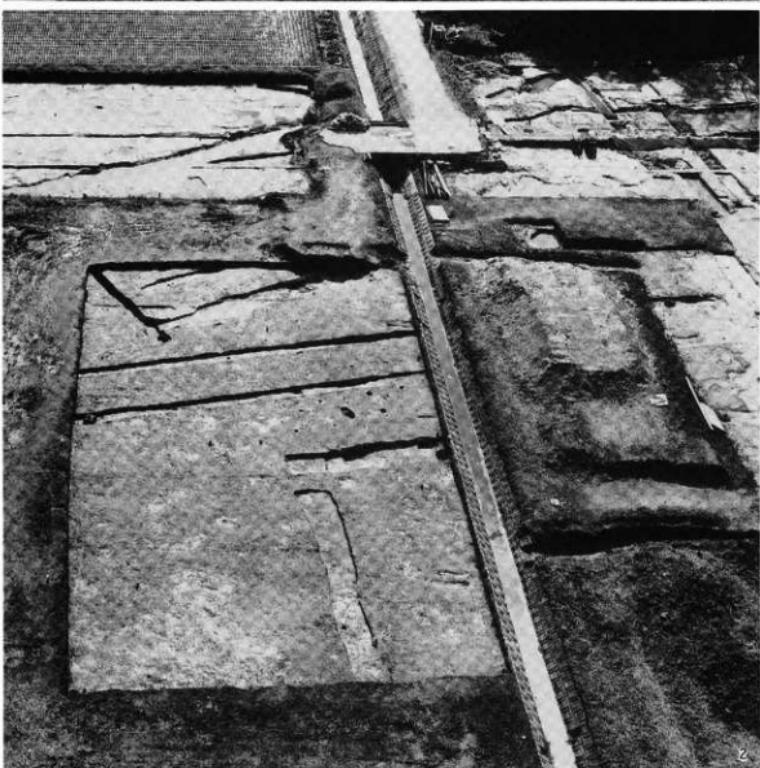
D地区

I. 全景（東  
上空から）  
奥は A 地区



2. 全景（北  
上空から）  
奥は B 地区

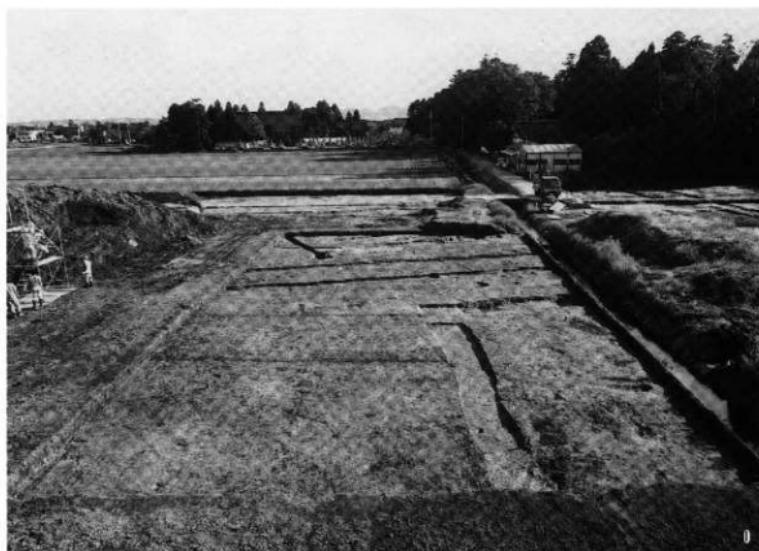
SD02(堤)



図版30

D地区

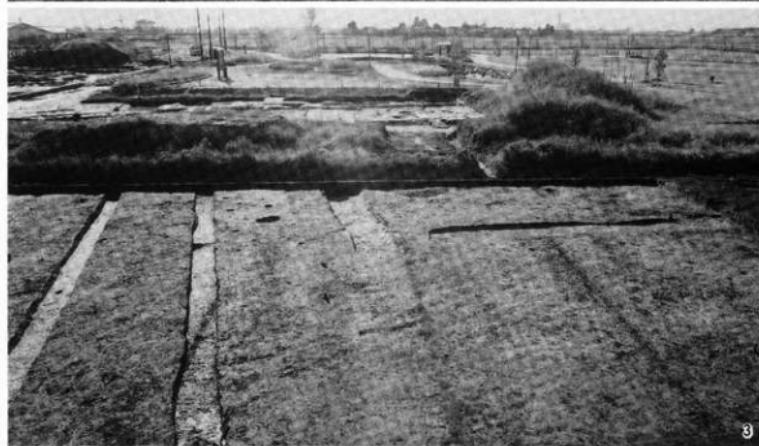
1. 全景（北から）  
奥は福王寺  
(中央)  
加茂神社  
(右)



2. 全景（東から）



3. SB01・  
SD04・05ブ  
ロック（東から）



図版31

D地区

1. SD04-05

ブロック

(北から)



2. SD04-1セ

クション

(東から)



3. SD04-1セ

クション

(東から)



4. SD05-1セ

クション

(南から)



4

5. SD05-2セ

クション

(南から)



5

6. SD03東西

セクション

(西から)



4

7. SD01-2セ

クション

(西から)

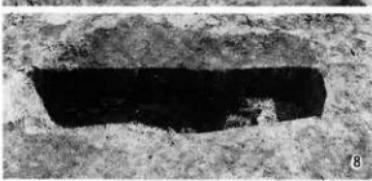


7

8. SK01南北

セクション

(南から)



8

9. SD02セク

ション

(北から)



9

図版32

E地区

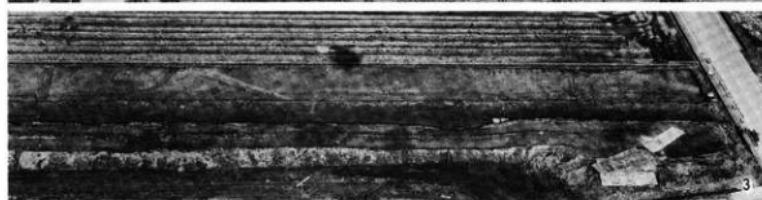
1. 全景（東上空から）  
手前左はC地区



2. 東端の採土穴群ブロック（南上空から）



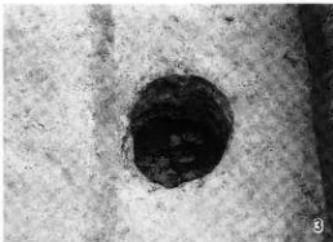
3. 西側ブロック（南上空から）



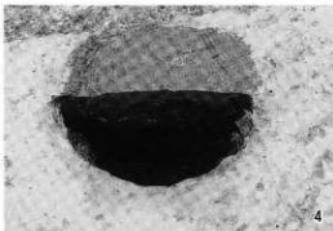
図版33

E地区

1. SD04・05  
(西から)



2. SD07・  
08(東から)



3. SK01(井  
戸)  
4. SK01東西  
セクション  
(南から)

5. SD07と切  
り合う土坑  
セクション  
(南から)



6. SD04東西  
セクション  
(南から)



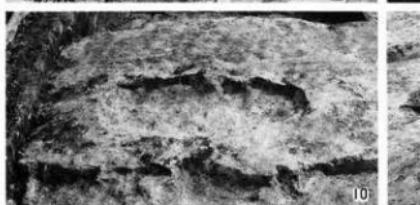
7. SD05南北  
セクション  
(東から)

8. SD07東西  
セクション  
(南から)  
9. SD08南北  
セクション  
(東から)



10. SK04(西  
から)

11. SK04南北  
セクション  
(東から)



図版34

E地区

1. 東側道路跡（中央）と採土穴群（東から）



2. 道路跡と採土穴群ブロック（北から道路跡が伸びる方向をみる）



3. SK08東西セクション（北から）



3

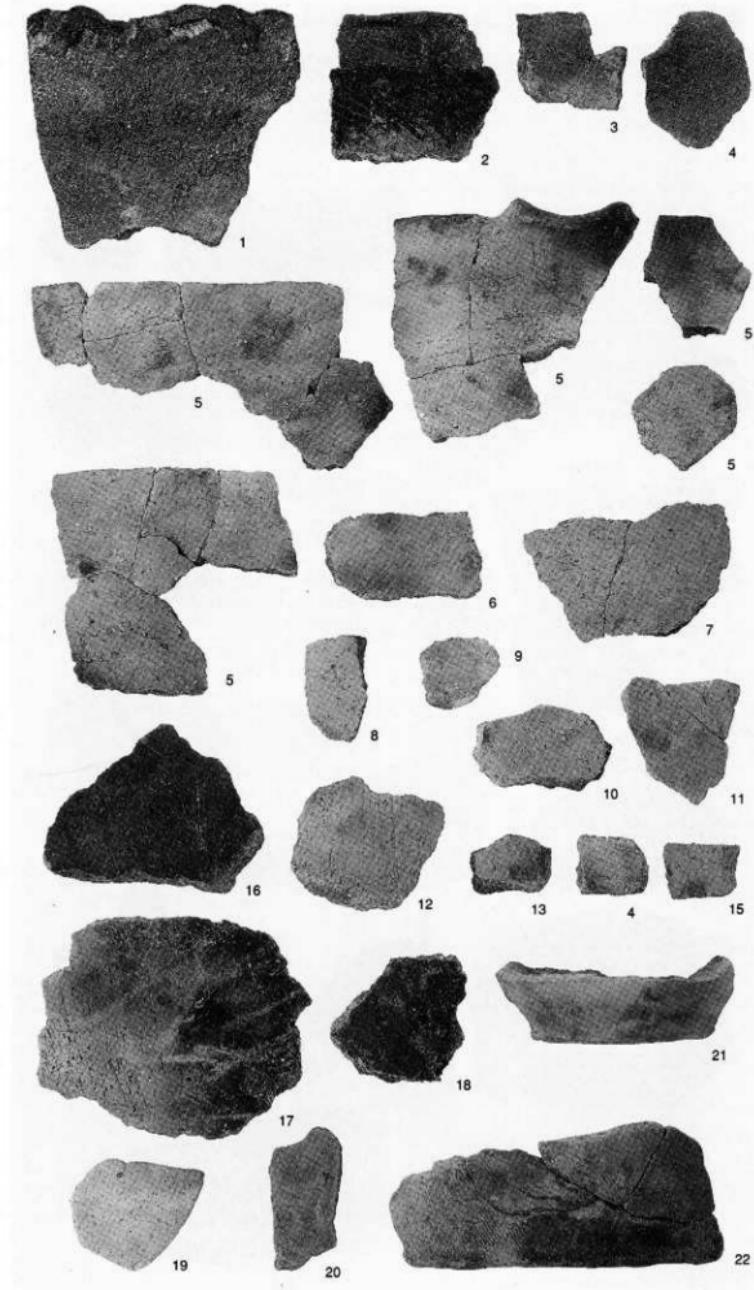
4. SK17東西セクション（南から）



4

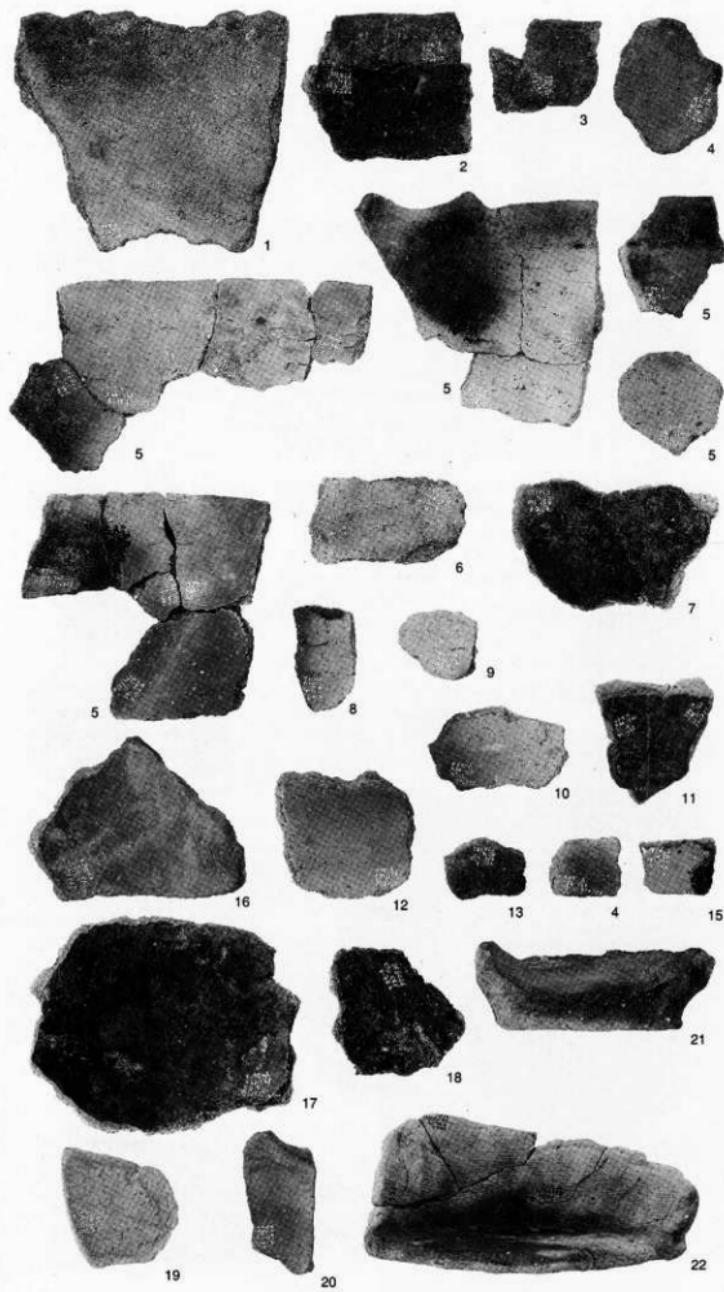
图版35

A地区  
绳文土器  
弥生土器  
(表)



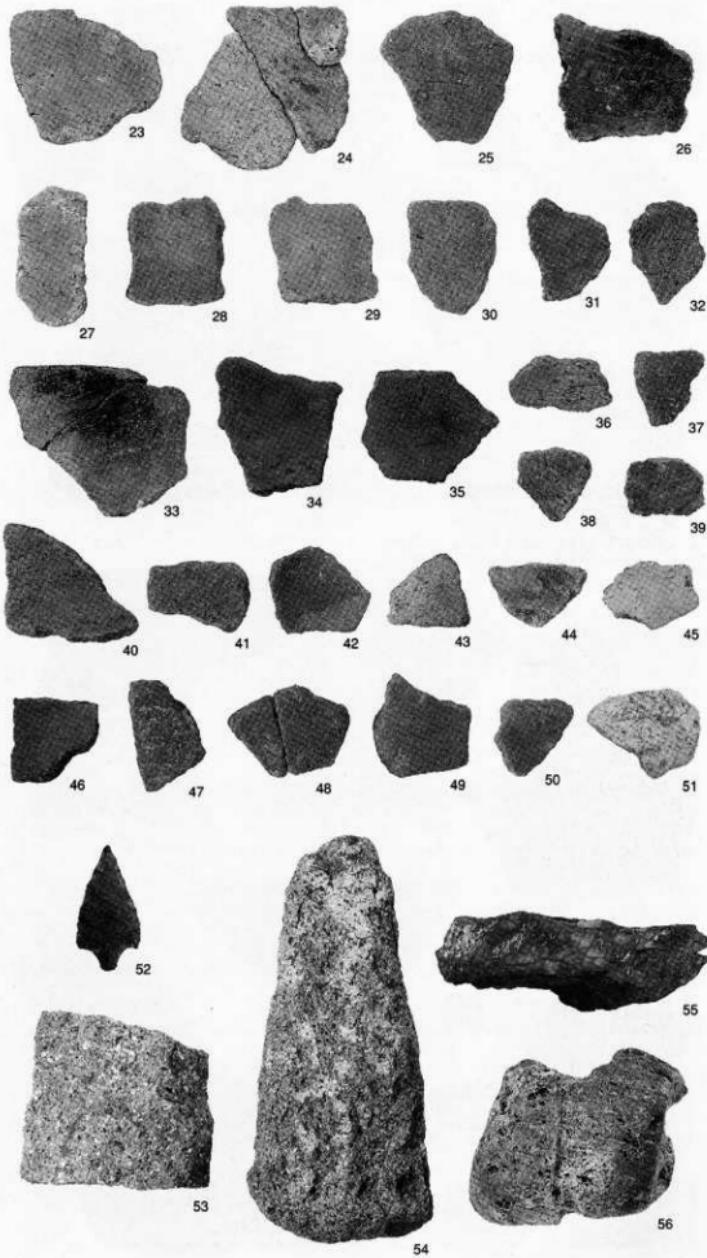
圖版36

A地區  
網文土器  
彌生土器  
(裏)



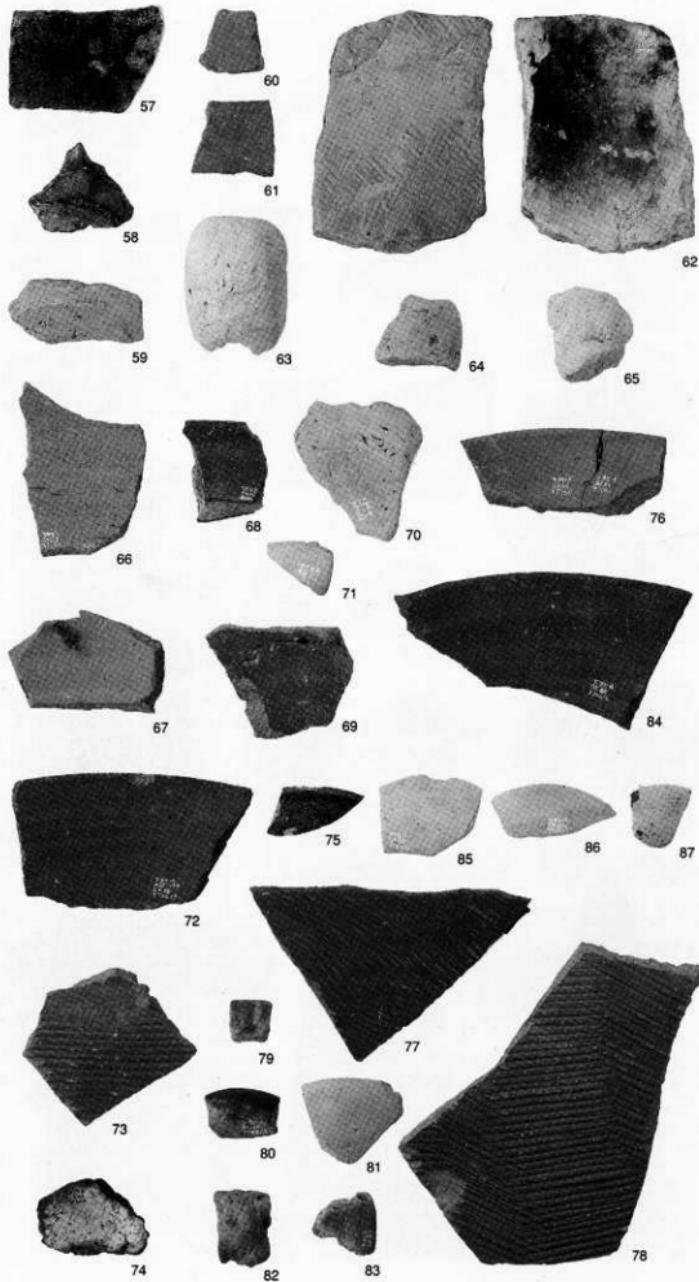
圖版37

A地区  
鋪文土器  
弦生土器  
石器



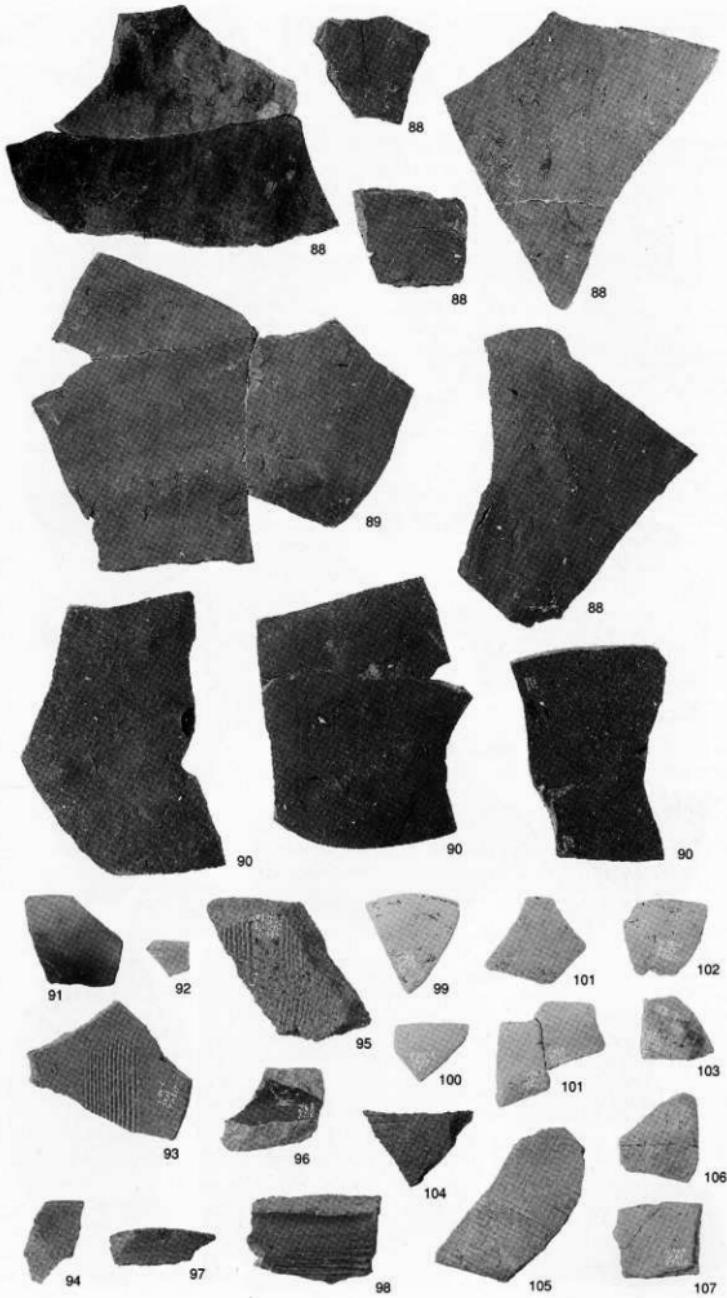
図版38

A地区  
土器  
須恵器  
珠洲ほか



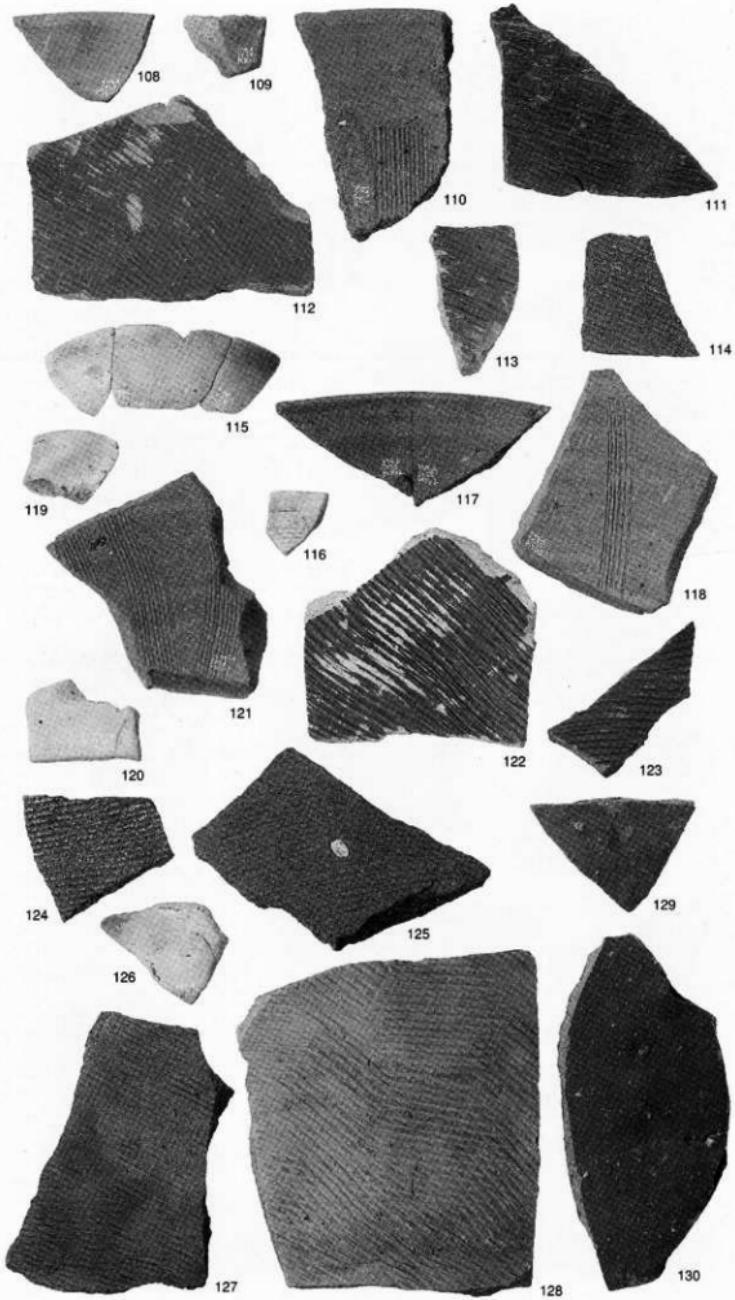
図版39

A地区  
八尾・珠洲ほか



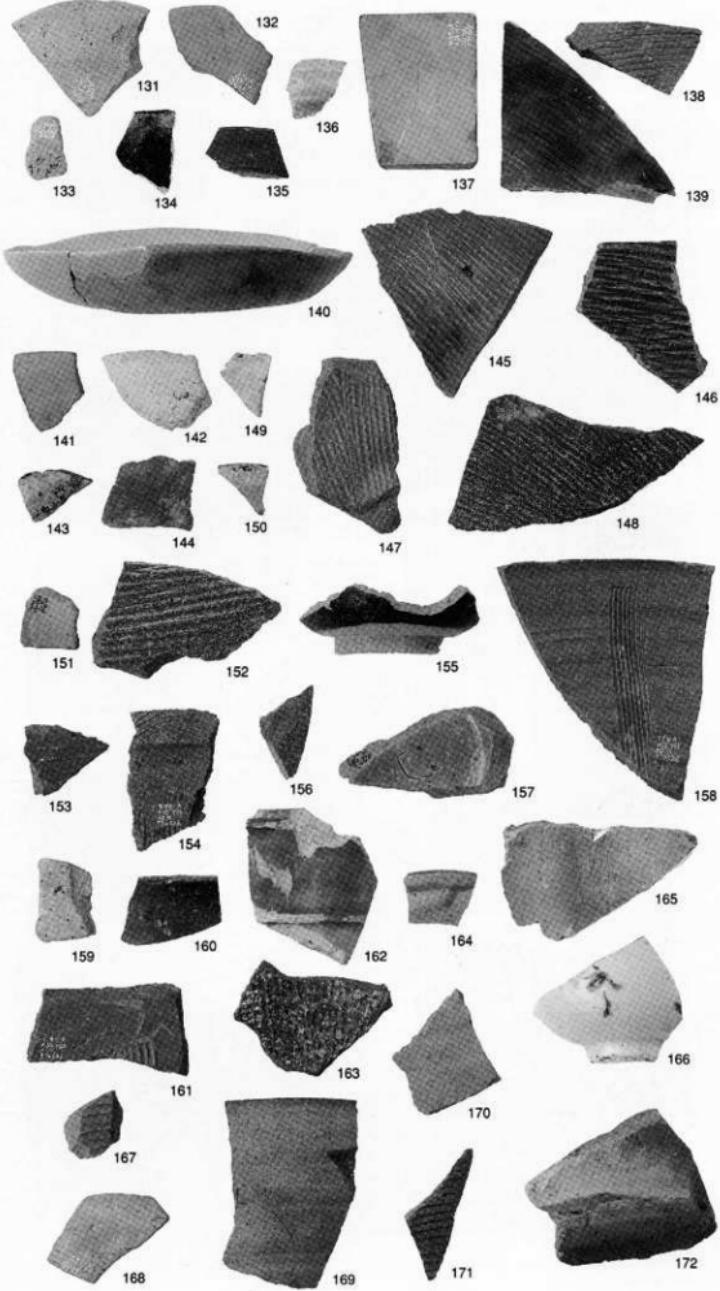
図版40

A地区  
珠洲ほか



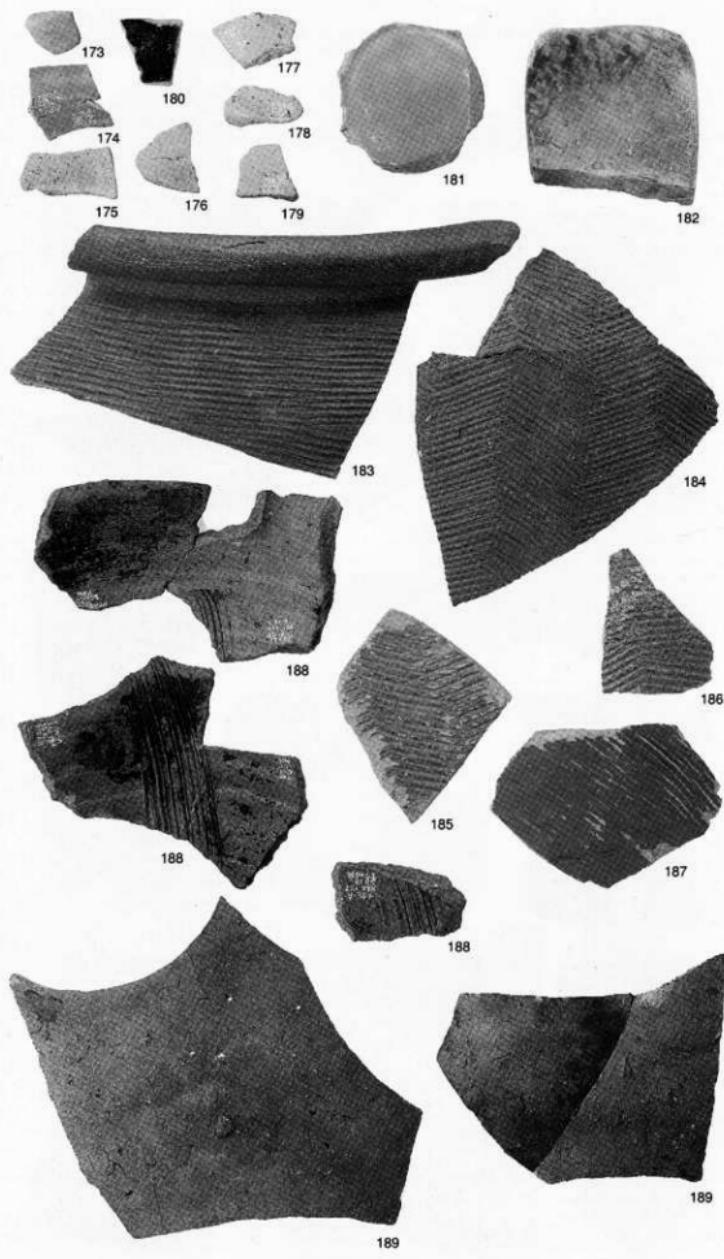
図版41

A地区  
土師器皿  
珠洲ほか



図版42

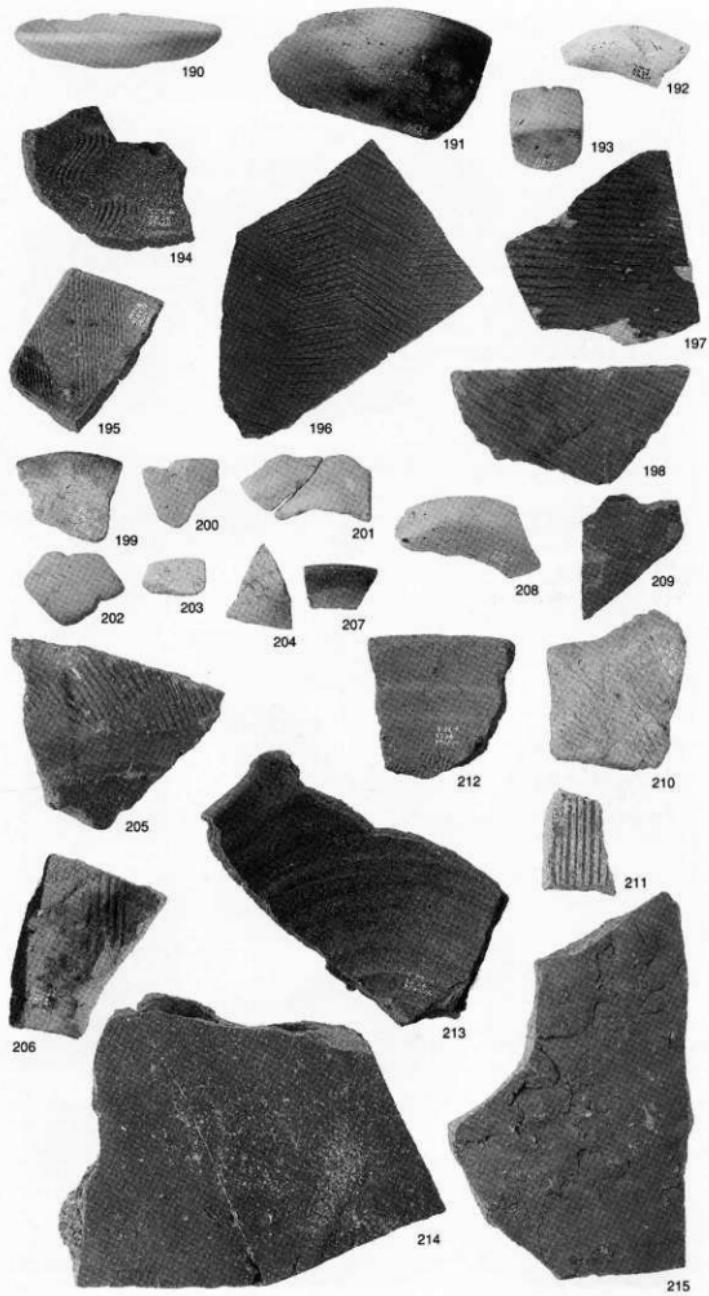
A地区  
珠洲・青磁  
磁石ほか



図版43

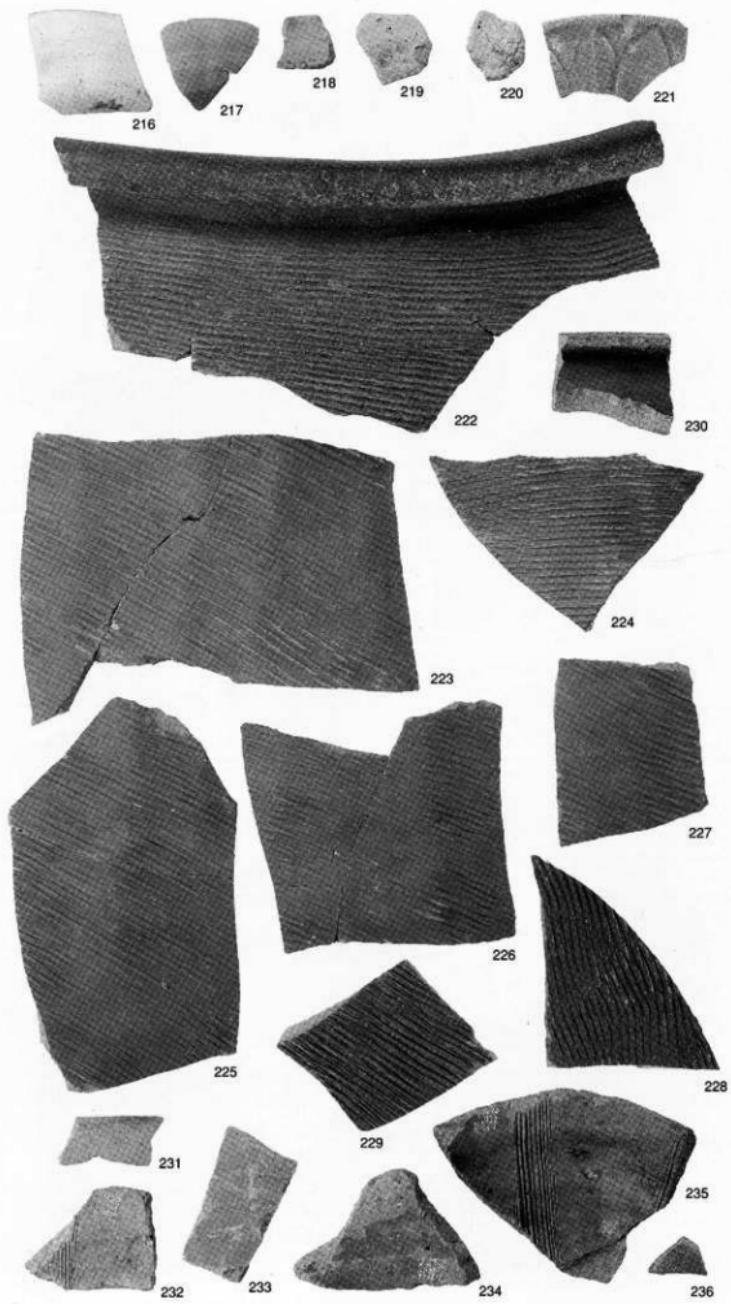
A地区

土師器四  
株洲ほか



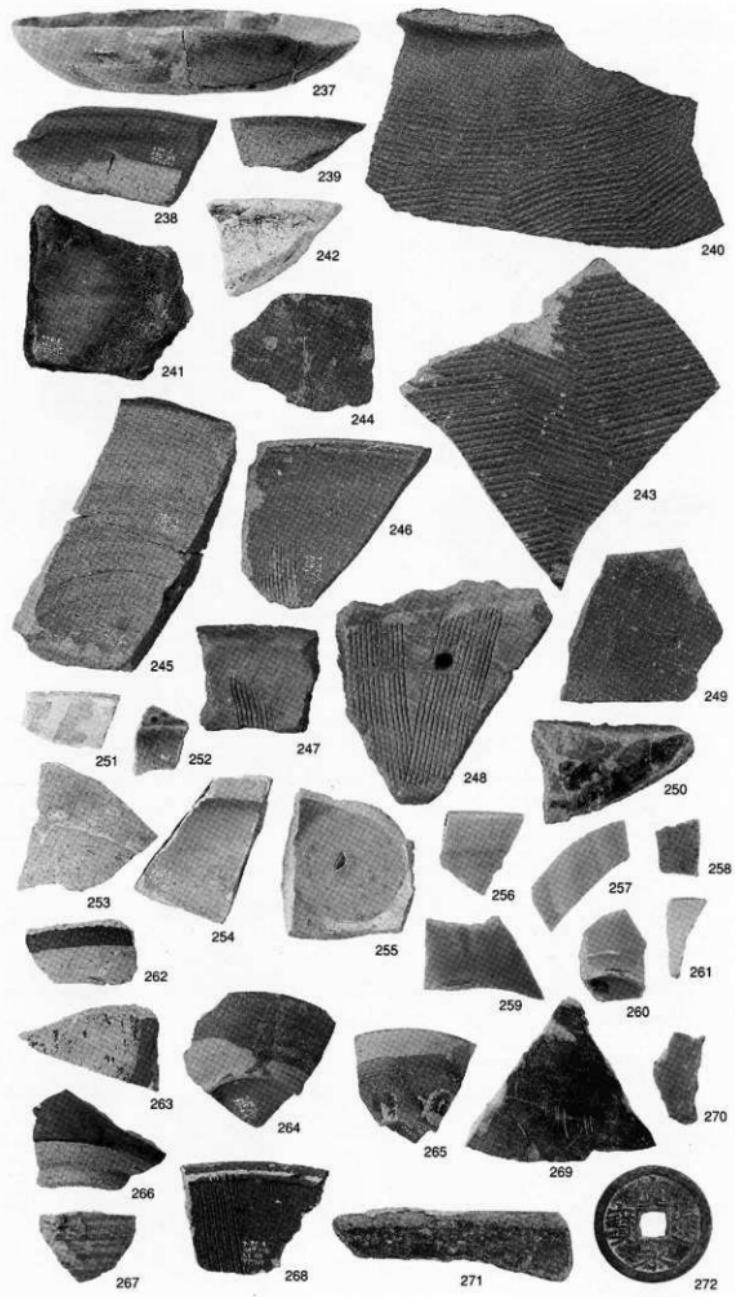
図版44

A地区  
土器四  
青磁・珠洲



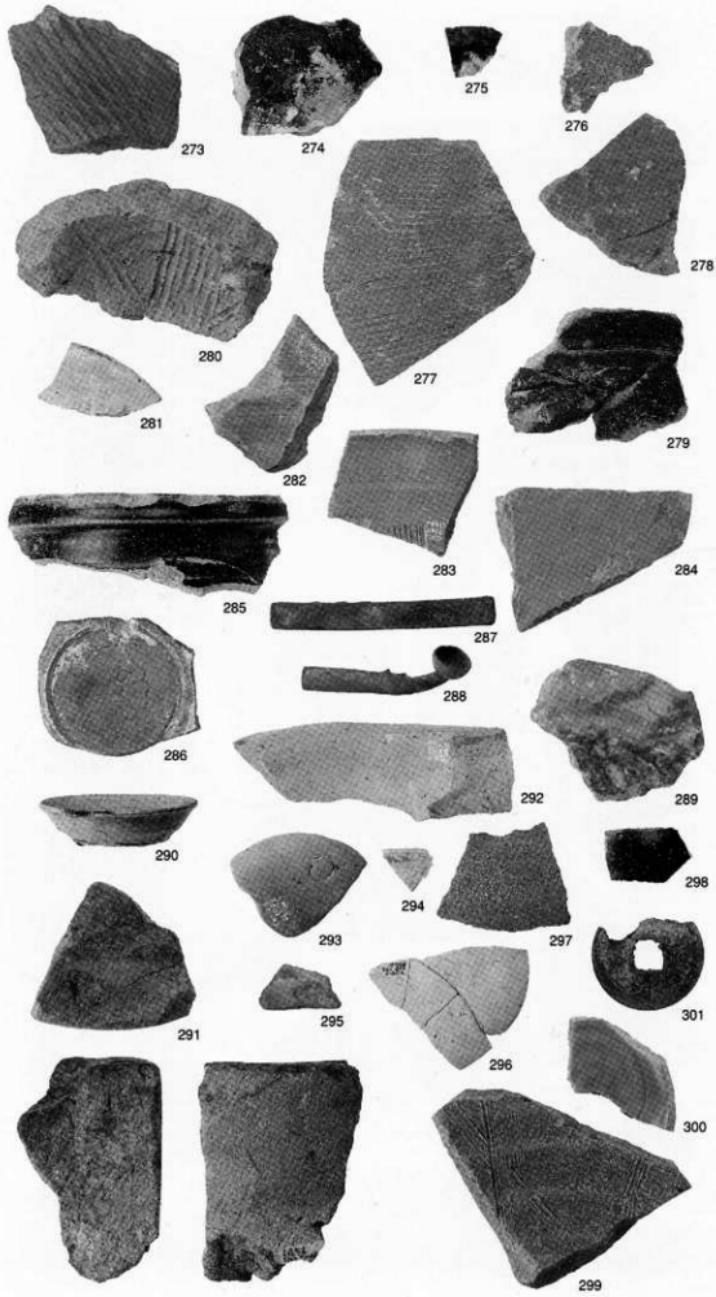
圖版45

A地区  
土師器皿  
株洲・瀨戸  
越中瀬戸  
鐵鍋  
寛永通寶



図版46

B地区  
珠洲・瀬戸  
灰釉陶器  
茶臼ほか



図版47

C地区  
珠洲ほか



302



303



304



305

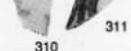


306



309

310



311



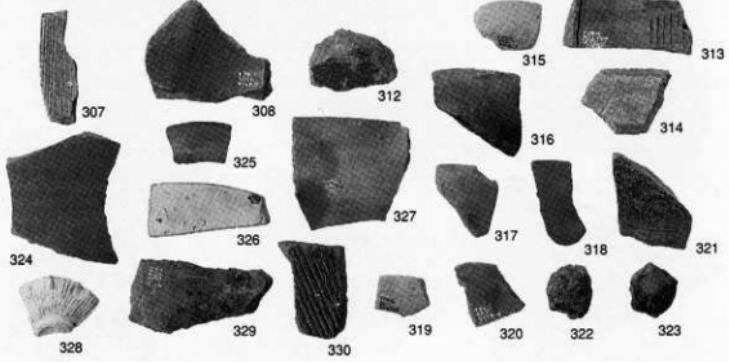
312

313



314

315



307

308

312

325

316

326

317

324

327

318

328

329

319

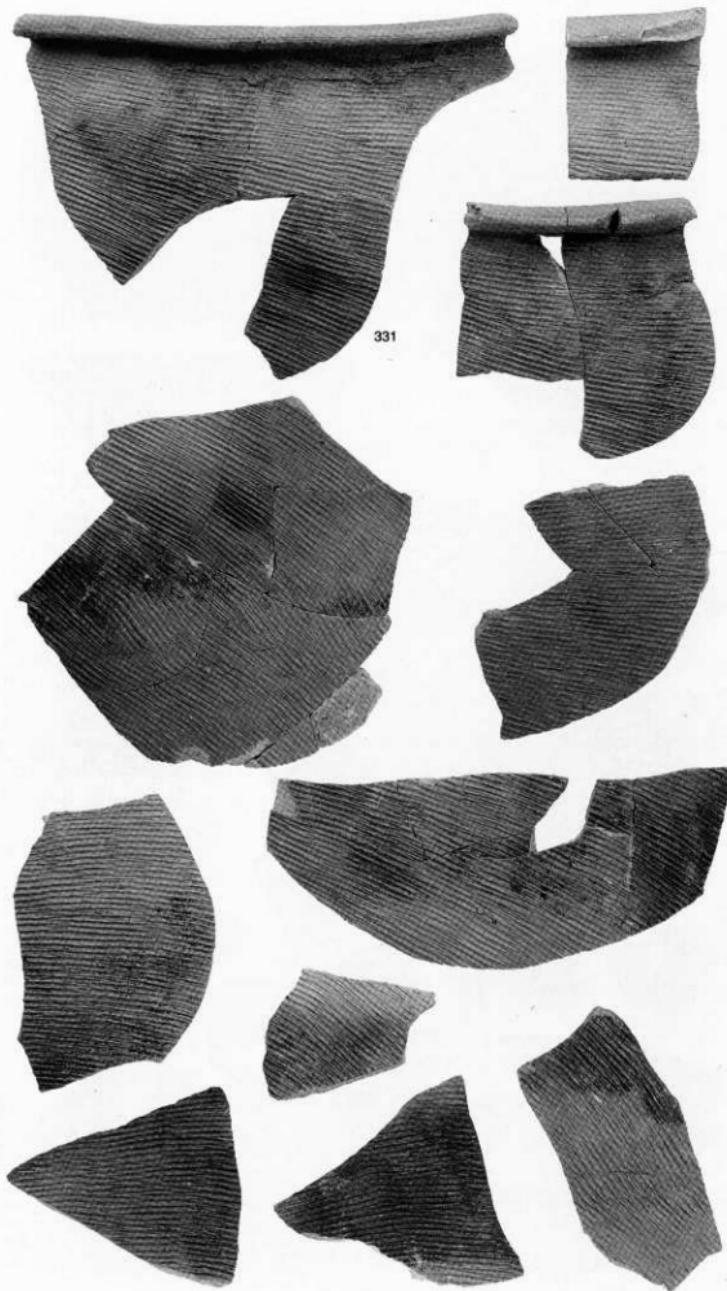
330

320

321

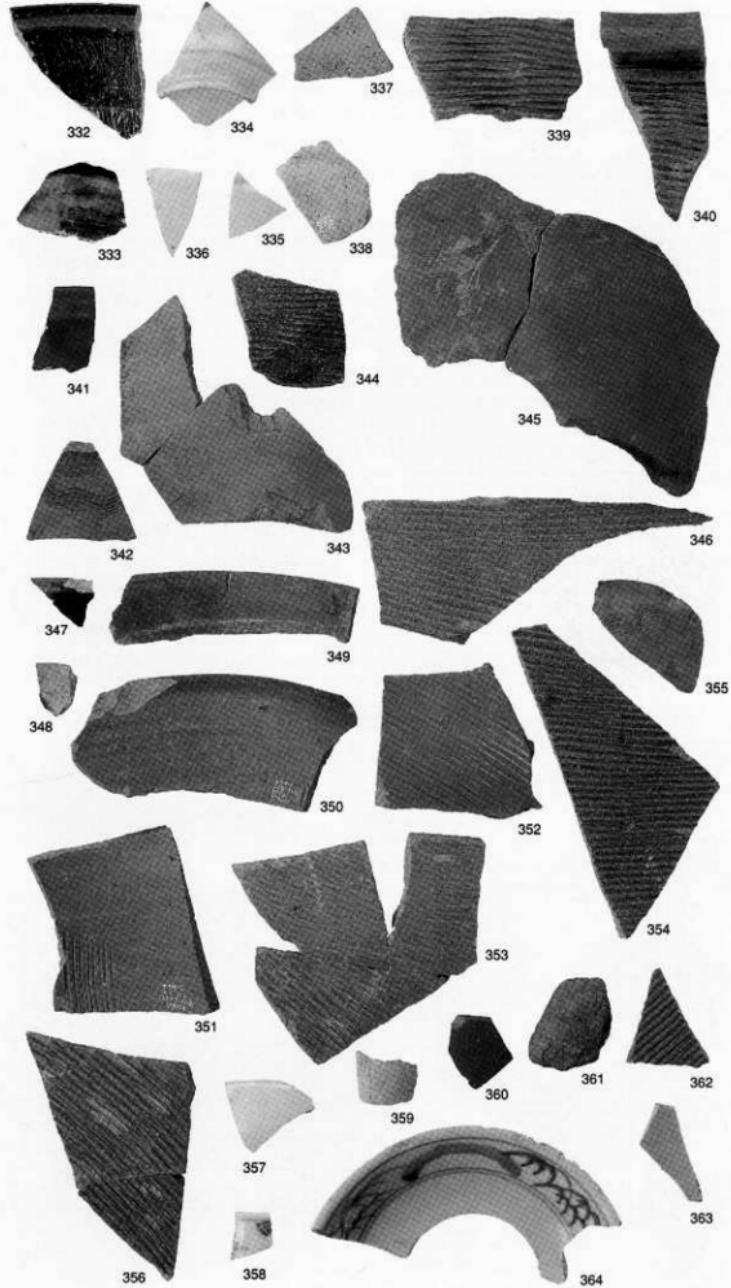
322

323



図版49

C地区  
珠洲ほか

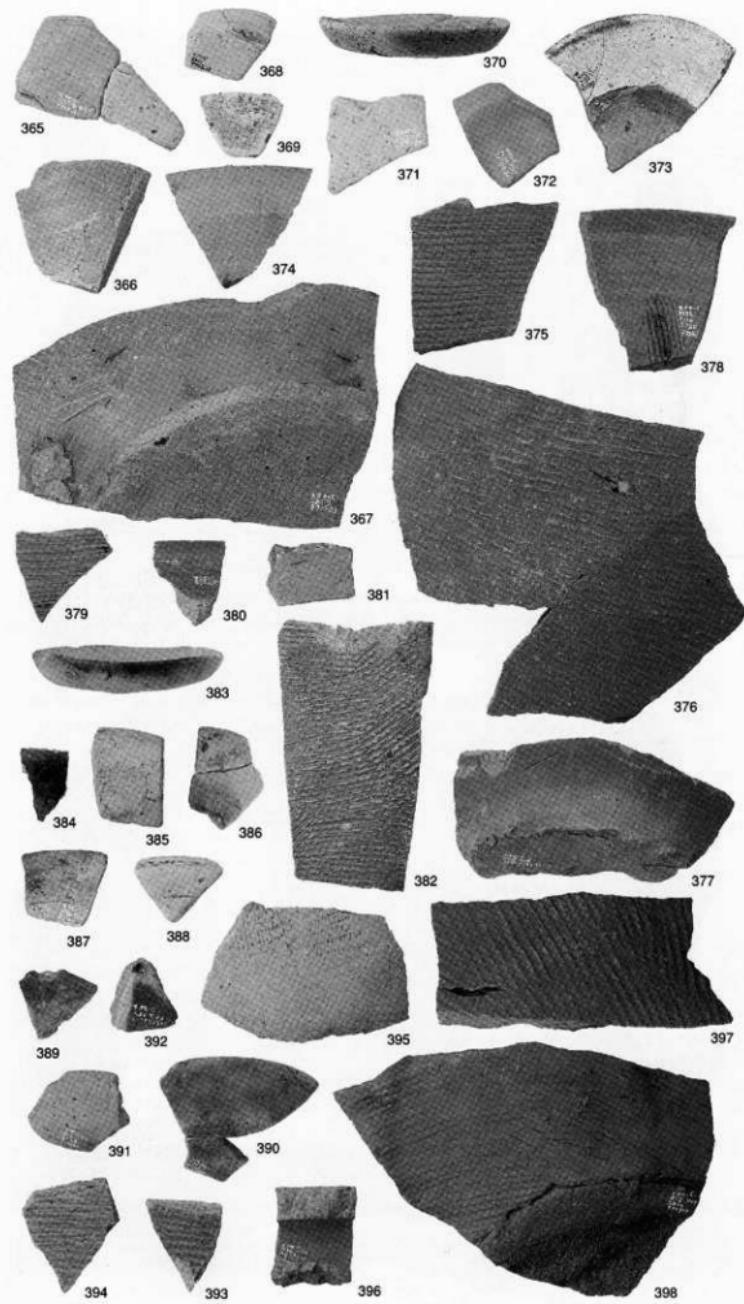


図版50

C地区

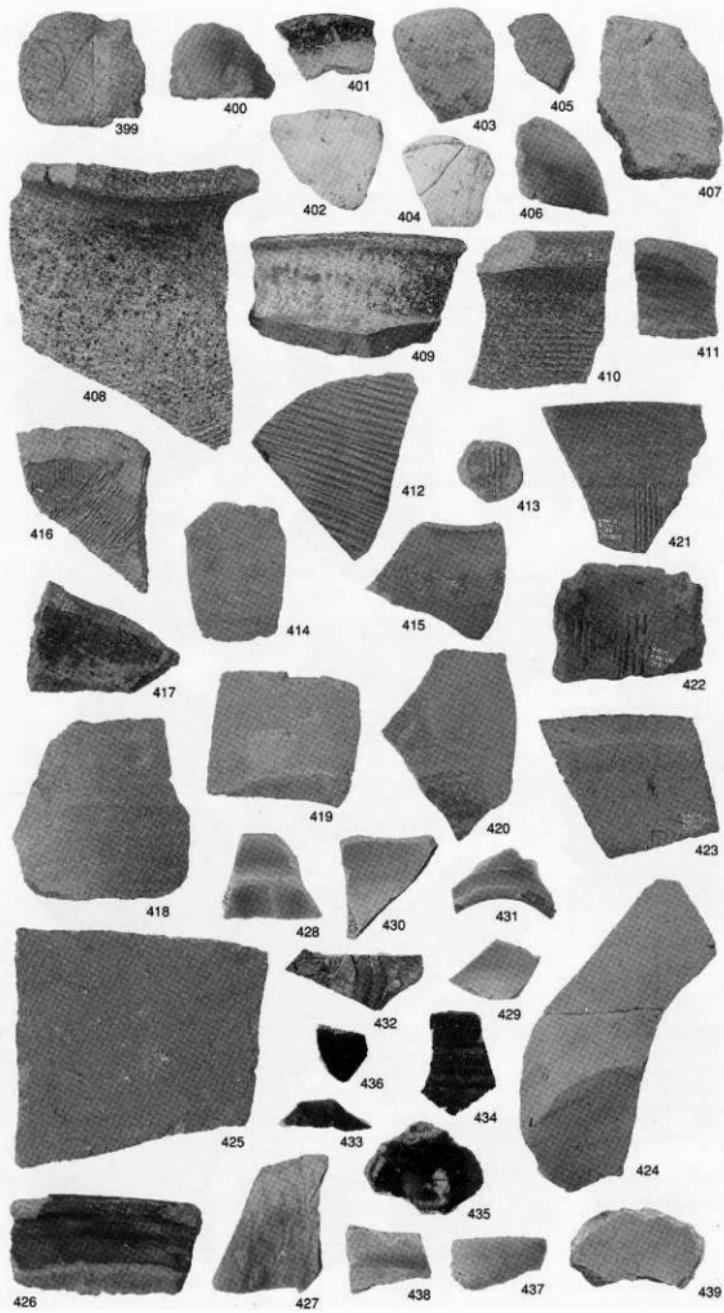
土師器皿

珠洲ほか

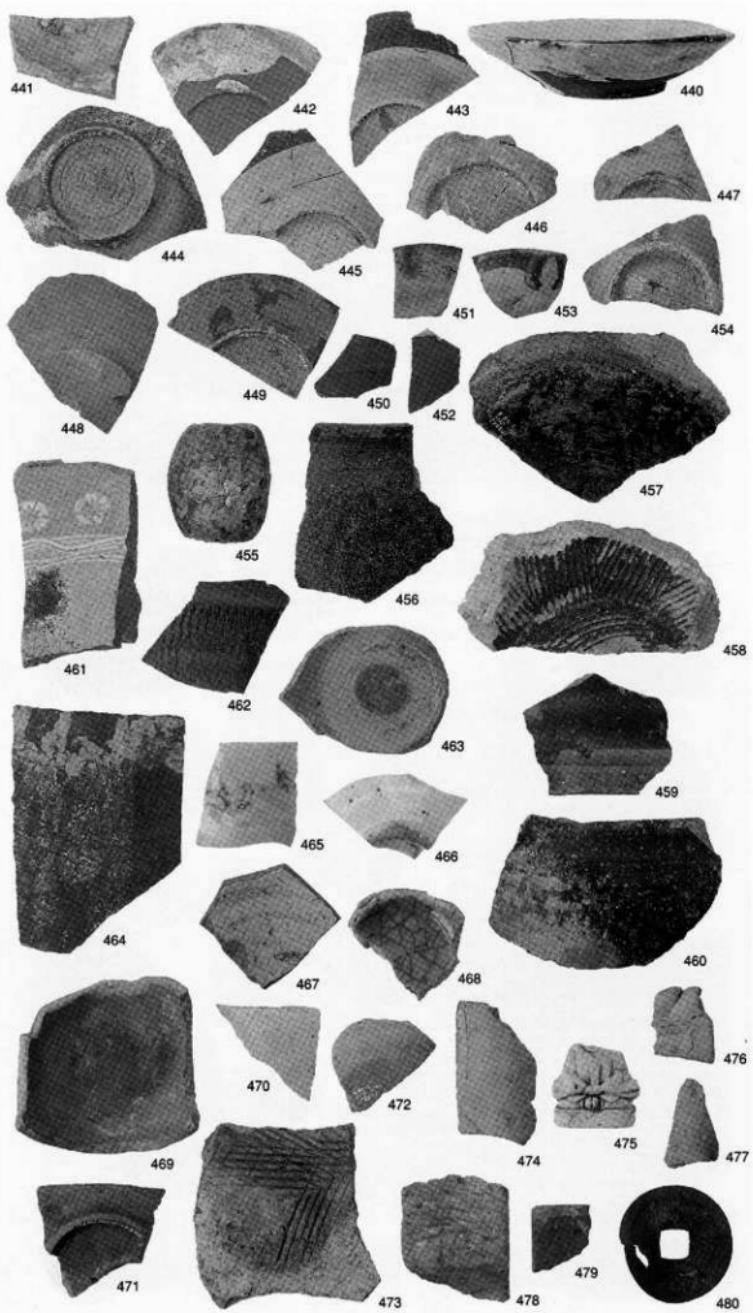


図版51

C地区  
珠洲・青磁  
ほか



図版52  
C地区  
越中瀬戸  
唐津ほか

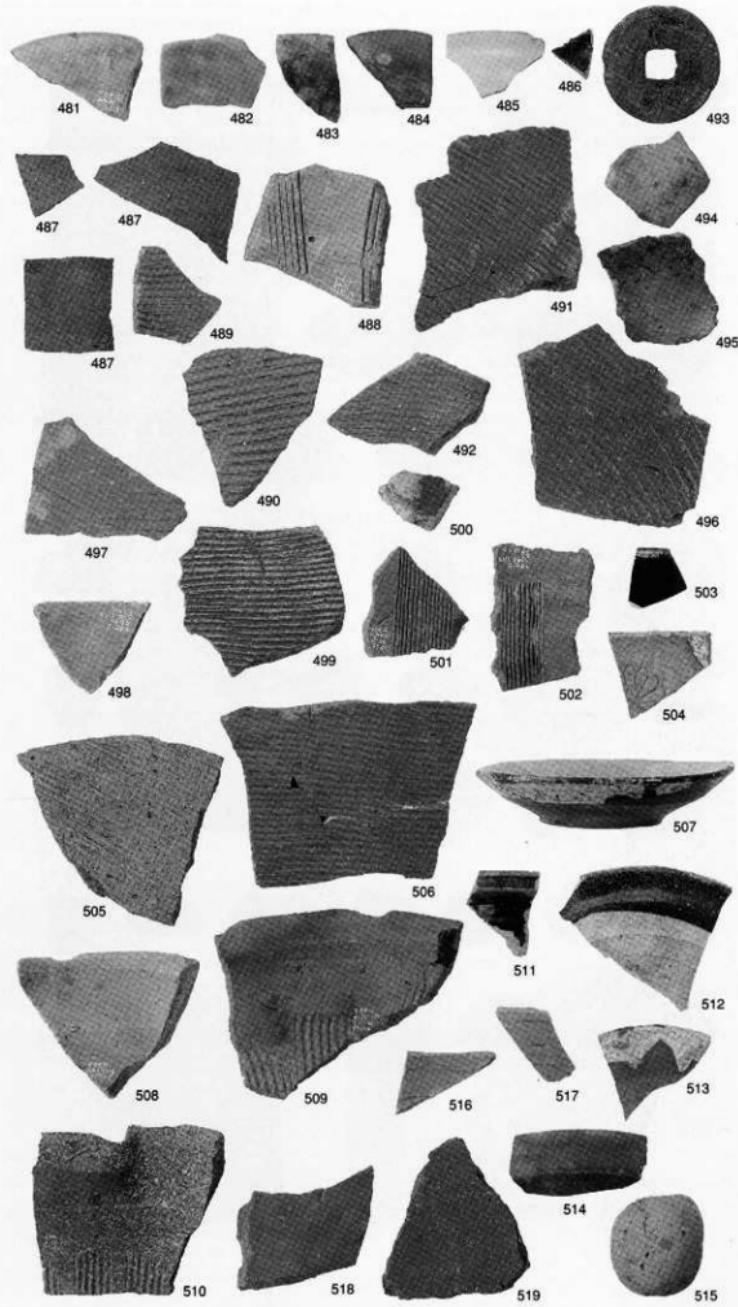


図版53

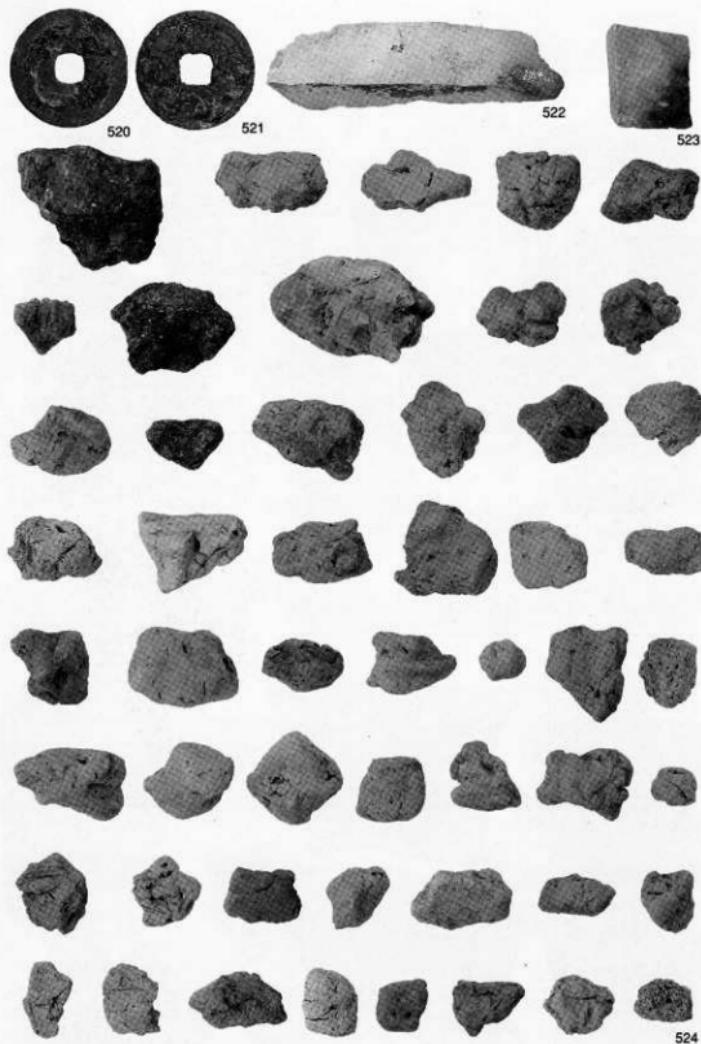
E地区

珠洲

越中瀬戸ほか



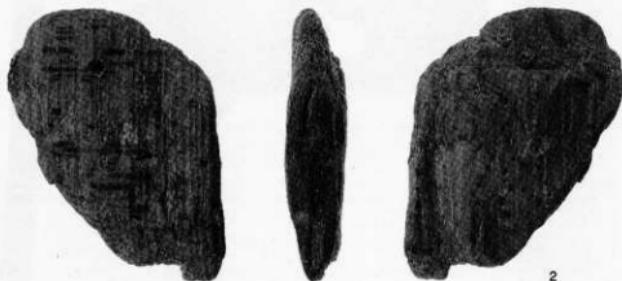
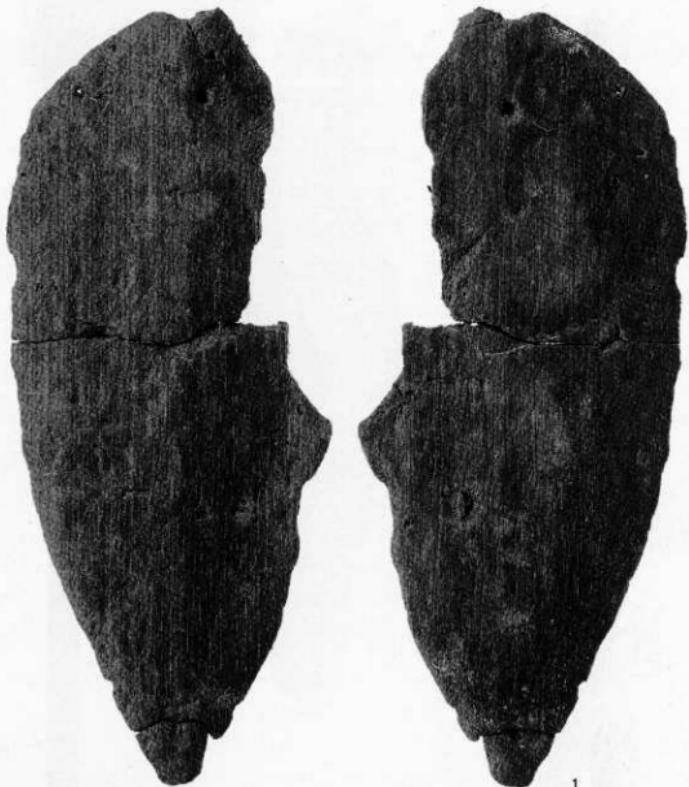
図版54  
E地区  
宋錢・磁石  
炉壁



524

図版55

A地区  
弥生前期の木器  
鏡



図版56

A地区  
弥生前期の木器  
鉤  
鉤柄



3



4



5

図版57

A地区  
弥生前期の木器  
柄・堅杵

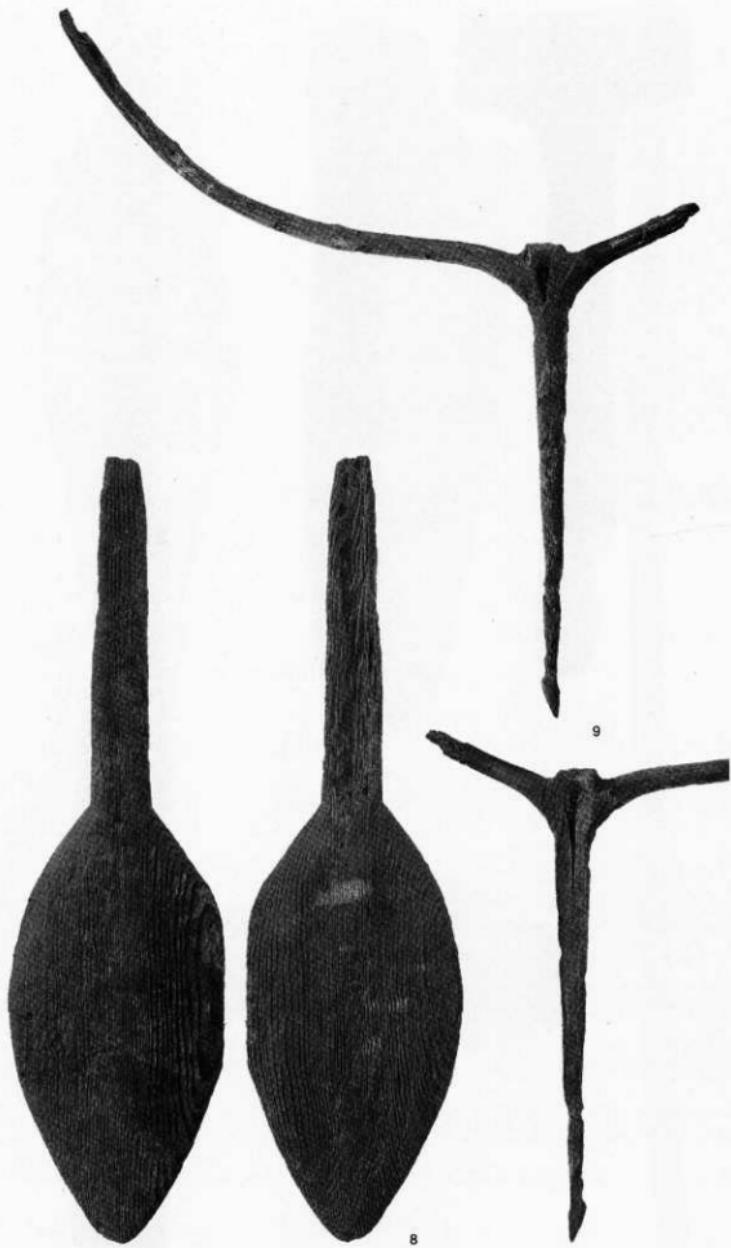


6

7

図版58

A地区  
弥生前期の木器  
たも綱枠  
櫂



図版59

A地区  
弥生前期の木器  
編板・錦打具  
経巻具  
紡錘車の軸



10



11



12



13



14



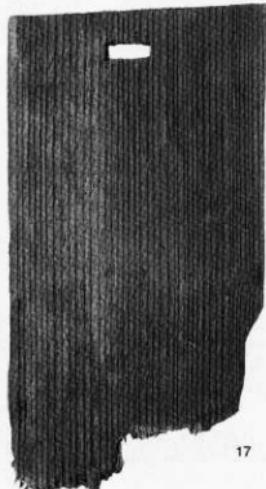
15



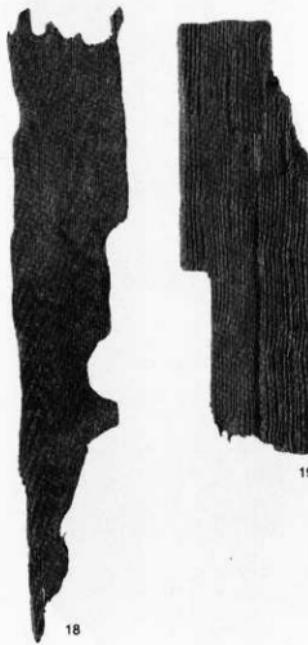
16

図版61

A地区  
弥生前期の木器  
箱・蓋  
削物



17



18



19



20



21

図版62

A地区  
弥生前期の木器  
舟か檜



22



23



24



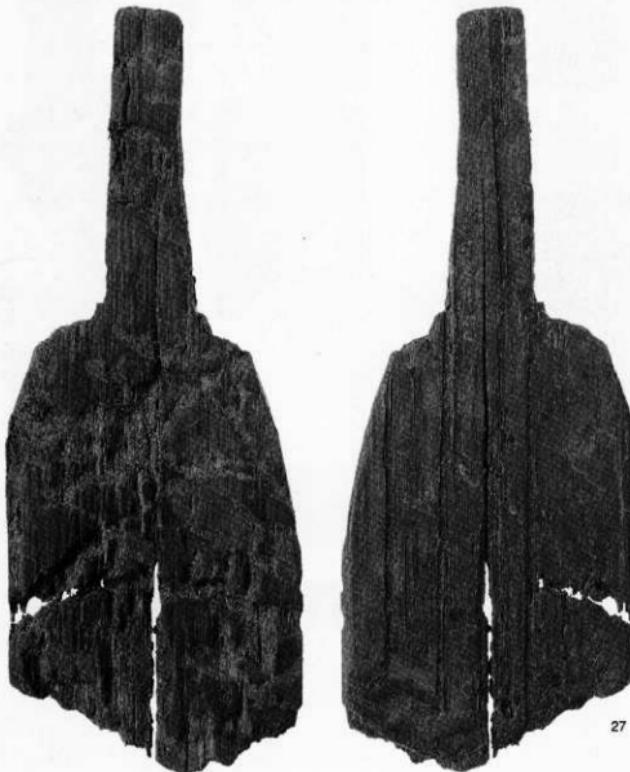
25

図版63

A地区  
弥生前期の木器  
鎌状品



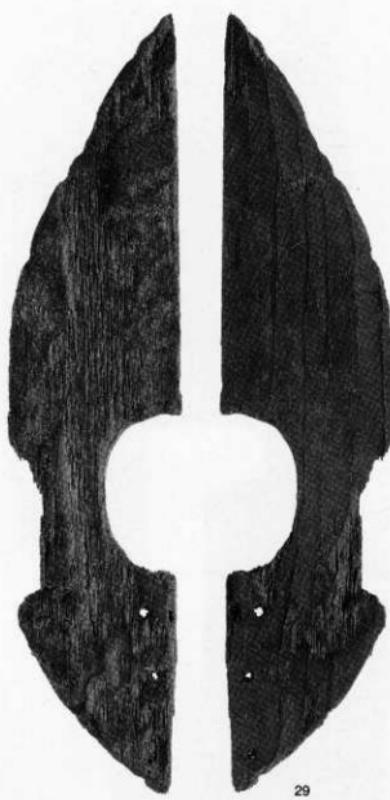
26



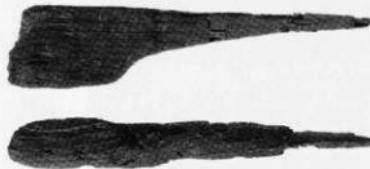
27

図版64

A地区  
弥生前期の木器  
刻形・鎌状品  
脚



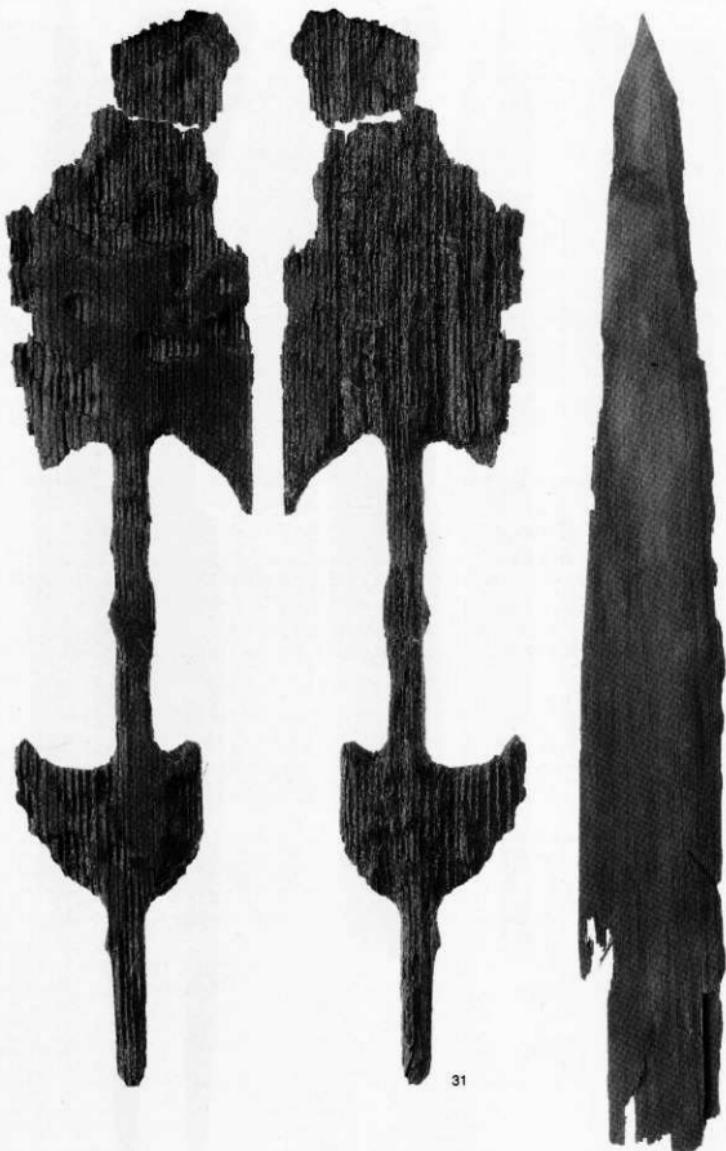
29



30

図版65

A地区  
弥生前期の木器  
鋸状品ほか

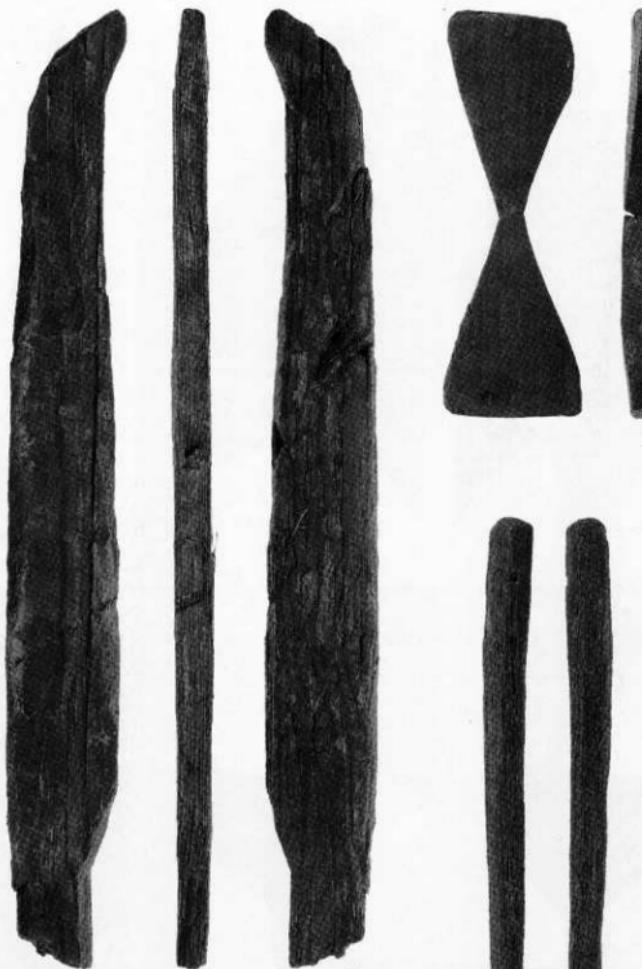


31

32

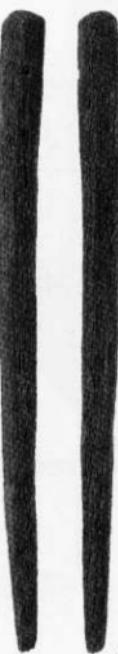
図版66

A地区  
弥生前期の木器  
鳥形  
バチ形木器  
柄



34

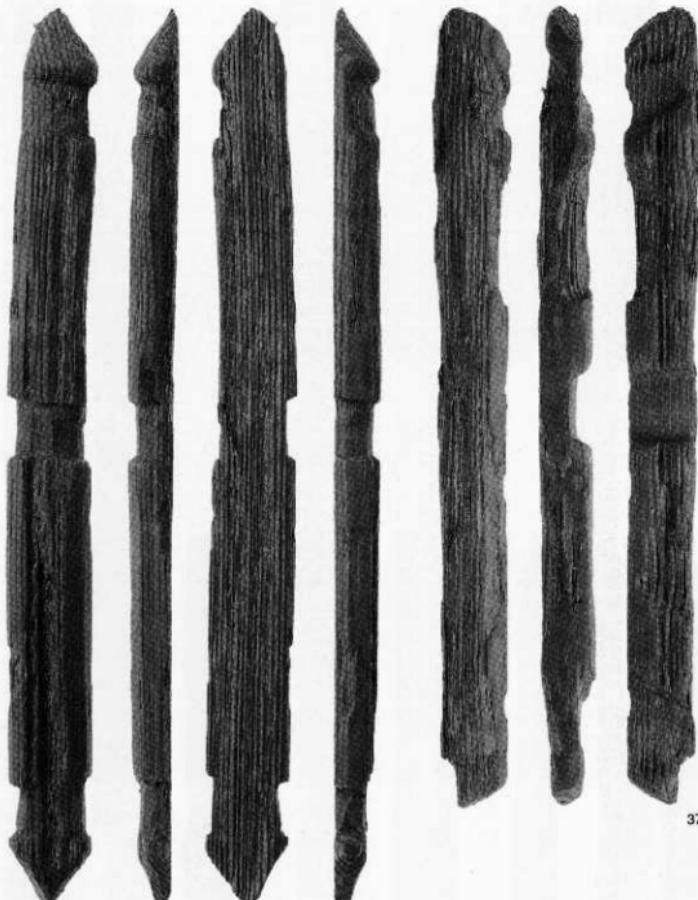
33



35

図版67

A地区  
弥生前期の木器  
柄・部材

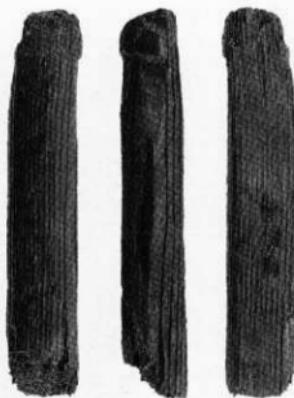


36

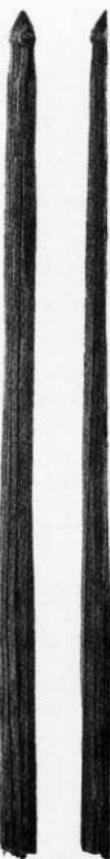
37

図版68

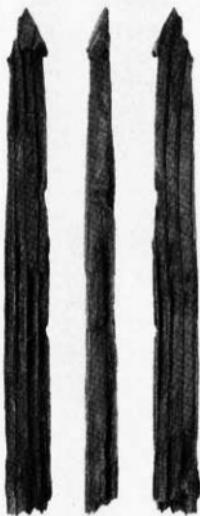
A地区  
弥生前期の木器  
柄



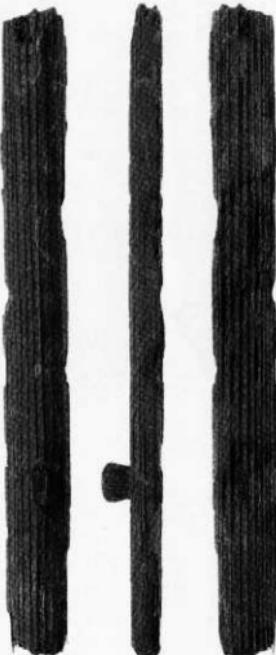
38



41



39



40

図版69

A地区  
弥生前期の木器  
柄



42

44

46

45

43

図版70

A地区  
弥生前期の木器  
柄



50

図版71

A地区  
弥生前期の木器  
柄・柱



51



52



53



54



図版72

A地区  
弥生前期の木器  
柱



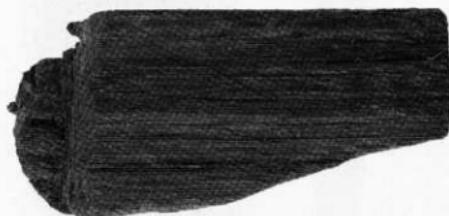
55



56



58



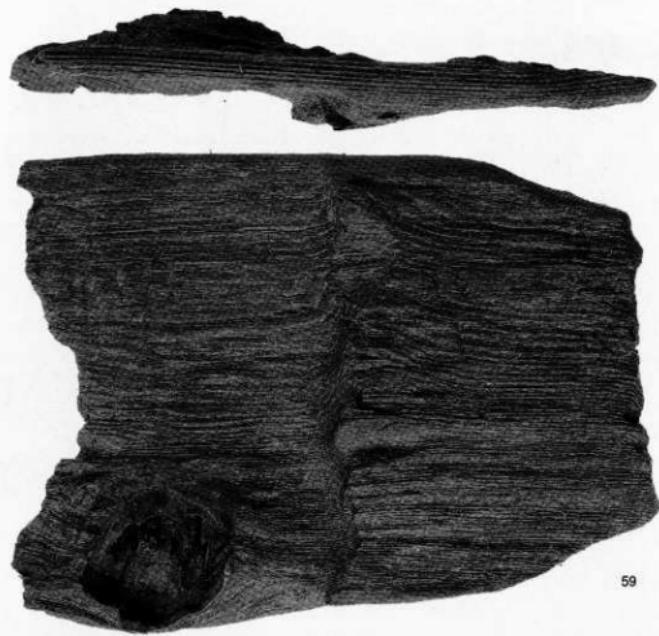
57

図版73

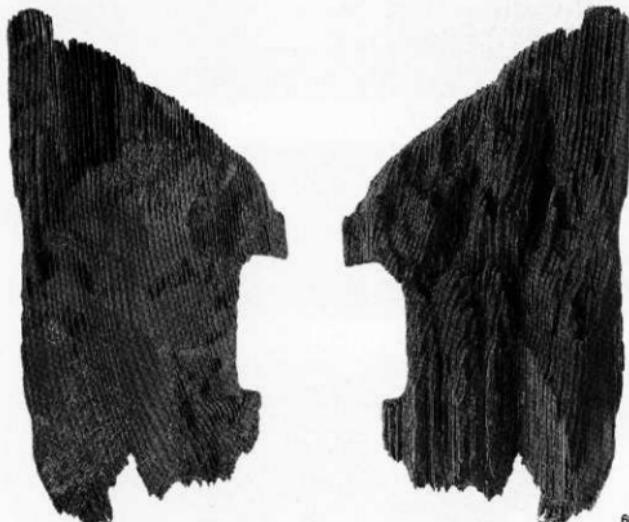
A地区

弥生前期の木器

厚板



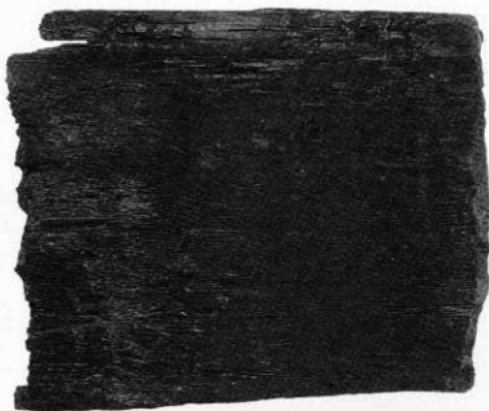
59



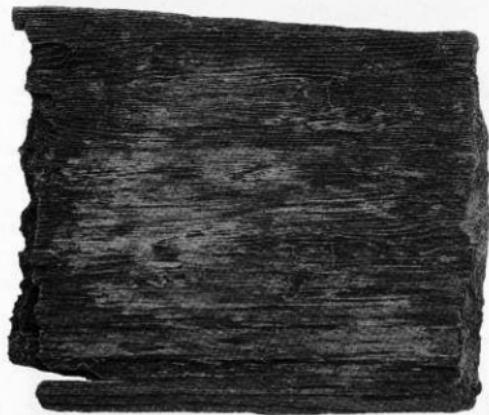
60

図版74

A地区  
弥生前期の木器  
厚板



61



62



63

図版75

A地区  
弥生前期の木器  
穴のある板



64



65



図版76

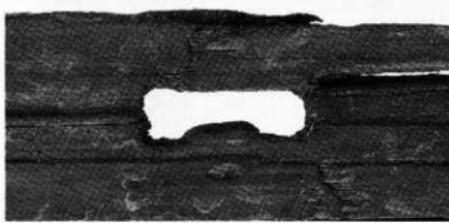
A地区  
弥生前期の木器  
穴のある板



66



67



図版77

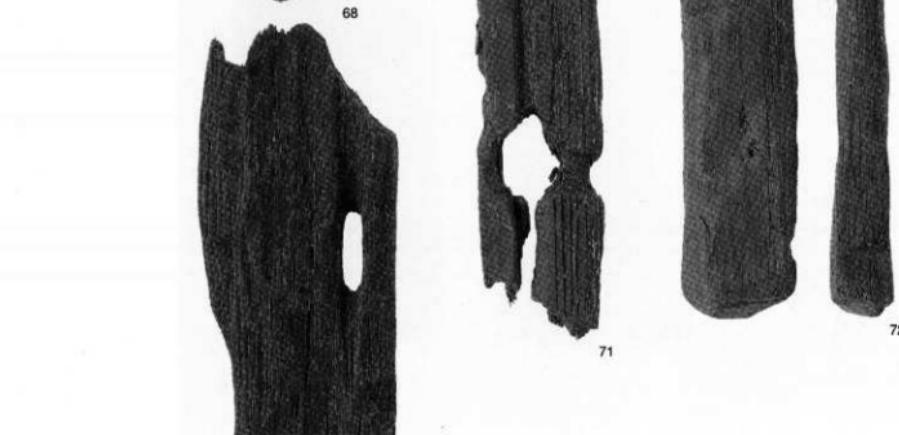
A地区  
弥生前期の木器  
穴のある板



68



69



70



71



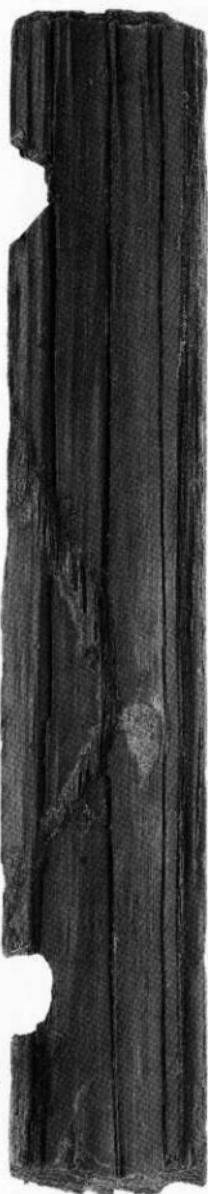
72

図版78

A地区  
弥生前期の木器  
穴のある板  
えぐりのある板



73



74

図版79

A地区

弥生前期の木器  
えぐりのある板



75



76



77

図版80  
A地区  
弥生前期の木器  
板



78



79



80

図版81

A地区

弥生前期の木器  
板



図版82

A地区  
弥生前期の木器  
板



85



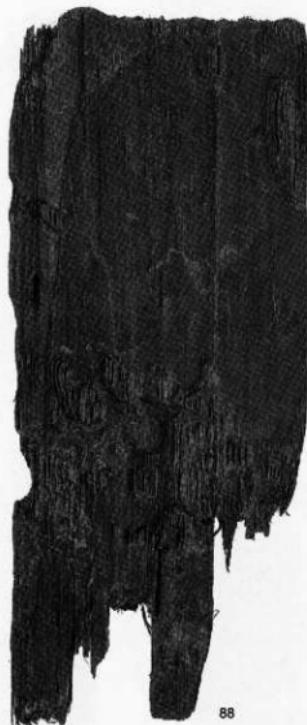
86



87

図版83

A地区  
弥生前期の木器  
板



88



89



90

図版84

A地区  
弥生前期の木器  
板



図版85

A地区

弥生前斯の木製  
角材



95



96



97



図版86

A地区  
弥生前期の木器  
板



102

100

101



103



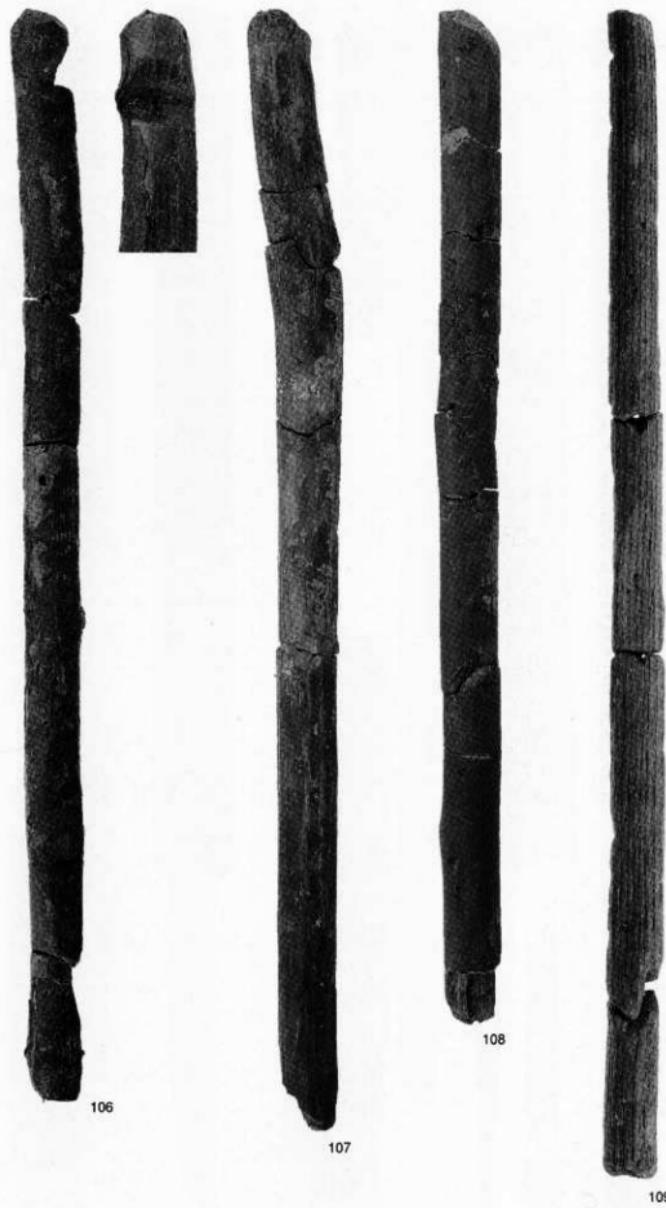
104



105

図版87

A地区  
弥生前期の木器  
棒



106

107

108

109

図版88

A地区  
弥生前期の木器  
棒



110



111



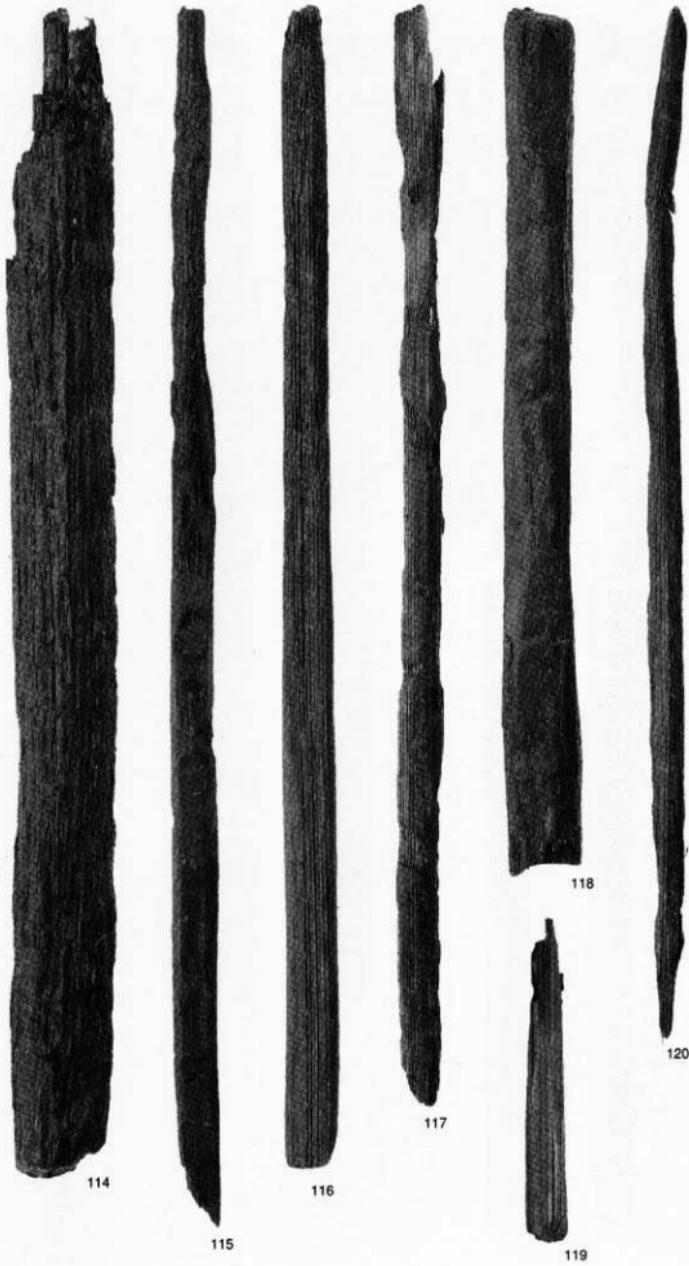
112



113

図版89

A地区  
弥生前期の木器  
棒



図版90

A地区  
弥生前期の木器  
棒



121

123

122

124

図版91

A地区  
弥生前期の木器  
棒



125



129



130



126



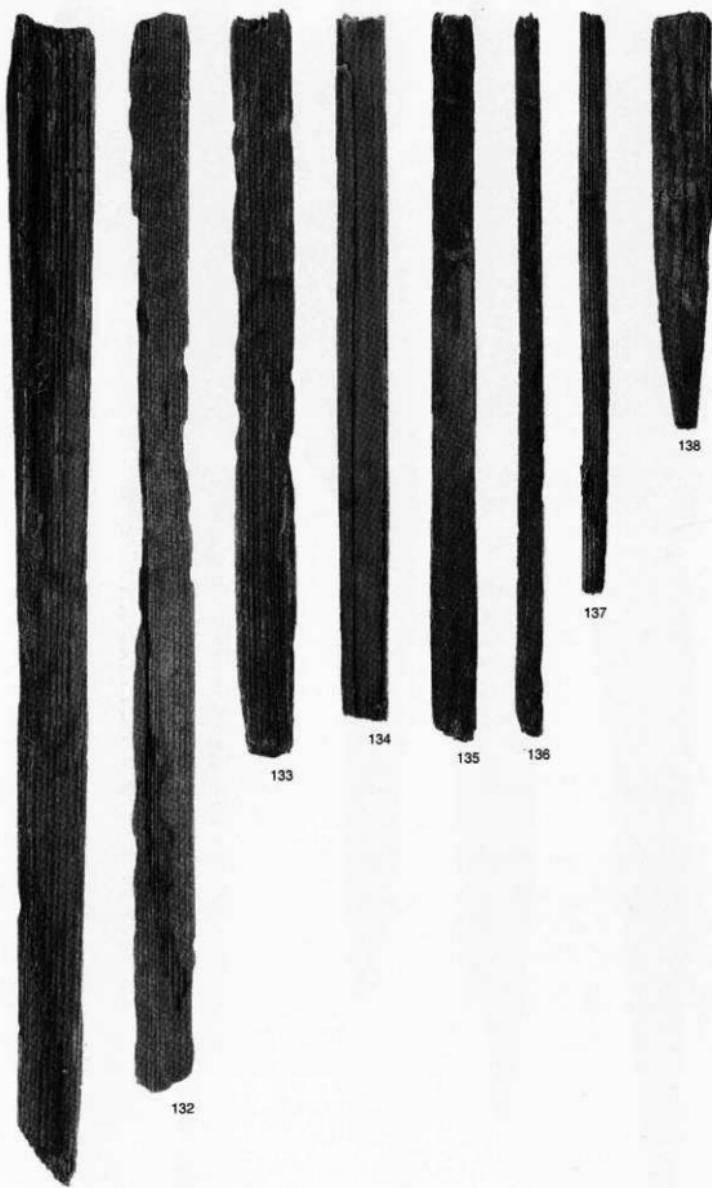
127



128

図版92

A地区  
弥生前期の木器  
棒



図版93

A地区  
弥生前期の木器  
棒



139



140



141



142



143



144



145

図版94

A地区  
弥生前期の木器  
棒



146



147



148



149



150



151

図版95

A地区  
弥生前期の木器  
角材・棒  
柱



図版96

A地区

弥生前期の木器  
柱



155



157



158



図版97

A地区  
弥生前期の木器  
柱



159



160



161

図版98  
A地区  
弥生前期の木器  
柱



162



163

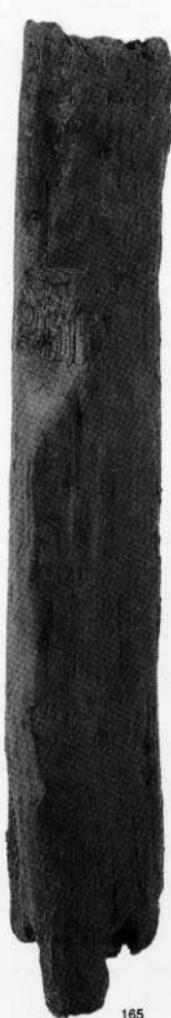


164



図版99

A地区  
弥生前期の木器  
柱



165



166

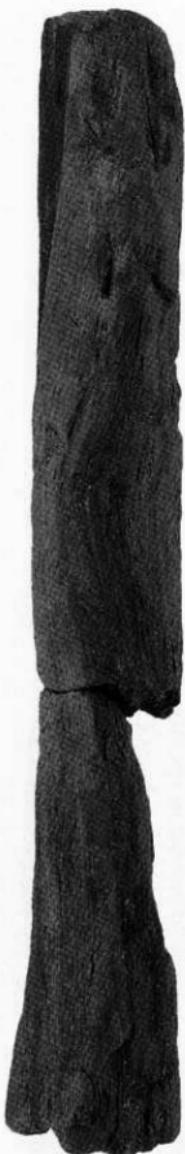


167

図版100

A地区

弥生前期の木器  
柱・杭



図版101

A地区  
弥生前期の木器  
杭・剥片  
柱



173



174



175



176



図版102

A地区  
弥生前期の木器  
切断木



177



178



179

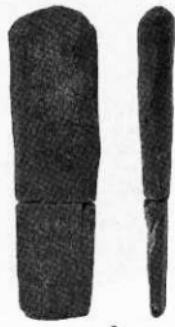
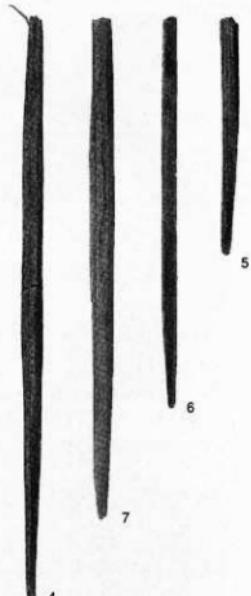


180

図版103

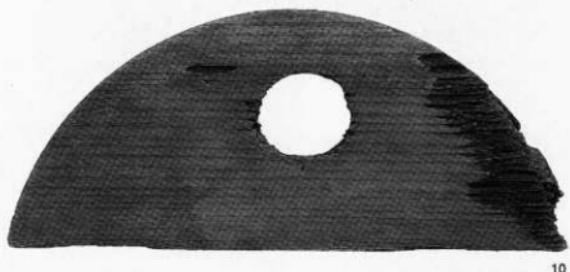
中世・近世の木器  
(A地区)

- 1,2 : SK03
- 3 : SK05
- 4~7,9 : SK07
- 14 : SK08
- 13 : SK06



図版104  
中世・近世の木器  
(A地区)

8 : SK07  
10 : SK33



10



8

図版105

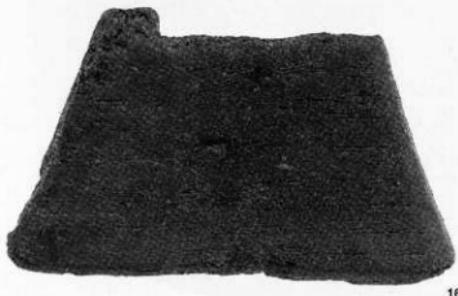
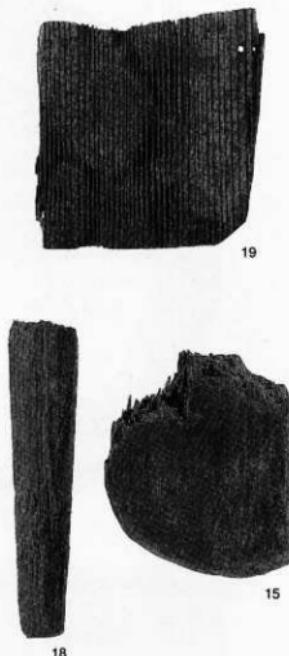
中世・近世の木器  
(A地区)

11: SK64



図版106  
中世・近世の木器  
(A地区)

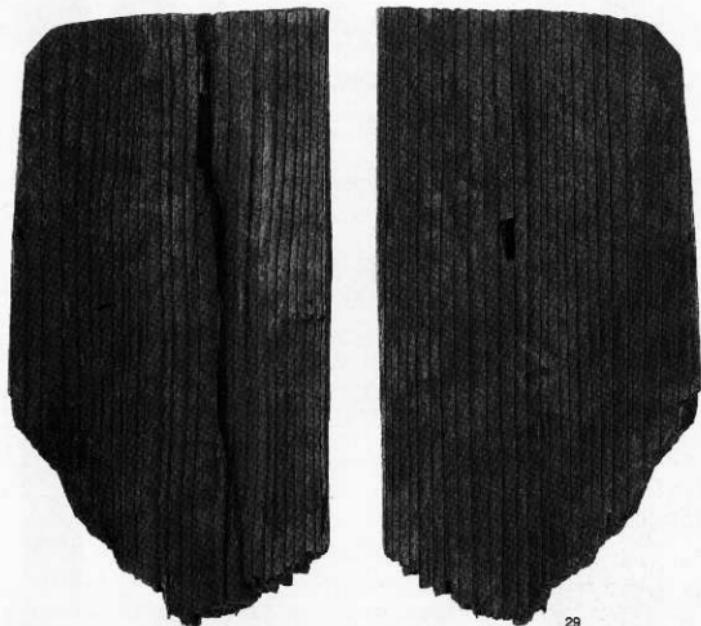
12 : SK65  
15 : SD11  
16 : SD16  
17~19 : SD24  
20 : SD30



図版107

中世・近世の木器  
(C地区)

26.29 SD17



29



26

図版108

中世・近世の木器  
(C・D地区)



25



22



31



35

27

22 : C-SK11

25,27,28 : C-SD17

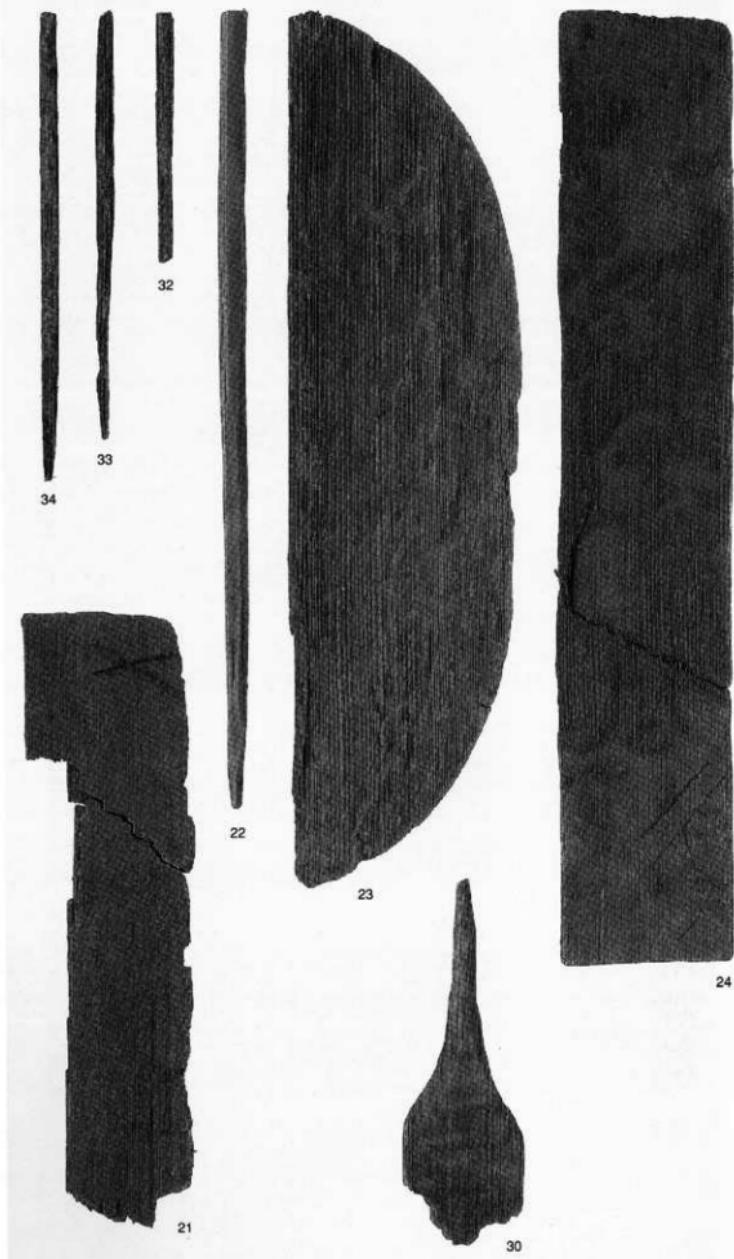
35 : C-SK17

31 : D-SD02上■

図版109

中世・近世の木器  
(C・E地区)

21.22:C-SK11  
23.24:C-SK39  
30:C-X120 Y114  
32~34:E-SK01



図版110

F地区

I. F地区全景(南から)



2. SD02他遺構集中部(北から)



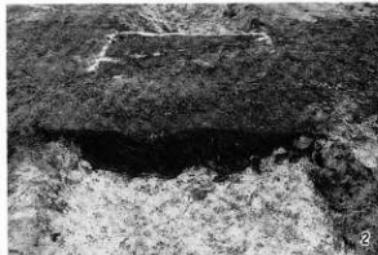
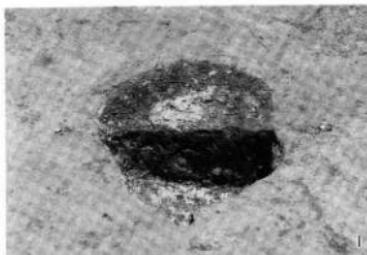
3. SD03・18(北東から)



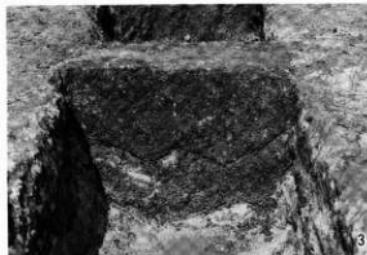
図版111

F地区

1. SK 01 南  
北セクション(西から)



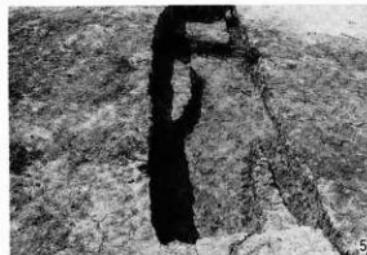
2. SD 02 東  
西セクション(南から)



3. SD 03 南  
北セクション(西から)

4. SD 03 完  
成(南から)

5. SD 18 完  
成(東から)



6. SK 09 東  
西セクション(南から)

7. SK09~II  
・I7検出  
(南から)



8. 同 完成  
(南から)

9. 作業風景  
実測作業



10. 作業風景  
掘削作業

図版112

F地区

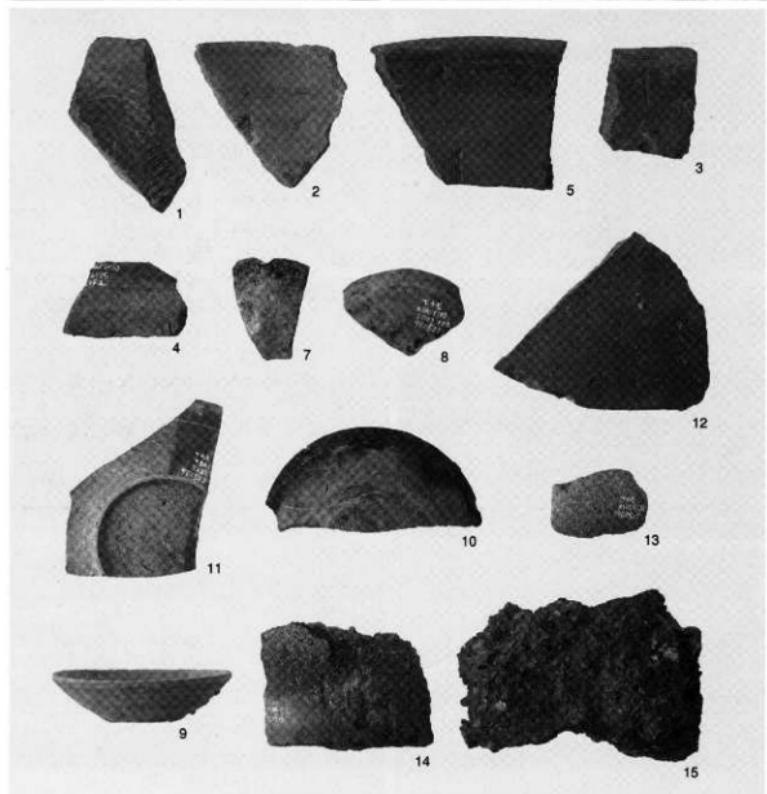
1. SD12東  
西セクション(南から)

2. SK14南  
北セクション(東から)

3. SK15南  
北セクション(南から)

4. SD16東  
西セクション(南から)

5. F地区的  
遺物



**報告書抄録**

ふりがな	とやまけん いみずぐん しもむら しもむらかもいせきはつくつちょうきほうこく							
書名	富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告							
編著者	久々忠義・越前慶祐・安念幹倫・境 洋子							
編集機関	下村教育委員会・富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒933-0204 富山県射水郡下村加茂中部893 TEL 0766 (59) 2101 〒930-0115 富山県富山市茶屋町206-3 TEL 0764 (34) 2814							
発行年月日	西暦 1999年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
下村加茂遺跡	富山県 射水郡下村 加茂中部	16383	383005	36° 44° 32°	137° 8° 17°	平成9年度 19975001 ↓ 19971119	10,650	農免農道及 び水郷の里 建設
						平成10年度 19980428 ↓ 19980609	1,400	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
下村加茂遺跡	貯木場	弥生時代前期	川1	縄文土器・弥生土器 石鎌・打製石斧・砥石・軽石 鍬・鋤・豎杵・編板・紡錘車 絹巻具・縛打具・櫛 たも網・桶・鳥形・劍形 柱・板・柄・炭化米・ヒヨウタン 珠洲・八尾・土師器皿・青磁・白磁 瀬戸美濃・山茶碗 砥石・茶臼 漆器椀・柄杓・曲物桶・箸・下駄 横櫛				
	集落・城館	鎌倉時代	掘立柱建物2 塙6・井戸6 カマド1 堀1・溝2	珠洲・八尾・土師器皿・瀬戸美濃・瓦器 瀬戸美濃・越中瀬戸・唐津 寛永通寶・小柄・キセル・陶鍔・羽口・炉壁				
		室町時代 江戸時代前期	塙2 道路1 採土穴95					
土取り場								

富山県射水郡下村  
下村加茂遺跡発掘調査報告  
発行日 平成11年3月31日  
発行 下村教育委員会  
〒933-0204  
富山県射水郡下村加茂中郷893  
TEL 0766 (59) 2101  
編集 富山県埋蔵文化財センター  
印刷 (株) チューエツ

## 下村加茂遺跡発掘調査報告

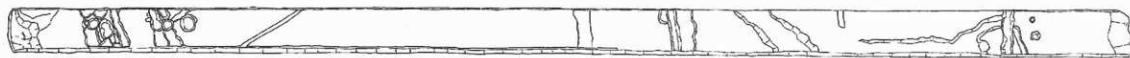
### 付 図

1. 下村加茂遺跡遺構全体図
2. 下村加茂遺跡 A 地区・D 地区遺構図
3. 下村加茂遺跡 B 地区遺構図
4. 下村加茂遺跡 C 地区遺構図
5. 下村加茂遺跡 E 地区遺構図

付図1 下村加茂遺跡遺構全体図



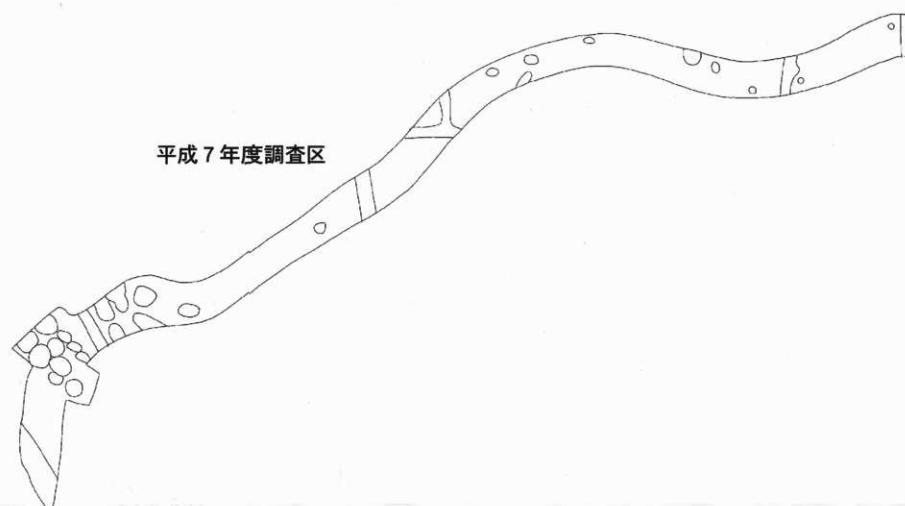
E地区西



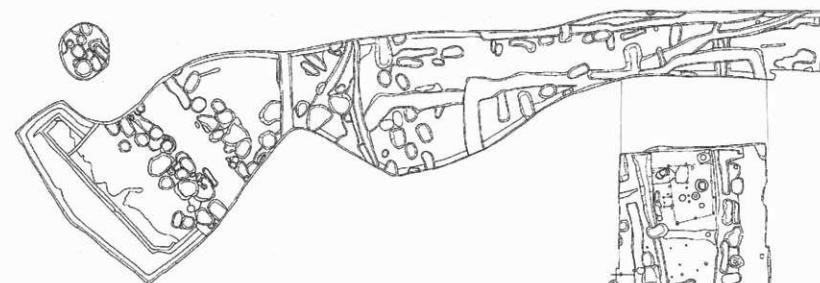
E地区東



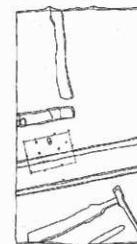
平成7年度調査区



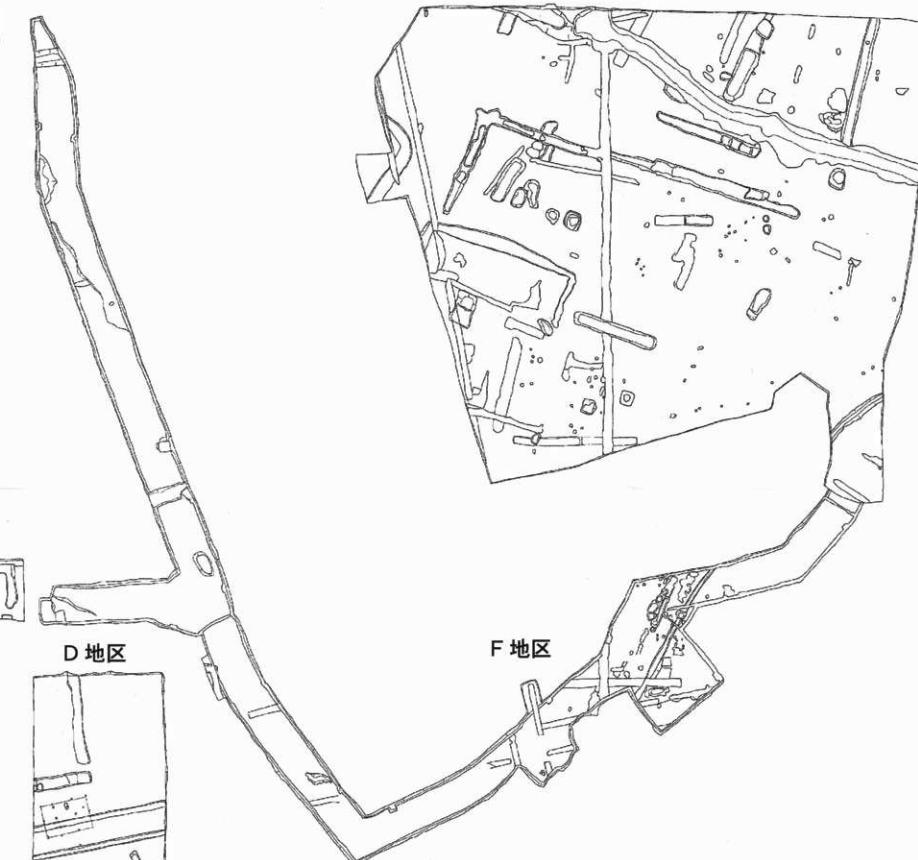
平成8年度調査区



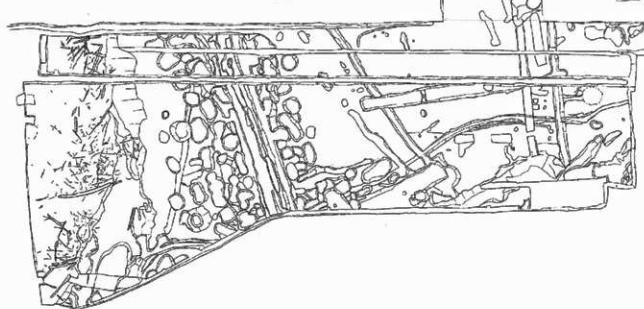
D地区



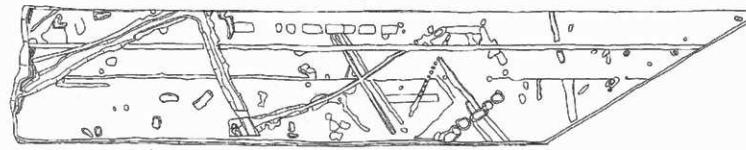
F地区



A地区

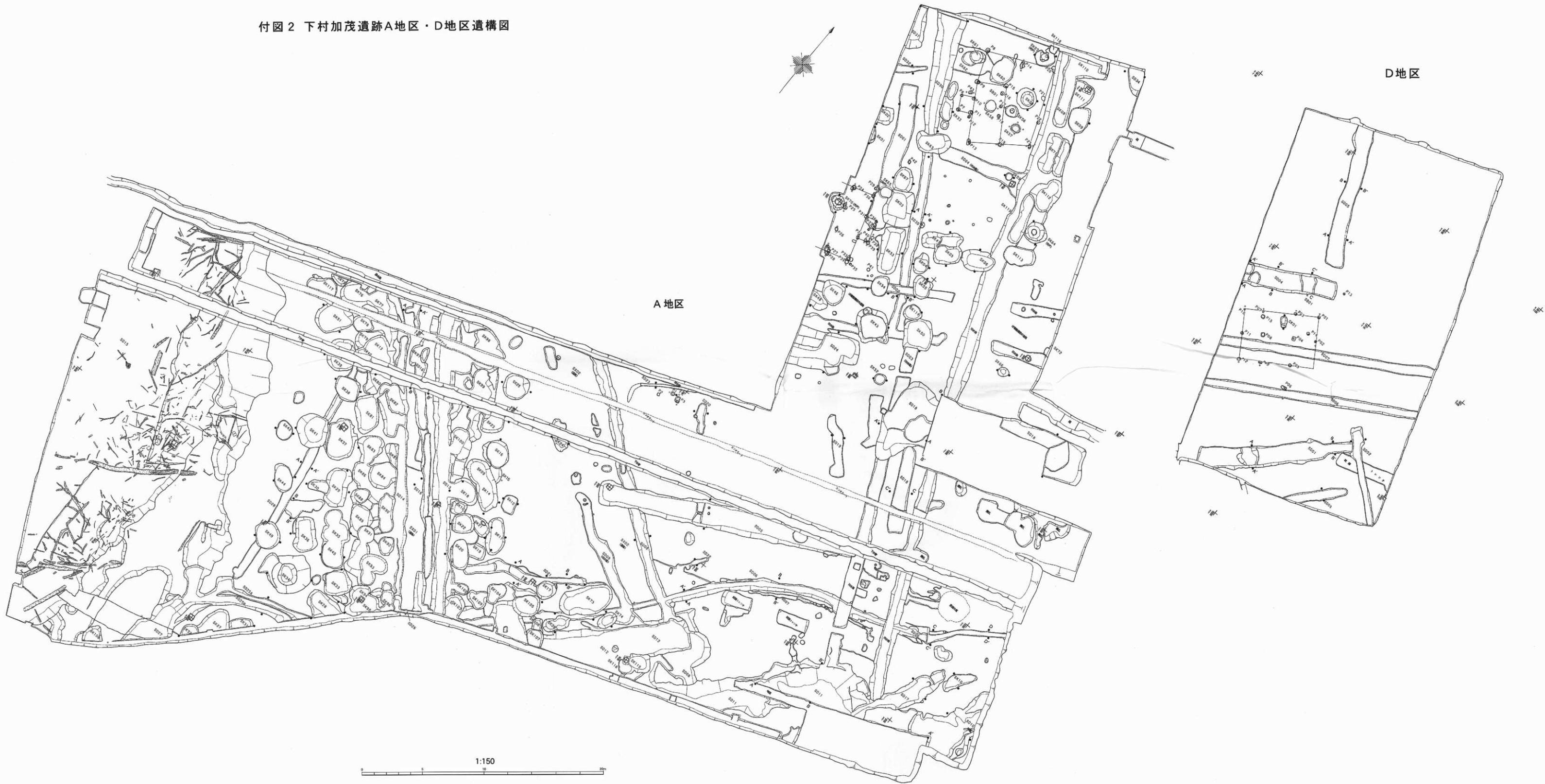


B地区

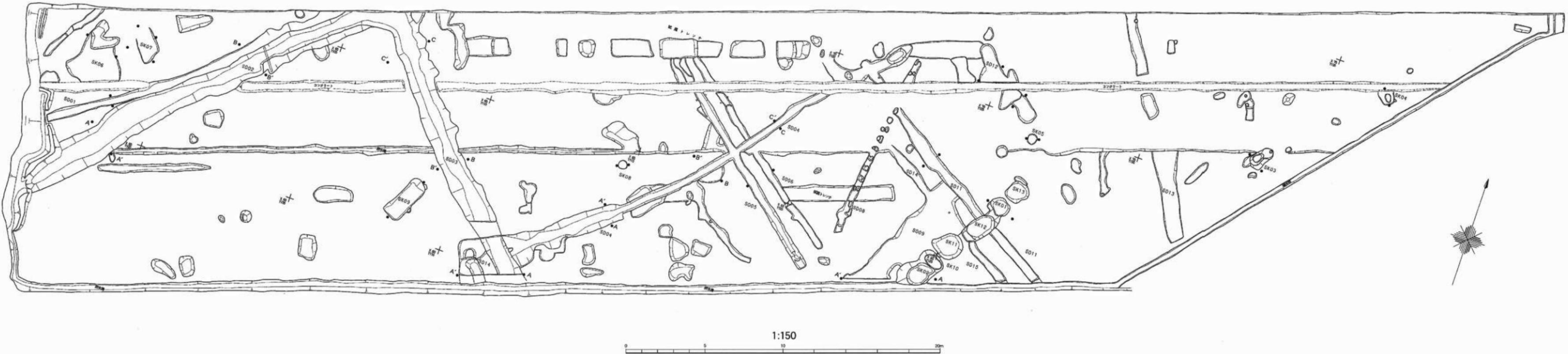


1:500  
0 5 10 20 30 40m

付図2 下村加茂遺跡A地区・D地区遺構図



付図3 下村加茂遺跡B地区遺構図



付図4 下村加茂遺跡C地区遺構図



付図5 下村加茂遺跡E地区遺構図

